
絶対無敵のデュエリスト

犬飼ことり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対無敵のデュエリスト

【Nコード】

N9838Q

【作者名】

犬飼ことり

【あらすじ】

花咲護恋はななぎしりえんは、とある大会でうつかり優勝してしまい、異世界の王立ハルシオン学園への留学の切符を手に入れる。そこでは、剣の勝負デュエルが頻繁に行われて、その勝負の賭け事も日常茶飯事らしい。だが、行って早々護恋は、王子キャシアスと彼の手駒のフェイに目を付けられてしまい……？ 絶対的な賭けと、剣と恋と友情のバトルファンタジー。絶対無敵のとありますが、護恋はそんなに強くありません。どことなくミステリー仕立てです。恋愛要素は薄めですが、濃くなっていく予定。フェイとキャシアスと護恋で三角関

係ですが、二章はマックスが加わってちょっと逆ハーです。あまり恋愛ぽくはありません。不思議要素の少しある学園ファンタジーでもあります。軽く読めるライトノベルです。三章開始しました。

第一話 優勝した大会の賞品（前書き）

この話は侍従関係が出てきますので、B.Lや百合めいた描写がありますが、B.Lや百合ではけっしてございませぬ。恋愛はノーマルですので、安心してお読みください。

第一話 優勝した大会の賞品

私、花咲護恋はなさきこれんは、飛行機の窓際の席に座って、綿雲をぼんやりと見下ろしていた。

機内には、私に付けられたSPセキユリテイボリス以外に乗客は存在しない。なぜなら、これはただの飛行機ではなく、政府専用機だからだ。

どこに向かうのか。

それは、イースティアという国だ。

地図の中を探したけれど、載ってなかった。そもそも、そんな国って本当に実在するのかな？ 狐につままれたような気分よ。

どうしてその国に赴くのか。それは私が、剣道の大会に友達の代役で出場したところ、うっかり優勝してしまったからだ。

それは、剣道のルール関係なく、若者限定で日本一の剣の使い手を決める変な大会だった。しかも主催していたのは、なんと日本の現在の首相である神凧かんなぎ総理だったのよ。

『優勝おめでとう。花咲さんには、ハルシオン学園に通学してもらって、一番の剣の使い手になっていただきたい』

総理は、私に優勝トロフィーを手渡しながら、朗らかにそう告げた。

『はあ、一番の剣の使い手ですか』

大それたことをお願いされて、戸惑ってしまった。それは社交辞令のようなものかもしれないけれど。

『君には、日本の未来がかかっている。よろしく頼むよ』

神凧総理は気持ち良さそうに笑っていた。

それでも、日本の代表である神凧総理にお願いされて嬉しかった。だから、できる限り頑張ろうと決心したんだ。

『護恋のがさつな所が、認められるだなんて思っても見なかったわ』

私の母は、高校の学費免除という言葉に諸手を挙げて喜んでいて。私の家は貧乏だ。だから親は、留学は ではなくて、私の食いぶ

ちが減るだけでも嬉しいのよ。

でも私は、剣道だって少し上手い程度なのだ。その私が、優勝できるだなんて奇跡じゃないのかな。確かに、運動神経がいいのが取柄ではあるけれど。

ハルシオン学園が異世界にあるということは、今日になってこの機内で知らされたのだ。異世界と聞いて、ふざけているのかと憤慨した。新しい国ができたのかとさえ勘繰ったんだ。ところが、SPが渡してくれた世界地図の中を探したけど、どこにも載っていないかった。私は混乱してしばらくの間、その地図を見つめていたんだ。

空を飛んでいるので、今更降りるわけにもいかない。結局は、そこに行くしかない。料金も向こう持ちなので、迷う必要などないはずだ。

そうよ、迷うはずなんてない。だって、すべてタダだもの。でも、タダより高いものはないって言うけど……いやいや、大丈夫だよ。だって、神風総理が言った事だし。そう自分に言い聞かせて、無理やり納得させた。

だけど、ため息が出た。

今まで一緒に過ごしていた家族と離れるのはちょっと寂しいな。

一般人には珍しい政府専用機に搭乗しているというのに、まったく喜ぶことができない。

少しでも感傷的になって染み渡る青空を見ていると、いきなり飛行機が白光に包まれた。

私の目から零れそうだった雫は、びっくりして涙腺の奥に引っ込んでしまった。

「わっ、何!？」

シユン、シユンと、速度を上げたような音がしている。機体があたたと危うげに揺れた。

「だ、大丈夫なの? この飛行機、落ちたりしないよね?」

私は恐怖してしまい、両手で座席を押さえながら、隣のSPに話しかける。落ちるだなんてとんでもない。イースティアに行くこと

を早くも後悔していた。

変な剣の大会で優勝したために、地図に載っていない国に行く途中で飛行機が落ちて死んだなんて、シャレにならないよ！

座席にしがみ付きながらSPを涙目で見る。だが、彼は平然として笑い声すらあげた。

「大丈夫ですよー。これは、この世界と異世界の境目を乗り越えただけです。異世界に行く飛行機のエンジンを日本が開発したんですよ」

「に、日本の技術ってすごいですね……っ！」

座席に背中を張り付かせながら答えた。

「このことは極秘事項なんですけれどね。護恋さんは特別ですよ。運が良かったですねー」

どこがだ！

ツツコミを入れそうになって、台詞を飲み込んだ。

運なんて全然良くない！むしろ、貧乏くじを引いた感じがする！そのサングラスをかけた外人は、また背筋を伸ばして周りを警戒し始める。次第に機体が安定して、また、いつもの平和な空に戻った。安堵してシートに背中を預ける。

それにしても、このSP、異世界がどうのって言わなかった？

やっぱり異世界なの？それに、日本のお偉いさんが絡んでいる。もしかして、大変なことに巻き込まれているのではないのだろうか。そんな不安がよぎった。

第一話 優勝した大会の賞品（後書き）

感想、批評など宜しければお願いします。

一人称で書いておりますが、敬語など不安定ですので、変なところがあれば、ご指摘よろしくお願いします。

あと、誤字脱字の報告も宜しければ……！

まだ、出始めなのですが、この小説を読んでもくださる方が増えると嬉しいです^^どうか、また遊びにいらしてくださいね^^

第二話 異世界の国イースティア

イースティアに到着する少し前。上空から太陽に照らされた、赤い屋根のアパートメントの集まりが一望できた。

日本の家々とは全然違う。どちらかというと伝統的なヨーロッパの建物なんじゃないかな。その中でひとときわ高い時計台も、日光を受けて輝いていた。

旅立つてから初めて感動して、わーっと声をあげたんだ。

この絶景は何十カラットもの宝石より価値があるような気がする。朝日に心が溶かされるような錯覚を覚えた。緊張も不安も日の光で浄化されていくみたい。

「SPさん、見て！」

隣にいるSPをつつくと、彼は笑いながらサングラスを少しずらして朝日を見つめた。

「とても綺麗な朝日ですね。昔の人は太陽に祈ったって言いますけど、彼らの気持ちがよく分かりますね」

「うん、そうだね！」

私は日本にいる家族が、幸せでありますようにと太陽に祈りを捧げたんだ。

しばらくして、私たちを乗せたジェット機は、ゆっくりと空港の滑走路に降り立った。

着陸してもしばらくの間、景色はずっと流れていた。でも、ジェット機が完全に停止したので、SPに促されて外に出たのよ。

空港は人で溢れかえっていた。

その中は、色んな人種の肌の人がたくさん行き交っていて、圧迫感で酔いそう。私はその人ごみの中で浮いていた。黒いサングラスしたSPをつけているのは私だけだからだ。行き交う人々が、私のほうを振り返って通り過ぎていく。

それに居心地が悪くなりながら入国審査を突破して、そこから外

に出る。すると、空港とは温度差のある冷たい風が私の髪を撫でていった。

外はまだ肌寒いな……。

私の身体は、まだ日本との時差に馴染むことはないみたい。自然と出てきたあくびを、口を押さえることで留めた。

そのまま、まぶたが下がりそうな目を道路に向ける。すると、タクシーに交じって高そうな黒塗りの車が不自然に停まっていた。

その光景は、吸い込まれるように目の中に飛び込んできて、また自然とまぶたが開いたんだ。その車から目を離せずにいると、一人の女の人がドアを開けて降りてきた。

彼女は私より少し年上かな。制服を着ていることから学生だと分かる。ブレザーに赤くて長いネクタイか。カッコイイな。前にテレビで見たことのあるイギリスの制服に似ている。

私の考えなど露知らず、彼女は私と目が合うと、にこりと微笑んだ。

「初めまして、護恋。私は、アンジェリカと申します。私がイースティアのハルシオン学園を案内して差し上げますわ」

「こ、こんにちは。アンジェリカ。今日はよろしくお願いします！」
まさか、そう来ると予想していなかった私は恐縮してしまった。

「ええ、お任せください」

アンジェリカは優しそうな顔で微笑んだ。長くて腰まであるウェーブヘアの金髪と、青い瞳を持ったアンジェリカはフランス人形みたい。

天使が居るとしたら彼女のような感じじゃないかな。ああ、だから、アンジェリカって名前なのかな。

私とアンジェリカは黒塗りの車に乗り込んだ。SPとはここでお別れだ。彼らに手を振ると、向こうもバイバイしてくれた。

車の中は暖房が効いていてすごく温い。車は次第に速度が出る。丸い円を描くようにして敷き詰められる石畳の小路。朝のラッシュ時に当たるのか、行き交う車の数も相当多い。見慣れない縦型の信

号機が赤から青に変わるたび、大勢の人々が颯爽と歩道を歩いていく。当たり前なんだけど、彼らはみんな『外人』さんばかりだった。ふと、私は違和感に気付いた。英語でなくともアンジェリカに通じるとはどういうことだろうか。

いや、アンジェリカは語学が堪能なのかな。美人だし、可愛いし、優しそう。

アンジェリカのような子と友達になったら人生変わるだろうな。友達になって、綿菓子のような軽い髪を三つ編みにしてみたいな。私は、そんなことを考えてアンジェリカの方をちらちらと見ていた。更に、憧れは募るばかりだ。アンジェリカの居住まいは本当に美しい。ユリの花のようだ。私は、足を開いて座っていたのを恥じ、慌てて足をそろえた。

「護恋は、異世界の日本からいらしたのよね？」

「はい、そうです」

私は背筋を伸ばした。

「じゃあ、イースティアのことはよくご存じではないのよね？」

「はい、まだ、異世界とかよく分からないです」

正直、異世界なんてものがあるのか、今でも分からないくらいだ。「イースティアは大きな国です。隣には同じくらいの大きさのウエストランドという国があります。三十年前まで領土を争って、二国は激しい戦争をしておりましたが、決着が付かず、二国は休戦して、停戦協定を結びましたの」

「なるほど、今は平和なんですね？」

「今は、平和といえば平和です。それでも、当初は本当に争いが絶えなくて、彼らは困り果てていたそうです。そして、ある者の案で、代表同士が停戦ラインに建設された競技場『ハルシオン』で戦うことになりました。やがて、それは、二国関係ない祭りのような催し物に変化したのです。そして、今では形だけが残り、強さを競うイベントになっているんですわ」

「そうなんですか。この国は、楽しそうなのか物騒なのか……。一

言で言えば変わっていますね」

「そうかもしれないね」

アンジェリカは私に笑みを返してくれた。

それは、異国人ならどこの国へ行っても抱く感想かもしれないけど。

「それで、その大会に出るために鍛える学校が『王立ハルシオン学園』です。護恋にはその学園の寮に入って生活していただきます」

「は、はい……」

大人しく説明を受けながらも私は心の中で思いつきりうるたえていた。確かに、こんな国の歴史は聞いたことがない。

「もしかして、学園で生活して、この大会に出なくちゃならないんですか？ 一体何のために？」

「そうなるかもしれないね。でも、今はそんな難しいことを考えなくても良いのではないだろうか。何のためにといわれましても、私はその事情を存じませんし……」

「そ、そうですね」

一体、総理は何を考えているの？ 私、とんでもないところに来ちゃったんじゃないのかな。でも、帰るわけにも行かないし……。

まあ、必死で勉強しろっていうんじゃないからいいか。何よりタダだし、ね。

しばらくすると、大きな敷地の前で車が停まった。私は、手ぶらで降りる。荷物は部屋に送ってくれることになっているらしいのでご好意に甘えよう。

私は敷地の中にある建物を見上げた。カメラがあったら、きっと写真をたくさん取っていることだろう。

イギリスの城館のような造りだ。しかも、敷地が宮殿のように広い。よく手入れされた木々が隅に植わっているが、落ち葉はひとつたりともない。

ふと、開いた門扉のところに、横長い立派な看板がかかっているのが見えた。

「王立ハルシオン学園……」

つい声を上げて読んでしまった。何故か、すらすらと読めた。

「そうです、ここですわ」

アンジェリカが微笑む。そう言うことではなくて……。

「なんで、日本語で書かれているんですか？」

もしかして、日本語学園なのだろうか。そういうと、アンジェリカは首を振った。

「いいえ、この文字はイースティア語ですわよ」

「はあ？ いや、でも……アンジェリカも日本語が堪能だし、ここに書かれているのも日本語だし……」

「言葉が通じるのは、この世界の魔力のせいですわ」

「えっ？ へ、へえ……そうなんですか……魔力……？」

私は、苦笑いを浮かべた。アンジェリカには悪いけど、魔力なんてそんなものがあるわけない。それにしても、異世界と聞いていたけれど、本当に異世界なんだろうか。異世界というよりは、ヨーロッパのどこかに来たみたいなきがする。異世界っていったら、フアンタジーや魔法みたいな感じじゃないの？ それなのに、言葉が通じるのが魔力だなんてペテンも良いところだ。私、もしかして騙されているとか？ でも、こんな、失礼なことをアンジェリカには聞けない。

「さあ、護恋、参りましょう」

「……はい」

不満を抱えながらも、もう一度車に乗り込んでから、園舎のそばで降りた。

「建物の中をご案内しますわ」

「ありがとうございます」

アンジェリカの後ろを付いて学園の中に入る。いつまでも眺めていたくなる、イギリスのカントリーハウスの中にあるような廊下が、この先もずっと続いている。印象としては天井が高くて白い。それから、天井がアーチのように丸みを帯びているのも特徴だ。

ああ、おしいなー、本当にカメラ持って来るんだったな。すっかり私は動揺していたことを忘れ、観光旅行に来たような気分になっていた。

そのとき、私はひらめいた。

「あ、そうだ。携帯があつたっけ」

携帯にはカメラの機能もあつたはずだ。

アンジェリカの後ろを歩きながら、スカートのポケットの中を探る。その為、前方を見ていなかった。

「護恋！」

アンジェリカの悲鳴交じりの声が聞こえて、私は顔をゆっくりと上げる。

「え？」

途端に、私は何かにぶつかって尻餅を付いてしまったのだった。

第二話 異世界の国イースティア（後書き）

次回で、サド二人組みが出てきます。護恋の恋の相手？かもしれない
せん^^

アンジェリカは可愛いと護恋は思っているらしいけれど、ノーマル
で行きます！

なので、ご安心ください^^

第三話 三日間の賭け

「いたあ」

石造りの床に強くお尻をぶつけてしまった。木の床だったら、もつと痛くなかつただろう。

「一体どこを見ているんだ!？」

若い男の怒鳴り声がして、私は顔を跳ね上げた。そこには、背の高い男が私を見下ろして睨んでいた。短い黒髪で黒い目というアジア系の容姿をしている。顔は整っているが、少し爬虫類に似ている。お尻がひりひりするの構わず慌てて立ち上がる。ジーンズだったからスカートがめくれたわけじゃないけど、いきなりヘマをやらかしてしまったことが恥ずかしくて顔が熱くなった。

「す、すいません」

慌てて頭を下げるが、男は私を完全に無視した。しかも、私ではなく連れに心を配っている。

「お怪我はございませんか、キャシアス様」

「ああ、ないよ、フェイ。ありがとう」

黒髪の男は金髪の男の服を丁寧に払っている。連れの金髪の男は優しそうな茶色の瞳でそれを見ていた。男の金髪が日の光を受けてキラキラと宝石のように輝いていたので、私はつい見とれてしまった。

彼らはアンジェリカの制服を男物にしたようなブレザーを着ている。そして、赤いネクタイを締めていた。ここの生徒だろうか。

しかも、彼らが話しているのも日本語だ。外人の風貌なのに言葉が通じるなんて不思議だ。吹き替えの映画を見ているような感じがした。

「おい、お前! キャシアス様を前に堂々と頭上げているとはどういふ見だ!」

「はあ、何を言ってるのよ。ちょっとぶつかったただだし、謝った

でしょ。あんたたちが、偉そうにしすぎなんじゃない？」

気が付くと反抗していた。「護恋！」とアンジェリカが悲鳴じみた声を上げた。彼女は前に出て勢い良く頭を下げた。

「申し訳ありません、キャシ阿斯様。護恋は、何も知らないまま今日、異世界から留学してきたところなのです」

「アンジェリカ。なんで、そこまでして謝るの？ 王様じゃあるまいし、頭を下げるだなんて、ちょっとおかしい……」

アンジェリカが青い顔で振り返ったので私は驚いた。

「護恋、キャシ阿斯様は王様ではありませんが、イースティアの第三王位継承者です」

「え？ ということは、キャシ阿斯様はイースティアの王子様？ なんで、王子様が学園に通ってんの？」

「護恋、お願いだから頭を下げて」

彼女が私とキャシ阿斯を交互に見て慌てている。

そんな私たちをキャシ阿斯は面白そうに見ていた。黒髪の男ほど、怒ってはいないらしい。流石、王子様だ。心が広いな。

「この学園に私が通ってはおかしいか？ この学園は王立だし、国王が運営している由緒正しき学園だ。私の他にも由緒正しき家柄の者も通っている」

確かに、変じゃない。私が居た世界にも、学校に通学している高貴な方は存在した。

「その態度から見ると、お前の身分はしれているだろうがな」

黒髪の男は、馬鹿にしたように鼻で笑った。

「何ですって？」

「フエイ！」

キャシ阿斯が黒髪の男 フエイをとがめた。

確かに、私の家は貧乏だが、馬鹿にされるいわれなんてない。

「安心しろ。身分のいやしいお前のような者でも剣技が優れていれば、由緒正しき家柄の方に手駒として使っていただけ。俺のようにな」

……フェイは、身分が低いのか。フェイの台詞が自虐めいていたため、私の怒りは削がれてしまった。

「手駒ってそんな使い捨てみたいだな」

動揺しながら呟くと、キャシアスが苦笑した。

「君は、本当に何も知らないまま、ここに来たんだね」

私の代わりにアンジェリカが頭を下げる。

「もうしわけありません、キャシアス様」

平謝りするアンジェリカを目にして、私は彼女に申し訳なくなつた。

「構わないよ。護恋といつたね。君は、剣は強いのかい？」

と、キャシアスが尋ねた。

「一応、大会で優勝しました」

「そう、それは面白い。では、デュエルをしないか？」

「デュエルって何ですか？」

「だから、剣の勝負のことだよ」

「キャシアス様と剣の勝負ですか？」

私の問いには、フェイが首を横に振って答えた。

「違う、キャシアス様はお戦いにならない。勝負するのはキャシアス様の『手駒』の俺と、お前だ」

「『手駒』って具体的に何なの？ 家来？ それとも召使い？」

「『手駒』とは、高貴な身分の方がデュエルの勝負で必ず勝つために、その方の代わりに戦う者のことをいう。剣の勝負に強い者を家来にしてデュエルで自分の代わりに戦わせる。それが『手駒』だ」

「ふーん、自分の手を汚さないための？」

「口が過ぎるぞ！」と、フェイが怒鳴った。

「でも、面白そうね」

神風総理が私に世界一の剣の使い手になれって言ったことだし、手始めに特訓するのも悪くないわね。

「分かった、勝負よ！」

私の答えを聞いたフェイは、初めて笑った。でも、その笑みは二

ヤリといった風で、陰険そうなのがありありと浮かんでいる。

「では、何を賭けようか？」

そう言ったのはキャシアスだ。でも、賭けるってなあに？ 賭け事をするの？

「申し訳ありません、キャシアス様。勝負の申し込みはなかったことにしてはいただけませんか。護恋は何も知らないのです！」

アンジェリカは真っ青を通り越し、血の気のない顔になって微妙に震えている。

「アンジェリカ、大丈夫よ。私、男相手でも勝てたもん」

私の台詞を聞いても、アンジェリカは辛そうに眉を下げるだけだ。

「アンジェリカ、と言ったね。確か、ライゼント伯爵の娘だったよね」

「わ、私のことをご存じとは恐縮です」

キャシアスの前でアンジェリカは頭を垂れる。

私は目を見張った。確かに、アンジェリカは見るからにお嬢様だが、本当に高貴な身分の方だったとは。私が驚いているのも構わず、キャシアスにはこやかな顔で続けた。

「心配するな、賭けると言っても大したものには賭けない。『三日間の賭け』だけだ」

「『三日間の賭け』って何ですか？」と、私は尋ねた。

「勝ったものは、三日間負けたものを自分の前に文字通りひれ伏させることができるという最小の賭けのことだ。勿論、フェイが負ければ私とフェイが護恋にひれ伏すし、護恋が負ければ、護恋が私とフェイにひれ伏さなければならぬ。……どうだ？」

「面白そうじゃない。やるわ」

「護恋……」

アンジェリカが心配そうに顔をしかめる。私は、アンジェリカを安心させるように微笑んだ。

「大丈夫だって。軽く勝ってみせるからね」

なんだか、楽しくなってきた！

フエイはそんな私を見て薄く笑っている。

彼は余裕そうにしているけど、強いのかな。でも、それも、面白そうね。

私が、この学園でどれだけ通用するのか、確かめてみなくちゃね。

第三話 三日間の賭け（後書き）

さて、護恋は勝つのでしょうか？

感想・批評などお待ちしております〜^^よろしく願いします！

第四話 嫌味な男

「では、後で体育館に来るように」

と、キャシアスが命令したので、私は「分かった」と頷いた。

キャシアスとフェイは、またどこかに去っていった。体育館には一緒に行かないのかな？ でも、共に居ても衝突するだけだから一向に構わないけど。

ふと、私たちを見ていたギャラリーに今更ながらに気づいた。けれども、彼らも興味を失ったのか、思い思いに散らばって消えた。

そんな様子を横目に見て、

「アンジェリカ！ 体育館に案内してください！」

気楽な顔でお願いすると、アンジェリカは酷く疲れたように嘆息した。

「護恋、あんなに止めたのに、私はもう知りませんから」

怒るのは分かるけど、彼女には嫌われたくないな。

「そんな、アンジェリカ、怒らないで」

アンジェリカを覗き込むと、彼女はやつと微笑んだ。

なんだか、アンジェリカとは良い友達になれるかも。アンジェリカは伯爵令嬢という身分の高い方だけど、敬語をつけなくても友達だから良いよね。

「仕方がないので、先に体育館にご案内いたします」

「ありがとう、アンジェリカ！」

彼女は、軽い笑みを浮かべて歩き出した。私も彼女の後を付いていく。

ふと、顎を上げる。人通りのない廊下に重苦しい雰囲気はこちらに歩いてくる男が一人居る。制服を着ているので、どうやらこの学園の生徒らしい。肩までの銀髪のウェーブヘアを揺らし、陰険そうな緑の瞳をすうつと細めている。

アンジェリカは彼に気付いて、立ち止まる。私も自然と歩むのを

やめた。

「どうしたの、アンジェリカ……?」

彼女の顔を見ると、顔色がさえない。キャシアスのときも動転していたけれど、今回も白い肌が青くなっている。けれども、今回は厳しい顔をしているのは何でだろう。

男も足を止めて、アンジェリカに笑いかけた。でも、笑いかけたとはいえ、それは嫌な笑みだった。負の感情が交じっているようなそんな笑い方だ。

「アンジェリカ様がデュエルをなさるとは。しかも、相手はキャシアス様とか。その方はアンジェリカ様の手駒でございますか?」

「いいえ、ヴェンセント。私はデュエルは致しません。それに、護恋は私の手駒ではありません。私は手駒を持つことはこの先もないでしょう。では、失礼します」

アンジェリカは彼を振り切ろうとしているのか、足を速めた。

私もアンジェリカに急いで付いていく。

「なんか、嫌な感じの人だったね」

「ええ……ヴェンセントは少し苦手な方です……」

アンジェリカの表情は強張ったままだ。それに彼女は気になることを言っていた。

「アンジェリカは手駒を持たないって言ってたけど……」

「ええ、この先も持つことはありません」

きっぱりとした口調だ。なにか理由があるのかな。

「あの」

どうして手駒を持たないの? そう尋ねようとしたけれど、いきなりアンジェリカが笑顔でこちらを振り向いたのできくりとなった。

「体育館に着きましたわよ」

「あつ、案内ありがと……」

私は用意した台詞を、浮かべた微笑の中に仕舞い込んだ。

アンジェリカが言いたくなさそうだから無理に聞いて自ら嫌われるものな。仕方ない。聞くのは止めておこう。

「さてと……」

辺りを見回すと、やけに大きな建物の前に来ていたことに気付いた。これが体育館なのだろう。伝統的な建物とは違い、日本の学校でも見かけるような新築の体育館だ。

「じゃあ、戦ってきますね」

靴を脱ぐと、体育館の中に足を踏み入れた。

新鮮な感覚が私を満たし、五感がフル回転する。

汗臭さがしみたような活気ある臭い。床は木目調で所々ラインが引いてある。周りを見渡すと、人だかりができていた。それを確認すると同時に、体育館の中でドワツと歓声がわきあがった。

私は、軽い高揚感を感じながら進んで行った。

第五話 勝負の行方

体育館の中には学園の生徒の大勢が集まっている。朝早いのに、ご苦労なことだ。ギャラリーは、女の生徒のほうが多い気がするが気のせいだろうか。

「あれが、転入生？」

「剣の腕は強いのかしら？」

「見たところ、ひよろひよろして強そうには見えないけど」

ざわめきの中にこんな話し声が飛び交っている。

「待たせたね」

入り口から若い男の声が出て目をやると、キャシアスとフェイが体育館の中に入って来ていた。ヒーローのお出ましに、「キャー！」という黄色い声が私への応援の二倍増しで響き渡る。私は思わず、両耳に人差し指を突っ込んだ。

「キャシアス様ー！」

キャシアスにはやはり熱狂的なファンが居るらしい。そりゃ、カツコイイもの。分かる気がするわ。

「フェイ様ー！」

げ、フェイ様だって。フェイにもファンが居るとは。こんな奴を好きだなんて気が知れない。フェイの顔なんて少し爬虫類に似ているのに。

「フェイ様ー！ 愛してるー！」

「キャシアス様、抱きしめてー！」

などなど。耳が痛くなるキンキンな声援が飛び交っている。キャシアスはそれに手を振って答えているが、フェイはそれらを完璧に無視した。

女の子達の鋭い叫び声のせいで、耳鳴りと眩暈と頭痛が起きてくらくらする。こんなしょうもない男らのどこがいいのか分からない。私は、いろんな形相が交じった変な表情をしていたんだろう。

それに、フェイが気付いた。

「どうした？ お前、悪いものでも食べたのか？ 牛乳を拭いた後の雑巾みたいな顔してるぞ？」

「牛乳の拭いた後のぞーきんっ！？ くさい臭いが漂ってきそうな顔ってこと！？」

「分かっているじゃないか」

フェイが面白そうに笑った。

「むっかー！ さあ、さっさと勝負しようよ！」

人を汚物扱いしたフェイをこてんぱんにやつつけてやる！

キャシアスが「剣をここへ！」と声を張りあげた。同じ制服を着た男の学生の手によって、大きな箱が運ばれてくる。箱の下には車輪が付いているらしく、出し入れしやすそうだ。その大きな箱を覗き込むと、剣が刃を下にして入っていたのでびっくりした。

「……って、ちょっと待つてよ！ 真剣で勝負するの！？」

「何を言っている。この剣は切れはしない。ただ、触れると十分間ほど動けなくなる麻痺する薬を塗っているがな」

「な、何ですって！？ 毒を塗ってるの！？」

「毒じゃない。麻痺する薬だ。勝敗をはつきりさせるため少しの間動けなくするだけだ。体に害はない。それに、この麻痺薬は先生方や規則委員の手によって厳重に管理されている。怯えることはない」

「へ、へえ……」

恐る恐る、剣を選ぶ。とは言っても、どれもこれも同じものに見えるけど。刃の部分には触れないようにしよう。

「あ、真剣の格好をしているけど、結構軽いな」

選びぬいた剣を、鼻歌交じりに振っていると、フェイが可笑しそうに口の片端を持ち上げた。

「余裕だな？ デュエルを知らなかったよそ者とは思えないな」

「あ、分かる？ フェイをすぐに跪かせることができると思うとうれしくってさ」

挑発するようにフェイを煽るが、フェイは特に気に障った様子は

ない。それどころか、静かに薄く笑ってる。

余裕なのはどっちよ。でも、勝つのは私なんだから。

剣を床に置いて、自分の長い髪をポニーテールにして括った。そして、剣のグリップを握り締めて、フェイの方に歩いていった。

ギャラリーの話している会話が聞こえてきて分かったんだけど、この白い線の中は『バトルフィールド』って言うらしい。私は、その白線の引かれている中に踏み入った。

それでも、私は落ち着かず、周りをきよるきよるしている。すると、ここの男子生徒が、分厚い本を抱えて近づいてきた。

バトルフィールドの際まで来ると、こちらを見て愛想良く微笑んだ。赤い縁の眼鏡を掛けていて、頭にはヘッドホンマイクをつけてある。

「貴方は？」

「私はデュエルの審判です」

私は「へえ」と、得心して何回も頷く。ちゃんと審判までいるなんて、本格的だな。

『今から護恋VSフェイのデュエルを行います』

彼は片手を上げて高らかに宣言する。

『掟の神テュテュスの名の下に私コードネルは審判の立会いを務めます』

コードネルは手に持っていた分厚い本を開く。すると、体育館の中に涼しい風が舞った。私は館内の中を見回すけれど、窓は全て閉めきられている。

えっ？ ど、どこから風が？

ページが規則正しく風に吹かれたようにぱらぱらとめくれていく。私はそれが不思議で、コードネルの手元をじっと見ていた。

『この審判の判断はこの『決闘の書』の判断にゆだねます』

「決闘の書？ それを見て審査するの？」

私は指を本の方にさし示していた。

『ええ。正確には、この決闘の書に記されていく神のジャッジを審

判の私が正確に伝えるんです』

決闘の書に記されていく神のジャッジ……？

なーんか、胡散臭いわね。私は疑わしげに眉を寄せる。

「続けてくれ」と、フェイ。

『では……。審判コードネルはテュテウスと規則委員の名の下に公平な判断をすることを誓います』

『決闘の書』のページがやっと真ん中を開いて落ち着いた。

『最初に、決闘七ヶ条を読み上げます』

コードネルの声が体育館に染み渡り消えていく。

『一条。決闘は正々堂々行われなければならない』

不可解なことに『決闘の書』のページがまた、一ページ勝手にめくれた。

『二条。決闘はテュテウス神の御前で行わなければならない』

コードネルは背表紙に両手を置いているのに、またページが勝手に開いていくのだ。

『三条。決闘の勝敗により主おもに敗者は賭けに束縛される』

コードネルが読み終わると、また一ページめくれる。

『四条。手駒は主のために戦わなければならない』

それから、また一ページ。

『五条。決闘を行う者は剣によって戦わなければならない』

それは透明な誰かが、コードネルの傍でめくっているみたいだ。

『六条。賭けは正当かつ対等でなければならない』

どうなってるの？ どういうトリックなんだろう。

私はじっと、コードネルの持っている『決闘の書』を見つめた。

『七条。決闘の精神にもとる行いをしてはならない』

コードネルは読み終わると顔を上げた。ページもそこで止まってしまった。

『尚、掟に背くと神の意志により『絶対的な賭け』は実行されません。正々堂々と戦ってください』

フェイは「はい」と返事する。私も慌てて「はい」と声を張った。

それにしても、絶対的な賭けって……？

「ねえ、絶対的な賭けって何なの？」

私の問いに、フェイはニヤリと陰険そうな笑みを浮かべた。

「それは、どちらかが勝ってからののお楽しみだ」

私も釣られてニヤツと笑みを浮かべる。

「それは楽しみね」

『賭けの確認をします。それぞれ、三日間の賭けをするという事でよろしいですね？』

もう一度、私とフェイは「はい」とそれぞれ返事をした。

『ルールはもう一度言いますが、先に剣が肌に触れたほうが負けです！』

審判が、片手に分厚い本を開いたまま声を張り上げる。

互いに剣の先を微かに触れさせ、私とフェイが構える。応援する声飛び交う。ほとんど、フェイへの歓声なのが悲しいけど。

『では、始め！』

コードネルがサツと片手を上げた。

私はフェイントをつけて踏み込む。更にフェイントをつけてフェイの肩を狙った。この間の大会だって、この最初の素早い剣さばきですぐに一本を取って、終いには私が優勝したのだから。

剣を振ったが、手ごたえはなかった。彼の姿が忽然と消えたからだ。

ど、どこに消えたの！？

「え………？」

振り向こうとしたとき、体が動けないことに驚いた。やっと、後ろ首に冷たい刃が当たっていることに気づいた……がもう遅い。

私は、あっけなくその場に倒れこんでしまったのだった。

『そこまで！ フェイの勝ちです！』

うそーん！？ 私、負けたのおお！？

やっぱり、私の剣はこの学園で通用しないの！？

「何？ 早速負けただと」

その頃、神風総理にホットラインで素早い連絡が入っていたらしい。総理は複雑そうな顔で唸っていたそうだ。

「そ、そうか。でも、まだ最初だから仕方ないな」

負けてしまっごめんなさい、神風総理。でも、私、この学園で鍛えて総理の期待に答えられるように頑張るよ。

第六話 絶対無敵のデュエリスト

私がある場に崩れ落ちると、フェイへの歓声が湧き上がるように大きくなる。

「護恋！」

向こうから走ってくるアンジェリカの細くて白い足が見えた。すぐに、私を抱き起こしてくれた。そのお陰で、座った時の目線で周りを確認することができた。どうやらキャシアスとフェイは、女達に取り囲まれてキヤーキヤーされているようだ。別に確認しなくてもどうでも良い様子だったな。

「だから、止めたほうがいいって忠告しましたのに」

アンジェリカは濡らしたハンカチで、私の首筋を拭いてくれた。

「こうすると、早く、麻痺が取れるのですわ」

アンジェリカは優しいなあ。私の傷心を薬のように癒してくれる。でも、負けちゃったのはどうしてだろう。私って結構強いはずなのに……。

私の気持ちを悟ったのか、アンジェリカは消沈した様子で切り出した。

「護恋、やはり、負けると分かってました。なんと言っても、フェイは、イースティアの競技場ハルシオンでの三年連続のチャンピオンですもの。絶対無敵のデュエリストとは、彼のことですわ。普通の方では勝てるはずがありません」

そ、そんな〜！ それを早く言ってよ！

わめこうとしても、私は動けないし喋れない。だから、せめて目を潤ませて訴える。

傍にいたので、アンジェリカの嘆息した息遣いを感じられた。

「でも、負けてよかったかもしれませぬ。もし、勝てたとしても

」

アンジェリカはそこで言いよどんでしまった。彼女の視線がキヤ

シアスのほうに向けられている。

勝てたとしても、って？ 何か問題があるのかな？

「まだ痺れてますか？」

アンジェリカが心配そうに髪をなでてくれる。こんな可愛い子に介抱してもらえるなんて極楽じゃー。私は、ついおっさんのように思ってしまう。良い心地で、うつとりと目を細める。

その時、視界にブレザーのズボンの足が入ってきた。「おい」と声がかかり、私は顔を上げようと努力した。やっとのことで視線を引き上げると、フェイが意地悪そうな顔をして私を見下ろしていた。傍には、楽しそうな表情のキャシアスもいる。

うつつ。そうだ、負けたんだった。

「まだ、痺れているから、効果はないか……」

フェイが意味不明なことを言う。

「そへっへはひ？」

おっ？ ちょっと喋れるようになってきた。

「それって何って言ったのか？ この世界には魔力のようなものがある。賭け事に勝ったら大抵のことは守られるというな」

また、魔力だ。フェイもアンジェリカと同じような考えらしい。

「じゃあ、負けたほうはその魔力のせいで勝ったほうに従わなくちゃならないっていうの？」

おっ、ちゃんと痺れが取れたみたい。フェイもそれを確認してにやりと笑う。

「大体はそういうことだ。それが絶対的な賭けだ」

「そんな馬鹿な。悪いけど、私、魔力とか怪しい宗教信じてないから」

「なら、痺れも取れたし、試してみるか？」

試すって何を？ そんな疑問を顔に出したときだった。

フェイが犬に言うように「伏せ！」と高らかに命令した。

もちろん、私はそんな無礼な命令に従うつもりはない。だけど、

「にゃ？」

途端に、私の上体は顔ごと床にぺたんこひれ伏した。その「伏せ！」という彼の命令に絶対服従するように体が勝手に動いたのだ。

「なっ！？ なななな！？」

気が動転してしまった私は、床に這いつくばってのたうつ。それが面白かったのかギャラリーは楽しそうに笑う。

この時になって、この異世界がどういうものなのかやっと分かってきた。この国は一般的な世界地図にも載ってないし、魔法みたいな絶対的な賭けだなんて、なるほどファンタジーの異世界トリップだわ……。

四苦八苦することで、私はやっと起き上がることができた。すると、今度は、フェイがにやりと笑った。フェイの顔がどうして爬虫類に似ているのか分かった気がする。

私の今の状態が蛇に睨まれた蛙そっくりだからだ。彼は獲物を威嚇するためああいう顔になったのだ。……多分。

「三日間、覚悟しろよ？」

なるほど、三日間の賭けだから、この命令に服従と言う状態が三日続くと言うわけだ。

「は、ははは……」

全然、笑えない。一体何をされるのやら。

第七話 絶対的な賭け

密やかな笑い声が、四方八方から耳障りに聞こえてくる。私はキヤシアスとフェイの後ろから、金魚の糞みたいについて行く。しかも、手にはキヤシアスが図書室で借りたハードカバーの本を五冊抱えさせられている。その上、頭は下げたままという有様だ。

「しっかり歩けよ」

フェイが振り返って私に声をかけた。私はムカついて、ついに顔を上げた。

「ひれ伏させるって、頭を下げるだけじゃないの？ 普通、女の子に本とか五冊も持たせる？」

文句を並べると、フェイが意地悪く笑った。

「おおっと、頭が高いぞ」

「あう」

自分の意思とは関係なく、私の頭は下を向く。ますます泣きたい気分になってきた。当初の予定では、軽くフェイに勝って、私が彼に命令するはずだったのに！

「大体、キヤシアス様を敬わないその態度が気に入らなかつたんだ。いい気味だ、ざまあみる」

な、なんだと……！

「フェイ、そんなことをいうと、護恋が可哀想じゃないか」

キヤシアスが私を庇ってくれた。

廊下から明るい光が入ってきて、私を照らした。

キヤシアスは、何て優しい人だろうか……！ 感動していると、キヤシアスは更に続けた。

「でも、生意気な女が自分にひれ伏すのは凄く気持ちがいいというのは否定しないけど。護恋、三日間精一杯こき使ってあげるからね」

キヤシアスは、天使の笑みを浮かべて、悪魔の台詞を吐いた。

わーん！ こいつら、私を三日間苛め抜く気だ！

キャシアスも、フェイと全然変わらない。二人ともサドもいいところだ。流石、フェイの主。そういうところでは、尊敬しますとも。仕方なく頭を下げたまま彼らの後ろをついて行くと、廊下の脇で女生徒がこちらを傍観していた。彼女たちの話す声が自ずと耳に入ってきた。

「いいなあ、三日間の賭けで負けたら、私もキャシアス様とフェイ様とずっと一緒に居られるのよねー」

何が一緒にいたいものか！

「でも、私、あの子みたいな無謀な真似できないわ！」「どうして？」

「だって、私、キャシアス様とフェイ様が凄く容赦ないって気づいているもの！三日間の賭けなんかしたら、ずたばろになってその辺にぺいって捨てられちゃうわよ！」

「やっぱり、キャシアス様とフェイ様は観賞用よね」

「あの子すごく可哀想ね。異世界から来たって言うてるけど、逃げ帰るんじゃない？」

まさに他人事もいいところだ。彼女たちは私の話で楽しそうに盛り上がっている。けれども、彼女たちもキャシアスを見かけるや否や頭を下げている。キャシアスとフェイは彼女たちにも恐れられているのか。

この学園のキャシアスとフェイは鬼門だったな。アンジェリカが止めるのも聞かずに、その鬼門に突っ込んでいったのだから、私って救いようがない。

「というか、アンジェリカはどこ！？私の天使は！？」

苦渋に耐え切れず叫ぶと、フェイがウザそうに振り返った。

「何、気持ち悪いこと言っているんだ？」

「ああ、アンジェリカは護恋と同じクラスだよ」

と、キャシアスが告げた。

「ほ、本当ですか！？」

それだけで天国に昇るような心地がした。

更に、キャシアスが続ける。

「でも、私とフェイも同じクラスだけどね」

「え……………」

天国から地獄へとはこのことか！ フェイは足を止めた私に気付いた。そして、鬼のような形相で怒鳴った。

「なんだ？ その露骨に嫌そうな顔は！ 『私は、キャシアス様と同じクラスになれてすごく光栄です』と言え！」

調子に乗るな！ 私は怒鳴り返そうとしたが、口が勝手に「私は、キャシアス様と同じクラスになれて凄く光栄です」と繰り返す。

この世界では『デュエルに勝った者の賭け』は、負けたものに絶対的に働くのだ。身を以って知った。

「そう、それで良い。当初、護恋は別のクラスだったが、キャシアス様がお前をこき使いたいが為にわざわざクラスを俺たちと一緒にのクラスにお変えになったのだからな！ 感謝しろ！」

な、なんだと！？ で、でで、できるかああああ！ 私は叫びたいのを喉の奥で精一杯食い止める。

ああ、数時間前の自分に、『キャシアスとフェイに気をつけなさい！』と言ってやりたい。後悔先に立たず。

「あ、ありがとございます……………」

私の口は引きつりながら、二人にそんなお礼を言っていた。

第七話 絶対的な賭け（後書き）

実は最強主人公ではなかったという^^次回から、学園の生活が始まります。

では、読んでくださってありがとうございました！

感想や批評など、ありましたら、お願いします！

第八話 悪い視力

しばらく、キャシアスとフェイの後ろをよたよたと歩いていただけ、キャシアスが自分の腕時計を見て立ち止まった。フェイも私も彼にならって足を止めた。

「もうすぐ、ホームルームが始まるね」

キャシアスは、フェイにそう教えた。

「そうでございますか」

彼に相槌を打ってから、フェイは私を振り返った。

「おい、お前」

キャシアスを見ていたときの穏やかな表情を豹変させて、鋭い視線で私を射る。

「な、何よ」

キャシアスと私との百八十度違う態度は、何とかなんなのかな。「ホームルームが始まるから着替えて、教室まで来るんだ」

フェイが顎を上げて命令した。

彼の不遜な態度に腹を立てそうになっただけ、

「えっ、今日から授業を受けなきゃなんなの？」

私は、そのことに驚いて目を瞬いたんだ。

「お前がイースティアに来るのは、春休みの予定だったんだ。授業は今日からでも遅いくらいだ」

「んなつ！？ そ、そうなの？」

「もう時間がないよ？」

キャシアスが私に腕時計を見せてくれた。もうすぐ長針が八時を示そうとしている。

「ホームルームって何時からですか！」

「八時半からだよ」

「えっ、うそーっ！ 本当に時間ないじゃん！ 持って持って！」

「お、おいー！」

慌てて本をフエイに押し付ける。

「えっと、寮ってどこだろう？」

私はパニックになってしまっただけで頭を掻きむしった。

「はい、地図」

キャシアスがにこにこしながら、私に女子寮寮までの道順を書いた紙を渡してくれた。

用意が良いのは何でなのか分からないけれど。

今はそんな小さな疑問を気にしている場合じゃない。

「ありがとう……！」

私は素早く一礼すると、すぐさま廊下を駆けた。

女子寮の割り当てられた自分の部屋で制服に着替えて、教室まで戻ってきた。

そもそも時間がないのは、フエイとキャシアスが私をこき使うからなんだけどね！

高等部、一年Aクラス。広くて綺麗な教室だ。清潔感のある白を基調としている。開けた窓からは、爽やかな春の陽気のそよ風が吹き抜けている。

こうして私は、自己紹介をすることになった。

見渡す限りの教室の中には、三十人ほどの生徒が席に座っている。

「えー、転校生を紹介いたします。花咲護恋さんです」

担任の女の先生は、グロリアーナという名前らしい。ショートカットのクリーム色の髪を持っている。茶色の目は優しくそうだ。

先生は、黒板に私の名前をチョークで綴る。

達筆な漢字だ。でも、この世界の魔力で漢字に見えるだけかもしれないけど。

皆と一緒に入学できなかったのは、その時期がずれてしまったためだ。先生の話によると、なにか日本で手違いがあったらしい。

「席はどうしましょうか？ アンジェリカ様の隣が空いてらっしゃるようですが……」

確かに、アンジェリカの隣が空いている。

私は嬉しさのあまり、何回も頷いた。

だが、悪魔の声が前の席から聞こえた。

「グロリアーナ先生、護恋は、私の隣に座らせてくれないか」

キャシアスだ。

「そうです。こいつは、俺にデュエルで負けて、三日間の賭けをしなくてはならないのですから」

フェイは、キャシアスの横の席で、楽しそうに続けた。

絶対に嫌だ。こんなサド二人組の隣は絶対に……！

グロリアーナ先生に、私は必死に目で訴えかける。

先生、見て。私のこの泣きそうな悲しい捨て犬のような眼を……！

グロリアーナ先生はそんな私を一瞥した。

「そうね……キャシアス様が仰るなら、そういたしましたよ」

グロリアーナ先生には通じてなかったようだ。笑顔ですっぱりといわれてしまった。

私は、またしても天国から地獄に落ちた。

「そ、そんなに……」

生気が尽きたように、がっくりとうな垂れる。

「何をやっているんだ。早く席につけ」

フェイが、向こうから声を私に投げつけた。

「分かってるわよ。あんたたちの隣は凄く嫌だから戸惑ってるだけよ」

そんな声が喉から出そうになったが、ぐっと堪える。

言ってしまうば、この世の終わりだ。このサド二人組に何をされるか分かったものではない。

やむなくアンジェリカの横の空いた席をキャシアスの所に持つてくる。

すると、キャシアスとフェイが間に座るように促したので、私の

机は、キャシアスとフェイの間に収まった。

一時間目のベルが鳴り、国史のヒューゴ先生が教壇に立った。若い男の先生だ。黒髪で黒目という見た目で親近感がわいた。だけど、西洋風の顔の作りをしている。笑うと口元にしわができるんだ。

「それでは、テキストを出してください」

ヒューゴ先生の指示に従うように、皆は国史のテキストを机の中から取り出している。

「あつ、テキスト忘れちゃった……」

仕方がないので、私はしゅんとうな垂れて授業を聞き流す。机の上には真つ白なノートを、ただ広げているだけだ。ため息を付いてシャーペンの先でノートを突つつく。

しまったなあ……。三日間の賭けに負けているいろいろあつたせいで時間がなかった。適当にテキストを持って来たけど、その中に国史のテキストは入ってなかったようだ。

ふと視線を感じて、隣を見る。すると、フェイの机が私のほうに寄ってきたので、私は驚いた。

「しょうがないから、テキストを見せてやる」

フェイはテキストを机の端において、私に見るように促す。

私は、驚いて目を瞬かせた。どういう風の吹き回しだろうか。フェイの人が変わったような、そんな気がする。

「どうした……?」

「い、いや、妙に優しいなーと思って……何か企んでるの?」

「色々な」

フェイが面白そうに一笑した。なんとなく、フェイがかっこよく見えた気がして、私は視力が悪くなったのかと、目頭を押さえた。

第九話 賭け事という教科

三時間目まで授業が終了した。教室をきよろきよろと見渡す。アンジェリカが、一番後ろの座席で読書していた。フェイもキャシアスもこちらに気に留めていない。

アンジェリカの下に尻尾を振って走っていかうとするまさにその時、誰かが私の腕を掴んで引き止めた。戦々恐々としながら振り返ると、フェイがにたりと唇を引き伸ばしていた。

見つかった……！

「な、何よ……？」

それでも私は後ずさろうと試みる。

「キャシアス様の肩が凝ってらっしゃる。お揉みしろ」

フェイは私の腕を引っ張っている。ムカついて私はフェイの手を振り払った。

「なんでよ！ 私はアンジェリカと話したいの！」

我とはなしに叫ぶと、クラスメイト達が私に好奇心な視線を浴びせた。アンジェリカも私に気付いて瞠目している。

「三日間の賭けのことを忘れたのかい？」

テキストを読んでいたキャシアスが、独り言のように呟いた。

「う……」

泣きそうに顔をしかめる私に対して、フェイが続ける。

「それに、お前は、アンジェリカ様の手駒ではないだろう？」

「そ、そうだけど……友達だから」

「はっ、友達！？ 身分が違いすぎるのにか？」

フェイの台詞に言い返せなくて、俯いたまま黙り込んだ。

「フェイ。言いすぎだよ。身分が違ってても、私とフェイのように良い侍従関係になれるだろう？」

テキストから顔を上げたキャシアスが、フェイに優しくそうな視線を投げかけた。フェイは感極まった様子で、嬉しそうにキャシアス

の前に跪く。

「もつたいないお言葉、ありがとうございます」

「アンジェリカと話したいのに……」

私はアンジェリカに視線を投げかける。アンジェリカは遙か後ろから、心配そうにこちらを窺っているだけだ。

仕方がないので、キャシアスの肩を揉む。

「一ついいことを教えてあげよう」

キャシアスが、気持ち良さそうに目を細めて言う。

「なんででしょうか？」

投げやりに答える。早くも自分の人生が終わったような気さえしていた。

「次の時間の『賭け事』の授業をしっかりと聞きなさい。三日間の賭けを早く終わらせることができるかもしれない」

「えっ！ 本当ですか！ はい！」

私の気分は一気に高揚した。それにしても、賭け事の授業があるだなんて変わってる。私の国では賭け事は、あまり印象が良くない。しかし、このイースティアの国のあり方だと、もてはやされているのは、お国柄というものかもしれない。

「お兄様。ごきげんよう」

「こんにちは、キャシアス様」

突然、幼い声と低い声が聞こえて、私が隣を見ると、少女と、男の学生が楽しそうにこちらを向いていた。

男の学生は、私より少し年上のようなようだ。だけど、見たところ、キャシアスやフェイと同じ年のような気がする。それは、日本人が外人と比べて幼く見えるのと良く似ていた。

「やあ、ウナ。ギルバート」

少女は、ウナ、男はギルバートというらしい。

「お兄様って、キャシアス様の妹さんですか？」

「そうだよ。ウナは私の妹。普通は、片親が違っていたりするんだけど、珍しく、両親も同じでね」

ということとは、王女様ってことか。

「どうして、ウナ様がここにいらっしやるのですか？」

どう見ても、小学校低学年くらいにしか見えないのに、高等部にいるだなんて変じゃないだろうか。

「あら、居て悪いかしら。私は、高等部まで飛び級しましたの」

ウナは誇らしそうに胸を張った。

「それでは、すごく頭が宜しいんですね」

無意識に感嘆していた。

そういえば、ウナも私と同じ制服を着ている。

「俺は、ギルバート。ウナ様の手駒なんだ。ええと、護恋だっけ？」

よろしくな」

ギルバートは人懐っこそうな笑みを浮かべて、私に手を伸ばした。私はキャシアスの肩をもむのを止めて、ギルバートと握手した。

「なんで、私の名前知ってるの？」

それが不可解だった。ギルバートは「そんなこと？」と、当たり前質問だと言わんばかりだ。

「護恋は有名だぜ？ 転校早々、フェイに挑んで無様に敗北したってな」

なるほど、学園中の噂と言うわけか。しかも、格好悪く負けて滑稽な転入生として有名なのね。

「……絶対勝てると思っていたのよ……」

「まあまあ、落ち込みなさんな」

ギルバートは陽気に笑いながら私の背中を叩く。

ギルバートの言い方は直截簡明だけど、嫌味がないのがせめてもの救いよね。

ウナが愛らしく微笑んで、手の指を組み合わせる。

「それで、お兄様、お願いがありますの！」

おねだりのポーズらしい。

「なんだい？」と、キャシアス。

「護恋にお馬さんをして欲しいのですわ！ 貸していただけません

「？」

「んなっ！？ お馬さんんん！？ そんなこと、したくないわよ！」
私の言い方が面白かったのか、フェイは顔を背けて笑いを堪えている。キャシアスは悩んでいる風を装って、私に細い目を向けた。明らかに状況を楽しんでいる。

嫌な予感がするわ。

「じゃあ、護恋。ウナにお馬さんしてあげて」

キャシアスが悪魔の笑みで命令した。

「そ、そんな！？」

愕然としている私に、ウナが「さあ、早く四つんばいになりなさい！」とむこうずねを蹴った。

「い、痛いです……」

私は、それにも従うしかなかったのだ。

三日間の賭けおそるべし……！

第十話 賭け事のノウハウ

私は四つんばいになり、ウナを背中に乗せて、教室の中を歩き回った。それ以上詳しく思い出すことは止めておくわ。だって、屈辱としかいえなかったもの！

始業のベルが鳴り、私の魔の十分間は過ぎていった。ウナは満足したのか清々しい顔をして、ギルバートと一緒に教室に戻った。

ちなみに、ウナとギルバートは隣の一年Bクラスらしい。隣のクラスだったとはね。

三日間の賭けが終わるまでは、もう来ないで欲しい。

「それでは、『賭け事』の授業を始めます」
生徒達は、席につきはじめる。

賭け事の先生はカシス先生というらしい。初老の女の先生だ。パーマメントをかけた短い銀髪と、茶色の瞳を持っている。小太りだけど、優しそう。小さな丸い眼鏡をかけているのが印象的だ。

私は椅子に座り、黒板に真剣な目を向ける。フェイの言葉に従うのも、ウナにお馬さんをするのも、もう嫌なんだ。

幸い、賭け事のテキストは持ってきていた。カシス先生が教壇に立つ。

「ええ、この国では、賭け事が普通に行われております。それは、皆さんもご存知ですね？」

カシス先生が、眼鏡のフレームを上げながら、

「テキストの五ページを開いてください」と指示した。

テキストを開くなり、それを真剣な目で見つめる私。

「イースティアとウエストランドの国境に建設されている、競技場ハルシオンでは、月に何度か、国を代表するデュエリストが色々な物をかけて、戦っております。政治のことだったり、国と国の取引だったり、様々な駆け引きが行われております。そのために、この

国では、強いデュエリストを育成しなければならないのです」

なるほど、国の将来がかかっているわけだな。私は得心して頷く。「この『賭け事』の教科では、様々な賭け事の知識を身につけます。皆さんも、デュエルを挑まれることでしょう。そして、もう、三日間の賭けをされた方もいらっしゃるようですが……」

早速、先生方の耳にも届いてしまったようだ。

カシス先生やクラスメイト達に視線を向けられ顔が熱くなった。うう、早速負けました……。

フェイがこちらを向いて、にやりと笑っている。キャシアスもくすくすと笑っている。私は、二人を交互に睨んだ。

何よ、今は授業を聞きなさいよね！

カシス先生が、私の傍に立ち、私の手をそつと持ち上げた。

「えっ？ ど、どうされたんですか？」

「自分に絶対的な賭けが発動されると、このように小さくて黒い星型の烙印が自分の身体のどこかに一つ浮き出ます」

「えっ？ あ、これが？」

私の手のひらには山椒の粒くらいの大きさの星印が黒くタトウのように入っている。何かのインクが手のひらに移ったのかと思つた。「負けた場合に絶対に烙印が付くというわけではありません。絶対的な賭けが自分に働いている場合だけです」

はー、なるほどなあ。

「絶対的な賭けの効力が消えると、その星印も消えます。例えば、賭けを取り消す勝負をして勝つとか。賭け事が叶えられたからとかでね。なのでご安心ください」

その星印を擦ってみた。でも全然消えない。

やっぱり三日間の賭けだから、三日待つしか　でも、三日も待つてられないよ。そうなると、デュエルで勝つしか方法はないのか。「この世界では、賭けた約束はデュエルで勝つと大抵のことは守られます。この世界に漂う不思議な魔力のせいで、たいていのことは守られるようになっていのです。それを賭けに使う例もあります」

あ、あれ？

三日間の賭けの回避方法は……？ええい、もう待つてられないわ！ 私はすつと手を上げる。

「カシス先生、三日間の賭けを早く終わらせたいんですが、それを先にお教えくださいませんか！」

率直な物言いに教室は笑い声に包まれた。

カシス先生までも、笑っている。

こっちは必死なのよ！

「そ、そうね！ 護恋さんのほかに、三日間の賭けで負けた場合にどうしたらよいのか、先にお答えしますね！ テキストの五十七ページを開いてください」

カシス先生は黒板に図を描きながら、説明している。皆は一斉にテキストのページを開く。私もテキストのページを捲る。

「三日間の賭けに負けてしまい、負けた相手に絶対服従になった場合、逃れる方法があります。それは、もう一度、負けた相手に勝負を挑んで、賭け事をするのです」

そ、そんなこと！？ そんなことだったら、私も考えたわよ！

私は更に手を上に伸ばす。

「カシス先生つ、それじゃあ、また相手に負けてしまいます！ 負けたら、状況がもつと悪くなります！」

私は泣きそうになりながら、手を下ろした。隣を見ると、フェイがおかしそうに笑っている。

カシス先生は、頷いて、更に続ける。

「その場合は、負けた相手と戦うのではなく、負けた相手に許可を貰い、勝てそうな相手を指名するのです。そして、その相手と戦い、『三日間の賭け』の取り消しを賭ける。勝てば、最初に負けた相手との賭けは無効になります」

「な、なるほど〜！」

「その相手を決めるのもコツがいります。そのために、次の時間のデュエルの授業があるわけです。そこでは、賭け事は行われません

ので、自分より強い相手や弱い相手を見極めると良いでしょう」

カシス先生がにっこりと私に微笑んだ。

「それでも、相手が悪かった場合は、先生や規則委員に相談してください。色々と協力してくださいさと思えます」

真剣にノートに書き記す。これだったら、私も確実に勝てるかもしれない。それに、頼れる人も居るし安心だわ。

その後、問題を出され、解いている内に授業は終わった。終わりを告げるベルが鳴っている。私はノートとテキストを机の中に押し込んだ。

さあ、次は、デュエルの授業よ！ 私が勝てそうな相手を見つけなきゃ！ そして、さっさと、三日間の賭けを終わらせるのよ！

第十話 賭け事のノウハウ（後書き）

なんとか、突破口が見えてきた！？

読んでくださってありがとうございます^^次回に続きます！

感想や批評などあればお願いします！

第十一話 デュエルの相手

デュエルの授業の着替えをするため、私はジャージの入ったバッグを肩に引つ掛けて教室を出ようとした。

「じゃあ、また後でな」

フェイは楽しそうに、私の頭を軽くポンポンと叩く。

そんな彼の手を私は勢い良く振り払った。

ようやく、反抗する気力が湧いてきたんだ。

「ふんっ、残念でした！ さっさと、三日間の賭けを終わらしてやるんだから」

「そう簡単にできないと思うけど、まあ頑張って」

キャシアスは、見るからに楽しんでいる様子だ。

十メートルくらい駆け足で離れて、フェイとキャシアスに向かって、思い切り「べーっ！」と舌を伸ばした。二人には気付かれないはずだった。だが、フェイがこつちを見て睨んだので、慌てて駆け足で逃げた。なんて目ざといの！

「危なかったあ！」

息を切らしながら、クラスメイトたちの群れの中に紛れた。そして、彼女たちにぞろぞろと付いて行く。更衣室はどこなのか知らないけど、付いて行けば何とかなるよね。すると、その中にアンジェリカを発見した。

「アンジェリカ！」

恋人を見つけたときのようによく上機嫌で、アンジェリカに駆け寄った。彼女は私に気付いて、心配そうな表情を返した。

「護恋、大丈夫でした？」

「うん、平気！ デュエルって、アンジェリカも戦うの？」

「いいえ。貴族の家の者はデュエルを見学するのですわ。そして、誰が強いのか見極める目を養うのです」

「ふうん？ 私も、誰と戦ったら良いのか見極めなくちゃ」

それで、忌々しい三日間の賭けを終わらせるの！

するとアンジェリカが、真剣な目をして私に警告する。

「護恋、デュエルの相手は慎重に選ばないと」

私は、彼女に笑みを送った。

「分かってるって！ 背の低い人でも、太ってても、強い人いるものね！」

やっと、更衣室の前に着いた。クラスメイトたちは更衣室に入っていく。私は立ち止まってアンジェリカを振り返った。

「アンジェリカは着替えなの？」

「はい、貴族の者は、見学ですから……」

アンジェリカは、まだ言い残したことがあるようで、こちらに視線を投げかける。でも、着替える時間がなくなっちゃおう！

「着替えなきゃだから、また後でね！」

私はアンジェリカに手を振って、更衣室の中に引っ込んだ。

このとき、アンジェリカの言葉をもっと聞くべきだったと後悔することになる。

私は、新品の薄桃色のジャージに着替えた。

そして、まっさらの体育館シューズを履く。今まで、兄弟のお古しか履いたことがなかったので、すごく喜んだ。

制服やジャージにしてもそつだ。ああ、あの剣道の大会で勝ててよかった。

三日間の賭けが終わらせることができれば、もっと幸福に浸れるんじゃないかな。

よーし、頑張ろう！

「ええと、アンジェリカは……」

そつと、館内に足を踏み出した。体育館シューズが、磨かれた木の床に触れて、キュツと鳴る。

周りを見渡すと、高貴な方達は用意されていたパイプ椅子に座り、談笑している。

それに加えてアンジェリカは、ふわふわした長い金髪を持っているので、すぐに目に留まった。

彼女はキャシアスの横に座り、控えめながらも楽しそうに喋っている。

そこだけ、別の煌びやかなオーラが発色しているようだ。

キャシアス達、貴族は制服のままだ。アンジェリカの言ったとおり、デュエルの授業は見学らしい。

そして、キャシアスの横に小さなウナの姿を見かけて、驚いた。

「なんで、ウナ様が!？」

お馬さんの恐怖を感じて、身の毛をよだたせた。彼女には見つからないようにしなければ。そのため忍び足で、そつと、この場所を離れようとした。

「ウナ様がいらっしやるのは、デュエルの授業が、一年Aクラスと一年Bクラスの合同授業だからだぜ〜！」

後ろから低い声がして私は誰かに背中を軽く叩かれた。振り返ると、ウナの手駒の彼が立っていた。

「うわっ、ギルバート!？」

ぎよつとして彼を見上げた。ギルバートは水色のジャージを身につけて、体育館シューズを履いている。

「よっ! 護恋! 今日は、よろしくな〜」

彼は人懐っこそうに、にこにこしている。

「う、うん、よろしく〜……」

ウナは苦手だけど、ギルバートとは仲良くなれそう。

その時、私は後ろからいきなり羽交い絞めにされた。

「にゃ!?! 何すんのよ〜! 放しなさいよ〜!」

手を振って暴れると、誰かは嘆息して、ぱつと放した。

私は、前のめりに倒れた。

「お前、本当に大会に優勝したのか？」

フェイが馬鹿にした様子で私を見下ろしている。彼も水色のジャージに着替えて体育館シューズを履いている。

さっき私を羽交い絞めにしたのもこいつだ。

「うるさい、馬鹿フェイ！ 私をいじめるのも大概にしなさいよ！すぐに三日間の賭けから解放されるとあって、私は元気だ。

フェイは、倒れている私を目の下で蔑視した。そして、私のふくらはぎを足で軽く蹴っている。止めるっ、馬鹿っ！

「いじめているんじゃない、相手をしてやってるんだ」

「相手なんかしているか！」

フェイは舌打して、足で蹴るのをやめた。私は、ようやく起き上がる事ができた。

フェイが体育館のどこからか持って来た野球のボールをポーンと向こうへ投げた。

え……？ 何だろう？ 意味が分からなくて首を傾げる。

「取って来い」

フェイが顎で命令した。脳に響くような衝撃に襲われる。

「私は犬か！ 絶対嫌だ！」

断固として首を振る。フェイはぎろりと睨んだ。

「なんだと？」

すると、ギルバートが私とフェイの間に入った。

「まあまあ、フェイ。護恋が可哀想だろ？ その辺で止めてあげな

よ」

「ギルバートっ！」

私は、ギルバートの背中に隠れた。

「ふうん？ やけに、ギルバートと仲良くなったんだな？」

フェイがじろじろと私を睨んでくる。いちいち怖いわっ！

「仲いいよな、俺たち！ まあ、俺だったら、軽く護恋に負けてあげるけど」

ギルバートが笑顔で優しいことを言ってくれる。希望の光が見えた気がした。

「それでも、ギルバートはすぐ負けることで有名だよな？」

フェイはにやりと笑う。

「フェイ、そりゃないぜ！俺だって頑張ってるのにさあ！」

ふうん？ ギルバートは弱いのか……。

私は、ギルバートをじっと見つめた。彼は穏やかで人の良さそうな笑みを返してくれた。

第十二話 デュエルの授業

授業開始のベルがなった。薄い桃色と水色のジャージに着替えた生徒達が、ぞろぞろと体育館に集結している。男の先生が笛を吹いて、「集合！」と、生徒達を一気に呼び寄せた。貴族の方と、そうではない者とは二つに別れている。高貴な方達は、パイプ椅子に優雅に座っている。私達、デュエリストの卵達は、磨かれた木の床に体育座りをしている。

「それでは、デュエルの授業を始めます。俺はシンシエル。よろしくな」

シンシエル先生は、私達デュエリストの卵の前に立ち、挨拶している。シンシエル先生は、やけに体格が良い。筋肉質なのもジャージの上からでも良く分かる。緑の目を持ち、金髪を五分がりになっている。

シンシエル先生が、箱の底のローラーを転がして、剣の入った箱を持って来た。シンシエル先生がその剣を一本、手に取る。

「これが、デュエル公式の剣です。勿論、この剣は切れません」

剣が体育館の照明に照らされて、きらりと光る。私はその剣をまじまじとよく確かめる。細長いまっすぐの剣でしかも両刃だ。柄は、手が滑らないようにゴムで加工されてある。柄は、

「特徴としては、人体に当たっても構わないように切れませんし、良くしなる性質を持っています」

シンシエル先生が刃をぐにゃぐにゃと曲げてみせる。曲がるがすぐにもとの形態に戻っている。私はじつとその剣を見つめた。

刃が薄いのかと言えばそうではなさそうだ。きつと、特殊な合金を使っているのね。

「通常は、勝敗をはっきりさせるため、麻痺する薬を刃に塗って使うのですが、このデュエルの授業では薬は塗りません」

なるほど、いくらでも戦えるようにそうしているらしい。

「それでは、二人一組になって、勝負してみましよう！」
クラスメイトたちは剣をそれぞれ手にして、辺りに散らばっていき。私も剣を手に取った。そして、辺りを見回す。

フェイに負けたのが癪なので、彼に勝負をまた挑もうと思った。だが、フェイを見つけた途端、あまりのことに口が開いた。

「フェイ様〜！」

「私と勝負してください〜！」

ここぞばかりに女達がフェイに群がってきちゃっきやしている。なるほど、授業では賭けないし、痺れない。アピールのチャンスというわけか。

「ウザいぞ、お前ら！ いい加減にしろ！」

フェイが声を荒げると、女達は「キヤー！」と黄色い声を上げた。なんで、あいつ、あんなにもてるんだろ。学園の七不思議だわ。

「こちら、ちゃんと授業を受けなさい！」

シンシエル先生が、笛をたたき鳴らして止めに入っている。うん、先生も大変だな。

「よー、護恋〜！」

私はいきなり、背中を叩かれて飛び上がった。

「あ、ギルバートか！ びっくりした〜！」

「なんか、犬の糞を踏んだ時みたいな顔をしてたぜ？」

ギルバートが面白そうに肩を揺らして笑っている。

「あ、分かる！ 犬の糞がフェイと同格よね！」

私が思わず、大声で言うのとギルバートは苦笑する。

「護恋、フェイが睨んでるぜ」

私はぎくりとして、振り返った。遠く離れているが、フェイはこちらを睨みつけている。その眼光、蛇の如し！

私は、ギルバートの影に、慌てて隠れた。

「それはそうと、護恋、デュエルの練習相手になってよ」

ギルバートが剣を構えて、そう言った。

「えっ？ 良いよ！ やろっやろっ〜！」

私は、早速剣を構えた。私は、視線を感じて振り返る。すると、アンジェリカやキャシアス、ウナがこちらに注目していることに気付いた。私は、アンジェリカに大きく手を振る。アンジェリカはくすくす笑って、振り返してくれた。やっぱり、アンジェリカは良い子だなあ。

「さあ、勝負しようか！」

「うん！」

審判が居ないので、次第に剣を交わしていく。私は、剣を素早く振る。

「おつ、おつ、おつ！」

ギルバートは焦った様子で、それをかろうじて受け止める。私が、足を踏み込んでいく。そして、剣を交わして追い詰める。

フェイのときは全然違う。ギルバートの剣筋も簡単に読めたし、なにしろギルバートは体の軸がぶれている。これでは、弱いはずだなあ。

私は軽く苦笑して、フェイントをかけて踏み込んだ。すると、ギルバートの二の腕に剣が当たった。もう、勝負がついてしまった。

「うわー、負けた負けた！ 護恋って結構強いんだなあ」

ギルバートは、かなり弱い！ 私でも、確実に勝てる！

私は、獲物を見つけたときのライオンのようにぺろりと舌なめずりをした。

「ふっふっふ！」

「何だ、何だ？」

いきなり肩を揺らして笑い出した私を、ギルバートは驚いた目で留めて、瞬きを繰り返している。

「ギルバート！ 放課後、フェイの代理として私とデュエルの勝負をしてください！」

私が、大きな声を張りあげると、辺りは、一斉にどよめいた。シンシエル先生までが瞠目して口から笛を落とした。

ギルバートは人の良さそうな顔で「あちゃ〜勝負を挑まれちゃっ

たか！」と白い歯を見せて笑った。

これで、三日間の賭けとは確実におさらばよ！

第十三話 不安な言葉

体育館の中が、動揺で満たされた。そのどよめきも、体育館の中で膨張して私の耳に届く。それを聞いても、私はすごく楽しくてドキドキする。それも、私は確実に三日間の賭けとおさらば出来ると踏んでいるからよ。

「俺に勝負を挑むのはいいけど、フェイに許可を貰わないと」

ギルバートは勝負を挑まれて戸惑っている様子だ。困ったように頭を掻いている。

「あ、そうか……」

私が振り返ると、フェイがこちらに歩いてきた。

「良い相手を見つけたみたいだな」

フェイが面白そうにこちらを見ている。

「フェイ、許可をちょうだい！」

「別にいいけど」

フェイはあっさり許可を出した。私は「やった」と軽く飛び跳ねた。うんうん、フェイも、私を虐げて遊ぶのにようやく飽きたのね。良かった〜！

丁度、授業の終わりを告げるベルがけたたましく鳴った。シンシエル先生は笛を吹き鳴らして皆の注目を一身に集めた。

「それでは、デュエルの授業はここまで！ 礼っ！」

生徒達はシンシエル先生に向かい、一斉に頭を下げる。

『ありがとうございます！』

体育館に、大きな声が木霊した。後は、ざわめきになって散っていく。

「じゃあ、ギルバート放課後、体育館でね！」

「おう！」

私は、ギルバートに手を振って、アンジェリカの元に急いだ。

「護恋、ギルバートに勝負を挑んだのですね……」

アンジェリカは少し気落ちした面持ちだ。

「うん！ ギルバートは負けてくれるって言うてたし！ それに、ギルバートはすごく弱かったの！」

「そう、ですか。でも、油断大敵ですわよ」

私は、アンジェリカの言葉を聞いて「うん！」と、頷いた。改めて、今度こそ頑張ろうと思った。

それから、私は次の時間の剣技の授業もご機嫌だった。フェイもキャシアスも私を虐げるのに飽きたのか大人しい。

剣技は、剣の技や、ルール等を習う授業らしい。私も放課後のデュエルの為に聞いておこうとノートを取り始めた。

剣技のサーヴェリー先生は少し年老いた男の先生だった。雪のような白髪の上に白ひげを少し蓄えている。顔には少しシミがあった。だけど、背筋もまっすぐでかっこいい方だ。

「エー、デュエルにはルールがあります。剣で、相手を麻痺させるのはいいですが、相手を剣や体術で傷つけてはいけません。もし、傷つけた場合はルール違反となり、相手の勝ちになります」

サーヴェリー先生の少々しわがれた声が心地よく耳に届く。

「基本的に、剣以外で手や足で暴力を振るうことは禁止されています」

私は、真剣に黒板とにらめっこしながら、ノートにシャーペンを走らせる。

「もし万が一、麻痺薬が効かないというときは、武器落とし、武器破壊を行うと良いでしょう。武器落とし、武器破壊は通常のデュエルでも、それをした者の勝ちになります」

私は、真剣に耳を傾けて、その箇所には蛍光ペンを引いた。

そして、辺りが薄っすらとオレンジ色に染まった頃、今日の授業は全て終了した。私は荷物を手に取った。

「おい」

フェイが私の背中に声をかける。私は嫌そうに振り返るが、今日のフェイはやけに機嫌が良かった。私の嫌そうな素振りを綺麗にスルーした。

「何よ……？」

「今日、負けたら、明日から三日間の賭けの残りの二日分かってい
るよな？」と、フェイはどこまでも楽しそうだ。

「もし、負けたら明日からも肩もみしてもらおうかな」
キャシアスも目を細めて面白がっている。

「大丈夫ですー！ 絶対勝ってみせるわ！」

「それは、どうかな？」

私はフェイに向かって思い切り舌を出した。それでも、フェイも
キャシアス様も何もしてこない。ぶ、不気味……！！

「護恋」

アンジェリカが呼んでいることに気付いて、私は慌てて、アンジ
エリカの元に駆け寄った。

「おまたせ！」

「参りましょう、護恋」

「うん」

私は、不安に思っ
て振り返る。フェイはもう、こちらを見てはお
らず、キャシアスと楽しそうに喋っている。

「護恋、どうしました？」

「ううん、なんでもないよ」

フェイの予言するような発言のせいで、私は、少し不安になっていた。

あれは、私を不安にさせるフェイの作戦よ。惑わされないんだから！

第十四話 ギルバートVS護恋

私とアンジェリカは、体育館への道筋をたどって外に出る。外は、分厚い雲が空を覆っていた。冷たい風が顔に吹きつけ、私は顔をしかめた。時差のせいでぼんやりしていたが、これで一気に眠気が吹き飛んだ。このデュエルが終わったら、長い一日がようやく終わる。うん、長かった。

私とアンジェリカが、体育館のドアを潜ると、また歓声が体育館の中から湧き上がった。今回も、沢山人が集まっているようだ。体育館の照明が私達の姿を鮮明に映し出す。私は制服姿のまま、体育館シューズに履き替えた。

「それでは、護恋、頑張ってください」

「うん！」

アンジェリカが私の手を握る。私もアンジェリカの手を握り返した。アンジェリカの手は暖かで優しい。次第に勇気が湧いてきた。ようし、がんばるぞ。

私は、アンジェリカに手を振って別れた。

「ごめん、待った？」

すでに、ギルバートは待ち構えていた。ギルバートも制服姿だ。足元だけ体育館シューズを履いている。ギルバートは傍にウナを連れている。ウナやギャラリーは制服姿で靴下という格好だ。体育館は土足厳禁だが、校舎では土足は許可されているようだ。

「いや、今来たところだぜ。じゃあ、そっちの賭けは、フェイの三日間の賭けの取り消しだな？」

「そっちの賭けは？」

ウナはこちらを見てにこにこしている。ウナの目が体育館の照明できらりと怪しく光る。うう、この方は本当に苦手だ……。

「じゃあ、俺も、三日間の賭けにしようかな。それで、ウナ様のお馬さんをしてもらおうかなーなんて」

「うん、負けたら、お馬さんね！」と、ウナは笑っている。

「げっ、絶対に負けられないじゃない！でも、ギルバートは優しいから、負けてくれるよね？」

「ああ。多分、俺は負けるよ」

ギルバートは優しそうな笑みを浮かべている。私は安心してホッと息を吐いた。

「じゃあ、まあいいか……」

「じゃあ、決まり、な！」

それを横で聞いていた審判のコードネルが、ヘッドホンマイクを付けて、分厚い本を開いた。

『今からギルバートVS護恋のデュエルを行います』

コードネルが片手を上げて高らかに宣言した。

『掟の神テュテュスの名の下にコードネルは審判の立会いを務めます』

コードネルが『決闘の書』を開くと、どこからともなく風が舞い込み、そのページを素早くめくっていく。

『この審判の判断はこの決闘の書の判断にゆだねます。コードネルはテュテュスと規則委員の名の下に公平な判断をすることを誓います』

コードネルの声が強い意志を持って体育館の中で響いた。決闘の書は真ん中のページで開ききって止まった。

そして、最初にコードネルは『決闘七ヶ条』を述べた。決闘七ヶ条を彼が紡ぐことに体育館の中が緊張で静まり返った。

『尚、掟に背くと神の意志により絶対的な賭けは実行されません。正々堂々と戦ってください』

私とギルバートは「はい」とそれぞれ返事をする。

『護恋は賭けの取り消し、ギルバートは三日間の賭けですね』

私とギルバートはそれぞれ「はい」と首肯した。

そして、既に用意されていた剣を手に取る。これはデュエルだから、剣に麻痺する薬が塗られているのよね。気をつけて持たないと。

私とギルバートは、剣先を微かに合わせて、構える。空気が緊張感を持ってぴりりと締まる。

『これより、ギルバートVS護恋の一本勝負を行います！ ルールはもう一度言いますが、先に剣が肌に触れたほうが負けです！』

コードネルが声を張り上げる。

『では、始め！』

その声が放たれた途端、応援も一斉に大きくなる。

私は、いの一番に、「やあっ！」と、踏み込んで袈裟懸けに剣を振り下ろした。ギルバートは「おっと！」と言いながら、よろよろと私の剣を刃で受けとめる。軸がぶれているわ！ 剣の握り方も変だし！ これなら確実に勝てる！ 私は勝利を確信して、にやりと笑った。

ちょうどその時、フェイとキャシアスが体育館に入ってきた。

じつと、フェイは私のほうを見ている。私はそれに構わず、ギルバートに責めの一手で踏み込んだ。

「やああ！」

私は、フェイントをかけて、剣を突き出した。だが、「おっと」と！ と言いながら、ギルバートは私の剣を受け止めた。偶然なの……？ でも、それから、私の繰り出す剣を確実に何回も、ギルバートは刃で受け止めている。剣の触れ合う金属音が激しく響きあう。「何よ！ ギルバートってそんなに弱くないんじゃないの!?!」

「そうかな!?!」

ギルバートは戸惑ったように笑っている。

私は、更に間合いを詰めて、剣を斜めに振り下ろしていく。

「なんなの……?」

私は、不気味な兆候に驚いていた。ギルバートはよろよろしながらも、確実に私の剣を刃で受け止めている。どんなにフェイントをかけても、彼はその剣の刃で受け止めてしまう。う、嘘でしょ……? ギャラリーは最高潮に盛り上がり、ギルバートや私の声援を大声

で送っている。

「それなら、これはどう!」

私は、一步踏み込んだ。そして、ギルバートの下段を攻めた。

私はギルバートの下方から、彼の手を狙おうとしたのだ。

「うおっ!?!」

だが、ギルバートはそれに気付いて、後ろに大きく跳び下がった。私の剣は空を切る。

私とギルバートの肩は、激しく上下している。ギルバートが、剣を構えたまま、にやりと笑って頬の汗を拭う。何なの? その不気味な笑みは……?

「護恋、もしかして、すごく強いんだ?」

「えっ?」

私は、びっくりした。ギルバートの目がきらきらと鈍い光を宿している。

「ゴメン、負けてあげる約束、守れそうにない」

ギルバートは剣を構えなおした。すっと軸の通った構えだ。今になってやっと気付いた。ギルバートは、今まで本気を出してなかったということか!

「騙したのね!?!」

私は、息を切らしながら、剣先をギルバートに向けて構えなおす。

勝負は、ここからだ! 絶対に負けられない!

第十五話 勝負の行方2

私は一気に間合いを詰めて、右、左、右と、剣を交互に打つていく。だが、今度はギルバートに、とても素人とは思えない構えで剣を刃で受け止められてしまった。そして、すぐさま彼は剣を払って踏み込んでくる。

「やあっ！」

「くっ……！」

先ほどの彼の下手な打ち方は見る影もない。

私は、彼の剣を打ち上げた。だが、彼は簡単にそれを払い除けると、剣先にフェイントをつけて、剣を突き出してくる。

「はあ！」

彼の力強さが剣先に伝わってくる。

「くっ！」

私は何とか、それを刃で受け止めた。だが、彼はまたフェイントをかけながら前へ踏み込む。

「やああああ！」

「っ！」

私は、ギルバートの剣を払い除けることに必死だ。剣がどこに出てるのだろうという冷やりとした感覚に襲われる。

ギルバートはフェイほどじゃないけど、すごく強い。私はフェイ以外にこんなに強い相手に当たったことがない。

よく考えてみれば、王女であるウナの手駒なのだから、弱いはずがないじゃない！ 王女であるウナがそんな弱い手駒を持つはずがないじゃない！ 私は、早くも後悔しっぱなしだ。

「ギルバート頑張れー！」

ウナの幼い声が他の声援の中に混じってひとときわ高いトーンで響く。ギルバートは、どこまでも楽しそうな表情をして私を正視している。そんなに私と戦うの楽しいのかな？

「ほらほら……！ 護恋、どうした？ 押されているぜ？」

ギルバートの挑発に答えることも出来ない。私は、剣を払い除けるのに必死だ。剣を交える衝撃で汗が零れ落ちる。剣のグリップがべたついてきた。ギルバートの肩も上下しているけれど、私の息も相当上がってきている。

もう限界かもしれない！ 私、負けるの！？

私がそう思ったとき、ウナが叫んだ。

「護恋ー！ 負けたらお馬さんだからね！」

私の目が覚めたようにカツと見開いた。歯を食いしばって、後ろに下がる。体育館シューズがキュツとひととき大きな音を立てた。ギルバートの剣が空振りして、ヒュツと風が舞う。私は、普通に攻めると見せかけて、フェイントをかけた。そして、ギルバートの下段を攻めた。ギルバートの懐に飛び込む。

「お馬さんは、嫌あああああああ！」

私は、ギルバートの小手を打った。シンと水を打ったように体育館の中が静まり返った。彼の動きが、すぐに止まる。そして、ギルバートは無言でその場に崩れ落ちた。ドサツと言う音が鮮明に耳に届く。

『そこまで！ 護恋の勝ちです！』

審判の聲が高らかに響き渡った。

体育館中が歓声でいっぱいになる。私は天井を見上げて、体育館の照明に目を細める。私の口は激しく酸素を求めている。

「やった……！」

私が剣を持ったままその場へたり込むと、足音が私のほうに駆けて来た。私が顔を上げると、私は生徒達に取り囲まれていたのだ。わっ、びっくりした！

「護恋さん、すごいわ！」

女生徒がキラキラした目をして私に迫る。私は息を整えながら、目をぱちくりさせる。

「え？ 何が？」

「ギルバートにはめつたに勝つことが出来ないんだぜ！」と、男子生徒その一が言った。

「普段弱いふりしているのは、少しでも、デュエルで戦いたいからって言ってた」

この男子生徒その二はギルバートと同じクラスなのだろうか。やけに詳しい。

それにしても、アンジェリカが気をつけるように言っていたことはこの事だったのか！

「私は、よりによって、強い相手ばかりを選んだの!？」

私は、自分の選択に危うさを感じた。

「護恋！」

振り返ると、アンジェリカが女神様のような神々しさで立っていた。うん、私の勝利の女神はアンジェリカよ！

「アンジェリカ、勝ったよ！」

私は、がさつに座ったまま手を伸ばしてピースする。

「おめでとう、護恋。これで、三日間の賭けは無効ですわね」

私の勝利の女神はふんわりと微笑んだ。

「あつ、そうだった！」

手のひらを確認すると絶対的な賭けの烙印が消えていた。

「星印が消えたよ！」

お馬さんしたくないばかり考えていたけど、三日間の賭けもなくなっただ。やった、嬉しすぎる！

「護恋はなかなかやるようだね」

キャシアスの声が聞こえてきた途端、道がサツと出来て生徒達は頭を垂れた。キャシアスが優雅にこちらに歩いてくる。

「もっと、こき使ってあげようかと思っていたんだけど」

「あーっはっはっは！ 残念でしたー！」

私は、べーっと舌を出した。キャシアスは面白そうに笑っている。

「ところで、フェイは？」

私が、立ち上がって見回していると、私の両脇から手がゆつと

伸びてきた。

「そこにいるよ」

キャシアスが楽しそうに微笑みながら、私のほうを人差し指で示した。

「ん？ ……にゃ!?」

私はまた、誰かも分からない手に後ろから羽交い絞めにされた。

ぎりぎりと体が悲鳴を上げる。ちよつと待つて!? この手は知ってるわ!

「いたたたた!」

「キャシアス様に無礼な口の利き方は止める!」

この手と声はフェイだ。フェイは、羽交い絞めしている手を更に強める。

「ぎ、ぎぶぎぶ……!」

途端に手が放される。私はよろけながら振り返った。フェイが青筋立てて食いしばった歯を見せている。私はその姿にびびった。三歩後ろに逃げた。

「な、何よ! もう、三日間の賭けは無効なんだからね!」

フェイは私の台詞を鼻で笑った。

フェイが指を私に人差し指を突きつけるように言う。

「そんなの関係あるか。キャシアス様を敬わない奴は万死に値する!」

「そ、そんな大げさな……私だって、心の中ではちよつとだけど敬ってるわよ」

「ほう? なら、明日から、その敬意が表に出るように特別に指導してやる!」

私はごくりと唾液を飲み込んだ。フェイが怖くて思わず笑ってしまつ。

「みつ、三日間の賭けは終わつたんですけど……」

「ノープロブレム! 問題ない!」

問題大有りよ! この、サドっ! この、キャシアスタクっ!

私のこの台詞は、もちろん言葉に出来るはずがなかった……！

辺りを見回せば、生徒達は笑っている。キャシアスも笑っている。アンジェリカまで笑ってる！？　そ、そんな！

わーん！　皆、笑ってる場合じゃないでしょ！　誰か助けてっ！

そんな、私には暖かな目を向ける人たちばかりではなかった。

この人ごみの中には氷のような冷たい視線を私に向けるものも居たのだ。その時、私は全然気付かなくて、フェイから逃げるのに必死だった。

第十六話 護恋の携帯

私は、大きなあくびをしてしまい、慌てて手で口を押さえた。時差のせいで眠ってないので、上の瞼と下の瞼がくつきそうさ。

それでも、お腹は空くもので、寮からすぐ出たところにある学生食堂に来ていた。バイキング形式の美味しそうな様々な料理がケースの中に色とりどりと並んでいる。

昼もここで、アンジェリカと一緒に食事を取っただけで、今は、アンジェリカはお屋敷に帰ってしまったので私一人だ。

「何にしようかなー」

メニューは、西洋料理が殆どで、日本食は全然ない。当たり前と言えは当たり前かもしれないけど。

魚のムニエルのタルタルソース付きに、カリカリのベーコンとルッコラのサラダと、枝豆のスープをトレイに乗せて、私は空いた席に座った。学食の時計は夜の七時を示している。皆、夜の食事をする時間はまちまちなのか、席はがら空きだ。

「そうだ、メールしよう」

私は携帯を取り出した。思えば、この携帯のせいでえらい目にあつた。私は、メールを送信しようとした。だけど、メールは送れないのか、『送信を失敗しました』という表示になる。私は携帯の画面を睨んだ。そして、重大なことに気がついた。

「なんで？ アンテナ、全然立ってない！ 通じないわけだよ……」

普段は二本立っているアンテナが今は一本も立ってない。

私は大きなため息を付いて、携帯を閉じた。そして、そのまま携帯をテーブルの上に投げ出した。食欲が一気に減退した。家族と話が出来ないなんて聞いていないわよ。お母さんや、姉ちゃん、兄ちゃん、妹や弟は元気かなあ。私は、食事のトレイを横に避けて、テーブルに突っ伏した。そして、私は眠気に負け、いつの間にか眠ってしまったのだった。

私が眠っていると、私のテーブルの前に誰かが立った気配がした。私は浅い眠りの中で物音を夢現に聞いていた。

「おい」

フェイの声がした。次に、私の手から携帯の重みが消えた。横で、勝手に見ているような携帯のボタンを押す音がしている。

勝手に見るなんて、プライバシーの侵害よ！ まったく！

フェイは、携帯を操作するのを止めたらしく、携帯を私の手の中に戻したみたい。そして、眠った私のほうへ嘆息した。更に、どうしたことがフェイは私の隣に座って、食事を始めたらしい。トマトソースとチーズの匂いがした。なんで、私の隣にわざわざ座るのが分からないけど。

「あれ？ フェイと護恋、おそろいで」

ギルバートが姿を現したようだ。シチューの良い匂いが鼻腔をくすぐる。そして、ギルバートの苦笑したような声が耳を掠る。

「護恋、疲れちゃったのか。でも、護恋強かったなあ。マジで勝負して負けるなんてフェイ以来だぜ」

「俺には勝てなかったけどな」

フェイとギルバートは喋りながら食事をしているようだ。料理のいい匂いがして、よだれが出そうになる。

「料理が冷めているけど、起こさなくていいのか？」

「そうだな。おい、がさつ女、起きろ」

フェイが、私に向かって声をかけた。

「うーん……」

私は、反論することも出来ず、眉をぴくぴくと動かすだけだ。フェイが面白そうに一笑した。私の耳元で悪魔の音が囁く。

「オトコ女。胸なし。起きないと三日間の賭けの続きをするぞ」
ギルバートが「おいおい」と呆れている。私の体からは変な脂汗が出てくる。

「うーん……うーん……」

私は悪夢の中をさまよっている。夢の中で巨大なフェイの手が私を握りつぶそうとしている。

「三日間の賭けをして欲しいのか？」

私は、やっと目覚めた。

「はっ！ 私、眠ってたの？」

フェイはそ知らぬ顔をして、自分の食事を開始した。

「フェイ、なんか隣で私の悪口言ってたでしょ！」

私が怒ると、フェイはフツと笑った。

「料理冷めてんぞ」

ギルバートが苦笑している。私は目をこすった。私は、フォークとナイフを手を取った。

「あっ、食べなきゃ」

私は、白身魚のムニエルをナイフで切って、フォークにさして口に運ぶ。あ、ホントだ、冷めちゃってるや。

「ところで、なんで、フェイとギルバートが居るの？」

私が、パクパク食べながら合間に聞くと、ギルバートが微笑んだ。「俺たちも寮に入っているからさ。ウナ様は宮殿にお帰りになったし」

「キャシアス様もだ」と、フェイ。

「へえ、そうなの」

私は、食事を食べ終わってトレイを持って席を立とうとした。ふと、携帯が目に残る。私は、ため息を付いて、携帯をスカートのポケットに突っ込んだ。ふと、視線を感じて振り向く。

だが、フェイはそ知らぬ顔をして立ち上がった。食事が済んだらしく、カウンターにトレイを戻しに行っている。なんか、さっきフェイがこっちを見ていたような気がしたけど……気のせいかな。

その日は、眠いので、そのまま寮に戻って眠った。その日は良く眠れて、夢を見ることもなかった。

第十七話 嫌がらせと果たし状

そして、いつもの忙しい朝を迎えた。私は、寮の部屋からいつもどおりに学園に通おうとしていた。

「ん？ 何これ……」

自室のドアの下に何かが挟まっているのが見えた。丁寧に三つに折られた紙のようだ。もしかして、私へのラブレターかな？ 私は、ウキウキしながらその手紙を広げた。

「なっ！？」

私の顔は怒りで般若のように歪んだ。紙をくしゃくしゃに丸めて捨てようとしたけど、それをスカートのポケットに突っ込んだ。私は前方をキツと睨んだ。こんなことする奴なんて、一人しか浮かばないわよ！ 私は、急いで外に出て、ドアに鍵をかけると寮を飛び出した。

寮から少し出たところに学生食堂がある。昨日の夜も、ここで食事をしたのだ。ギルバートと、いけ好かないアイツと あー！ やっぱりここに居た！

フェイは、早くも席について、食事を取っている。

「フェイ！」

私はフェイに向かって、その丸めた紙を投げつけた。フェイはあっさりとそれを受け取る。フェイは眉間にしわを寄せて、私をウザそうに見る。

「……俺にラブレターか？ 気持ち悪いな」

「どこのだれがだっ！ こんな嫌がらせするなんて、あんたの他に浮かばないのよ！」

「嫌がらせ？」

フェイは、スプーンをくわえて、丸まった紙を開いた。そして、スプーンを手に持ち、片手で紙を持って横目で追った。

「『花咲護恋、この学園から出て行け』か、ふーん」

その文字は、ごく丁寧に赤で書かれてある。もしかして、血文字のようにしたかったのかな？ フェイはそのままその紙を横に置いた。そして、フェイは澄ましたまま、スプーンでスープをすすっている。特に感想はないようだ。それだけ！？ 私は、フェイの前の席に座って、テーブルを叩いた。

「ふーんって！ 私のことが嫌いならはつきりそう言いなさいよ！」

「おはよー、護恋、フェイ、朝から何をそんなに揉めてんの？」

私の肩をギルバートが軽く叩いた。

「ギルバート、聞いてよ！ フェイがね！」

「悪いけど、こんな嫌がらせしたのは俺じゃない。俺なら、直接締める」

フェイの目がキラリと鈍く光った。私はごくりとつばを飲む。

直接締めるって……。私は昨日羽交い絞めされたことを思い出した。そういわれば、そうね。フェイなら因縁つけてすぐに行動に移しそうだわ。

「……じゃあ、これは誰が？」

「沢山居るだろ？」

フェイはにやりと笑う。

「あー、俺も心当たりあるわ」

ギルバートも頭を掻いている。私は思わず身を乗り出した。フェイとギルバートを交互に見る。

「えっ？ フェイもギルバートも心当たりあるの？ 誰!？」

「望んだわけじゃないが、俺は良くモテる」

フツと、得意げにフェイは笑った。

「はあ!？」

「だれが、あんたの自慢を聞きたいか！」

でも、心当たりがあることにやっと気付いた。

「って、もしかして、フェイのファンがやったってこと？」

私は思わず、小声で呟いた。フェイは何も言わない。私は大きな息を吐いた。

「そうよねー、断定は出来ないわよねー」

「俺も良くもてるけど」

ギルバートが横でにこにこしている。

「ぎ、ギルバートのファンかもしれないの？」

「そう考えると、お前の敵は無数に居るわけだな」

フェイがパンをちぎりながら、楽しげに言った。

「むっかー、人事だと思って！ あんた達のせいかもしれないのに！」

「護恋、時間がなくなるから食事しようぜ！」

ギルバートがカレーライスを二皿持って来た。

「あ、朝からカレー！？」

私の前に大盛りのカレーが置かれた。

「健康にいいんだぜ！ それに、勝負挑まれると思うし。これを食べてたら、力が入るしな！」

ギルバートが、ニツと笑った。カレーのスパイシーな匂いが鼻腔をくすぐる。

「ふうん……でも、美味しそう。持って来てくれてありがとうー」

私は自分の髪をポニーテールに結ぶ。それから、私は、嫌がらせされたことを忘れて、ウキウキとスプーンを持って食べ始めた。

「でも、勝負挑まれるって、どういうこと？」

「ほら、来たぜ」

ギルバートが向こうの通路を横目で見ている。私の視線も自然とギルバートの見ている方を向く。そして、思わず、「げっ」と、呻いてしまった。

そこには、女達がぞろぞろと列を作って軍隊のように行進してきているのではないか。それは、ぴたりと私の横でザツザツと足を止めた。私は、ぽかーんと口をあけている。ハツと我に返り、カレーを食べようとしたが、いきなり「護恋さん！」と、声をかけられたので、私は、がっかりして、スプーンを皿に戻した。

私を睨んだのは、その列の代表と思われる、茶色のくるくるした

髪の女の子だった。両腕を組んで、茶色の気の強そうな双眸で私を睨んでいる。その子は、ちらちらとフェイの様子を伺って、フェイと目が合うと頬を赤く染めた。だが、気を取り直したように、キッと私を睨みつける。

「な、何ですか？」

私は驚いて瞬きを繰り返す。女の子の代表は、持っていた紙を広げて私に示した。

「中等部の、フェイ様とキャシア様のファンクラブ代表の克蘭チカと申します。貴方にデュエルを申し込みます！」

その紙を私に押し付けてきた。

「ええっ、また勝負するの？ 三日間の賭けはもう嫌よ！」

私はその紙を受け取りながら、ぼやいた。フェイはそ知らぬ顔をして、紅茶を飲んでいる。ギルバートは興味津々という顔をして彼女たちを観察している。顔をしかめてその紙に目を通そうとする私に、克蘭チカは笑顔で続ける。

「安心してください、護恋さん！ 私の手駒が勝ったら、フェイ様やキャシア様に近寄らないで貰うというだけですから！」

おや？ 本当だ。この紙にも条件が綴られているが、殆ど、フェイやキャシアスに近寄るなどが、仲良くするなといったものだ。私の表情が、ぱつと明るくひらめいた。

「えっ、そんなので良いの？ なんなら、勝負なしで今から実行してもいいけど」

今にも鼻歌を歌いだしそうな私に、克蘭チカは釣られて嬉しそうに頬を緩めた。

「本当ですか！？ い、いえ、駄目です！ デュエルして貴方に勝たないと意味がありませんし……」

戸惑った様子で、語尾を弱める克蘭チカ。なんか、可愛い子だなあ。フェイやキャシアスを好きになるなんて、かなり間違っただ道を行っているけれど。

「分かった、良いよ！ その勝負受けた！」

私が景気良く宣言すると、彼女たちはわぁっと喜びに沸いた。

へへへ、簡単に負けちゃおーっと。そうしたら、フェイやキャシ
アスから簡単に逃げれるし。

気楽な笑みを浮かべてカレーライスを食べている私を、フェイが
じっと見ていた。

そして、勝負は放課後に行われることになった。

第十八話 アンジェリカの恋心

黒板の上の掛け時計が朝の九時五分前を示している。ここは、一年Aクラスの教室だ。朝のホームルームもすっかり終了して担任のグロリアーナ先生が先ほど教室から出て行った所だ。

私は、鼻歌を歌いながら一時間目の『賭け事』のテキストを取り出した。

「護恋、何か良いことがあったの？」

隣から楽しそうな、声がかかった。そちらに顔を向けると、キャシアスがこちらを向いて微笑んでいた。

「うん、まあねー」

私が気楽に答えていると、反対横の席から手が伸びてきて、耳をつままれた。問答無用で顔がフェイのほうに移動した。

「いたたたた！

「何すんのよ！」

私が手を振り払うと、フェイの絶対零度の目と目が合い、私は笑顔で凍り付いてしまった。ひい！ しまった、ついキャシアスに友達口調で喋っちゃった！ フェイは噛んで含めるように命令する。

「はい、そうでございます、だ！ 言葉遣いに気をつける！」

「は、はい、そうでございますっ！」

私が背筋を伸ばすと、キャシアスは声を立てて笑った。

「まあ、良いよ、続けて？」

私は、気を取り直して、キャシアスのほうへ向いた。

「実は、フェイとキャシアス様のファンクラブの方から勝負を挑まれました。それで、負けると、私はキャシアス様やフェイに近寄りなくてすむというありがたい申し出でした！ 私は、今から負ける気満々なんですー！」

私のテンションはかなり高い。でも、このサド二人組から逃げられるのなら、誰だって嬉しいんじゃない？

「それが、ありがたいだと……?」

怒りの熱気が揺らめいているようなフェイの声が背後で響く。

「な、何よ！ 本当のことじゃないっ！ 二人して、私のこといじめるし！」

キャシアスはくすりと一笑した。

「じゃあ、優しくしてあげようかな？」

キャシアスは立ち上って、私に顔を近づけた。私は「いつ!？」と、びっくりして、どきまぎと後ろにのけぞる。

「なっ、何ですか?」

「耳を貸してご覧」

あ、なんだ、そういうことね。私は、髪を上げて耳を差し出す。

キャシアスは私の耳にあることを囁いた。私は、途端に、笑みを押しさえきれなくなった。

「ふふふふ……」

キャシアスが私から離れる。私がフェイを振り向くと、フェイはもどかしそうな顔をしていた。

「キャシアス様から何を仰せられたんだ?」

フェイは気になっているようだけど。私は、笑顔でキャシアスに目配せする。

「それは、私と護恋の秘密だよ」

キャシアス様は自分の唇の前で人差し指を立てた。

やっぱりね!

「そう、秘密なの!」

私がキャシアスとにこにこしていると、後ろの方からガタンと席を立つ音が、やけに鮮明に聞こえた。アンジェリカが、ふわふわの金髪を後ろになびかせて、急ぎ足で教室から出て行く。

「アンジェリカ、どうしたんだらう?」

フェイが驚いたような目を私に向けた。

「おい、護恋! アンジェリカ様は泣いていらしたぞ!」

「なんですって!?!」

立ち上がった衝撃で、椅子がひっくり返りそうになった。私は、サツと椅子を仕舞って、駆け出した。

アンジェリカは廊下の先に居た。複数の生徒達が歩いたり立ち止まって談笑しているが、彼女の腰まである金髪は目立つのですぐに分かる。

「アンジェリカ！」

アンジェリカは私に気付いて、更に足を速めて私から離れた。私はショックで立ち止まった。でも、このまま、アンジェリカを放っておけない。私は更に廊下を蹴った。先生に見つかったら、廊下を走るなどいわれそうだけど。やつのことで、アンジェリカの手を掴むと、彼女は泣き顔で私を振り返った。

「アンジェリカ、どうして泣いているの？」

「護恋に話すことはありません」

アンジェリカは首を振って、私を拒絶する。

「そんなこと言わないで話してよ！ 私に出来ることなら何でもするから！」 アンジェリカの頬を涙が静かに伝う。アンジェリカは泣いても、百合が雨の雫に濡れる様に美しかった。私はハンカチを胸のポケットから出して、アンジェリカの涙をハンカチに染み込ませる。アンジェリカはそのハンカチにそっと手を添えたので、私はハンカチから手を放した。

「さつき……」

アンジェリカは、ハンカチを持ったまま、俯いた。

「えっ？」

私は、アンジェリカの顔を覗き込む。アンジェリカはそろりと私の顔を窺う。

「先ほど、キャシア様は護恋に何を仰っていたのですか？」

私は、笑顔になった。

「ああ、フェイに勝てる秘策をお教えくださったのよ！ これで、フェイに確実に勝てるからね！」

私は力こぶを作るまねをして、おちゃらけて見せた。

「……それだけですか？」

アンジェリカは私のほうをじっと見て、涙で濡れた目を瞬く。その瞳からは涙はもう零れてこない。私は、安堵して笑みを送る。

「そう、それだけ！」

「そう、ですか……！」

アンジェリカはほっとしたように頬を緩めた。私は、すぐに感付いてしまった。

「……もしかして、アンジェリカはキャシア様のこと好きなの？」

「はい。でも、キャシア様には内緒にしておいてくださいね」

はにかんだようなアンジェリカも可憐だ。私は、アンジェリカと秘密が共有できることが嬉しい。

「じゃあ、滅茶苦茶、応援するからね！」

アンジェリカはすごく嬉しそうに微笑む。ようし、アンジェリカをもっと笑顔にしてあげられるようにがんばるぞ！

第十八話 アンジェリカの恋心（後書き）

四角関係勃発です^^どうなっていくのか、見守ってくださいると嬉しいです！

読んでくださってありがとうございます^^感想や評価などもお待ちしております。宜しければ……！

第十九話 規則委員会

私は、一時間目も二時間目も三時間目もアンジェリカとキャシアスがどうやったたら、両思いになれるかをずっと考えていた。そのため、授業は殆ど聞いていなかった。

私にはこういう色恋の経験もないし、そういう話も聞かない。もし携帯が通じたら、兄ちゃんや姉ちゃんに相談するのになあ。私がちらちらとキャシアスを見ていると、私に気付いたキャシアスが、につこりとこちらに笑みを送った。私も曖昧に笑みを返す。

「護恋さん、次のページを読んでください」

サーヴェリー先生がいきなり私に声をかけたので、私はハツとしてテキストを捲った。今は、剣技の授業の途中だった。しまった、全然聞いてなかった！

「ええと、何ページでしたっけ……」

私は慌ててテキストを持つ。それも逆さまだったので、慌ててテキストをひっくり返す。

途端に、サーヴェリー先生の顔が険しくなった。

「デュエルで頭がいっぱいなのかな？　だが、授業をちゃんと聞いていないものは、デュエルには負ける。結局は、まじめな者が勝つのだ」

「すみません」

それから、ずっと授業は中断して、授業の終わりのベルが鳴るまで、サーヴェリー先生の説教をくどくどと聴くことになってしまった。サーヴェリー先生は、静かに話しているけれど、きっと酷く怒っているのね。うう……しまったなあ。

授業の終わる救いのベルが辺りに響いた。サーヴェリー先生は、学級委員の号令がかかった後、面白くなさそうに教室から退室された。私は気まずいので、開いたテキストで顔を隠しながら、サーヴェリー先生の姿を目で追っていた。

「おい！」

いきなり、フェイが私からテキストを取り上げた。

「な、なによ、フェイ」

私がフェイのほうを振り向くと、フェイが声を潜めて怖い顔を近づけてきた。

「授業中、ちらちらとどこを見ているんだ？ まさか、身分をわきまえずに身の程知らずな思いを……」

言いたいことはすぐに分かった。フェイは私がキャシアスのことを好きなのではないかと勘ぐっているのだ。私は、フェイを押しつけて、フェイから自分の教科書をひったくった。

「全然違うわよ！ そうだ、フェイ、ちよつと相談に乗ってよ！」
私が嬉々として身を乗り出すと、「はあ？」と、フェイは鬱陶しそうな顔になった。

丁度その時、クラスメイトの一人の女生徒が、廊下の方から声を張り上げた。

「護恋さん、中等部のクランチカさんが来ているわよ」

「えっ、何だろう？」

教室の外に出ると、中等部の制服を着た生徒がすぐに目に留まった。クランチカが女生徒を二人連れて来ていた。周りは高等部の生徒ばかりなので、彼女達は緊張した様子できよるきよるしている。私の顔を見つけると、ほっとしたような表情になった。

「クランチカ、どうしたの？」

彼女は何か書いた用紙をまた私に渡してきた。

「何、これ？」

用紙には、『規則委員長。本日の放課後、デュエルを体育館でいたします。』

主 クランチカ 手駒 ベラドンナ。 対戦相手、花咲護恋 本人等と書いてある。

「あの、護恋さん、規則委員の方にデュエルの申し込み表を出しておいて貰えませんか？ うっかり、今日の締め切りまでに出すのを

忘れてしまつて。しかも、規則委員の方は高等部にしか居ませんし……」
クランチカが、自分の手をこねくり回しながら、申し訳なさそうに言った。

「ふーん、規則委員会なんてあるんだ。初耳ね。」

「こういつの、出さないといけないの？ 分かつたわ、出しておくね」

「ありがとうございます！ では、よろしくお願いします！」
クランチカ達は、嬉しそうに話しながら帰っていった。

「うんうん、可愛い子達だな。私が、目を細めて、用紙を見ていると、後ろからフェイが私の用紙を取り上げた。傍にはキャシアスもいて、フェイの手元を覗いていた。」

「デュエルの申し込み表だね」と、キャシアス。

「こういつの出さないといけないんですか？」

私が尋ねると、フェイは「ああ」と頷く。

「お前と俺が勝負する時も俺が規則委員会に出した。でも、今日の申し込み期限が切れているから、多分説教されるぞ」

「げげっ、そうなの？」

「あの子達はそれが狙いじゃないの？」とキャシアス。

「そうなのかなあ……。」

「でも、フェイと勝負した時もぎりぎりだったような……」

「あの時は、新学期が始まったばかりで誰もデュエルをする人が居なかつたから良かったんだ」と、フェイ。

「ふーん、まあ、何とかなるでしょ」

フェイは私に用紙を返してきた。

「じゃあ、ちよつと出してこようかな」

教室を出て行くこうとしている私にキャシアスが声をかけた。

「出すも何も、規則委員ならこのクラスにも二人居るよ」

「ホントですか？」

「分からないのも無理はないよ。護恋が転入してくる前に規則委員

は決まったからね」

「えっと、誰でしたっけ？」

「コードネルは……席を外しているようだね」と、キャシアス。

フェイがすつと一点を指差した。

「あの赤いフレームの眼鏡を掛けているのが規則委員の証だ。あいつが、もう一人の規則委員のルルだ」

そこには、一人の生真面目そうな女の子が席に座って書き物をしていた。

第十九話 規則委員会（後書き）

読んでくださってありがとうございます^^感想などありましたらお願いします！

第二十話 アンジェリカの忠告

フエイが教えてくれたので、私はルルの方へ向かった。

「ルル、これ、お願いできるかな？」

私が、ルルの机にデュエルの申込用紙を置くと、ノートに向かって、がりがりと書き物をしていたルルが顔を上げた。忙しいのか、二つにくくった茶色の髪の毛の横がほつれている。まるで、内職をしている私の母のようだ。

「護恋さん？ また、デュエルですか？」

ルルは眼鏡のフレームをくいつと上げた。眼鏡の奥で青い瞳がきらりと光る。

「うん、そうなの」

にこにこして私は頷く。だが、ルルは何か気付いたように、申込用紙をバツと覗き込んだ。

「これ！ 今日の分の申し込み期限が切れているじゃないですか！」

「そ、そうなの。ゴメンね。何とかならないかな？」

私が手を合わせると、ルルは大儀そうに机の横にかけていた袋から大きなファイルを取り出した。

「何とかって、体育館のスペース、空きがあつたかしら！？ 最近、貴方の真似をして、デュエルをする方が増えているので、私たち規則委員は大変なのですよ！ 特に、規則委員は学級委員も兼任しなくてはなりませんし！ そのところ、分かっているのかしら！？」

ルルは、ぼやきながら、今日の体育館の空きをファイルの中からページを捲って人差し指で追っている。

「う、うん、ゴメンね……」

私もファイルを覗き見る。すると、ファイルに綴じられているルーズリーフには、休み時間も昼休みも放課後も体育館のスペースが埋まっているらしく、赤いペンで×印が記入されてあった。

「それで、何とかならないかな？」

私の言葉が気に入らなかつたのか、ルルは机に手をついて、思い切り立ち上がった。

「何とかですって!? 何とかするのも大変なのよ!」

かなりの大声だったため、周りは何事かと注目し始めた。げっ、もしかして、癪癪持ち? 私は、不味いことになったと思い、ルルを鎮めるように両手を掲げた。

「で、でも、ルルは、頭が良さそうだし、こういうことスパッとやってくれそうな感じじゃん? 見るからに、優等生みたいな感じだし……」

私には兄と姉が居るから分かるのだ。怒らせたときはひたすら褒めると! すると、ルルは何事もなかつたかのようにストンと椅子に腰を下ろした。

「そうかしら……。まあ、そうね! 私の手にかかれば、こんなことわけありませんけどね。これからは、気をつけてください」

キラーンと眼鏡のレンズが光る。褒めたのがよほど嬉しかったのだろう、ルルは笑みを浮かべている。

「あ、ありがとう、ルル!」

ルルは気難しそうだけど、頼りになるなあ。かなり気を使うけどね。

今日の昼休み、私とアンジェリカは学生食堂でランチを食べていた。少し離れた場所でフェイとキャシアスが座って食事をしている。どうしたんだろう?

今日は絡んでこないなあ。まあ、そっちの方がありがたいけど! 「護恋、またデュエルを行うのですか?」

ふと、アンジェリカがそんなことを尋ねた。アンジェリカは私の

前の席に座って、ナイフとフォークを美しく動かしている。

「うん、そうなの」

私は、苦笑いを浮かべた。

デュエルのことは、またアンジェリカが心配するといけなから黙っていたんだけど、どうやら、ルルがあの時、大声を出したから、クラス中の知れるところとなってしまったらしい。

「まさか、またフェイト？」

「違うよ、安心して」

私が、これまでであったいきさつを話すと、アンジェリカの可愛らしい顔が険しくなった。なんで？

「キャシアス様やフェイトに近づくことが出来なくてそれで良いのですか？」

「あつ、そうか！ アンジェリカのこと応援するって言ったのに、近づけないんじゃないや応援できないね……どうしよう」

「そうではありません。キャシアス様もフェイトも貴方が思っているよりずっと良いお方です」

アンジェリカはきっぱりとした口調で断言した。

「そんな馬鹿な〜！」

私はアンジェリカのギャグだと思って、大笑いした。私の笑い声はフェイトやキャシアスの所には届いていないらしく、二人ともこちらを見ては居ない。私は、ほっとしてアンジェリカの談笑に戻った。だが、アンジェリカは真剣な顔で続ける。

「この国には、絶対的な賭けがあるため、学園にもいじめや嫌がらせなどがはびこっております。転校生はその標的にされやすいのです」

「あー、分かるよ！ 私、フェイトやキャシアス様に目を付けられたし」

「それは、違います。あのことは偶然で良くない出来事だったかもしれませんけれど、フェイトやキャシアス様は、あれから、護恋を傍において、護恋がいじめの対象にならないように周りを牽制してい

らっしゃるのです」

私は、うっかりパンを口から皿の上に零してしまい、慌てて拾った。

「あ、あれで？ もう十分苛められた気がするけど」

私は、曖昧な笑みを浮かべる。アンジェリカはキャシアスが好きだから妄信しているんじゃないのかなあ。

「フェイやキャシアス様は確かに、怒らせると怖いですが、そんな恐ろしいだけの方々ではありません」

アンジェリカは真剣な顔で小首を振る。そうなのかなあ。でも、フェイはああ見えても、私がテキストを忘れた時にテキストを見せしてくれたし。キャシアスもフェイに勝てる秘策を教えてくれたし。そんなに悪い人たちじゃないのかとは私も思うけど。

「ふーん……アンジェリカ、実はね」

私は、アンジェリカに自分の部屋のドアの間に挟まっていた紙切れを見せた。アンジェリカは、ナイフとフォークを置いた。そして、くしゃくしゃになった紙を手にとって見つめた。すると、途端に、白くて細い手が震える。アンジェリカの青い瞳も恐怖したように揺れている。

「アンジェリカ？」

私が、アンジェリカの顔を見ると、青ざめているように見えた。

「護恋……。護恋が、このような目に合うのは、私のせいかもしれないかもしれません」

アンジェリカが嫌がらせの紙を私にそつと返した。私は折りたたくのでそれをスカートのポケットにしまう。

「？ なんでよ、アンジェリカは関係ないよ！」

私がそういうと、アンジェリカは嬉しかったのか、微かに微笑んだ。だが、すぐに、真剣な顔に戻る。

「とにかく、護恋はデュエルでは絶対に勝ってください。今、フェイとキャシアス様に守ってもらえないのは非常に危険です」

「でも……うん、分かった！ 絶対に勝つよ！」

思えば、アンジェリカの忠告は今まで正しかった。今度だってきっとそうに違いないよね。

第二十話 アンジェリカの忠告（後書き）

個人的に今回の話は気に入っていたんだけど……。色々と難しいですね；

読んでくださってありがとうございます。感想などあれば、お願いいたします。

第二十一話 道化の者

放課後。私とアンジェリカが体育館に入っていくと、ルルの言っていたとおり、体育館の中はデュエルをしている人で溢れていた。応援を送っている声と、剣を交える金属音が響き合っている。外はもうすっかり薄暗くなっているため、体育館の中の照明が少しまぶしく感じる。まあ、すぐに慣れると思うけど。

「護恋、念を押しませけれど、わざと負けたりしないでください」
アンジェリカが心配そうに眉を下げて祈っている。

「アンジェリカ、絶対に勝つから安心して」

私は、そんなアンジェリカにウインクを送った。アンジェリカは少し安堵したように息を吐く。

私が体育館シューズを履いていると、向こうから靴下だけの足音が近づいてきた。私は体育館シューズの紐をくくり終え、やっと顔を上げた。やってきたのは、ルルだった。彼女は、規則委員の証である眼鏡の赤いフレームをくいつと人差し指で持ち上げた。

「護恋さん、この体育館の左下の場所で十分間だけ時間を都合つけましたので、さっさと終わらせてください」

歯切れの良い厳格な声でルルは言った。

「ありがとう、ルル！ やっぱり、ルルは学級委員もしているだけあって、頼りになるう！」

ルルの眼鏡のレンズがキラーンと嬉しそうに光った。

「任せてください。それでは、護恋さん頑張ってください」

ルルが指定した場所を指差すと同時にルルは固まった。私もルルの視点を目で追って「うわー……」と思わず声を漏らしていた。

「こら、お前ら、べたべたとキャシアス様に触るな！」

フェイの声が、私とは関係ない他のデュエルの応援に交じって嫌そうに響く。なんてことはない。フェイとキャシアスが中等部の生徒達に、おさわりされているだけだ。その中に、クランチカが惚け

た顔をして先頭を切って混ざっている。うーん、流石、フアンクラ
ブ代表だけあるわ。負けてあげたいけど、アンジェリカがああいう
から、仕方ないか。

突然、怒りを込めたような笛の音が、ピーツ！ と、響き渡った。
私はぎよっとして笛の音の出所を見た。ルルが笛を吹いたらしい。
ルルは笛を首に提げると憤怒の顔で、どすどすと中等部の生徒の中
に突入していく。

「貴方達！ デュエルに来ているのでしょ！？ 今回は十分しか時
間がないのですから、早くデュエルをしてください！」

ルルに怒鳴られて、中等部の生徒達はしょんぼりになった。

克蘭チカは気を取り直したようにコホンと咳をする。

「待ちかねておりましたわ、護恋さん！ さあ、デュエルをしまし
ようー！」

きりりとした目をして、私を指差す克蘭チカ。私は呆気にとら
れてしまう。克蘭チカはムツと気色ばむ。

「その、間抜けそうな顔は止めてくれませんか？」

「あはは……なんだか、付いていけなかったのよ」

私は空笑いしたけど、気を取り直す。

「でも、今日はやっぱり負けてあげれそうにないけど！」

私が言うと、克蘭チカが面白そうに笑った。

「そう来なくては勝つ意味がありませんわ！ ベラドンナ！」

「はい、克蘭チカ様」

克蘭チカが呼ぶと、横から一人の少女が進み出た。年は克蘭
チカと同一年くらい。そして、克蘭チカより少し背が高い。

「そちらが、克蘭チカの手駒なの？」

「はい、ベラドンナと申します。お見知りおきを」

ようやく、ベラドンナが顔を上げると、彼女の短い黒髪がサラリ
と後ろに流れた。眠りから覚めたばかりのような黒い瞳で私を睨む。
どことなく、物静かな雰囲気をもっている女の子だ。

「私は護恋っていうの。よろしくね」

私は手をひらひら振って、愛想笑いを浮かべた。でも、ベラドンは黙ってそれを無視した。私は感情を乱しそうになったが、平静を保つ。なるほど、もう勝負は始まっているというわけだ。

「ところで、私の賭けは、キャシアス様やフェイ様に近寄るな、仲良くするなといったものですけど、そちらの賭けは、何にしましたの？」

克蘭チカが腕組みしながら尋ねた。私はにんまり笑う。

「私の賭けは、このデュエルに勝ったらフェイに勝てるという賭けよ」

キャシアスに教わったのだ。今度の賭けでこう言えば、次にフェイに勝負を挑んだ時に勝てるよ！

克蘭チカはハッと呆れたように笑った。

「そんなので、本当に構いませんの？」

「もちろん！」と、私。

ルルは賭けを確認して頷いた。

「では、始めましょう。剣をここへ！」

克蘭チカが声を張り上げると、中等部の生徒達が、剣の箱を押してここに持ってくる。

私は、剣を選んで引き抜いた。剣の持ち手のグリップを確かめて、握り締める。

ルルがヘッドホンマイクを付けて、こちらを向いた。

『今からベラドンナVS護恋のデュエルを行います』

真っ直ぐに手を上げ、ルルは厳格な声で声高に宣言した。

『掟の神テュテュスの名の下にルルは審判の立会いを務めます』

ギャラリーは最高潮に沸く。

ルルが決闘の書を開くと、どこからともなく風が吹き抜けて、ペー지를素早くめくった。

『この審判の判断はこの決闘の書の判断にゆだねます。ルルはテュテュスと規則委員の名の下に公平な判断をすることを誓います』

ルルの声が意思を持って、体育館に響いた。

そして、ルルは『決闘七ヶ条』を読み上げた。注目はルルに集まっている。

決闘が始まるのを、皆は待ちわびているようだ。真剣な顔でルルの声に耳を傾けている。

それらを読み上げたルルは再び、本から顔を上げてこちらを見る。尚、掟に背くと神の意志により絶対的な賭けは実行されません。正々堂々と戦ってください』

私とベラドンナは「はい」とそれぞれ返事をする。

『賭けの確認をします。ベラドンナの賭けは、護恋が今後一切フェイとキャシアスに近寄らない仲良くしない。護恋の賭けは、この勝負に勝てばフェイに勝てる。これで宜しいですね？』

私は「はい」と力強く頷いた。ベラドンナも「はい」と神妙に首肯した。

『それでは、護恋VSベラドンナの勝負を行います！ 両者前へ！』ルルの審判の声が辺りによく通って聞こえる。私とベラドンナは前に進み出て、剣を構えた。

『では始め！』

堰を切ったように中等部の生徒達のベラドンナを応援する声が響く。だが、私の応援もある。ちらりと脇を見れば、クラスメイト達が応援に来てくれていた。

「よそ見をするなんて、余裕ですね」

ベラドンナが剣を横に薙いだ。私はそれを受け止めて払いのける。「余裕なんてないわよ！」

剣を左右に交える。だが、ベラドンナも素早く脳天を突くように振り下ろしてきたので、私は、サッと右に避けた。

私は、剣を交わして前に出ようとした。ベラドンナも同様だ。ぎりぎり剣がこすれあい、右に剣がぐるっと回る。そして今度は左に。らちが明かないので私はくるりと右に回転して間合いを取った。そして、すぐさま剣を前に突き出す。だが、ベラドンナに薙ぎ払われてしまった。

このベラドンナは、流石さすが、ファンクラブ代表の克蘭チカの手駒だけあって隙がない。

次の瞬間、ベラドンナの体育館シューズがひときわ大きな音を立てて、前に踏み込んだ。

「やああああっ！」

ベラドンナの気迫が前面に出たので、私は驚いた。でも、同時に彼女の間を見つけた。ベラドンナの剣を外側から下に打ち払って、私は彼女の懐に潜り込んだ。そして、剣で真一文字にベラドンナの胸を斬り付けた。途端に、ベラドンナの動きが止まり、彼女はその場に崩れ落ちた。

「やった！」

私はガッツポーズをして、乱れた息を整える。私を応援をしてくれていたクラスメイト達の拍手喝采が止まらない。しかし、中等部の生徒はため息を付いて肩を下げていた。

その時、体育館の二階の部分に人が立っていることに気づいた。その下に、私やベラドンナの応援をしてくれている人が集まっている。普段は応援をする時に使う二階だ。だけど、二階の部分はあまり使われていないので私はそこに立っている人がやけに気になった。私は、その人の顔を見てぎくりとした。その人は顔にピエロのお面をつけて、よく見れば道化の格好をしている。そして、何故かバケツを肩の辺りまで持ち上げている。そのバケツからは湯気がもうもうと立ちのぼっていた。そのピエロはその下にいる応援をしている人に向かってそのバケツを傾けようとしている。

「危ない！ 皆逃げて！」

私は声を張り上げた。フェイやキャシアスがそれに気付いて、アンジェリカたちを逃がしている。だが、克蘭チカだけが、何が起きているのか分からずに一人呆気を取られている。私は、そちらに向かって駆け出した。

第二十一話 道化の者（後書き）

ランキングに参加してみました。宜しければ^^それでは、読んでくださってありがとうございます！

第二十二話 狙われたのは誰？

私は勢いよく走って、克蘭チカのところまで手を伸ばした。そして、覆いかぶさるように、克蘭チカを抱きしめた。私の方が克蘭チカより身長が高いので、そうすることはたやすい。途端に、上からザバツと勢いよく何かがかげられた。それは、私の体に滝のように降り注ぐ。

「っ！」

私はそれに歯を食いしばって耐える。

「護恋っ！」

アンジェリカが悲鳴のような声を上げた。

「二階だ！ 二階から逃げた！」

誰かが叫んで、辺りは騒然となり、足音がこちらに集まってくる。フェイが追いかけて行こうとするが、アンジェリカがフェイの手を掴んで止めた。

「フェイ！ それより護恋を！」

アンジェリカの涙声にフェイは私を振り返る。

「私が追いかけます！」

ルルが二階に居た。ピエロを追おうとしている。

「ルル、俺も行く！」

「じゃあ、参りましょう、コードネル！」

同じ、赤いフレームの眼鏡を掛けた男、コードネルが、ルルの先頭を切った。

言い忘れていたが、コードネルは私のクラスの学級委員だ。そういえば、学級委員は規則委員でもあった。

ついで、ルルも一緒に外に出る。

フェイは、私の方に駆け寄ってきた。

濡れネズミになった私のほうを見て、克蘭チカは涙をぼろぼろと零している。

「クランチカ、大丈夫だった？」

クランチカは私の言葉に無言で何度もうなずく。クランチカは濡れてはおらず、大丈夫みたい。ホント、良かった。

なんだか、私の周りには人がわらわらと集まってきている。私が叫んだから、無理はないけど。

「護恋、大丈夫かい！」

キャシアスが駆けてきて、私の手を取った。

「ああ、大丈夫、大丈夫！」

私は、へらへらと笑って暢気そうに答える。

「大丈夫って、本当に？」

キャシアスが私の方を心配そうに窺う。なんだか、キャシアスらしくないわ。私は苦笑して、ひらひらと手を振った。

「なんか、ただのお湯だったみた　うわっ！」

私はいきなり浮遊感を感じた。次の瞬間、私は、フェイの肩に担がれていた。

「な、何すんのよ、フェイ！」

「アンジェリカ様のご命令だ。保健室まで連れて行ってやる！」

「自分で歩けるって！」

私が降りようと抵抗するとフェイが怒鳴った。

「いいからじつとしてる！」

私は思わず身をすくめた。はい、大人しくしてます……。私がフェイの背中から顔を上げると、生徒達が、私の方に途中まで駆けて来た足を止めて、心配そうに私の姿を目で追っていた。まるで、売られていく子羊を見るような目で私を見ている。心配しなくても私は無事なのにな。なんだか、申し訳ない。

運ばれるままになっていると、暫くしたところで、フェイがドアを開けて、暖かい室内に入って行った。

「ジェイディ先生、ちょっとこいつを見てくださいますか？」

私はやっと床に降ろされた。担がれていたせいで、頭の方に血が上ってくらくらする。部屋の中は白で統一されていた。ベッドが規

則正しく並んでいて、隅にデスクが一つあった。どうやら本当に保健室の中のようなようだ。そのデスクの椅子には白衣を着た美人の女生が座っている。宝石のようなグリーンの瞳は誰もを癒しそうな感じがした。ウェーブヘアのクリーム色の髪は後ろで一つに束ねられており、清潔感がある。

私は戸惑ってフェイを仰ぎ見た。

「フェイ、私は何ともないわよ」

フェイが何か言う前にそのジェイデイ先生が驚いた顔をして、椅子から立ち上がった。そして、白くて長い手で私の頬に触れる。

「どうしたの!? ずぶ濡れじゃない!」

「はあ、多分、お湯をかけられたんだと思うんですが……」

ジェイデイ先生は大きな業務用の塗り薬の蓋を開けた。

「本当ね、少し赤くなっているみたい! この塗り薬を塗ってあげる! さあ、制服を脱いで頂戴!」

私は、大騒ぎなジェイデイ先生に圧倒されていた。

今にも私の制服を脱がそうとしているジェイデイ先生に困惑して、私は、手で静止する。

「き、着替えはありますか……!」

「ああ、あるにはあるけど、まあこれでいいでしょう!」

ジェイデイ先生は戸棚から着替えを取り出して、私は、視線を感じて後ろを見ると、フェイが爬虫類のような目でじっと私を凝視していた。

「いつまで見てんのよ。着替えるから部屋から出て行って!」

「お前の胸板は真っ平らだし、別に見てもまったく興奮しない。だから、大丈夫だ」

平然として堂々とそこに居るフェイに私はついにはぶち切れた。

「だが、感想を求めているかつ! 出て行けえ!」

私は傍にあったティッシュの箱をフェイに投げつけた。

フェイは易々とそれをキャッチして、蔑んだような笑いを残し外に出て行った。

ま、まったく、むかつくつ！

私は、フェイが出て行ったのを見計らって下着姿になった。ポニテールを解いて、タオルで頭を拭いた。ジェイディ先生が私の首元に薬を塗ってくれている。

「本当に、硫酸とかじゃなくて良かったわ」

私はぎくりとして、ジェイディ先生のほうを見る。

「硫酸？ 硫酸ですか？ そんなこと本当に」

私がうろたえていると、ジェイディ先生は我に返ってぎこちない笑みを浮かべた。

第二十三話 狙われたのは誰？2

「ああ、もしもの話よ！ そんなことになったらディージャが黙っていないわ！」とジェイデイ先生は言った。

「ディージャって何ですか？」

「ああ、護恋さんは異世界から来たのだったわね。『デュエル審判協会（Duel Judge Association）』です。デュエルの違反者を取り締まる組織です。通称『DJAJ』^{ディージャ}。デュエルに関するこの警察のような組織だと思ってね」

「はい。そういう組織があるのなら、安心ですよね……」

私は、笑ったが、疲れが前面に出ていたようだ。ジェイデイ先生が同情したような顔になった。

でも、その組織は、何か事があってから動くのよね。それじゃあ、間に合わない。

「はい、薬を塗ったから、もう安心ね」

私はハツとして、いつの間にか俯いていた顔を上げた。

「ありがとうございます」

私は、手ぐしで梳いて、髪を一つにまとめた。そして、制服の袖を通す。でも、この制服……まあいいか。

私の着替えが終わったと同時に、誰かが保健室に飛び込んできた。

「護恋さん！」

「グロリアーナ先生」

グロリアーナ先生は短い髪を乱して、私のほうに駆け寄ってきた。そして、私の両肩を掴んで私の目を見据えた。

「護恋さん、大丈夫なの！？ 先生、護恋さんが、デュエルを挑みまくるから心配で心配で！」

心配してくれていたのか……！ 私は、グロリアーナ先生をつい家族の母や姉に置き換えてしまい、うっかり涙を出しそうになった。でも、私はその涙を飲み込んで、笑みを浮かべた。

「お湯をかけられただけです。心配要らないですよ」
続いて、ぞろぞろと、フェイ達が入ってきた。

「ルルどうだった？ 捕まえた？」

私が尋ねると、ルルは隣のコードネルと顔を見合わせ、そして、頭を振った。

「いいえ、逃げられました。申し訳ありません」

ルルの眼鏡のレンズが元気がなさそうに曇っている。私は手を振って明るい声を出した。

「ううん、良いの。捕まえたとしても、怪我されちゃ困るし。皆、無事でよかったよね！」

フェイが傍に来て、私をつついた。

「おい、グロリアーナ先生に、あの紙切れのことは言ったのか？」

「ま、まだ、だけど……心配するといけないし……」

私がそういうと、グロリアーナ先生が怒鳴った。

「何かあつてからでは遅いのですよ！ アンジェリカ様から少し話はお聞きしましたけれど、どういうことですか！？」

私は観念して、今まであった出来事を話した。前の制服のポケットから紙切れを出して、グロリアーナ先生に手渡した。グロリアーナ先生はその紙を穴が開くように睨みつけた。

「なんて陰湿な！ これは、私が預かっておきますね！」

グロリアーナ先生は紙切れをポケットにしまわれた。

「はい。でも、私は、クランチカの仕業だと思っていたんですが」
私が、クランチカの方を、ちらりと見ると、クランチカは首を振った。

「私、そんな紙切れなんて知りませんわ！」

クランチカは犯人呼ばわりされて、今にも泣き出しそうだったの
で私は慌てた。

「分かつてる！ クランチカが狙われたんだものね……」

クランチカは元気のなさそうな顔で私の方を見る。

「いや、狙われたのは護恋のほうじゃないの？」

そう言ったのはキャシアスだ。私達はキャシアスに注目する。

「えっ、どういうことですか？」と、私は尋ねた。

「俺もそう思います。護恋が叫んでから、クランチカに湯をかけるまで時間がかかっていた」と、フェイ。

アンジェリカがフェイの言葉に反応する。

「待つてください！ では、護恋がクランチカを庇うと分かっている、そのまま庇った護恋にお湯をかけたということですか!？」

キャシアスが頷いた。

「そういうことになるね」

私はにっこりと笑って見せた。

「だったら良いの。クランチカが狙われているんじゃないかとほっとした」

「護恋さん……」

クランチカは感動して泣きだしそんな声を詰まらせた。

一同は同情した様子で私を見ている。

ふいに、キャシアスが吹き出すように笑った。

「それにしても、護恋、その格好良く似合っているよ」

「ん？」

そういえば、この制服、なんと、男物なのよね。ブレザーにズボン。ネクタイはしていないけど。

「キャシアス様、似合っているって、どういうことですか？」

フェイまで、フツと笑った。

「そのままの意味だ。何度も言うが、お前には女を感じない。寸胴だしな」

な、何を！ まさか、見たのか!？

「アンジェリカ！ そんなことないよね！ 私はスタイル良いよね！」

私が、アンジェリカに同意を求めると、アンジェリカがくすくすと笑いながら頷いた。がーん!

「笑いながらじゃ、慰めにならないって!」

後ろで、ルルとコードネルが笑っていた。伝染するようにみんなは笑みを浮かべる。

「そこ、笑わない!」

だけど、周りに、ほんわかとした笑いが灯って、私はほっとしていた。こんなことで、私は負けないよ。立ち向かってやるんだ。

第二十四話 フェイの賭け

結局、ピエロは捕まらずに二日が過ぎた。ついに、何も起きなかつたので、お気楽な私は、もうすっかり暢気に構えていた。そんな午後の休み時間。教室の自分の席で、春の陽気に目を細め、あくびを浮かべた。

「夜は眠れているの？」

心配そうな声が横からかけられた。キャシアスが椅子をこちらに向く、優雅に腰掛けていた。

「はい、よく眠りすぎるぐらいに眠れてます……」

私は机に突つ伏して「極楽、極楽」と呟く。

「呆れたよ」

キャシアスが笑っている。

「本当でございますね。もっと緊張感や不安感があるのかと思っていましたが、こいつには皆無らしいですね」

フェイが、私の隣の席で馬鹿にしたように笑う。いや、面白がっているのか？ 私はムカついて、上体を起こした。

「何よ、起こるか起こらないかの心配なんてしたくないわよ。でも、何かあると怖いって思いはあるけど……」

私は頭を掻きまわった。私にしては少し元気がなかったのだろうか。二人は同情したように嘆息した。

「今、規則委員会が動いて犯人を捜している」と、フェイ。

「規則委員会ってルルやコードネル達が？」

「そういうことだよ。規則委員は高等部の各クラスに二名ずついるからね。搜索も結構な力になるんじゃないのかな」

「犯人は捕まるかもしれないってことね！ よし、元気が出てきた！」

私は、しゃきつと体を起こす。乱れた髪を解き、またポニーテールにまとめる。

「それは良かった。ところで、護恋」

「何ですか？」

「デュエルはしないのかい？」

キャシアスがにっこりと微笑んだ。私はにやりとして、椅子から立ち上がる。そして、人差し指をフェイに突きつけた。

「フェイ！」

「何だ？」

「デュエルを申し込みます！ 私が勝ったら、三日間の賭けをしてもらおう！」

私の大声に、ざわりと、教室が色めき立った。フェイは、やれやれと肩をすくめた。懲りない奴だともいいたいのかな。でも、今回は違うよ。キャシアスに言われたとおりに、ベラドンナと戦った時、『この戦いに勝てたらフェイに勝てる』という賭けをしたし。そして、私はベラドンナに勝ったのだから。

「別に俺は構わないが、お前の方こそ覚悟は出来ているんだろうな？」

「私が絶対に勝つから、何でもいいわよ」

私が胸を叩くとフェイが爬虫類のような目をすつつと細めた。

「三日間の賭けじゃ面白くないな。それより悪くてもいいんだな？」

「勿論よ！」

「じゃあ、放課後、体育館で」

やけにもつたいぶるのね。別にいいけど。勝つのは私だし。

ふと、後ろを見ると、アンジェリカが青い顔をしてため息を付くのが見えた。私、今度は負けないはずなのに、何でだろう？

放課後はすぐに来た。授業中はデュエルのことではいっばいで、殆ど上の空だった。前にサーヴェリー先生に叱られたので、しっかりと授業を聞こうと思ったんだけど、フェイに勝てると思ったたら顔が緩んで仕方なかった。ベラドンナのときも勝てたし、今回も賭けのことがあるから絶対勝てるよね。

放課後。クラスメイト達が葬式のような表情で私を見送りながら

ひそひそと話をしていた。私はそれに気付かず、アンジェリカに声をかけた。

「今日は、絶対に勝つから見ててね！」

私がアンジェリカに向かってピースすると、アンジェリカは疲れた様子で小さく息を吐き出した。

「では、参りましょう、護恋」

「うん！」

アンジェリカと一緒に教室を出ていく。アンジェリカは歩きながら、手で胃の方を押さえていた。

「どうしたの？ 胃が痛いなの？」

私が心配そうに覗き込むと、アンジェリカは「ええ」と返事した。

「護恋……。貴方のことを考えると胃が痛くなります……」

「えっ、何で？」

「どんな秘策をキャシア様から伝授されたのか知りませんが……」

「絶対にフェイに勝てる賭けをしたの！」

私が、満面の笑顔になると、アンジェリカは、また何か言いたげな目で私を見て、更に目をそらした。

「そ、そうですか」と、一言。

私は急に不安になって、アンジェリカの顔をおずおずと覗き込んだ。

「キャシア様やフェイはそんなに悪い人たちじゃないんでしょ？」

アンジェリカは確か前にそう言ったよね？」

粗相をした子供を見るような目をして、アンジェリカは、微かに微笑んだ。

「ええ、まあ、大丈夫でしょう。頑張ってください」

「うん！」

外はすっかり薄暗くなっている。歩くにつれ、体育館の歓声が段々大きく近づいてくる。体育館の前まで来ると、開いた扉から漏れた光が私とアンジェリカの影を長く伸ばした。

アンジェリカはそっと私の背中を押して、体育館へ送り出してく

れた。ドアの向こうの歓声とデュエルの剣の音が私を吸い寄せた。
私は、体育館シューズを履いて、フェイの元にゆつくりと踏みしめていった。

「ようやく来たか」

フェイは既に待ち構えていた。キャシアスが隣にいた。フェイのファンクラブの女の子達の声援を後ろに背負っている。

「待たせたわね！ それで、そっちの賭けは決まったの？」

私が尋ねると、フェイは面白そうにフツと一笑した。そして、フェイは声を張り上げた。

「ああ、俺の賭けは、護恋、お前の一夜を貰おうか！」

途端に、体育館の中は悲鳴と歓声が入り乱れ、騒然となった。

第二十五話 勝負の行方3

「は、はあ!?! 一夜!?!」

もしかして……もしかしなくても、そういう意味!? フェイは、とんでもない奴だ! アンジェリカがフェイは実は良い人っていうから、私は安心していただけ、デュエルとなったら人が違う……。

フェイのファンクラブの女の子たちは悲鳴を上げたり、わあわあといいたり、気絶する人まで現れて、体育館の中は大混乱だ。

私は思わずフェイから一步後ろに下がった。フェイは、得意げに笑みを浮かべて近づいてくる。近寄るなケダモノ……っ!

突然、ピーツ! という笛の音が辺りに響き渡った。ルルとコードネルだ。

「フェイ君。法律違反です」

ルルが、笛を首にぶら下げて、フェイを指差した。

法律違反って、そんなのあるんだ。少し、ほっとした。

「法律違反?」

フェイは、白々しく尋ねた。どこかひょうひょうとしている。

「そうだよ、フェイ。『禁忌とされている賭け』の十三条にも載っているし、『決闘七ヶ条』にも書かれてあるよ」と、コードネルは茶色の癖のある髪を戸惑ったように掻いている。

「性的な賭けは禁止されています。負けた者に性的行為をすることも禁止されています。それに賭けたとしても、この賭けは発動されません。それでも、無理に実行しようとするれば、私達、規則委員は『デイージャ』に通報しなければなりません」

ルルが、『禁忌とされている賭け』のハンドブックを読みながら、声を張り上げる。だが、フンとフェイは一笑した。

「だが、性的行為を言った? 一夜を貰うと言ったんだ」「同じでは?」

コードネルの茶色の瞳はフェイに失望している。

「同じじゃない。そんなに気になるなら、ルルがコードネルが見張れば良い」

「では、賭けは撤回する気はないのですね？」

ルルが赤い眼鏡のフレームをくいつと上げた。

「ああ」フェイは楽しそうに返事した。

「分かりました。俺とルルが、責任を持って貴方を監視します！」

それを聞いた観客たちは拍手喝采した。ファンクラブの女の子達からは「護恋、頑張れ」という応援が、火を付ける様に大きく広がっていく。私だって、あんな賭けを実行されたくないし、負けたくないよ！

私は、箱の中から一本剣を選んで手にした。フェイも横で剣を握っている。ふと、フェイと目が合った。

「一ついいことを教えてやる」

「何を……？」

「お前は、キャシア様にはめられたんだ。俺には絶対に勝てない」私は頭をぶたれたような気がして、フェイを見つめた。キャシアスが教えてくれたことは嘘なの？ 急に心拍数が早くなってくる。私の手のひらは、すでに汗をかいている。スカートで手を拭いて、剣を握り締めた。

コードネルがヘッドホンマイクをつけた。

『今から護恋VSフェイのデュエルを行います』

そして、彼が手を上げて高らかに宣言した。

『掟の神テュテユスの名の下にコードネルは審判の立会いを務めます』

コードネルが分厚い『決闘の書』を開くと、どこからか風が吹き抜けて、そのページを素早くめくって行った。

『この審判の判断はこの決闘の書の判断にゆだねます。コードネルはテュテユスと規則委員の名の下に公平な判断をすることを誓います』

コードネルが蔽とした声で宣言すると、辺りの空気が引き締まる

ような気がした。

そして彼は、決闘七ヶ条を一言一句間違えずに読み上げた。

『賭けの確認をします。護恋の賭けは、フェイの『三日間の賭け』。フェイの賭けは、護恋の一夜を貰う。尚フェイの賭けが実行された場合、私とルルが規則委員の名を持って監視します。良いですね？』
私とフェイは「分かりました」と返事をした。

『尚、掟に背くと神の意志により絶対的な賭けは実行されません。正々堂々と戦ってください』

私とフェイは「はい」とまじめに首を縦に振った。

『これより、護恋VSフェイの一本勝負を行います！ ルールは分かっていると思いますが、先に剣が肌に触れたほうが負けです！』
コードネルの審判の声が響き渡る。

集中するのよ。私は剣先まで意識を研ぎ澄ませる。

声援が雑踏の音のようになり、そして、他人事のようになり、やがて、聞こえなくなる。

『始め！』

コードネルの声だけが、ひときわ鮮明に響いた。

「やーッ！」

私は、開眼すると同時に、逆袈裟に振り上げて仕掛けた。ふつとフェイの姿が消える。でも、戸惑っては駄目！ 私は身を翻して剣を後ろに振った。剣がキンと交わる。私は剣をなぎ払い、フェイと距離を置く。

「ほう？ 少しは強くなったか」

フェイは剣を構えながら、感心したように呟く。でも、それは、私を舐めきっているような意味にもとれる。

「言ったでしょ！ 私は勝つのだ！」

必死で繰り出す剣をフェイは軽く払いのけている。隙を見つけてそこを突こうとするが、隙がまったく見つからない。ベラドンナのときはすぐに隙が見つかった。ギルバートのときは気合いで何とかだった。でも、フェイは気合いで何とかできるような相手じゃない。

フェイは、息も全然切れてないし、犬と遊んでいるような余裕がある。

私は、剣で操られているような錯覚を覚えた。

「……っ！」

私の息はどんどん切れていく。

「終わりだ」

フェイが冷酷にそう告げた。その時、剣の残像が迫ったかと思うと、また首筋に刃が当たっていた。冷やりとした麻痺の薬が私の首筋を濡らす。私とその場に倒れこむと、フェイのファンの泣き叫ぶような悲鳴が体育館を奮わせた。

『この勝負、フェイの勝ちです』

コードネルの戸惑ったような声が女達の声に交じって、空しく私の耳に届いた。

第二十六話 楽しい夜

ま、負けた……っ！ 私はなす術もなく、体育館の冷たい木の床に転がった。

荒い息を繰り返していると、誰かの足音が聞こえてきて、私を抱き起こしてくれた。

アンジェリカ……？

だが今日はアンジェリカではなかった。私の顔から血の気が引いていった。間近でフェイが薄く笑みを浮かべている。

「……っ！」

私は泣きそうになっているが、麻痺の薬のせいでまったく動けない。そのため、逆らうことも出来ない。フェイが私を横抱きにして立ち上がった。

「今日は、優しくしてやる」

フェイはそう言って、私に微笑みかけた。

うえええ！？

私は思わず呻きそうになったが、それよりも、それを聞いたフェイのファン達は、泣くどころじゃない。絶叫のような声で体育館を震わせている。

フェイは私を横抱きにしたまま、体育館の出口に向かって歩き出した。ルルとコードネルも付いて来ているようだ。キャシアスが体育館の出口で待っていた。

「今日は、楽しい夜になりそうだね」

キャシアスが楽しそうに大声で言ったものだから、女の子達の絶叫は二倍増しになった。

「本当だなあ、俺も行って良い？」

応援に来ていたらしいギルバートまでそんなことを言い出したので、絶叫は三倍増しになった。

そのせいで、私の耳にキーンと耳鳴りが聞こえた。しばらく、私

の耳は使い物にならなそう。

「許さない！ 護恋！」

誰かの声が私の後ろから追いかけてきたが、私はキャシアスが用意したらしい、胴体の長い黒塗りの車　　リムジンというのだろうか　　に放り込まれてドアを閉められたため、その女の絶叫はぴたりと聞こえなくなった。静寂に支配された高級くさいリムジンの中で私は外を見ていた。体育館の前に女達がちらほらと現れている。それを振り切るように、リムジンは次第に走り出した。景色がゆっくりと動いてやがて女たちは見えなくなった。

私はキャシアスとフェイに挟まれて座っている。その前方に、ルルとコードネル、そして、アンジェリカ、ギルバートが座っていた。「アンジェリカ！」

私の痺れは取れたようだ。

「護恋、良かった」

私がアンジェリカにすがり付くと、アンジェリカはいつものふわつとした笑みを浮かべて私を包んでくれた。

「どうということですか？」とルル。

「そうだね、最初は変だと思っていただけ、キャシアス様が絡んでらっしゃるし、ギルバートやアンジェリカ様までいらっしゃる」

コードネルは顎を触りながら唸った。コードネルの眼鏡に度は入っていないらしく、もう眼鏡を胸のポケットにしまっている。

「私は、ただ、あの女の子達を煽っただけのような気がしましたが」
キラーンとルルの眼鏡のレンズが光った。

「鋭いね、ルルもコードネルも」

「ど、どうということ？ 私、フェイに酷いことされるんじゃないの？」

「するわけがない」

フェイはハツと鼻で笑った。私は、ムツと口をへの字にした。それはそれで、その言い方がむかつくのよね。

「良かったじゃん」と、ギルバート。

「そうだけど……。じゃあ、フェイとキャシア様は女の子達をわざと煽ったの？」

「そうだよ」

キャシアスはにっこりと微笑んだ。

「護恋に嫌がらせをする人が居たから、前から色々と計画していたんだよ」

「俺はキャシアス様に計画の一端を教えて頂いたというわけだ」

「そういえば、キャシアスとフェイが食堂でこそそと話していたときがあっただけ。」

「でも、そんなに回りくどいことしなくても……」

キャシアスがチツチツと指を振る。

「作戦には自然さが大事なんだよ」

「はあ、そういうものですか」

私は曖昧に返事する。キャシアスの美学なんて良く分からない。

「俺も、フェイから聞いてさあ。参加してみたんだ」

ギルバートは楽しそうに言った。

「そんな、お祭りじゃないんだから……。私はぐったりと疲れた。」

「はあ、それで、キャシアス様は私にフェイに勝てるという嘘を？」

「その通りだよ」

「まったく、嘘だと気づかないのかな？」

コードネルが肩をすくめて呆れている。がーん。

「ええ、そんなことが本当だったら、もう既にフェイ君は負けていますね」と、ルル。

「ええーっ！　そ、そんなに……。！　じゃあ、最初から私はキャシアス様に、はめられていたの？」

「その通りだよ。本当に計画を実行しようと思ったのは、護恋が本気で狙われていると思ったからだよ」

キャシアスが珍しく真剣な表情になった。

「あ……」

私の脳裏に、頭からお湯をかけられた映像がフラッシュバックす

る。

「手始めに、女の子達をみんな護恋の敵に回してみたよ。明日から、護恋はデュエルを沢山挑まれると思うから覚悟してね」

「ど、どういうことですか!?!」

「今日は楽しい夜になるってことだよ。そうだよね、フェイ? ギルバート?」

「御意にございます」

フェイは深々と頭を垂れる。

「仰せのとおりです」

ギルバートも軽く頭を下げた。

「意味が分からないんだけど、大丈夫なのかなあ」

私は、席の下に座ったまま心配そうにアンジェリカを見上げる。

「大丈夫ですよ、護恋」

アンジェリカがそう言ったので、私は少し安堵した。

「ルルやコードネルにも協力してもらおうよ」

キャシアスの言葉を聞いたルルとコードネルは顔を見合わせた。

「かしこまりました」と、ルル。

「法律に反しないことならご協力いたしますよ」

コードネルがそう付け足すと、キャシアスは面白そうに笑った。

第二十七話 キャシアスの策略

道路をどれくらい走っただろうか。やがてキャシアスのリムジンは、門を潜り、広い敷地の中に入っていく。

「ここつて、宮殿……じゃないですよね？」と、私。

大きな屋敷が車の窓から見えたのだ。

「いや、私の別荘だよ。さあ、みんな降りてもらおうか」

私はみんなの後ろについて降りる。地面に降り立つと爽やかな緑の香りをした夕風が吹き抜け、私の髪を弄んで行った。暮れなずんだ赤い太陽が緑の庭をほの赤く照らしている。私たちは整備された庭の中に入っていく。

屋敷のドアが突然、がちやりと音を立てて開いた。屋敷の中から執事が現れ、一礼すると共に、キャシアスに何かを手渡した。

「ルル、コードネル」と、キャシアスが呼んだ。

ルルとコードネルは一緒に「はい」と返事した。

「このビデオカメラですつと護恋を記録して、規則委員会に提出すると良いよ」

「えっ？ 宜しいのですか？」コードネルは驚いているような楽しんでるような表情になった。

「君たちはまだ勘違いしているようだね」

キャシアスの言葉を聞いて、ルルとコードネルは顔を見合わせた。「俺たちがここに来たのは、護恋を鍛えるためだ」と、フェイ。

「えっ？ 私を？」

私が自分を指差すと、アンジェリカが頷いた。

「そういうことです。キャシアス様からお聞きしましたが、護恋は今日敵に回した人たちからデュエルを挑まれることになるでしょう。そのための特訓です」

私の頭の中に疑問が渦巻いた。

「どうして、敵に回すようなことをするの？ そんなことをしたら、

もつと状況が悪くなるわよ」

「いいから、キャシア様の仰る通りにしようぜ」と、ギルバート。
「でも……」

「キャシア様を信じてください」

アンジェリカが笑みを浮かべて言ったので、私は少し安心した。

「う、うん……アンジェリカがそういうなら」

「ついておいで」

キャシアスは隣に建っている体育館そっくりの大きな建物の中に入って行った。私たちはそれに続いて、その建物の中に足を踏み入れる。どうやら、ここは土足でも構わないようだ。眩しい照明が突然明るく照らし出し、私たちの目を焼いた。段々と目が慣れてくると、この建物は新築で、清潔に掃除されていることが分かった。

コードネルがビデオカメラで私を映し始めたようだ。ルルもコードネルの隣で目を光らせている。

「さあ、護恋。剣を取れ。俺が稽古をつけてやる」と、フェイ。

フェイは剣を置いている箱の中から一本抜き取った。

「うん、分かった。これには、麻痺する薬は付いてないんだよね」

「ああ」と、フェイ。

私も剣を一本選んで抜き取った。振ってよし悪しを確かめてみる。いい感じね。

「俺も参加して良い？」と、ギルバート。

フェイは剣をすつと構える。

「では、二人で俺にかかって来い。余裕で相手してやる」

私とギルバートは目配せして、にやりと笑った。

「言ったわね！」

「そういったことを後悔させてやるぜ！」

私とギルバートは二人してフェイに剣でかかっていった。

それを、眺めている視線が複数ある。一つは、コードネルとルルの監視だ。そして、もう一つはアンジェリカ。私はこのとき、気付いていなかったのだが、アンジェリカは眉を下げ、じつと私のほ

うを見つめていた。

「アンジェリカ、どうしたんだい？ 元気がないようだけど」

キャシアスがそれにいち早く気付いた。

「いえ、そんなことはありませんわ」

アンジェリカは、無理やりに笑ったらしく口元が引きつっていた。「それでは、私は、帰らせていただきます。護恋をよろしくお願いします」

私に声をかけることもなく、アンジェリカは、そそくさと帰って行ってしまった。

キャシアスは、そんなアンジェリカの後姿を真剣な目で追っていたが、やがてパチンと指を鳴らした。すると、執事が後ろから現れてキャシアスの前で跪いた。

「お呼びでしょうか？」

「……アンジェリカの事を探ってくれ」

執事は「畏まりました」と言って、この建物から出て行った。戸が開いて、夜風が吹き込んだ。その風は寒々と冷え切っていた。

第二十八話 作戦実行！

それから、何時間経っただろうか。外では夜気が静寂の中で唸っていた。気まぐれに野犬が吠える音が遠くで耳鳴りのように聞こえる。だが、この明々と照明のついた建物の中では、金属の音と掛け声が鮮明さを持ってひとときわ際立っていた。

私はその建物の中で、汗だくで息を切らして、へたり込んだ。手にはデュエルの剣を握っているが汗で滑りそうになっている。ギルバートも似たようなものだ。

「そろそろ終わりにするか」

フェイが壁にかけられた時計を見ながら頷いた。時計の針は午前零時を示そうとしている。フェイはまったく息が切れていない。涼しい顔をして、剣を箱に戻している。悔しいけど、私たちを相手にしてもフェイは全勝だった。

「どうして？ 私はフェイに勝てるって賭けをしたのに、一勝もできないなんて！」

私が、息を切らしながら言うと、フェイが鼻で笑った。

「人物Aと人物Bのデュエルの場合、AとBの主とAとB以外の人物に関係のない賭けは実行できない。関係のない賭けはすべて無効になる。常識だ」

「初耳なんですけど……」

「それに、能力を上げたり下げたりする賭けは発動しない。誰かに勝つという祈願の賭けは、結局は自分が強くない限り勝てることはない」

「そ、そんなに……」

私は完璧にキャシアスに騙されてしまったというわけだ。

「ごめんね、護恋」と、キャシアスは悪気のない顔で謝った。

「いえ、むしろ完璧に騙されて清々しいです。素晴らしい騙し方で感服しました」

私は嫌味を言ったがキャシアスには通じなかった。

「そう、良かった」と、キャシアスは嬉しそうな笑顔を浮かべた。負けた……！」

「さて、屋敷の方で夕食をとって、休もうか」

キャシアスがそう言ったので、私は重い腰を上げた。

ルルがビデオカメラのレンズを覗きながら、コードネルと一緒に私を追ってくる。私は、辺りを見回した。

「あれ？ アンジェリカは？」

ルルに尋ねると、コードネルがにっこりと笑った。

「とつくの昔に帰られましたよ」

「教えた方がよかったですか？ でも護恋さんはフェイ君と特訓している最中でしたし」と、ルルがビデオカメラのレンズを覗きながら、申し訳なさそうに語尾を弱める。私はがくりと膝を付いた。

「そ、そんなー！ アンジェリカと一緒に添い寝が出来ると思って楽しみにしていたのに！」

私が叫ぶと、ギルバートが後ろから私の背中を軽く叩いた。

「まあまあ、がっかりなさんな」

「護恋、また、気持ち悪いことを言ってるのか？」

フェイが私の隣を歩きながら嘆息した。私は頬を膨らませてフェイの後を追いかけた。

「何よ、フェイだって、キャシアス様に逆立ちで歩けとか、三回まわってワンと言えと言われたらするでしょ？ 私はそれくらいアンジェリカが好きなの！」

私がアンジェリカの愛を訴えると、フェイが鼻で笑い捨てた。

「馬鹿かお前は。キャシアス様はそんな下卑たことは仰らない。美しい方なのだ、あのお方は」

フェイが夢見た様子で、ほろりと感嘆の息を浮かべた。

「アンジェリカだって言わないよ！ って、どっちが、気持ち悪いのよ」

私が吐き出す真似をしていると、フェイの手が後ろから伸びてき

て、私の口を引つ張った。

「何か言ったか？ 何か言ったのはこの口か？」

「ひたたた！ ギルバート、フェイがいじめる！」

私がギルバートの後ろに隠れると、ギルバートがフェイを止めた。

「まあまあ！ 美味しい夕食が待っているから、行こうぜ。ついでうか、似た者同志なんだよな、この二人」

「はあ？ 全然似てないし！」

フェイと私の声が綺麗に重なった。ギルバートの言ったことが裏付けられたようで、私とフェイは顔をそらした。だが、私は、あることを思い出してフェイのほうを再び見上げた。

「そういえば、フェイ。アンジェリカはキャシア様のことが好きなんだつて。フェイも協力してよ」

私が言うのと、フェイは頭を振った。

「俺がキャシア様にごうこうと言えない。全ては、キャシア様がお決めになることだからな」

「何よ、ケチ！」

膨れる私を見て、フェイは頬の筋肉を緩めた。

「まあ、出来ることはしてやるが」

「ホント？ よろしくね」

「ああ」

私は、フェイが協力してくれるとあって、ずっと上機嫌だった。

アンジェリカ見ててよ。キャシアスとアンジェリカをラブラブにしてあげるからね。私が肩を揺らしてくつくつと笑っていると、またフェイに「気持ち悪い」と言われてしまった。何よ、まったく失礼しちゃう！

そして、遅い夕食を取って、ルルと同じ部屋で眠った。ルルはずっとビデオカメラを回していたが、眠気に負けたらしく、カメラを台にセットして、力尽きたようだ。ベッドは一人一台だった。しかも、寝心地がすごく良いベッドでよく眠れたんだ。

勿論、キャシアスやフェイ、ギルバートは別室だ。誰が一緒に寝

たいものか。それに、そんなことをしたら、女の子達に本気で恨まれちゃうわよ。

そして、空が段々と白み始めるころ、私達はキャシアスのリムジンで学校の門をくぐった。既に、キャシアスのリムジンの前には殺気立った女の子達が大勢仁王立ちになって風に髪をはためかせていた。

「良いかい、護恋、言うとおりにしてね」

私はキャシアスの戦略に頷いた。それにしても、よくこんなことを……。私は感心するやら呆れるやらだ。私が、リムジンから降り立つと、校庭の砂塵が舞った。対峙している私達はとても絵になっていた。まるで、西部劇を実演しているみたい。

「花咲護恋……！」

誰かが、私の名前を憎憎しげに呟いた。女の子達は私を見て吠える前の犬のように歯を食いしばっている。ルルとコードネルも私の横に並んだ。

ルルが声を張り上げた。

「結論を申しますと、皆さんが気に掛けるようなことは何もありませんでした！」

「本当なの？ 信用できないわ」と、女達は口々にささめく。

「規則委員の名をかけても良いですよ。ここに証拠のビデオカメラの記録があります」と、コードネル。

「じゃあ、証拠のビデオカメラをこちらに寄越して頂戴！」

女の一人が語気を強めて手を出した。

「出来ません！」と、私。

「何ですって？」女達は殺気立ってざわめく。

私は、不敵に笑って見せた。

「私にデュエルで勝つたら見せてあげる！ かかってきてよ！」

私が入差し指を自分に向けてちよいちよいと動かして挑発する。

「面白いわ！ 後で、吠え面かかせてやる！」

女の子達は口々に呟いて敵意をむき出しで笑う。

かかったわね？ 私にはやりと、ほくそ笑む。
さあて、フエイに鍛えられた特訓の成果を見せてあげるわ！

第二十九話 護恋へのラブレター

その日を境に、私は女の子達に沢山デュエルを挑まれた。

「私の賭けは録画した記録の要求です。そちらの賭けは？」

「私の賭けは、私を襲った犯人探しに協力してもらおうという賭けよ」
女の子達は顔を見合わせた。

キャシアスは不敵な笑みを浮かべながら私にこう説明したのだ。

『まず護恋が、このデュエルに勝つと犯人探しに協力してもらおうという賭けをするんだ。そして、デュエルに勝つ。その時に、ルルやコードネルに撮ってもらったビデオを見せて、安心させて味方につけるといふ寸法だよ。これを繰り返していれば、情報は集まるし、犯人に行き着くかもしれない』

そして、私は順調にデュエルに勝っていった。

そんなデュエルの帰り。私が体育館から出ると、ルビーのような赤い瞳と視線がすれ違った。赤い瞳が珍しかったものだから、つい振り返った。

「お強いんですね」

赤毛の彼女は歌うように言って、私が答える間もなく、その場から人ごみに混じって消えてしまった。

そんな最中、朝礼が行われることになった。そのため、私達は体育館に向かっていた。アンジェリカの横を歩きながら私は弾んだ声を出した。

「アンジェリカ、朝礼って初めてだね。そういえば、この学園に学園長っているの？ お会いしたことがないから」

私が転校して来たときも学園長は不在だった。

「ええ、学園長はキャシアス様のお父様ですわ」

アンジェリカは綿のようにふわっとした笑みを浮かべた。

「キャシアス様のお父様？ ってことは、学園長って国王様なの？」
前を歩いていたキャシアスが振り向いた。

「そんなに驚くことないよ。この学園は王立だからね」

「ああ、そう言えば」

体育館には生徒たちが沢山列を作って並んでいた。私はアンジェリカの横に立つ。

『それでは、朝礼を始めます』

マイクを通った知らない男の先生の声が体育館を満たした。

学園長が壇上に立ったので、私達は頭を垂れて敬意を表した。

『頭を上げて楽しんでください』

学園長がマイクを通してそう言ったので、私は頭を元の位置に起こした。学園長はスーツを着てネクタイを締めていた。キャシアスと同じ金髪に、キャシアスとは違う緑の瞳を持っている。国王というので、もっと王冠をかぶった王様の格好を想像していた。なので少しがっかりした。

『今日は、転校生を皆さんに紹介します』

学園長は、自分の横に一人の少女を立たせた。私は面白くなかった。私が日本から来たときは学園長は声をかけることすらしてくれなかったのに。私はヤキモチを焼いてむくれた。更に学園長は続ける。

『この方は、ウエストランドの第五王女のミルドレッド様です』

ざわりと全校生徒は沸いた。

「あの、憎いウエストランドの？」

「きつとこの国に乗り込んできたんだわ」

「なんでウエストランドの奴なんか」

敵意のこもった囁きが交わされている。私のヤキモチの気分はすっかり消えていた。私だったら、こんなに敵意を持った歓迎は絶対に嫌だ。この憎しみのざわめきは、私がファンクラブの子を敵に回したときより数百倍酷い。

なるほど、イースティアはウエストランドと戦争していたってアンジェリカが言ってたな。

私は、同情を込めてミルドレッドを見つめた。だが、ミルドレッ

ドは全然動じていない。それどころか、ミルドレットの赤い目が私と合ったとき、彼女は私に微笑みかけたのだ。度胸のある方だと思つた。そして、彼女が、私のデュエルを見に来ていたことを、私はぼんやりと思い出していた。

『静粛に。皆さん、それぞれ思うことはあると思いますが、ミルドレット様と仲良くしてください』

学園長が言いたいことは、どうやらこのことだったようだ。ミルドレットがイジメにあうと政治的に色々と困るのだろう。

そして、ミルドレットは高等部の二年のクラスに入ったらしい。どのクラスかまでは分からなかったが、私には関係のないことだったので放っておいた。

一週間で平和に過ぎていった。平和といっても、私は勝負を沢山挑まれた。私が全ての勝負に勝つた頃、私の学園での立場が変わっていた。ファンクラブの女の子達の敵意はすっかり消えてしまった。キャシアスやフェイが私の一夜を貰ったという事も、どうやら、キャシアスの悪い冗談だということに意見がまとまっていた。

そして、キャシアスの一件で、ファンクラブの女の子達がみんな協力してくれることになり心強くなった。

「おはよー」

私が一年Aクラスのドアを開けると、コードネルが寄ってきた。

「護恋、大変なことになってるよ」

「えっ？」

私は自分の机に目を落として、愕然となった。

「な、なにこれー！」

私の机の上も中も封筒に入った手紙で溢れていた。キャシアスもフェイも苦笑している。最初は、嫌がらせかと顔を険しくしたが、手紙を一通開けてみて違つたので安堵した。それは、私を手駒にしたいというラブレターだったのだ。

第三十話 拒絶された手駒

私は、手紙を開いて目を通すと、戸惑いながら顔を上げた。キャシアスの作戦の思わぬ効果が出て驚いていた。

「面白いことになってきたね」

「本当でございますね」

キャシアスやフェイは楽しそうに手紙を開けて読んでいる。私に手駒の誘いをかけてくれた人は、フェイやキャシアスと仲の良い私を敵に回すより味方に付けたほうが良いと思ったのか。それとも、単に私の強さが欲しくなったのか。

「キャシアス様、全然面白くありません」

私は、読んだ手紙を荒く封筒に戻しながら語気を強めた。

「どうしてだい？ 護恋もせっかくだから、主を決めると良いよ。

ほら、この人なんか、条件が良いよ」

私は首を振った。

「私は、初めから主を決めています……」

「へえ、驚いた」

キャシアスは目を丸くした。

「もう、手駒になっていたとはな」

「いいえ、まだ許可は得られてないんです……」

私は迷っていたが一点を指し、ある席まで歩いていった。目線の先には天使が私の真剣な形相に気付き、目を瞬いている。

「アンジェリカ！」

私がつつと友達になりたいと思っていたアンジェリカ。私はもう友達だと思っているけど……。

「護恋、どうしたんです？」

「アンジェリカ、あのね！ 私をアンジェリカの手駒にして！」

私の声が響き教室の中が好奇心な視線で満ちた。もし、アンジェリカの手駒になったら、アンジェリカと親友のようになれるような気

がしていた。アンジェリカの身分は高いから、友達は無理かもしれないけど、手駒にならなれる。だが、アンジェリカの顔が申し訳なさそうに曇った。

「ごめんなさい。私に手駒は必要ありません」

私は自分の胸に手を置いた。

「私なら、アンジェリカの為に何でもしてあげられる！ アンジェリカのためならどんな勝負だって勝つよ！ アンジェリカの好きな人だってアンジェリカのほうに向いてくれるように応援するから！」
アンジェリカの瞳が揺れた。だが、アンジェリカは視線を落とす
て、頭を下げた。

「ごめんなさい。何度言われても私の答えは同じです」

「何か手駒を取らない理由があるの？」

「ありません。もともと、デュエルが好きではないからです」

「そっか……無理言ってゴメン……」

それから後の授業は何をしたのかまったく記憶に残らなかった。私は、アンジェリカのことをずっと友達のように思っていた。でも、本当に私の一方通行だったようだ。私はショックで涙をずっと堪えていた。一方で、手駒にならないかと声をかけてくれた人たちに頭を下げて断って行った。やっぱり、私はアンジェリカの手駒になりたいから。

そして、私がアンジェリカの手駒に志願したということは駆けるような速度で学園中の噂になっていった。

その日の昼休みのことだ。いつものように、アンジェリカを誘って学生食堂に行こうと後ろの座席を振り返った。だが、そこに、アンジェリカは居なかった。

「アンジェリカ……一人で食べに行っちゃったんだ……」

「どうやら、そうみたいだな」と、フエイ。

「良かったら、私達と食事をしない？」

キャシアスは私を哀れに思ったのか誘ってくれた。

「うん……」

私は、ぼんやりしていた。学生食堂にはアンジェリカの姿はなかった。食事をしている間も、ひっきりなしに出るため息をそつと付くの気に使った。白身魚のパスタを食べたが、ゴムを食べているような気がして美味しく感じない。

「本当に元気がないな」

フェイが前の席で物珍しそうに無言の私を見ている。

「アンジェリカに、手駒にしてって言ったから嫌われちゃったのかな」私は声に出すと涙まで零れそうになり慌てて手で拭った。

「そんなことはないよ」と、キャシアス。

「きつと、アンジェリカに事情があるんだよ。手駒を持たない理由がね」

知ったような口ぶりだった。

「それは、アンジェリカがデュエルが嫌いだからで……」

突然私の話し声をさえぎるように耳をつんざくような悲鳴が響き渡った。私はフォークを置いて、慌てて立ち上がった。フェイやキャシアスも同様な様子だ。

「何が起きたんだろう?」

砂鉄が磁石に引かれるように悲鳴の方向に人が集まっていく。私は、野次馬達の先を見ようと爪先立ちになった。だが、皆は背が高いので、私の爪先立ちは無駄な努力だったようだ。

「ピエロが現れたんじゃないのか?」と、フェイ。

「そうかもしれない」と、キャシアスが頷いた。

「それなら、情報を集めて追いかけてなくちゃ」

だが、この人ごみだ。簡単に追えそうにない。

その時、野次馬達の話し声が耳を掠めた。

「えっ? アンジェリカ様が?」

アンジェリカ……?」

私は嫌な予感がして、人ごみを縫って野次馬の先に出た。そこにアンジェリカがへたり込んで俯いていた。

「アンジェリカ!」

私が駆け寄ると、アンジェリカは泣き出しそうな血の気のない顔を上げた。

「何があった」

尋ねようとして、やっと私は、アンジェリカの異変に気付いた。

アンジェリカの髪は、ばつさりと肩の辺りから切られて、彼女の長い髪の名残が床一面に散っていた。

ドクンと心臓が大きく鳴った。私の視界がショックと怒りで揺れ動いた。

第三十一話 ピエロの正体

「誰がこんな酷いことやったの!? 許せない!」

床に散らばったアンジェリカの綿毛のような髪を私は無我夢中にかき寄せた。

「護恋……」

泣きそうなアンジェリカの声が聞こえてきたので私はハツとして振り返る。

「アンジェリカ、怪我はない? 大丈夫?」

アンジェリカは無言で何回も頷く。

その時、女子学生が私に話しかけた。

「護恋さん、ピエロがいきなり現れて、アンジェリカ様の髪を切ったのよ! ピエロは逃げてしまったけれど」

「何ですって?」

突然、携帯のコール音が近くで忙しく繰り返される。私はポケットを探したが、私の携帯は相変わらず微動だにしていない。

「はい」と、後ろで誰かが携帯に出た。

振り返ると、携帯の主はキャシアスだった。キャシアスの顔色が険しい。

「ああ、分かった。ありがとう」

キャシアスは携帯を二つに畳んだ。キャシアスが「護恋!」と私を呼んだが、私は無視して猪突猛進に駆け出そうとした。

だが、フェイがあっさり私の腕を掴んで引く張る。

「キャシアス様のお声を無視するな」と、フェイ。

「何よ? 私はピエロを追わなくちゃいけないのよ!」

「その必要はないよ。ピエロは捕まった」と、キャシアス。

「えっ……?」

こんなにもあっさりと捕まるなんて信じられなかった。私に協力するという賭けに負けた女の子達の包囲網は伊達ではなかったよう

だ。

アンジェリカをクラスメイトの女の子に任せ、学生食堂の外に出てみると、ファンクラブの女の子や、赤いフレームの眼鏡を掛けた規則委員達や駆けつけたグロリアーナ先生が、ピエロを取り囲んでいた。

「さあ、お面を外してもらいましょうか」

ルルの眼鏡のレンズが太陽の光を受けて激しく光る。ピエロの面の中でこもったような嘆息が聞こえた。

「仕方ないわね」

なんと、女の声だった。女はかつらとピエロの面を地面に落とした。女は長いストレートの赤毛を掻き上げる。ルビーのような勝気な目を見て、私は彼女が誰か知った。

「み、ミルドレッド様……!?!」

ウエストランドから転校してきた王女だ。

「そう、ご名答」

ミルドレッドは歌うように答えた。

「なんでこんなことするのよ!」

「アンジェリカが生意気だからよ」

「何ですって!?! アンジェリカは私の天使なのよ。それをそれを!」

私が怒りで震えていると、ミルドレッドが妖艶に笑った。

「可愛いわね。その忠誠心も手駒としては最高なのに。アンジェリカが貴方の申し込みを断ったから腹が立ったのよ」

「私は、そんなことしてって頼んでないよ! アンジェリカに謝って!」

ミルドレッドはナイフを翳した。私たちはギョツとして、ミルドレッドから距離を取った。ミルドレッドは自分の髪を掴むと、ナイフで切り捨てた。ミルドレッドの手の中で赤毛が日の光を受けてキラキラと光っている。

「これで許してもらえるかしら?」

私は、呆れるやら驚くやらで言葉を紡げなくなった。ギャラリ―も完全に気後れしている。ミルドレッドはナイフと髪を地面に捨てた。

「護恋、私の手駒におなり。私の為に剣を振るいなさい」

ミルドレッドは私のほうに歩いてきて、白くて細い手で私の頬を撫でた。私はぞわつと総毛立ってしまった。

「お……お断りします」

「そう？ 後悔することになってよ」

「後悔はしません！」

それだけは、しっかりとと言えることだ。フェイが隣で感心したように笑みを浮かべていた。

「アンジェリカ様」と、誰かが呟いた。私が振り向くと、アンジェリカが気丈な姿で後ろにたたずんでいた。

「アンジェリカ……！」

私はすぐにアンジェリカの傍に駆け寄った。ミルドレッドは顎を上げてアンジェリカの方に声を飛ばす。

「アンジェリカ、貴方が手駒を持たないのは常に狙われているからよね。デュエルに負けたら貴方や周りの人たちが危ないと、そう思っているのよね。でも、貴方はデュエルをしてもしなくても狙われているの。勘違いしないことね」

真っ青になったアンジェリカを、私は胸が締め付けられる思いで見ている。アンジェリカが手駒を持たないのはアンジェリカが狙われているからだったのか。私のことを嫌いというわけじゃなかったんだ。

「ミルドレッド様、今から、デイージャに通報して、貴方を拘束させていただきます。宜しいですね」

グロリアーナ先生がミルドレッドに言い渡した。

「好きにするといいわ」

ミルドレッドは規則委員に連れられてその場から去っていった。

「これでひとまずは安心だな」

フェイが私の頭に軽くポンポンと手を弾ませた。

「そうね！ 流石キャシアス様の作戦というか……キャシアス様？ 私の横で難しく考え込んでいるキャシアスが気にかかり、彼の顔を覗き込んだ。キャシアスはハツと我に返る。」

「いや、どうして、ミルドレッドは護恋を襲ったのかと思ってね」

「私、ミルドレッド様の仰ることは理解できないですから……アンジェリカの長くて綺麗な髪が好きだったのに」

「髪はまた伸びますわ」

アンジェリカはもう元気を取り戻したようだ。私に微笑みかけてくれている。私は少し安堵した。

「そ、そうだね。ともかく、アンジェリカが無事でよかったよ」

「護恋、いつも私のことを気にかけてくれてありがとうございませううん、いいよ、そんなこと。だって友達だもん！」

私が、にへらつと、だらしない笑みを浮かべると、アンジェリカが首を振った。

「友達ではありません、これからは」

「えっ、そ、そんなに……」

私はどん底に落とされたような気持ちになった。だが、アンジェリカはくすつと笑って、続ける。

「友達ではなくて、私の手駒になってくださいますか？」

「えっ、ホントに……良いの!？」

「はい」

「やったー！」

「お、おい！」

私はフェイの手を掴んでくるくと回った。

「やったよ、フェイ！」

フェイは完全に呆れている。アンジェリカとキャシアスはクスクスと笑っている。

私は、アンジェリカの為にならなんでもしようとするこの日この時を誓ったのだった。

でも、アンジェリカがまだ隠し事をしていて、笑顔の中にそれを伏せていた事に私たちは全然気付いていなかった。

第三十二話 強力な後ろ盾

午後からの授業が始まる前に、キャシアスが機嫌良く提案した。

「護恋がアンジェリカの手駒になったから、アンジェリカの机を護恋のところに持ってきてはどうだろうか？」

「そうですね！ 私が運びます！」

私がアンジェリカの机を持ち上げて移動させていると、私はふとひらめいたのだ。

「よいしょ、とー！」

「護恋……！？」

アンジェリカが手で口を押さえて戸惑っている。それもそのはず、アンジェリカの机を置いた場所はキャシアス様の隣だったからだ。

キャシアスが何か感付いた顔で私を見る。

「どういうつもりだい？　なんで、アンジェリカの机が私の隣なのかな？」

「いや、私の趣味でアンジェリカとキャシアス様を並べてみたくなつて！　ね、フェイ！」

フェイも頷く。

「キャシアス様とアンジェリカ様がお並びになると、とても絵になると存じます」

「護恋！　フェイ！」

アンジェリカが頬を赤く染めてうるたえている。何故かキャシアスは面白くなさそうだ。

「二人とも何か企んでいるだろうか？」

「ずばりと指摘されて私は慌てて首を振った。」

「い、いいえ！」

「いえ」フェイも控えめに否定している。

「ふうん、なら別にいいけど？　よろしく、アンジェリカ」

キャシアスはアンジェリカにっこりと微笑みかけた。

「は、はい、よろしく願います」

アンジェリカはそれだけで、とろけそうになっている。私は大満足で顔いっぱい笑みを浮かべて二人を見ていた。

予想外のことも起きた。私の机はアンジェリカとキャシアスの後ろに置かれたのだが、必然的にフェイの横になってしまった。

「やはり、お二人は絵になるな」

フェイと私は、ほうつと息をついた。私も頷く。

「そうね、特にアンジェリカは後姿も美しいよね」

「どちらかというと、キャシアス様の後姿の方が美しい」

「そんなことないわよ。アンジェリカのほうが勝ってる」

「おい、護恋、キャシアス様の後姿にケチをつける気か？」

「ケチつけているのはそっちでしょー！」

それから、私とフェイは授業が始まってからもこそそと喧嘩していた。

そんな私とフェイのことをキャシアスが一瞥して、面白くなさそうに嘆息していたことなど、当の私を知るよしもなかった。

その日の放課後は、デュエルの申し込みもなく静かだった。今はアンジェリカの見送りをして、寮の方に向かっていているところだ。少し、アンジェリカと喋りすぎて帰りが遅くなってしまった。静かな校庭に夕日の赤色が落ちていく。木が風を受けて波のようにサアアと鳴っている。

「ああ、お腹減ったなあ。先に学食でご飯にしようかなー」

私がうーんと背伸びしながら、ただらと歩いていると、後ろで砂を踏みにじる音が聞こえた。私が、何気なく振り向くと、それは矢のように飛んできて、私の首筋を冷たいもので打った。

「な……っ」

私は動けなくなつてその場に膝をついた。麻痺したように身体が動かない。ついに私は横に倒れてしまった。焦りが募り、大声を出そうとした。でも、麻痺しているため上手く声が出ない。目線の先に剣の刃が鈍く光っている。私は思わず息を飲んだ。デュエルの剣だから切れないことは分かっている。でも、恐怖で私は振り切れそうだ。心臓の鼓動が張り裂けそうに鳴っている。

だが、それは、焦つた私をあざ笑つた。余裕のある動きでピエロの面を外す。だが、ミルドレッドではなかった。私は彼の顔を見て驚いた。

彼は嫌な笑みを浮かべる。

「アンジェリカ様が手駒を持つのを待っていた」

私は、しまつたと後悔したがもう遅い。

『いや、どうして、ミルドレッドは護恋を襲つたのかと思つてね』
キャシアス様の台詞が脳裏に蘇っていた。初めからミルドレッドがピエロだったわけではないのだ。最初の二つの事件は恐らく彼だ。そして、それを面白く思つたミルドレッドが彼を真似したのだ。

夜の体育館に、眩しい照明が点灯した。私はその照明に目を慣らそうと瞬きを繰り返した。私は縄でぐるぐる巻きにされている。私の痺れは取れたようだ。何とか解けないものかと身体や手を捻ってみたが上手くいかない。自由なのは口だけだ。

私は息を吸い込んで思い切り叫んだ。

「助けて　っ！　誰か　っ！」

彼は、そんな私を笑つた。

「無駄だ、体育館は防音している。外に聞こえはしない」

私は勇気を出して、目の前の人物へと声を飛ばした。

「ねえ！　こんなことして、ただじゃすまないこと分かってないの！？」

彼が私を無視したので私はもう一度息を吸って声を張り上げた。

「ねえ、ヴィンセント！」

肩までの銀色のウェーブヘアを振って、彼はウザそうにこちらを向いた。彼はアンジェリカが苦手としている人だ。でも、私はこの学園にきたときに少し見ただけなので、彼を良く知らない。

「ただじゃすまない？ 例えば？」

ヴィンセントは口の端を上げて私に問うた。

「た、例えば、先生やデージャが黙ってないんじゃない？」

ヴィンセントは声を立てて馬鹿笑いする。私は急に不安になった。恐怖感が後から後から湧き上がる。

「な、何がそんなに可笑しいのよ！」

「それは、以前の私であれば！ 今は私には強力な後ろ盾がある！」

その時、ドアが開く音がして、誰かが入ってきた。アンジェリカが心配して駆けつけてくれたのだと、私は希望を持って視線をドアに走らせた。だが、違った。

「強力な後ろ盾って、私のことかしら？」

「なっ………！？」

それは、デージャに捕まっているはずのミルドレッドだった。

第三十三話 罰せられるべき者

「どうなっているの？　なんで、捕まっているはずのミルドレッド様がここにいるの？」

ミルドレッドが答える前に、向こうのドアが開いて複数の足音が体育館に飛び込んできた。

「護恋！」

「護恋、無事か！？」

「護恋、大丈夫かい！？」

「アンジェリカ！　フェイとキャシア様まで！？　どうしてここに……？」

アンジェリカとキャシアスに限っては私服だ。こんな時でなければ、新鮮な気分浸れただろうに。

「私が呼んだの。今から、面白いデュシヤールをするからってね」
ミルドレッドは体育館に入ってきてヴィンセントの横に並んだ。

「デュシヤールって何なの？」

私は初めて聞く単語が気になった。

「影のデュエルよ。非合法の認められてないデュエル。もっとも、非合法の危険な賭けをして戦ったとしても、その絶対的な賭けは発動されないから、人の手で無理にその賭けを叶えるのだけどね……」
私は、危険な香りがしてごくりと喉を鳴らした。非合法って……。

「ふざけてるのか！　そんなことをしたら、ディージャが黙ってない！」と、フェイ。

そつだ、デュエルの法を取り締まるディージャが大人しくしているはずがない。だが、ミルドレッドは鼻で一笑した。

「馬鹿ね。どうして、私がここに居ると思っっているの？」

私もそれが不思議だと思った。

「そつよ！　ミルドレッド様はディージャに拘束されているはずじゃ……」

「キャシアス様、もしかして、ミルドレッド様がディージャの幹部に裏から手を回したのでしょうか？」と、フェイ。

「いや、ディージャ幹部にもウエストランド出身者が居る。その者が王女であるミルドレッドの味方をして可笑しくはない」

キャシアスの答えを聞いたミルドレッドは「ご名答」と、満足そうに頷く。

「そんな……」

目の前が暗くなるような気がした。ディージャがミルドレッドの味方になれば、誰がこの者たちを止められるというのか。

ヴィンセントが私のほうに顔を近づけて粘っこく囁いた。

「もはや、私を止めることはできない」

「アンジェリカに何かしたら許さないよ！」

「あらあら」

ミルドレッドは私たちを見て母親のように肩をすくめている。私は、私たちと二人の温度差が気に障った。

「なんで、私に嫌がらせしたり、アンジェリカに酷いことをするのよ！」

それを疑問にすることが可笑しいといわんばかりに二人は苦笑する。

「私は、ヴィンセントに賛同しただけよ？　だってあまりに酷いんですもの」

それだけでは、意味が分からない。

「護恋への嫌がらせは、すべてアンジェリカ様を苦しめるためだ」
アンジェリカが息を詰めた。私はヴィンセントを睨みつけた。更に、ミルドレッドが続ける。

「ピエロ騒ぎがあったとき、私はピエロのヴィンセントと出会ったの。手駒にして欲しいというヴィンセントの願いをかなえてあげたというわけ。そして、事情を聞いて、私はアンジェリカを煽ってやりたくなった」

ヴィンセントが可笑しそうに声を立てた。

「ミルドレッド様は困ったお方です。本当のことを言えば、私はアンジェリカ様が手駒を持つことと、このときを迎えることを待っていたのですけれど」

「アンジェリカが何をしたって言うのよ！」

ミルドレッドが吐き捨てるように笑った。

「……悪いのはアンジェリカの父親のライゼント伯爵よ」

「えっ？」

「やっぱりね……」

キャシアスが嘆息した。アンジェリカは打たれたようにキャシアスを振り返る。そんな二人にフェイが気遣いながら割り込んだ。

「キャシアス様、何かご存知なんですか？」

「ライゼント伯爵は色々あくどいことを裏でやっているらしい」

キャシアスに冷めた口調で言われて、アンジェリカは裁判で死刑を言い渡されたときのように青ざめて俯いてしまった。

私はアンジェリカが可哀想でなくなかった。

「でも、アンジェリカは関係ないでしょ！ アンジェリカはこんなに良い子なのに！」

「いや、ある！」

ヴィンセントの断言に私は驚いて、思わず息を飲んだ。

「昔、私の家族は平和に暮らしていたんだ。それを、ライゼント伯爵が私の母を見初めてから変わってしまった。母はライゼント伯爵のことを振ったが、ライゼント伯爵は私の母を諦めるどころか、農地を召上げるなどして私の父と母に嫌がらせを続けた。そして、とうとう、私の父と母はそのせいで過労がたたり帰らぬ人となってしまった」

ヴィンセントは震える手を落ち着けるように、もう片方の手で押さえた。アンジェリカの足もがたと落ち着かない。とうとう立つていられなくなったらしく、彼女はその場に膝を付いてしまった。「申し訳ありません！ 父のしたことは謝ります！ だから許してくださいー！」

アンジェリカは座ったまま頭を下げた。彼女の嗚咽が聞こえる。アンジェリカの肩までの髪が哀れに見えた。彼女は今までヴィンセントに嫌がらせをされてきたのだろう。私はアンジェリカのところへ駆け寄りたくなつたが、縛られているため、体をくすぶらせることができず、としか出来ない。

「それでも、アンジェリカは悪くないよ！」

私が我慢できなくなって叫ぶと、フェイが頷いた。

「そうだ、アンジェリカ様は悪くない」

「ああ、それは、ヴィンセントの逆恨みだ」

キャシアスもフェイに同意する。

だが、それを聞いたヴィンセントが気色ばんだ。

「……逆恨みだつて？ キャシアス様、それは違う！ 私の父と母はライゼント伯爵のせいで亡くなつたんだ！ 私の家族は居なくなつてしまつた！ なのに、ライゼント伯爵の家族はのうのうと暮らしている！ あんなにあくどいことをやっておきながら、自分だけ暖かい家庭を作っているんだ！ これが許せることか！？」

ヴィンセントは大声を張り上げた後、涙で濡れた息を切らした。

同情で体育館がしんと静まる。

「……私は許せないわ。ライゼント伯爵はもっと苦しむべきだと思つわ。例えば、一人娘がどうなるかとかでね」と、ミルドレッドが警告するように呟いた。

「アンジェリカに何かしたら許さない！」

私が吠えると、ミルドレッドは私のほうを振り向いた。赤い目が笑っている。

「私が何かするのではないわ。護恋、貴方がするのよ」

第三十四話 信じられない賭け

「は……はぁ？」

私の声は我ながら間抜けに聞こえた。

「こいつがそんなことをするわけがない！」

「フェイ、そのとおりよ！」

何で私がアンジェリカを苦しめなければならないのよ。だが、ミルドレッドは笑う。

「デュエルで負ければ、必然的にそうなるのではなくて？」

「そ、それは……」

私とフェイは何も言い返せなかった。確かに、デュエルで負ければ結果的にそうなってしまふ。戦ったことがないけど、ヴィンセントは強いのかな。

いや、強いはずよ。だって、ミルドレッド王女の手駒だもの。王女であるウナ様の手駒のギルバートもすごく強かったし。王女のミルドレッドが、簡単に負ける手駒を持つはずがないわ。

「さあ、アンジェリカ、護恋を傷つけられたくなければ、私とヴィンセントを止めたくば、貴方が賭けで勝つしかない。どうする？」
アンジェリカは涙を拭って気丈に立ち上がった。

「分かりました。護恋を信じて、デュエルをします」

アンジェリカの宣言の後、キャシアスとフェイはアンジェリカの為に賭けを考えて、紙にまとめ始めた。上手く賭けを書いて私がデュエルに勝てば、ミルドレッドやヴィンセントはこの絶対的な賭けのせいで手出しが出来なくなるだろう。でも、私は縄で縛られているため、それを考えることに参加できないでいた。あくまでも私はまだ人質というわけか。

暫く経って、アンジェリカは紙に書いた賭けを読み上げた。

「私の賭けは、ヴィンセントやミルドレッド様に関する方が、私の周りや私のことを今後一切傷つけたり悪意を働かないというもので

す

「良くつてよ。ヴィンセントも構わなくて？」

「はい」

「そちらの賭けはどういうものですか？」と、アンジェリカは恐る恐る尋ねた。

ミルドレッドはヴィンセントを振り返って彼を促した。ヴィンセントは嫌な笑みを浮かべて言い放った。

「私の要求はアンジェリカ様の命を貰うことだ」

「何ですって！？」と、私は思わず叫んでしまった。

アンジェリカはシヨックでよろめいている。

「そんな賭けは絶対に許可しない！」と、キャシアスが叫んだ。

突然、体育館のドアが開いて、夜の冷たい風が吹き込んできた。

「護恋！ アンジェリカ様！」

体育館の中に入ってきたのは三人だった。

「コードネル！ ルル！ それに、グロリアーナ先生までどうしたんですか！？」

三人は急いで来たのか息を切らしている。

「キャシアス様の運転手さんから連絡を頂いたのです！」と、グロリアーナ先生。

「俺とルルはたまたまグロリアーナ先生と一緒に学園に居たんだ。そこに電話があったものだから」

コードネルは胸のポケットから赤いフレームの眼鏡をかけた。

「それより、デュシャルをするって正気ですか？」

ルルの眼鏡が体育館の照明できらりと光る。

「ええ、そうよ。私たちが勝ったらアンジェリカの命を貰うの」

「そ、そんなこと私たち規則委員が許しません！」

ルルが、印籠を突きつけるようにミルドレッドに向かって指をさした。ミルドレッドは面白そうに笑う。

「どう許さないというの？ デイージャでも私達を止められないというのに？」

「そ、それは……！」

ルルのミルドレットに突きつけた指が戸惑って下がる。グロリアーナ先生が立腹した様子でルルの前に出た。

「学園長……いえ、国王様にご相談いたします！ 貴方がウエストランドに帰っていただくように！」

そうだ。厄介ごとを持って来たのは国王様なのだから、この方に相談するしか方法はない。だが、ミルドレットはケタケタとお腹を抱えて笑う。

「出来ないわよ。私はウエストランドの王命で来ているんだもの」

「いや、父上に言っただけで貴方には帰っていただく！ これ以上、私の学園で好きにさせない！」

キャシアスの頑とした口調をきいて、ミルドレットの顔から笑みが消えた。彼女にしては珍しく、キャシアスのほうを向いてうろたえている。

「……いいわ。キャシアスがそこまで言うなら、賭けを替えましょう」

「ミルドレット様！？」

ヴィンセントが反論しようとしたが、ミルドレットが彼の前に手をかざして制止させた。

「……本当言うと、私もこの国で罪を犯すのは忍びないし。ウエストランドの国の名に傷がついても困る」

皆の口から安堵の息が漏れた。

「そうね、デュエルの法律に反しないことなら良いのよね？ では、アンジェリカが永遠の眠りにつくという賭けはどうかしら？」

「な、何ですって!?!」

「永遠の眠りだと!?!」

動揺が辺りに走る。

「全然さつきと変わってないじゃない！」

私が怒るとミルドレットは「いいえ」と威厳のある声を張った。

「眠りというのは死ぬわけじゃないわ。ただ眠っているの。私たち

の許可を得ないと死ぬまで目覚めないそういうことよ」

「それが、許可されている賭けなの!？」

「ええ。許可されている賭けだけれど、結構不平等だからデュシヤールと世間では皮肉って言うかもしれないわね。でも、これは法的に保護されているから私達をさばくことはできないわよ」

私は信じられなかった。ルルが眼鏡のフレームの端を人差し指で上げる。

「……確かに、昔、競技場ハルシオンでそういう賭けのデュエルがありました。ウエストランドの最強とうたわれたデュエリストがその賭けに負けて、十五年間今もずっと眠っています」

事実を言うルルの声も戸惑っている。

「さすが規則委員、物知りね。許可されているデュエルなんだから、これで文句はないわね? ヴィンセント?」

「分かりました」

ヴィンセントは笑みすら浮かべて首肯した。

「護恋はこのデュエルを受けるわよね?」

ミルドレッドに尋ねられて、私の心臓がドクンと重く鳴った。私

が答えれずにいると、キャシアスが提案した。

「フェイが護恋の代わりに戦うというのは?」

「ただ、ミルドレッドは首を振って、」

「駄目よ。護恋でないデュエルはしないわ」

と、却下してしまった。

フェイが競技場での三年連続チャンピオンだったから、ヴィンセントの方が不利だと判断したのかな。

「それで、護恋は戦うの? 戦わないの?」

ミルドレッドが面白そうに尋ねる。

「私は……私は……」

心拍数が段々と早くなる。永遠の眠りをかけるなんて普通の賭けじゃない。それに、ヴィンセントがもの凄く強いということは予測がつくわ。もし、そのせいで私が負けてしまったら。そして、二度

とヴェンセントに勝てなかったら、アンジェリカは二度と目覚める
ことは　！　私はプレッシャーで押しつぶされそうになっている。
一体、私はどうすればいいの！？

第三十五話 手強い敵

「……護恋が勝てば良いんだ」

ぼつりとしたフェイの眩きがゆっくりと耳の中に沈殿した。私は軽い頭痛を覚えながら、のろのろとフェイのほうを向いた。途端にフェイの強い意志の瞳が私を射った。私は感電したように動けなくなる。フェイは本気で勝負して勝てと私に言っている。でも……！

「フェイ君、何を言っているの!？」

二人を見かねたグロリアーナ先生が割って入った。

「そうだ、フェイの言うとおりだ。勝てば、全て丸く収まる」

「キャシアス様……」

私の喉は乾いて張り付きそうだった。心臓が不快な音を奏でている。

「キャシアス様まで、何を仰っているんですか!？ 負けたら、アンジェリカ様は!」

「グロリアーナ先生」

キャシアスがグロリアーナ先生を制止させた。

「護恋、大丈夫ですか?」

いつの間にかアンジェリカが私の前に立っていた。アンジェリカは、しゃがんで、私の縛られた縄を解いた。私はやっと開放されたが、まだ気分は拘束されたままだ。それどころか、喉元に剣先を当てられているような気すらする。

「アンジェリカ、私……」

萎れかけの花のように俯くと、アンジェリカが私の手を取った。アンジェリカの手は温かくて、私は自然と落ち着きを取り戻している。

「護恋は言ってくださいましたよね。私のためなら勝つと」

「うん」

「それは、嘘ではないですね?」

「うん、嘘じゃない！」

今、私がアンジェリカの為に頑張らないでどうするんだ。

私は立ち上がって、箱の中から剣を一本抜き取った。

「それで良い」

ヴィンセントも、剣を一本選び取る。

「審判をお願いします！」と、私は振り返る。

だが、ルルは首を振った。

「私はこんなデュエルの審判をしたくありません！」

耐えられなかったようで、ルルは後ろを向いてしまった。

「じゃあ、俺がやるよ」

コードネルが、震えているルルの肩をポンポンと落ち着けるように叩く。

「護恋、絶対に勝てよ」

コードネルが最初に私を応援してくれた。私は無言で頷く。そして、彼はいつもの審判の顔になった。そして、コードネルはヘッドホンマイクを付けて、分厚い決闘の書を開いた。

『確認します。ミルドレッド様の手駒はヴィンセント、アンジェリカ様の手駒は護恋ですね？』

私達は「はい」と返事した。

『今からヴィンセントVS護恋のデュエルを行います』

コードネルが、手を上げて高らかに宣言した。

『掟の神デュテュスの名の下にコードネルは審判の立会いを務めます』

シンと静まり返った体育館の中に、どこからともなく風が通り抜けて『決闘の書』をめくっていく。

『この審判の判断はこの決闘の書の判断にゆだねます。コードネルはデュテュスと規則委員の名の下に公平な判断をすることを誓います』

今日はひときわ厳かなコードネルの宣言だ。ようやく決闘の書は真ん中のページで落ち着いた。

コードネルは肅として頷き、いつもの決闘七ヶ条を読み上げた。それらを読了したコードネルは再び、本から顔を上げてこちらを見る。

『尚、掟に背くと神の意志により絶対的な賭けは実行されません。尚、これはデュシヤールではありません。正々堂々と戦ってください』

私とヴィンセントは「はい」と返事をする。

『これより、護恋VSヴィンセントの一本勝負を行います！ ルールは分かっていると思いますが、先に剣が肌に触れたほうが負けです！』

私もヴィンセントも頷いた。剣を構えてぴたりと体の動きを止める。コードネルがサツと手を上げた。

『では、始め！』

私と、ヴィンセントは剣を交わしていく。

「護恋、がんばれー！」 「護恋さん、負けないで！」
皆の声援が私を後押しする。

「やああ！」

私は早く勝負をつけようと、攻めの一手で追い立てようとした。だが、ヴィンセントは嫌な笑みを浮かべて、簡単に私の剣を払い除けていく。

私の剣を受け止めているが、攻めてこようとはしない。だけど、追い詰められているわけではないようだ。煩い虫を何気ない仕草でしとめて行くように、私の剣を薙ぎ払っている。

「なあ！」

ヴィンセントは話せるぐらい余裕があるらしい。

「私が復讐しようとしてこの学園に入るためにどんな努力をしたと思っ？」

「知らないわよ！」

私は一気に打ち込んでいった。だが、ヴィンセントは闘牛を逃がすがごとくひらりと避けて私を前に出した。私は、慌てて方向転換

をした。振り返りざまにヴィンセントの剣を刃で受ける。ぎりぎり
と私とヴィンセントの剣がこすれあう。間合いを詰めるが、これ
は剣が繰り出せない。

だが、ヴィンセントは剣を前に押し、その反動で後ろに下が
た。そして、以前とは一転して、蜂が群れで刺すように攻めてくる。
「のほほんと生きてきたお前なんかより！ 数倍も何百倍も血の
じむ努力をして剣の腕を磨いてきたんだ！ そんな俺にお前が勝
てるはずがない！」

槍が降り注ぐような剣の突きだ。ギルバートよりも手ごわいかも
しれない……！ 激しい乱舞に目が眩む。私は刃で受け止めてい
くに必死だ。

「護恋、頑張れ！」 「護恋さん！ 頑張つて！」 「護恋、行けえ！」
皆の応援が耳を掠めていく。私は歯を食いしばった。このままで
は確実に負ける……！

「一か八かつ……！」
私はフェイントをかけた。そして、出来た隙を見て、ヴィンセン
トの懐に入った。

「やああああああ！」
二人の動きが交差して、ぴたりと止まった。体育館が水を打った
ように静まった。

私の勝ちだ。私はアンジェリカを振り返ろうとした。

だが、ぴりりとした痺れが私の体を襲った。

まさか 私の体が言うことを利かない？ えっ……？ いつの
間に……？

ぱらりと、私のポニーテールが解けて、肩に降りかかる。
私はなす術もなくそのまま床に崩れ落ちてしまった。

『こ……この勝負、ヴィンセントの勝ちです……！』
コードネルの落胆したような声。

私の負け……！？ 私、負けたの！？
また、誰かが倒れるような音が響いた。

「アンジェリカ!?」

「アンジェリカ様、眠ってはいけません!」

「アンジェリカ様! 目を覚まして!」

皆の悲鳴のような声が体育館の中を掠めていく。私は冷たい床に横たわっているため、天井しか見えない。私は荒い息を繰り返す。体育館の明るい照明がぐらりと眩暈を引き起こそうとする。

そんな、アンジェリカが……!

でも、アンジェリカは死んだわけではない。そう思いなおして、またヴィンセントに再戦を挑もうと考えた。

だが、私はヴィンセントの次の台詞に愕然となった。

「言っておくが、私は二度とこれに関するデュエルはしない! 二度とだ! これで、アンジェリカ様は一生眠ったままだ! はははははっ! ライゼント伯爵を懲らしめてやったぞ! 私の復讐は終わった!」

「良くやったわ、ヴィンセント!」

ヴィンセントとミルドレッドの笑い声が不快に響いている。

アンジェリカは二度と目覚めない? そんな……そんな……!

私は、天井を向いたまま、呆然としていた。敗北の味はいつもより何百倍も苦かった。

第三十六話 デュエルの特訓

私は、抜け殻のようになって体育館の冷たい床にへたり込んでいた。先ほど、お迎えの車が到着してアンジェリカの屋敷に彼女を送っていったところだ。

車内の中で、私はアンジェリカの手を握っていた。アンジェリカの首には小さな星印が一つ黒く浮き上がっていた。デュエルの効果が働いている証拠だ。アンジェリカの手は温かだ。アンジェリカの白い手の甲には薄く血管が通っているのが見えた。耳に近づけると、とくとくと鼓動を刻んでいる。彼女が生きている証明のようで、それだけが救いだった。

「アンジェリカ、目を覚ましてよ」

私は、アンジェリカにずっとそう訴えていた。でも、アンジェリカは目覚めない。

「賭けは絶対だ。デュエルで勝たない限り目覚めることはない」と、フェイが追い討ちをかけた。でも、今日はフェイの酷い言葉ものを射ているので、怒る気にもなれない。

戦えと言った二人を責める気にもなれない。勝てなかった私が悪いのだから。

「なんだか、眠り姫のようだね」

キャシアスも眉を下げてアンジェリカを見守っていた。私は、キャシアスの台詞を聞いて、もしかしたらと考えた。

「キャシアス様！ アンジェリカにキスしてあげてよ。眠り姫だったら王子様のキスで目覚めるかもしれないでしょ？」

私はキャシアスに笑いかけたわ。だが、キャシアスは首を振った。

「それは、出来ない」

「ど、どうして!？」

「好きでもない人にキスなんか出来ないって言っているんだよ」

私は酷く打たれたような気がした。

「ひどいよ！ そんなのひどいよ……！ アンジェリカが聞いているかもしれないのに！」

私はアンジェリカの代わりに泣いていた。負けてしまった悲しみや、アンジェリカの期待に答えられなかった後悔が、一緒にたなあって涙になる。

だが、アンジェリカの屋敷に着いて彼女を部屋に運んだ後、また愕然とした。

原因はアンジェリカの父親のライゼント伯爵よ。彼は四十代くらいの男だった。髭を蓄えており、威厳がある。アンジェリカと同じ目の色をしていた。だけど、アンジェリカが天使のようなら、この男は魔王のようだと思っただわ。

「すいませんでした！」

私が頭を下げると、彼はベッドに横たわったアンジェリカの寝姿を一瞥して、他人の失敗を嘲るように鼻で笑ったのだ。

「だから学園に通うなと言っていたのだ。馬鹿娘が！ このような出来の悪い娘は必要ない。ずっとこのまま眠っていればいいんだ。そのほうが好都合だ」

そう言って、部屋の外に出ていこうとした。私は啞然として、二の句が継げなかった。

「ちよつと……！ それってあんまりなんじゃない？ いつそのこと、私を責めてくれた方が救われるのに。なんで、親であるライゼント伯爵がアンジェリカを責めるのよ？ もともとの原因はライゼント伯爵で」

「止める、護恋」フェイが私の手を取って止めた。

「でも……！」

そうこうしているうちに、目の前でドアがボタンと拒絶するように閉まった。

そうして、なす術もなかった私達は、ハルシオン学園に帰ってきたというわけだ。キャシアス達は私を寮まで送り届けると、自分たちも帰って行った。

だが、私は未練たらしく体育館に戻っていた。どれくらい、薄暗い体育館の中でぼうつとしていただろうか。いきなり、体育館の照明が点いた。私は眩しい明かりに目を細めて光を手で遮る。

向こうから誰かが一人歩いてきた。体育館シューズを履いているのか、床が鳴っている。

「おい」

私は、ゆっくりと顔を上げた。彼は、私の前で止まった。

「なんだ、フェイか」

私は肩を落とした。

「お前らしくない」

「私らしいって何よ」

「いつもは気楽な楽天家の癖に」

私は、嘆息した。フェイと喧嘩する元気がない。

「ねえ、フェイ。自分の娘のことなのにあんなひどいことを言うなんて信じられないよ。親は子供の味方じゃないの？」

「……色んな親もいるってことだ」

私はアンジェリカの気持ちを考えて。

「アンジェリカはずっと孤独だったのかな？ だから、学園に通いたかったのかな？ でも、ミルドレッドやヴィンセントからも嫌がらせされて、アンジェリカが可哀想だよ……」

途端に、感情がぶわっと溢れてきた。

「私が、アンジェリカの友達になって支えてあげたかったのに……！ アンジェリカの為に役に立ちたかったのに出来なかった！」

私は体育座りをして足を抱えた。顔を伏せて震えていると、フェイが何かを投げて寄越した。それは、床に落ちてパサリと軽い音をたてた。私の視線がそちらに向く。そして、私はそれを拾い上げた。「……何これ……？」

それは、新品の袋に入った髪を括るための黒いゴム紐だった。一つだけ袋に入っている。フェイが買ったのだらうか。

そういえば、ヴィンセントとの戦いで、ゴム紐が切られてしまつて、ポニーテールが解けたんだつた。

「いつものように髪を後ろで一つにまとめろ」

「……えっ？ ……何で？」

「アンジェリカ様のために勝ちたいんだろ？」

フェイは、そう言いながら、出しっぱなしになっていた箱の中から剣を一本選び取つた。

「うん、勝ちたい……！」

私は涙を袖で拭つた。そうして、フェイがくれた髪のゴムのパツケージを開けて、中身を取り出した。そして、髪を手ぐしでまとめ、ゴムで髪をポニーテールに縛る。すると、気持ちも引き締まるよつだつた。

そして、フェイが剣を私の足元に転がした。きらりと剣の刃が光つている。

「護恋、剣を取れ。俺がみっちり稽古をつけてやる」

私の内側からめらめらと闘志が湧いてくる。そうよ、負けたのなら、もう一度勝てばいいだけの話！ ヴィンセントが二度とこのデユエルをしないというなら、無理にでもさせるだけ！ 靴下を脱ぎ捨てて、裸足になる。そして、私は剣を引つつかんで身体を起こすと、剣先をフェイに向けた。

「よろしく、フェイ！ でも、手加減なんてしないで、私をヴィンセントに絶対に勝てるようにして！」

私の台詞に満足したのか、フェイは、にやりと笑みを浮かべた。

「良いだろう！ かかって来い！」

私はかけ声を出して、フェイに向かって行つた。

第三十七話 護恋の賭け

また、いつもの日常が繰り返されているけれど、そこにアンジェリカはいなかった。アンジェリカはお屋敷ですつと眠ったままらしい。

「次は、ヴィンセントの剣筋で戦うから向かって来い！」

「うん！ お願い！」

休み時間も放課後も私は、フェイとの特訓に明け暮れている。アンジェリカが賭けに負けて眠らされたということは、学園中に広がっている。特訓を繰り返すうちに、私を応援してくれる人が増えていった。

「護恋、頑張りなさい！」

「護恋さん、ファイト！」

キャシアスやフェイのファンクラブの人たちも、私を応援してくれている。

「絶対アンジェリカ様を目覚めさせて！ 絶対よ！」

「うん！」

アンジェリカを応援してくれている人も増えている。ほら、アンジェリカは一人じゃないよ。私だって、アンジェリカの友達だし、これからもずつと変わらないって約束する。

「次は、護恋さん……いえ、キャシアス様、読んでください」

授業中眠っている私を見た先生達も事情を知っているので、見逃してくれている。私の味方は確実に増えていったわ。

逆に、ヴィンセントやミルドレッドを応援する人も増えている。ヴィンセントに同情する声も確実にあることは確かだ。やりすぎだという批判もある。でも、ミルドレッドの権力があるため、誰も何もいえないみたいだったよ。

「ヴィンセントを呼んでくれないかな？」

私が、二年Bクラスを訪れたのはその日の早朝だった。私が一人

でヴィンセントのクラスに来たことで、辺りが騒がしくなった。ギヤラリーが自然と私を取り囲んだ。

「何の用だ」

ヴィンセントが教室の柱にもたれながら姿を現した。

「私ともう一度、デュエルをしてよ!」

ヴィンセントは面白くなさそうな顔になった。

「……するかどうかは、何を賭けるかによるな。例えばアンジェリカ様の賭けに見合うような」

もしかして、命を賭けるといつているのか。

私は心臓の音を静めるように自分の手を握りしめた。そして、ヴィンセントをひたりと見つめる。

「分かった、私の命を賭ける! デュシヤールが駄目なら、永遠の眠りでも良い! だから、アンジェリカの眠りを解いて!」

辺りに動揺が走る。

ヴィンセントはニヤリと嫌な笑みを浮かべた。

「良いだろう。今日の放課後、体育館で待っている」

「えっ? き、今日の放課後?」

いくらなんでも、それは早すぎる。まだ、フェイとの特訓を極めてない。私はもう少し後にしてもらいたかった。だけど。

「ああ、それ以外は受け付けない」

すうつと目を細めるヴィンセント。全て見透かされているような気がした。私は、緊張で汗ばんだ手を更にぎゅっと握り締める。

「わ、分かった」

「では、また後で」

ヴィンセントが教室に戻った後、私は深呼吸を繰り返して心臓の鼓動を落ちつけようとした。ついに、私はとんでもない賭けをってしまった。だけど、アンジェリカの眠りを覚ますためだもの。絶対に勝たないといけない。

自分の教室へときびすを返そうとすると、フェイとキャシアスが廊下で待ち構えていて、私は「げっ」とうめいてしまった。

「ど、どうも……」

私は、空笑いして、二人の前を通り過ぎようとした。

「おい！」と、フェイが私の後ろ襟を掴んだ。

「な、何よ！ もう、宣言しちゃったんだから、替えないわよ！」

私は、干された洗濯物のようになって、じたばたと手を動かす。

「お前の今の実力だと絶対にヴィンセントには勝てないぞ！ どうするんだ！？」

「か、勝つわよ！ 絶対に！」

その時、忙しない携帯のコール音が鳴る。

「はい」

キャシアスが、手なれた仕草でそれに出る。キャシアスの顔色が変わり、キャシアスは私の方を向いて携帯を私によこした。フェイが私の後ろ襟から手を放す。

「？」

「神風総理から電話だよ」

私はギョツとして、思わず「私に？」と、自分の方を指差した。

キャシアスは珍しく厳しい顔で頷いた。私は、どぎまぎしながら携帯を受け取って握りしめた。そして、携帯の受話器を耳に当てる。

「は、はい、護恋です」

「神風です。花咲さん、アンジェリカ様の賭けのことは聞きました

『よ

早っ！

私は、周囲を思わずきよきよとしたが、みんな怪しい動きをしている者はいない。な、何なの！？ 私って監視されてるの！？

これが、政府の情報網というやつだろうか。

「そ、そうですか。応援してくださいさるんですか？」

私が、動揺を隠せずにいると、神風総理は最初の時とは違う低い威圧するような声で警告した。

『即刻、その賭けをお止めなさい』

私の手が震える。私は携帯を握り締めた。

「い、嫌です！ アンジェリカは私の友達だもの！」

少し間が空いて、周囲の雑音が耳に流れこむ。

「……そうですか、残念です。私の指示に従わないのなら、日本に帰って頂きます」

「……えっ？」

「それでも、構いませんか？」

私は気色ばんだ。これは、脅しじゃないか。総理は私のことを思っ
て言ってくれているのかもしれないけれど、私はそれに従いたく
ない。

「それでも構いません！ それでは、失礼します！」

私は、息巻きながら携帯の通信を切ると、キャシアスに携帯を押
し付けた。そして自分の教室に向かって歩き出す。二つの足音が私
を追いかけた。

「護恋、神風総理はなんて言ったの？ 護恋！」

キャシアスが手を伸ばして、私の肩を振り向かせる。キャシアス
とフェイが真剣な顔をしてこちらを見つめていた。

「……日本に帰れっ！」

私はぶっきらぼうに答えた。

「えっ？ 日本って、護恋の母国のことだよな？」

キャシアスの茶色の瞳が揺らいでいる。

私は顔を背けて「うん！」と、頷いた。

「護恋は、帰るって言ったの？」

「うん！ 今日の勝負が済んだらね！」

私は、色んな気持ちがかみ上げてきて泣きそうになった。そのた
め、キャシアスの手を振りほどいて、階段を駆け下りた。

さよならは、もうすぐだ。

でも、その前に必ず勝つ！ 絶対よ！

第三十八話 勝負の行方4

「んげっ!？」

階段を駆け下りている途中で、私は足を止めた。失礼だけど、学園の高等部には似つかわしくない、小さな女の子が現れたからだ。

「護恋〜! 今まで、私を避けてたでしょう?」

キャシアスの妹のウナだ。何が面白いのか、ウナは手をわきわきさせながら近づいてくる。逃げようと一歩引いた瞬間、ここが階段だということを忘れ、尻もちをついてしまった。

「わああっ! そんなことないですっ!」

いや、そんなことありまくりなのだ。今まで私は、ウナの気配がしたら用を足しにいたり席を立ったり、とにかく彼女を避けて避けて避けまくっていた。ホント、この方は苦手なのよ!

「護恋、観念しようぜ?」

ギルバートがウナの後ろで暢気のんきに笑っている。他人事だと思って! 「せっかく、私が良いことを教えて差し上げようと思っているのに

……失礼じゃありませんこと?」

軽く立腹し、ウナは腰に手を置いて迫ってくる。階段に背を向けた状態で転んでいるため、逃げようにも逃げられない。階段はよく磨かれていたので、立ち上がろうとした拍子に手が滑ってしまう。

「い、良いことですか? お馬さんじゃなくて?」

「あら、お馬さんがそんなにお望み?」

私は、左右に首を振る。

「聞きましたわ。アンジェリカのことを」

「そうですね……でも、今度は必ず勝ちます!」

「いいえ、貴方は負けるわ。確実にね」

ウナにそう言われて、一気に打ちのめされた気分になった。

何なの? ウナはそんなことを言い私を探していたの? だが、彼女は更に続けた。

放課後になるのが、いつもより早く感じられた。曇った空は太陽を消して雨を降らせている。だから、夕暮れがせまっている気がしたのか。

「よし、頑張ろう！」

私は頬を叩いて体育館のドアを潜った。すると、歓声がドワツと私の耳を打ち振るわせた。び、びっくりした！ 私は応援客に圧倒された。体育館には、今までにないくらいの観客が集まっていた。一階から二階までいっぱいだ。私への応援を書いた垂れ幕を持っている人も居る。それに、先生や生徒、それに保護者の方まで応援に駆けつけてくれたみたい。皆は、私の応援に来ている。目頭が熱くなった私は、惹かれるように応援席の方へ歩いていく。

「頑張って必ず勝ってください！」

「うん！ ルル、ありがとう！」

「俺も応援してるからさ、頑張れよ！」

「コードネルもありがとう！」

「頑張るのですよ、護恋さん」

「はい、グロリアーナ先生！」

「護恋、必ず勝ってくれ！」

「はい、キャシアス様、必ず勝ちます！」

「護恋、特訓を思い出せ！」

「フェイ、分かってる！」

「おい」

フェイが手を出したので、私はそれにハイタッチした。

そして、箱の中から剣を一本選び取る。ヴィンセントが仏頂面でおちらを見ている。けどどしばらくすると見飽きたのか、彼は剣を選んだ後、デュエルのフィールドに入って行った。私もそれに続く。

コードネルは、規則委員の証である眼鏡と、ヘッドホンマイクを

かけて、きりりと前を向いた。

『賭けを確認します』

「私の賭けは、アンジェリカの眠りを覚ますことです」と、私。

「私の賭けは、護恋の永遠の眠りだ」

ヴィンセントが賭けを口にすると、ブーイングが起こった。ヴィンセントは眉をひそめながら、観客を睨んでいる。

『分かりました。護恋の賭けは、アンジェリカの眠りを覚ますこと。ヴィンセントの賭けは、護恋の永遠の眠りですね？』

コードネルは事務的に尋ねる。

私とヴィンセントは「はい」と返事した。

『今からヴィンセントVS護恋のデュエルを行います』

コードネルは片手を上げて高らかに宣言した。

『掟の神テュテュスの名の下にコードネルは審判の立会いを務めます』

分厚い決闘の書を開くと、どこからともなく風が吹き抜けて、ページが風に乗って素早くめくれていく。真ん中のページを開いたと同時に風は収まった。

『この審判の判断はこの決闘の書の判断にゆだねます。コードネルはテュテュスと規則委員の名の下に公平な判断をすることを誓います』

コードネルの言葉は、強い意志を持って体育館の中に木霊する。

『尚、掟に背くと神の意志により絶対的な賭けは実行されません。』

正々堂々と戦ってください』

そして、コードネルは、決闘七ヶ条をきびきびと読み上げた。

『これより、ヴィンセントVS護恋の一本勝負を行います！ ルールは分かっていると思いますが、先に剣が肌に触れたほうが負けです！』

コードネルは更に続ける。

『なお、この勝負はデュシャルではなくデュエルです！ 正々堂々と戦ってください！』

ヴィンセントと向かい合った私は、静かに剣を構える。

『では、始め!』

コードネルがサツと手を掲げた。

「やああああ!」

腹のそこから声を出して、私はヴィンセントに向かつていった。

踏み込みながら、剣を上段から振り下ろす。ヴィンセントは顔をしかめたまま、それをいとも簡単に打ち払う。ヴィンセントの表情がふっと曇った。

「……私の復讐は間違いなのだろうか?」

「今頃分かったの!?!」

私は、袈裟懸けに振り下ろす。

「違う! 間違いじゃない!」

それをヴィンセントの剣が、力ずくで払い上げる。そして、隙を見て私の胸を真横に打とうとした。だが私は、軽く飛んでその一撃から逃れた。

「絶対に間違いよ!」

私が間合いを詰めて切りかかると、ヴィンセントの剣がそれを受け止めた。ギリギリと剣がこすれあう。

「いいだろう! 間違いだと言うなら、勝って証明してみせる!

私の正義を証明するために私も全力で立ち向かう!」

「もちろん、そうするわよ!」

二つの剣が交差して、辺りに金属音がこだました。私とヴィンセントはたがいに後退し、距離を置く。そして、私はまた、斜め左右交互に剣を振り下ろしていく。

「アンジェリカはずっと一人だったのよ! なのに、ミルドレッドもヴィンセントもアンジェリカを苦しめて、ひどいよ! ライゼント伯爵は悪い人かもしれない! でも、アンジェリカは何も悪いことなんてしてないじゃない!」

無言になるヴィンセント。隙を見つけたと思った私は、剣を打ち払って、ヴィンセントの懐に飛び込んだ。

「それでも、私は勝つ！」

ヴィンセントがあっさり私の肩を打った。私はたたらを踏んで前に出てしまう。

『いいえ、貴方は負けるわ。確実にね』

ウナの声が脳裏に蘇ってきた。私の肩が激しく上下する。体育館の中はがっかりしたような声が広がっていった。

「私の勝ちだ！」

ヴィンセントの声が、体育館に大きくこだまする。

「まだよ！」

そう、まだだ。私は何故か動けたし、眠たくもなかった。体勢を立て直すと、観客がどよめいた。

「!?!」

ヴィンセントも驚いているが、すぐに私に迎え撃ってきた。

『普通に、戦ったのでは護恋は負けるわ。例えば麻痺薬が効かなくてもね』

ヴィンセントがこちらに踏み込もうとしたとき。

『だから、護恋。私が勝てる作戦を考えてあげたわ』

ヴィンセントは蹴躓けつまずいたように、前につんのめる。足元を見たヴィンセントは驚愕した。

「何だとっ!?! 靴ひもが!?!」

混乱したヴィンセントは、私と靴を激しく交互に見ている。いや、見るだけしかできないでいる。

先ほど、私がヴィンセントの懐に入ったときに、彼の体育館シューズの靴ひもを剣を使って解いたのだ。これが、ウナの作戦だった。

「やあああっ!」

間合いを詰めた私は、すぐにヴィンセントの肩を剣で打った。

「あ……!」

彼は驚いた表情のまま、うつぶせに倒れた。横たわったヴィンセントを、私は荒い息を吐きながら見下ろしている。つかの間の静寂を破ったのは、コードネルの声だった。

『この勝負、護恋の勝ちです!』

観客は一斉に歓声を上げた。

「やった、勝った……!」

「待って! 反則よ!」

ミルドレッドが声を張り上げて、審判のコードネルの前に立ちふさがる。辺りに、また緊張感が戻ってしまった。

第三十九話 最後の日

周りのどよめきを消すようにグロリアーナ先生が、声を大にした。

「ミルドレッド様。反則ではありませんのでご安心ください！」

「反則よ！ だってあんなの　！」

ミルドレッドは険しい顔つきで、私に指を突きつける。

ルルがルールブックをめくった。

「反則ではありません！ デュエルは相手を傷つけなければ良いのです。それに、自分自身の繰り出す技であれば許可されています！

もつとも、眠り薬を仕込むなんてことがあれば反則に違いありません！ けれど、相手の靴ひもを解いた程度なら反則とは言えません！ むしろそれは、勝つための作戦と言えるでしょう！」

ルルは、フンツと鼻で息を吐いた。

ミルドレッドは悔しそうに歯ぎしりして、「それでもよ！」と怒声を張りあげた。そして、ヴィンセントの方に歩いて来て、彼の剣を奪い取る。

「反則は反則よ！ 簡単なことよ！ ヴィンセントの方の剣に麻痺薬が塗られてなかった、それだけのこと！」

それには、皆は静まるしかなかった。ミルドレッドは気をよくしたのか、さらに、刀身を手で掴んで引いた。

「ほらね！」

だが、次の瞬間、ミルドレッドは「あ……れ……？」と言いながら、膝を付いた。そして、横に倒れこんでしまったのだった。ミルドレッドの持っていた剣が落ちてカランと音を立てた。それでも、体育館の中では、まだ理解できてない人が大勢いるようだ。

辺りが静まる中、コードネルが先に我に返った。コードネルはじわりと笑みを浮かべる。

『反則ではないようですね！ 決闘の書にも『問題なし』と書かれています！ それでは、本当に護恋の勝ちです！』

その瞬間、一斉に皆は歓声を上げて拍手した。そして、お祭り騒ぎになって喜びの声が混ざり合う。口笛が良い調子で吹き鳴らされる。先生たちは抱き合って喜んでいる。

でも、私はその中で一人取り残されていた。

「アンジェリカは……？」

「護恋！」

キャシアスが携帯を片手に駆けて来て、私の両手を取った。

「アンジェリカは目覚めたそうだよ！」

キャシアスが携帯を私に握らせた。私は恐る携帯を耳にあてがう。

「もしもし……」

『護恋ですか？』

「うん、アンジェリカは目覚めたんだよね？」

『はい。私のために戦ってくれて、本当にありがとう』

「アンジェリカ！ 良かった……！」

アンジェリカの声を聞いた途端、私は緊張の糸が切れて号泣してしまった。フェイとキャシアスも嬉しそうだ。

そして、何分か思い切り泣いた後のこと。

「おい」

私の前にヴィンセントが立ったので、私は袖で涙を拭いさった。

「何よ！ 私の勝ちなんだからね！」

「確かに。だけど、今回は『アンジェリカ様に嫌がらせをしない』なんていう賭けはなかったが」

「あつ！ そ、そういうええ！」

し、しまった！ いまさら、賭けを替えるわけにはいかないし。しかも、今度はヴィンセントには小細工は通じないかもしれない。どうしよう、またアンジェリカの身に何かあったら……。

ヴィンセントは私の困惑に気付いて笑った。

でも、それは嫌な笑みじゃなかった。なんていうか、吹っ切れたような笑み。

「冗談だ。これからは、アンジェリカ様に嫌がらせはしない」

「えっ！？ ほ、ホント！？」

信じられなくて瞬きを繰り返していた私だったけど、どうやら本当らしい。ヴィンセントは頷いて続けた。

「実は、アンジェリカ様が倒れた後に彼女の屋敷に行ってみただ」
「どうして……？」

「ライゼント伯爵を脅すためだよ。今までのことを謝ってもらおうと思っていた。でも、ライゼント伯爵は娘であるアンジェリカ様のことを全然気にもしてない様子だった。それどころか、アンジェリカ様のことを酷く罵っていたよ。娘とは思えない口調でね」

私のときと同じだ……。

「だから、私のしていたことは間違いだったんだとようやく気付いた。もちろん、ライゼント伯爵には償ってもらいたい。だけど、アンジェリカ様には酷いことをしたと後悔している。勝負で勝って、私の正義を証明しようと思ったが負けてしまったしな」

「ヴィンセント……」

私には、ヴィンセントが自分を嘲っているように見えた。

「だから、アンジェリカ様にはこれからはもう何もしないと約束する」

「うん、分かった！ ありがとう！」

私は、ヴィンセントと握手した。

再び、体育館の中が喜びの声で華やいだ。

後ろで、ミルドレッドが苦笑している。ミルドレッドもただ、ヴィンセントに賛同していただけだから、アンジェリカをいじめる理由がなくなったわけだ。

それって、万々歳なんじゃない？

私は、やる気を出して立ち上がった。フェイの方を振り向く。

「よし！ じゃあ、フェイ勝負して！ 三日間じゃなくて、一年間の賭けでもいいよ！」

「どうしてそうなる？」

フェイが面白そうに笑っている。私はふんぞり返った。

「私は、麻痺薬が全然効かない体質なのよ！ きつと耐性が出来たのよ！ だから、私は無敵なのよ！ あーははははっ！」

こつんと、デュエルの剣の刀身が頭に当たった。

「あ……れ……？」

私は、ボタンと倒れてしまった。な、なんで〜！？ 剣を持ったフェイが、私の体を転がして仰向けにした。そして、私の前にしゃがんだ。

「どこがだ？」

フェイがフツと笑った。

うつつ。どうして！？ ヴィンセントのときは麻痺薬が効かなかったのに！ 私は目をウルウルさせて訴える。フェイはにやりと意地悪く笑う。

「言っておくが、さっきのが、一年間の賭けだ。お前は一年間俺の為に働くんだ。分かったな？」

何ですよ！ こんな不意打ちなんてナシ！

そう言おうとしたが、痺れて無理だった。

でも、一年間もここに居られないよ。だって、私はもう日本に帰らないといけないから。

フェイは、皆と一緒に笑っている。

でも、フェイも私が日本に帰らなければならぬ事を知っているせいか、どこことなく寂しげに見えた。

私は、急に寂しくなった。

胸が締め付けられたような気がしたのよ……。

第四十話 突然の告白

しばらくすると痺れが薄れてきて、私はよろけながらも上体を起こした。体育館の中は応援客が大体帰って閑散としている。

「護恋、大丈夫か？」

「上手くいきましたわね。やはり、私の作戦勝ちですわ！」

「さすが、ウナ様だぜ！」

応援に来ていたらしいギルバートとウナが傍で嬉しそうに手を叩き合っている。

「護恋？」

俯いている私の顔を、ウナが不思議そうに覗き込む。ギルバートも眉をひそめている。傍で、理由を知るフェイが私を見つめていた。雨が降っているせいか気温が下がってきた。私の気分も冷えて、どんよりと落ち込みそう……。

でも、いつまでも俯いているわけにもいかない。決心して、私は顔を上げた。

「皆には黙っていたけど……私ね。日本に、帰らないといけないんだ」

体育館の中が静かになったせいでも外の雨音がはつきりと聞こえる。「護恋さん、どういうことですか？」と、グロリアーナ先生が静かに尋ねた。

「実は、ですね」

私は、神風総理に逆らってアンジェリカのデュエルをしたことを告白した。そして、そのために日本に帰らなければならないことも。

「だから、短い間だったけど……皆、ありがと……」

フェイにルル、ギルバート、ウナ、コードネル、それにグロリアーナ先生に、お世話になった皆。全員顔をみると目頭が熱くなってきた。

や、ヤバイ。涙が出そ……！

私はすつくと立ち上がって、大股に立ち去ろうとした。向こうから歩いてきたキャシアスとすれ違おうとしたとき、彼が私の手を掴んだ。

「!？」

そのまま振り切って行こうとしたが、手を掴まれているため身体がキャシアスの方に戻る。

「護恋、待つて」

私の両目から大粒の涙が……ボロボロと、こぼれ落ちていく。私は、慌てて片方の手で涙を拭った。キャシアスへ視線を戻すと、何故か彼は晴れやかな笑みを浮かべていた。

「護恋、日本に帰らなくてよくなったよ」

「ほ、本当ですか？」

キャシアスは携帯を私に手渡した。何なの？

「出て」

「も、もしもし……」

恐る恐る携帯に耳を傾ける。

『花咲さんですか？ 勝ったんですってね、おめでとうございます』
それは、神風総理の明るい声だった。私は驚いて瞬きをくりかえした。

「あ、ありがとうございます……」

前と全然声の調子が違うや……。私の涙が自然と止まった。

『それで、花咲さんを日本に帰そうと思っていたのですが、事情が変わりました』

「え……？」

私は、周りを見渡す。皆、私に注目している。

『イースティアの国王様が、花咲さんにもう暫くイースティアに居てほしいそうです。なので、もう少しそちらで頑張ってください』
「は、はい……」

皆とお別れしなくて良いんだ……！

心に晴れ間がさしたような気がした。自然と背筋がのびる。

『では……』

「ま、待ってください!」

『……何でしょうか?』

「私の携帯、日本と通じないんです! 家族と話したいのに……何とかありませんか?」

総理が、かすかに笑った。

『そうですか、ではこちらで携帯を用意しましょう。デザインはこちらで選んでも構いませんね?』

「は、はい! 通じるならなんだって良いです!」

『それから、花咲さんが異世界にいることは秘密にしておいてください』

「えっ、どういうことですか?」

『異世界に行けるということになったのは日本の重要機密です。花咲さんはイギリスにいますということになってますので、話を合わせてくださいね』

「は、はあ……もし、言ったら」

『そのときは、日本に帰って来れなくなりますので、そのつもりで私は息を飲んだ。総理は笑いながら言っているが、最後のは脅しだろう。』

「わ、分かりました……」

『これからも、色々と頑張ってください。応援しますよ。では、失礼しますね』

「はい、失礼します……」

私は、携帯を切って嘆息した。まだ、胸の動悸ドキが収まらない。「護恋? 神風総理はなんと仰ったんだい?」

浮かない私の顔色を見て、キャシアスや周りの皆が不安そうにしている。

「あ、あのね、まだ日本に帰らなくて良いって!」

私が、じんわりと笑みを浮かべると、皆から歓声があがった。

「なら、もう少し喜ぶんだな。まったく人騒がせな奴だ」

フェイがキャシアスの横で嘆息している。でもそう言いながらも喜んでくれているみたいだけれど。

「うん、ゴメンね」

段々と私も嬉しくなってくる。皆とお別れしなくていいし、家族とも話せるんだし、まあいいか！

「良かったね、護恋」

キャシアスがにこにこしている。

「うん、良かったです！ ありがとうございます！」

私はつられて笑顔になった。

「でも、何で私にここまで良くしてくれるんですか？」

私は、さりげなく尋ねたが、キャシアスの顔から笑みが消えた。

「それは……」

キャシアスが一瞬、戸惑った。そして、ひたりと私の目を見つめる。

「それは、私が護恋のことを好きだからだよ」

「え……？」

一瞬何を言われたのか分からず、口もとで笑みが固まった。

そして、キャシアスは私の前に跪く。

「私と付き合ってくれませんか」

キャシアスは私の手の甲にキスを落とした。雨粒が体育館の屋根を激しく叩いている。そして、まだ残っていた女の子達の泣く声が辺りに響いた。

私は戸惑って辺りを見回した。目を見開いたままのフェイが、こちらを見て立ちつくしている。それが鮮明に目に残った。

「え……」

めまいを覚えて、私はくらりとたじろいだ。

キャシアスはなんて言ったの？ 私を好き……？

頭の片隅でアンジェリカの泣き顔がよぎる。

アンジェリカを泣かせる者は許せないと思っていた。まさか、そ

れが自分だなんて。

そんなの、そんなの嫌だよ……！

その頃、日本に居た神風総理は私との通話を終えて、執務室の椅子に背をもたれていたらしい。

「そうですか、キャシアス様が」

政府のお偉いさんが、ソファに腰掛けたまま嬉しそうに頷く。

「花咲護恋さん、あの子は色々とこれから日本の役に立ちそうですよ。例えば、キャシアス様と護恋さんがご結婚すれば、イースティアは日本をもっと重要視してくれるかもしれないね」

お偉いさん達は楽しそうに笑っていたそうだ。

そんなことも露知らず、私は。

「返事を聞かせて欲しい。私と付き合ってくれるね？」

「……っ。お、お断りします」

私は、そんな返答を口にしていた。体育館のどよめきは当分消えそうもなかった。

第四十一話 キャシアスの気持ち

「私では不満かい？」

キャシアスは私の答えに戸惑っている。

「そうじゃありません！ アンジェリカは？ アンジェリカはどうなるんですか！？」

「私はアンジェリカを好きだと言った覚えはないよ。悪いけれど、アンジェリカとは付き合えない」

「そんな……！ 私だって、キャシアス様とは……ど、どうか、アンジェリカと付き合ってください！」

やれやれと、キャシアスは嘆息した。

「では、デュエルで賭けをしないか？」

「えっ……？」

「私が勝てば、護恋は私と交際する。私が負ければ、私はアンジェリカと……これで、どうだろう？」

こんなときまで賭け事……？

「キャシアス様、その賭けはアンジェリカ様の合意がないと出来ないのでは？」と、フェイ。

「いや、私が『一方的に』アンジェリカと付き合うのだから、賭けは成立する……そうだろう、コードネル」

キャシアスにいきなり指名されたコードネルは戸惑いながらも首肯する。

「は、はい、確かにその通りです！」

賭けが成立すると言っても、私はアンジェリカを賭けの道具にしたくなかった。

でも、私が勝てば……アンジェリカはキャシアスと結ばれる。

何より、アンジェリカはこのことを知らないし。

それに、フェイ以外なら勝てるかもしれない。

「分かりました……！ その勝負受けます！ でも、デュエルの相

手はフェイ以外にしてください！」

「……フェイ以外ならなんだって良いんだね？」

「はい！」

「いいよ。こちらから指名しよう　ヴィンセント」

「あっ……！」

私はしまったと顔を苦くした。

「お呼びでしょうか、キャシアス様」

「フェイの代わりに戦ってくれるね？」

「ええ、もちろんです」

すつと目を細めて、ヴィンセントは私を見る。キャシアスの表情はすでに勝つことを悟っているかのよう。

そうだった……ヴィンセントが居たんだった。戦ったばかりなのに失念してるだなんてどうかしてる。きつと、勝ったから安心しちやっただ。どうしよう……私、ヴィンセントには勝てないかもしれない。彼には小細工してやっとな勝てたのに……！

「フェイ以外と言ったから、これで良いはずだよね？」

「で、でも……」

「でも？　フェイ以外ならなんだって良いって言ったよね？」

私の曖昧な笑みは、キャシアスの台詞にかき消された。私は顔を険しくした。

「わ、分かったわよ！」

フェイ以外と言っちゃったのはしょうがない。それでも、フェイよりは勝ち目があるはずよ。

『今からヴィンセントVS護恋のデュエルを行います』

ルルは手を上げて高らかに宣言した。

『掟の神テュテュスの名の下にルルは審判の立会いを務めます』

彼女が決闘の書を開くと、風が舞い、ページをめくって吹き抜けていく。

『この審判の判断はこの決闘の書の判断にゆだねます。ルルはテュテュスと規則委員の名の下に公平な判断をすることを誓います』

決闘の書が真ん中のページで開いて、落ち着いた。

ルルが、決闘七ヶ条を厳しい表情で読み上げた。

『尚、掟に背くと神の意志により絶対的な賭けは実行されません。

正々堂々と戦ってください』

私とヴィンセントは「はい」と返事した。

そして、ルルが賭けの確認をして、再び私とヴィンセントは「はい」と、返事した。

『これより、ヴィンセントVS護恋の一本勝負を行います！ ルールは分かっていると思いますが、先に剣が肌に触れたほうが負けです！』

ルルの審判の音が響く。

『では、始め！』

私は声を上げて、ヴィンセントに向かって行った。でも、応援席はお通夜みたいに静まりかえっている。女の子達にしてみれば、キヤシアスが私に告白したことが相当なショックだったんだろう。

でも、私はキヤシアスとなんて考えられないよ。アンジェリカを裏切ることなんてできないし、私はキヤシアスを友達としか思っていない。

私が、剣を斜めに振り下ろすと、ヴィンセントが身体を捻ってそれを打ち払った。

「一つ聞く！」

また、ヴィンセントは私に話しかけた。

「何よ！」

彼の余裕が話せるぐらいあることが、腹立たしい。

私はヴィンセントの刀身を払って横に薙いだ。ヴィンセントが後ろに飛ぶ。

「護恋はアンジェリカ様のことを言っていたが！ アンジェリカ様はキヤシアス様に惚れていらっしやるのか!？」

「そうよ！」

私がそう言いながら踏み込んで、剣を振り下ろそうとした。ヴィン

ンセントはふつと力を抜いたように見えた。

えっ！？ 何なの？

私がそう思っている間に、私の剣はヴィンセントの剣を、彼の手から外に跳ね飛ばしていた。剣がカランと地面に転がる。

『そこまでです！ この勝負、護恋の勝ちです！』

また、辺りが騒がしくなった。明らかに、これはヴィンセントの実力ではないことが皆の目にも明らかだったようだ。

「ど、どうということ!?!」

戸惑っている私の前を、ヴィンセントが目を伏せたまま通り過ぎる。

「そうだ、わざと負けたな!?!」

声を荒げて、キャシアスはヴィンセントを追いかける。しかし、ヴィンセントはどこまでもマイペースだ。そして、デュエルの剣を拾い上げた。

「人聞きの悪いことを言わないでください。あれは、私の実力です」
キャシアスの声に逆らわず、ヴィンセントは柔らかくいなした。

キャシアスは納得し辛そうに眉を歪めている。

「一つ言うなら、私はアンジェリカ様の味方であるということです。
アンジェリカ様に不利なことは、もう致しません」

ヴィンセントの本当の笑みを初めて見たような気がした。

「あ、ありがとう、ヴィンセント!」

私の声には彼はすつと無視して立ち去ってしまったけれど、私は嬉しい気持ちでいっぱいになった。

すぐに、私はキャシアスのところに駆け寄り、彼に笑いかける。

「キャシアス様！ 私が勝ちましたから、これでアンジェリカとキャシアス様は結ばれましたね!」

キャシアスは面白くなさそうに嘆息した。

「ああ、分かっているよ。この賭けには誰も逆らえない事を知っているだろう?」

うわ言のように、キャシアスはつぶやく。

私は嬉しくなって、調子に乗った。

「それから、キャシアス様！ アンジェリカのことを好きになって！」

「それは、賭けに含まれていないことだよ、護恋」

今度こそはと、キャシアスは私を睨んだ。

「でも」

「護恋はひどい子だな。でも、アンジェリカのことを好きでもないのに交際する私も相当ひどいけれど」

キャシアスがクツと自嘲した。

「そんな」

キャシアスがアンジェリカを好きになるという賭けを入れるべきだったかと、私は後悔していた。だけど、人の思いを賭けで操作させることなんてしたくないよ……。

私が、自分の足の先を見ていると、細くて長い手が伸びてきて、私の顎を一本の指で上げさせた。それは、キャシアスの手だった。

「それでも、私の思いは護恋のところにあることを忘れないで」

切なそうなキャシアスの顔を見て、罪悪感が募っていく。そして、キャシアスの伸びていた手は持ち主のところに戻っていった。

私は、取り残されたように立ちつくしていた。顔を上げさせられた状態で見えた景色を、仕方なく眺める。私に警告するように心臓の音が鳴っている。

「キャシアス様、お車のお迎えのお時間です」

フェイの静かな声。

「分かった、フェイ。行こうか」

キャシアスが歩みを進める。フェイは私の方をじっと見ていた。だが、それもつかの間。すぐに目が伏せられ、軽やかに黒髪が流れる。そして、彼はそのまま歩き出した。

私は、とてつもない居心地の悪さを感じていた。

グインセントに勝つことはできたけれど、アンジェリカに知られちゃいけないよね。こんなこと……。

これから先、アンジェリカの顔を……瞳を直視できるだろうか？
こんな思い抱え込みたくないよ……！

第四十一話 キャシアスの気持ち（後書き）

ここまでで、一章は終わりです。次回から二章目に入ります。

ここまで読んでくださってありがとうございます^^次回からもまた読んでくださると嬉しいです。

これからも頑張ってますのでよろしく願います^^感想や批評などあれば、よろしく願います。

第一話 序章

それは、あっけない終わりだった。

狭い室内には、デュエル専用のフィールドが設けられている。

男は半ば呆然として、その場にひざをついた。そのままうつぶせに倒れる。男の手からデュエルの剣が滑り、落ちて地面に跳ね返った。その剣は鈍い音を立てながら転がり、デュエルを見ていた女の足元で止まった。

「私の勝ちね」

女はニツと唇を歪ませた。手駒の主は何も言えずに押し黙っている。腕を組んだまま愉快そうに、女はゆっくりと相手の主の周りを歩いていた。

「賭けは絶対よ。負けたことを後悔することね」

その時、駆け寄ってきた従者が女の前でひざまずいた。

「お嬢様、朗報です」

「何事」

「お耳をお貸しください」

従者は女に耳打ちする。途端に、女の口もとに笑みが零れた。

「準備は整ったようね。もうすぐよ。もうすぐ!」

悦に入った女は、気持ち良さそうに声を立てて笑っていた。

その頃、私こと花咲護恋は、はなさきこれん学生寮の自室でテレビを見ていた。こっちのニュースっていえば、競技場ハルシオンの賭けで何が勝つて負けたのかばかりよ。ウエストランドの悪口を普通にアナウンサーが言っているから驚いた。戦争のしこりは、まだまだ残っているみたい。

『ニュースが入ってきました!』

女のアナウンサーは、さっきまで笑っていた。だけど、一気に顔が強張った。

『競技場ハルシオンでイースティアが負けて、ついにあのウエストランド最強とうたわれたデュエリスト、マックスが十五年間の眠りから目覚めました！ これは、イースティアの危機と言っても良いのではないでしょうか！』

私は、画面を食い入るよう見つめた。

「ウエストランドの最強のデュエリスト？」

そういえば、前にルルが言ってたっけ。ウエストランドの最強のデュエリストがデュエルに負けて眠らされているって。マックスっていうのかあ。へー。眠らされていて可哀想な気もするけど、私はイースティア側だから目覚めてよかったと喜べない複雑なところね。『速報です！』

一転してアナウンサーに笑みが戻った。

『マックスは競技場ハルシオンでは暫く戦わないと宣言しました！』
「な〜んだ、戦わないのね。だとしたら、イースティアはまだまだ平和よね」

私は、安心して暢気に笑った。

「だけど、このニュースが私達に大きく影響してくるなんてことは、このときは知るよしもなかったのよ。」

その後も、ニュースは続いている。あるお偉いさんがデュエルに負けて操られたらしい。そのせいで、政治の方向性が危うくなっているってアナウンサーが話している。デュエルで負けて操られるって、そんなのありなの？ 改めて思っけれど、デュエルの絶対的な賭けって怖いよなあ。

「あ、もうこんな時間か」

私は、テレビのスイッチを切って、寝る支度を始めた。

第一話 序章（後書き）

二章開始しました。またお付き合いくださればと思います。頑張り
ますので、よろしくお願いします。

第二話 フェイの助け

あれから、三日が経過すると、アンジェリカは学園に登校するようになった。キャシアスから付き合おうと言われたアンジェリカはとても喜んだみたいだ。

最初は、私に賭けの取り消しをかけて挑んできた女の子達だったけれど、キャシアスとアンジェリカの並んだ姿を目の当たりにしたら、認めざるを得なかったらしい。

だってね、二人はすごく絵になっていたの。眉目秀麗なキャシアスと清楚可憐なアンジェリカ。この二人に敵うカップルなんて見たことがないくらい。しかも、アンジェリカは伯爵令嬢だから、王子のキャシアスと釣り合うというわけよ。

でも、一つ心配なことがあった。よりによって、キャシアスが私に愛の告白をしたと言うことよ。それでも、周りはだれもアンジェリカにそのことを言わなかったらしいので、私は安心してた。だから、私から言うことはないと思って、アンジェリカには黙っていたわ。そのうちに、キャシアスはアンジェリカに心変わりするはずよと気楽に考えていた。

。 。
だけど、けどね。

「んまいつ！ この味付けよくできてるなあ！」

私は学生食堂の席に座っていた。ブリオツシュとコーンスープを交互に口に運んでいると、フェイがあくびを浮かべて歩いてきた。

「フェイ、おはよー！」

「早いな……」

「だってー、アンジェリカの出迎えに行かなきゃだもん」

最後の一口を胃に流して、私は席を立つ。フェイは眠いのかよた

よたしながら、ルッコラのサラダなんかをトレイに乗せている。その横から私が食器をカウンターに戻した。

「お先っ！」

私は、リュックサックを肩に引っ掛けて、ポニーテールを揺らしながら外に駆け出した。アンジェリカが到着するまでまだ時間がある。腕時計は七時十五分を示している。

朝でも大分寒くなくなってきた。朝の爽やかな風を受けた並木の葉が心地良さそうに揺れている。鼻歌と共に歩きながら、私は携帯で姉ちゃんにメールを打っていた。ピンク色の携帯を神凧総理が送ってくれたのは三日前のこと。私は、姉ちゃんと兄ちゃんにメールをして心の隙間を埋めていた。色々と相談にも乗ってもらった。

デュエルのことを話したら笑っていたけど。イギリスには変な風習があるのねって。変な風習ってイギリスに申し訳ないよ。だってここは、イースティアだから。でも、ここがイースティアだということは、家族や日本の友達には隠さないとイケない。それは、神凧総理と私の約束。

キャシアスとアンジェリカと私の三角関係をそれとなく、姉ちゃんに相談したら、

『キャシアスと付き合って、私を金持ちにして！』

という御達しが来た。そう、私の家は貧乏だから……。

でもね、姉ちゃんそれは出来ないんだよ。アンジェリカと私は友達だから裏切れない。

『アンジェリカと私は友達』と思ったところで、私の顔はにやっていた。

「アンジェリカと友達かあ。その上、私はアンジェリカの手駒だし『手駒』とは、位の高い身分の人が自分の代わりに剣で戦わせる駒のことよ。だから、強い手駒を持つと戦いが有利になるってわけ。そして、この戦いのことを『デュエル』。そして、デュエルで戦う人のことを総称して『デュエリスト』っていうの。」

ふんふんふーんと再び自作の鼻歌が出る。全て絶好調だった。

その時、不自然な音でさわりと、葉がささめいた。

「えっ……？」

私は、後ろを振り返った。

その木の音と一緒に甲高い不協和音が流れてきたからだ。聞き取れないけど、誰かが泣いている。それは、断片的にうわがりの調子で途切れている。そして、誰かが怒鳴っている。

「なんだろう？」

腕時計を再び確認する。まだ、七時二十分だ。時間は少し余っている。

私は、興味本位でそちらに歩き出した。すぐに声は大きくなってくる。

「やめてください……！ お金はありませんから……！」

体育館の裏からだった。誰かがかすれた声を出している。

「うるせえ！ おとなしく出しゃいいんだ！」

ドカツと、体育館の壁を蹴る音が響く。途端に私の正義感が爆発した。

「何やってんのよ！」

私が体育館の壁を叩くと、不良二人とか弱そうな男の子がこちらを振り返った。見るからに不良の二人は、ニヤニヤと嫌な笑いを浮かべる。見たことのない制服ね。ブレザーにチェックのズボンだ。

この学園の人じゃないのかな。彼らは肩を揺らしながら私に近づいてきた。

「あれえ、お姉ちゃん？ 僕達に何の用ですかあ？」

「何やってるのって聞いているの！ 弱い者いじめは……」

って、あ、あれ？ いつの間にか、か弱そうな男の子は十メートルぐらい先を走っている。に、逃げ足だけは速いのね。

「せっかくだから、俺たちと良いことしよつか？」

私のポニーテールを不良が触る。気持ち悪くなって、私はドンと突き飛ばした。不良はよろけてたたらを踏んだ。

「いい加減にしなさいよ！ 誰があんたらなんかと」

「いい加減にするのはそつちじゃねえの？」

不良二人はニタニタと笑っている。私は不良に押されて転んだ。そして、体育館の壁にもたれかけさせられた。リュックサックが押さえつけられて背中が潰れるような音を立てる。私の手から携帯が落ちた。私の大事な携帯が！

それよりも、私はピンチだ。私は泣きそうになっていた。

誰か！ 誰か、助けて！

その時、風が吹き抜けた。

黒髪がサアツと風に舞い、長い足が不良の腹に吸い込まれていった。不良の一人は吹っ飛んで壁にバウンドした。

それは、フェイだった。

不良のもう一人は、突きを食らわそうとした。しかし、フェイはそれを全て交わして、男に蹴りを食らわした。男はすぐに倒れて動けなくなる。

こんなに動いても、フェイは全然息を切らしてない。やっぱり、フェイは強い……！

「キャシアス様の大事な想い人に手を出そうとしたんだ。お前らは、停学だけではすまないと思え」

そして、フェイは自分のブレザーの襟を整えて、ほこりを払う。

そして、彼は不機嫌そうな顔でこちらを睨んだ。

私の心臓が、跳ね上がった。

第三話 三角関係

そのままこちらに歩いてきたフェイは、私の目前でしゃがんだ。そして、私のすりむけた足を見つけると、更に目つきを険しくした。「おい！ 不良に喧嘩を売るとは……お前は、自分が女だと言うことを分かってないのか!？」

怒鳴られてしまい、私は思わず目を閉じた。

「ご、ごめん」

気落ちしたままフェイを見つめると、彼は嘆息した。携帯を拾い上げたフェイは、私のリュックの中にそれを仕舞った。フェイの長い腕が伸びてきて、何をされるんだろうと身を硬くする。動揺している私に気付いていないのか、フェイは私を抱えて、立ち上がった。そして、私を抱えたままどこかへ向かって歩き出した。

「えっ!？ ちょっと！ 降ろしてよ〜！」

「足を怪我しているだろうが！ 黙ってるー！」

「あう……」

朝早いせいで人が居ないのがせめてもの救いよね。私は居心地の悪さを感じて、フェイの横顔を眺める。フェイの腕は力強かった。フェイを目の前にすると、私はちっばけな存在だと自覚してしまう。自分がただの女の子なんだということも。

着いた先は保健室だった。フェイは器用に足を使ってドアを開けた。薬の臭いが充満している。保健のジェイデイ先生は居ないみたいだ。フェイは私を椅子の上に降ろした。

「あ、ありがとう」

居心地の悪い空気を打ち破るように、私はから笑いする。リュックを降ろして、椅子の横に立てかけた。

「あつ、そうだ、アンジェリカにメールしないと」

「俺が、キャシアス様にご連絡しておくから、お前は座っている」
フェイは、私の見たことのない紺の携帯をポケットから出した。

「フェイ、携帯買ったの？ 見せて、どんなの？」

立ち上がると、フェイの目が鈍く光った。私は、ウツと声を詰まらせた。

「座ってる」

「う、うん」

仕方なく、ちょこんと椅子に座る。フェイは窓際に立ち、携帯を開いて、電話をかけ始めた。私はくるくる横に回りそうな椅子をフェイの方に向ける。

「……キャシアス様でいらっしやいますか？ お迎えに行けず申し訳ありません。実は、護恋様が」

「ご、護恋様！？」

ギョツとして私はフェイを見つめた。フェイは、こっちを見ていたけど、また背を向けて窓の外を眺める。

「はい、私が護恋様をお助けしましたので、問題はないかと」

やっぱり、聞き間違いじゃない。目を瞬いて、私はフェイの背中を見つめた。

「はい、はい。かしこまりました」

携帯を切った音がした。フェイは携帯を胸のポケットにしまうと、こちらに歩いてきた。ぽかんとした顔で私がフェイを見つめていると、彼は不機嫌そうに「何だ？」と聞いた。

「ね、ねえ、護恋様って何？ なんか、ものすごく痒いんですけど！」

「キャシアス様がお好きなのがお前なんだから、キャシアス様の前で呼び捨てにはできないだろうが」

フェイはむすつとして言った。

私が吹き出すと、フェイは更に不機嫌になる。しかも、それでは気が治まらなかつたのか、私の頭を小突いてきた。

「いったあ！ 良いの！？ 私にそんなことして！？」

「構わない。キャシアス様はご覧になってない」

「あのねえ、フェイ。くれぐれも、アンジェリカとキャシアス様が

居る前では護恋様なんて言わないですよ？ 理由を知ってアンジェリカが傷ついたら可哀想じゃん……」

「分かっている。だけど、お前は相当酷い奴だな」

「なんでよ！ 私はしっかりとお断りしたわよ！ これで、キャシアス様とアンジェリカが両思いになれば言うことがないでしょ？」

「まあ、そうだがな……」

ふと、私の足にフェイの目が留まった。自分の足を見ると、擦り剥けていて、傷口から血がにじんでいた。

「仕方ないから足の消毒をしてやる」

「べ、別にいいよ！」

拒んだのに、フェイは消毒液の乗っているワゴンを引っ張って来た。脱脂綿に消毒液をしみこませてから、私の足元に屈んだ。そして、私の患部に脱脂綿をあてがった。ズキズキと患部が脈打つ。

「いったあ……」

「我慢しろ」

フェイが脱脂綿を除ける。すると、消毒液が傷口で泡立っている。痛いわけだよ。フェイはその上から絆創膏を貼ってくれた。

「あ、ありがと！ なんだか、フェイ様様だね！」

「これからは、俺の方に足を向けて寝るな」

「あー！ フェイが調子に乗ったあ！」

フェイがやっと笑った。「冗談まで飛び出したので、私はやっと安心して一緒に笑った。」

「そっいえば、一年間の賭けがまだだったよな？」

更に調子に乗るフェイに、私は「げっ！」とうめいた。

「あれは、無効よ！ あんなのデュエルって言えないわよ！」

「だが、護恋は日本に帰らなくて済んだだろう？ 俺のお陰だ」

「なんでよ」

私は声を立てて笑った。

その時、廊下を走る音が聞こえて、がらりとドアが開く。

「護恋！ 大丈夫かい！？」

血相を変えたキャシアスが、保健室の中に飛び込んできた。

「キャシアス様、大丈夫です」と、私。

「足を擦りむいたと聞いたけど……」

キャシアスが心配そうにしている。

「手当てはしておきました」と、フェイはキャシアスに一礼する。

「そう、ならいいけど……それにしてもなんて野蛮な奴らなんだろう」

嘆くキャシアスを見ながら、私は曖昧な笑みを浮かべていた。遅れて保健室にアンジェリカが入ってきた。私はぎくりとしてキャシアスとアンジェリカを見つめる。

まさか、キャシアスはアンジェリカを放っておいて、ここまで駆けて来たのだろうか。

「お、おはよう、アンジェリカ……」

油の切れたロボットみたいになって、私はアンジェリカに挨拶した。でも、アンジェリカは、いつものようにふわっと笑って、「おはようございます、護恋」と挨拶してくれた。私の心臓は早鐘を打つ。私の気はなかなか休まりそうになかった。

第四話 予兆

特に保健室にいる必要もなかったのも、私達はそろそろと自分達の教室に向かっていた。

アンジェリカは私とキャシアスの事情については知らされていないようで、ずっといつもどおりだった。そのため、私はいくらか安心して、アンジェリカに話しかけることができたんだ。

「アンジェリカ、今日はお迎えにいけなくてごめんね」

「構いませんわ。護恋はくれぐれも、無茶をなさらないでくださいね？」

「う、うん！ フェイが助けてくれたから大丈夫だったよ」

アンジェリカがいつものように優しくだったので私は嬉しかった。

ふと、アンジェリカが左手の人差し指に絆創膏を巻いていることに気付いて、私は驚いた。

「アンジェリカ、それ、どうしたの？」

「料理をして少し切ってしまったのですわ。大したことがないので気になさらないでください」

「気をつけてね。アンジェリカは危なっかしくて心配だよ」

アンジェリカはくすくすと笑って「はい」と返事してくれた。

ふと、キャシアスが私の方を振り向いて微笑んだ。

「護恋」

「あ、あのね、アンジェリカ！ 今日、朝礼があるんだって」

キャシアスが私に話しかけたのを、私はつい無視してしまった。

「そうなのですか？」

アンジェリカが私とキャシアスの方を見て不思議そうにしている間が持たなかったが、ようやく一年Aクラスにたどり着くことができた。それで、私はやっと安堵したんだ。

「おはよー！」

教室に入り、私が挨拶すると、コードネルとルルが目を輝かせて

こちらに足早に歩いてきた。

「護恋さんっ！」

「護恋！」

ルルとコードネルが、酷く感動したように私の手を取る。愛の告白をされるんじゃないかと疑うぐらいの目の輝きようだよ。

「な、何かな？」

思わずたじろいだ私に迫ってくる、ルルとコードネルの二人。

「私達、今朝からグロリアーナ先生のお手伝いをしていたんですが、そこに連絡が入ってきたんです！」

「な、何の？」

「護恋、いじめられていた子を助けたんだって？ その子から、お礼の電話が職員室にかかって来たんだよ！ 俺、すっげー感動した！」

「私、護恋さんとクラスメイトなことを誇りに思います！」

「ええええ！？ 私は何もできてないよ！ 助けようと思ったけど、逆にフエイに助けられたし……それに、またあの子はいじめられるかもしれない……」

「護恋、心配しないでいい。私が、彼らに釘を刺しておいたから」

「流石、キャシアス様ですね！」と、コードネル。

「あ、ありがとうございます……キャシアス様」

私が頬を緩めると、キャシアスは「ん……」と言って嬉しそうに目を細めた。だけど、アンジェリカの視線に気付き、私はキャシアスからパツと目をそらしてしまった。

こんなときどうしたらいいのか分からないよ。

私の態度を見て、キャシアスは苦しそうにしていたが、ふうと息を吐き出した。

「一年前、まだ、私達が中等部に通っていた頃に、いじめられた子が自殺した事件があったね」

「えっ？ そんなことが……？」

つい、私はキャシアスの方に向いてしまう。そんな私を見て、キ

ヤシアスは苦笑いしている。

「そうですね、確かにありました。嫌な事件でしたね」と、アンジェリカ。キヤシアスはアンジェリカの言葉に神妙な面持ちで頷いた。

「ああ、もう、そんなことがあってはいけないと思っっているよ」

フェイが重苦しそうに息を吐いて後を繋ぐ。

「そんなこともございましたね……。事件の首謀者は逮捕されましたけれど、実は、私も事件に関わっております。フィネが亡くなったのは私のせいと言っても過言ではありません……」

「えっ!？」

私はフェイの言葉に耳を疑った。フェイはいつもどおり無表情だったが、どことなく元気がなさそうに見えた。

「私ね、フェイのことまだちょっとしか知らないけれど、フェイがそんなことをするはずないって知ってるよ」

私がフェイにそういうと、フェイはフツと笑って、私の頭をくしやくしやつと撫でた。

「なにすんのよー。髪が乱れたじゃない」

「たいして変わらない」

「ひっどー!」

私はフェイと笑いあっていた。

朝礼が始まるという校内放送を聴いて、私とフェイは他愛無いことを話しながら体育館に向かった。

その朝礼で私達はまた学園長に驚かされるのだけど。知らず知らずのうちに私達は事件に巻き込まれようとしていたのよ。

第五話 特別講師

あつという間に全校生徒が集まり、体育館の中はいっぱいになった。

初等部、中等部、高等部……ひゃー。朝礼はこれで二度目だけど、相変わらずすごい人数だよ。こんなに学園に人がいたのかわつてくらい。うう、人に酔いそう……。

アンジェリカはキャシアスの横にそつと並んでいる。そして、私とフェイは彼らの後ろに立った。

仲良く話しているアンジェリカとキャシアスを、生徒達がちらちらと羨望のまなざしで見ている。

私は誇らしかった。アンジェリカは私の友達なんだって、自慢したいくらいだよ。

マイクの調子が悪いのか、キーンという不快な音が鳴った。教頭先生らしき人が、マイクを片手に「あー、あつあつ」とマイクのテストをしている。「うおほん！」と咳払いまでマイクに乗った。

生徒達は教頭先生が面白くてくすくすと笑っている。私も釣られて笑ってしまった。

「えー、朝礼を始めます！」

その先生は横にはけて、代わりに、学園長が壇に上がった。

うちの学園は王立だから、学園長はなんとイースティアの国王様なんだよ。だから、皆は敬意を示して頭を垂れている。私もそれにならった。

「頭を上げて楽しんでください」

学園長の穏やかな声がした。そろそろと顔を元の位置に戻して、私達は学園長に注目した。

学園長は、中年だけど美形だ。キャシアスが老けたらああなるんじゃないのかな。

「ねえ、フェイ」

「なんだ？」

「また、学園長が厄介なこと持ち込んだりして」

「冗談のつもりだった。」

「まさか、学園長に限って」

フェイが一笑して、私の話を流そうとした。でもね、学園長は緑の瞳をにっこりと歪ませたの。

そのとき、初めて冗談が本当になるような嫌な予感がしたんだ。

『今日から、教育実習生の方に来ていただきました。皆さん、どうぞ』

壇上にはずらりと十人くらいの先生の卵が並んだ。彼らはやる気満々なのが顔に表れている。

『この方たちは、イースティアの教育実習生の方達です。これから授業に入っていただきます』

私は、胸を撫で下ろしていた。なーんだ、気のせいだったのね。でも、まだこれには続きがあった。

『あと、特別講師の方にも来ていただきました。どうぞ……』

一人の男の先生が壇に上がり学園長の横に並んだ。

「なっ!？」

フェイが驚愕をあらわにしている。私はいぶかしんで、その先生を更に注視した。

彼は、ミルドレッドのような赤い瞳を持っている。背が高く、すらつとしている。人の良さそうな温厚な顔立ちで、長い赤みのかかったつややかな髪の毛は、一つに束ねられて肩にかけられてあった。

「んー、どこかで見たことがあるような……?」

明らかに初対面であるけれど、何故かそう思った。

私の台詞にイラついたのか、フェイがこつちを勢いよく振り返った。

「どこかでじゃない! あいつは、ウエストランドの最強のデュエリスト、マックスだ!」

「えっ！？ えええっ！？」

そうか、どこかで見たと思ったのはテレビでだ。

フェイの声が大きかったのもあるけど、生徒達のどよめきは止むことはなかった。

そりゃそうだろう。どうして、ウエストランドの最強のデュエリストが、何を間違っつてイースティアの特別講師なんかに来るんだろう？ そういえば、こないだニュースで十五年間の眠りから目覚めたって言っていたけど。

私が、学園長に目を戻すと、彼は私達の反応を見て喜んでいうだった。

「なんか……学園長楽しんでない……？」

「ああ……ものすごく、楽しんでいらっしやるように見える」

フェイも私と同感だったようだ。横で頷いている。

「父上……」

キャシアスは嘆息して額を押さえてしまった。キャシアスの気持ちには痛いほど分かる。また厄介なことになりそうな予感が私もしたからよ。

『静粛に。皆さんが動揺するのは良く分かります。でも、私はイースティアとウエストランドの垣根を作つて欲しくない。ウエストランド最強とうたわれたマックス君に学ぶこともたくさんあると思います。皆さんが、イースティア最強のデュエリストになるための肥やしとして、よく学んでください』

この学園長の演説を聞いて全校生徒は納得してしまった。まるで、魔法のようね。学園長は口が上手いっていうか、やり手っていうか……。

今度は先生だから大丈夫だろうと、私は思っていたのよ。そう、思い込もうとしていた。

その後のことよ。私の知らない場所　職員室で、教育実習生や特別講師のマックスが、自己紹介をして先生方に拍手で迎えられていたみたい。

「マックスと申します。皆さん、よろしくお願いします」

でも、先生方にもアンチ・ウエストランド派は存在するようで、マックスの自己紹介のときに露骨に拍手をしない先生もいたようだ。国史のヒューゴ先生もその一人だ。

「私は学園長の考えが分かりませんよ。なんでウエストランドの方が特別講師として来るんですかね？」

ヒューゴ先生は隣にいる、剣技のサーヴェリー先生にぼそぼそと愚痴を零している。

「まったくだな、学園長の考えは理解できんよ」

サーヴェリー先生も疲れたように嘆息している。

いつの間にか目の前にマックスが立っていて、二人はぎくりと身を震わせた。そして、何事もなかったかのように二手に別れたのだが、マックスはヒューゴ先生の後を追った。

「ヒューゴ先生でしたよね……？」

「はい、そうです。マックス先生……少し、忙しいので」

「もしかして、次は、一年Aクラスの授業ですか？」

マックスはヒューゴ先生の持っている出席簿を見たようだ。

「そうですけど？」

ヒューゴ先生はつんけんどんに答えた。それにも意に介しないように、マックスはにんまりと笑った。

「私も一人で授業をやってみたいのです。代わっていただけませんか？」

「せっかくですけれど……」

ヒューゴ先生は断ろうと目を吊り上げて、マックスを仰いだ。マックスは赤い瞳でヒューゴ先生の黒真珠のような瞳を覗いていた。

途端に、ヒューゴ先生の目が力を失ってゆるりと流れた。

第六話 特別講師の授業

「次は国史の授業ね」

黒板の端にある、壁に貼られた時間割表を見て、机の上に国史のノートとテキストを出す。

「ねえ、マックスって十五年間も眠ったままだったんでしょ？」

隣の席にいるフェイに話しかけた。フェイは、「ああ」と頷いた。私は、うーんと唸る。

「どうした？」と、フェイ。

「あ、あのね？」

タイミング悪く、始業開始のベルが鳴った。皆は席に着き始める。誰かが教室に入ってきた。ヒューゴ先生だと思って、私は顔を正面に向けたの。でも、それはウエストランドの最強とうたわれた、デユエリストのマックスだった。

マックスは大きな資料と教科書を手に入ってきた。

「マックス！？」

「あれって、マックスよね！？」

教室の中のどよめきは最高潮になる。

「マックス……先生、ヒューゴ先生はどうされたんですか？」

規則委員であり学級委員でもあるコードネルが、皆を代表して尋ねた。

「授業を代わっていたきました」

マックスの一言で、生徒達は落ち着いた。マックスの笑顔は愛嬌がある。なので、私も普通に好感を持ったわ。

「何か質問がある人はいませんか？」

マックスがそう言ったので、また教室の中は騒がしくなった。手が複数上がる。しかし。

「……そうですね、護恋さん」

いきなり指名されたので、驚いた。もちろん、私は手など上げて

いない。マックスはこちらを見ている。間違いかと思い、自分を指差すとマックスは笑顔で頷いた。しかも、なんで初対面なのにマックスは私のこと知っているの？戸惑っていたけれど、私は「はい」と言って立ち上がる。ちょうど良いので、マックスに疑問をぶつけてみる。

「私の親戚に脳梗塞で倒れたおじさんがいるんですけど、一年間もベッドにいと、筋肉が固まって動けなくなって、とうとう寝たきりになってしまったんです」

「だから？」

「だから十五年間も眠っていたのに、マックス先生は普通に動いていらつしやるでしょ？本当に眠っていたのかなって思って……」

「賭けは絶対です。嘘はありません」

「えー、本当ですか？」

信じられなかった。

「この世界には絶対的に守られる賭けがあります。私の主が賭けをする時に、賭けの項目に入れていたのですよ。私が眠りから目覚めた時はちゃんと元通りに動けるって言う項目をね。それでも、発動しない賭けもありますけれど、治癒や治療の賭けはルールを守って勝てば、ちゃんと発動しますからね」

でも、私の頭の中は疑問で埋め尽くされていた。私は更に言葉を繋いだ。

「更に質問です！賭けは人物Aと人物Bの勝負の場合、AとBの主とAとB以外の人物に関係のない賭けは実行できない。関係のない賭けはすべて無効になると聞きましたが、それでは、マックス先生は関係のない賭けの部類に入っているのです、目覚めることはできなかつたと思いますけれど……？」

教科書を読みながら尋ねると、マックスは愛想の良い笑みを浮かべた。

「護恋さんはお勉強が足りませんね」

「す、すいません……」

つい頭を掻いてしまう。

「賭けで主Aの手駒Aが倒れてしまったとします。しかも何年間も眠らされてしまった。でも、この賭けを回避する方法が一つあります」

マックスは黒板に絵を書きながら説明する。マックスの背に、私は質問を投げかけた。

「賭けに勝つんですか？ でも、関係のない賭けは」

「主Aに関係のある賭けだと良いのです。主は手駒を無制限に持てるからです。主Aは手駒Aとは他の手駒Cで『手駒Aを目覚めさせる』という賭けをして戦って勝つ。すると、手駒Aは目覚めることができるというわけです」

マックスがやっところちを向いた。私の頭には疑問符が浮かんでいる。

「でもでも、主Aに関係のあるくくりでいうと、主Aの友達がいたとしますよね？ それも関係あるくくりになりませんか？」

私の質問に、マックスはまた絵を書いて説明する。

「いいえ、それは駄目です。あくまで、主Aとその主Aの手駒達に関する賭けでないといけません。もしくは、手駒Aとその手駒Aの主達」

「難しいんですね……賭けって……」

賭けについて色々教えてもらい、感心してしまった。

「そうですね。もう一つ言いますと、主Aに友達Dがいたとしますね。その友達Dは主Aや主Bその手駒達に関係がありませんが、友達Dが主Aと主Bの賭けに許可をしたとします。すると、友達Dも賭けに影響することができます」

「なるほど、良く分かりました」

ようやく納得して、私は椅子に座った。マックスはウエストランド最強のデュエリストだけあって良く知っているなあ。

「さて、疑問は解消したようですから、国史の授業に入りますね」
ほっとして、私は黒板に書かれているものをノートに写そうとし

た。

「護恋さん、六十ページを読んでください」

再び教室の中がざわめく。

隣にいるフェイがマックスを睨にらんでいる。

「……うえ？ は、はい」

また指名されて、私は戸惑いながらテキストをめくる。そして、テキストを読む。読んでいるうちに私語はなくなったが、それでも生徒達の目には不信感が募っている。時が過ぎ、やっと、指定された箇所を読み終えた。

「では、護恋さん」

「は、はい……？」

まただ。戸惑っている私へ、マックスは変わらない笑みを向ける。開いたテキスト片手に私のほうに歩いてきた。

第七話 集中攻撃

「この賭けの掟をつかさどる神を何とか答えてください」

「わ……分かりません」

私は硬直してしまった。もはや、何を質問されたのかすら頭に入っていない。

なんなの？　なんで、私ばかり当てるの？

マックスの警告するような赤い瞳が私を捉える。

「『テュテュス』です。掟の女神のことです。テュテュスは実際には居ませんが、この世界で絶対的に守られる賭けの不思議な神として、この世界ではあがめられています」

そう言って、マックスは教科書を一瞥して、再び私に視線を戻した。

「では、護恋さん、この絶対的な賭けの存在は何年頃から明るみになったでしょうか？」

「わ、分かりません」

何故か、マックスから視線をそらすことができない。マックスはにっこりと笑う。その笑みすら怖く思えて、私の心臓はドクンドクンと鳴り始めた。

「では、護恋さんだけ放課後、特別補習しましょうか」

私は、我慢ならなくて、思わず立ち上がって机を両手で叩いた。

「何で私ばかり当てるんですか!？」

怒鳴る声とは対照的に、先生に逆らうという緊張で私の視界はぐらついた。

「問題に答えられなかったでしょう？」

私のすぐ傍に立ち、マックスは私を見下ろして、薔薇の笑みを浮かべる。

フェイも怖いけれど、それとはまた違う。マックスは温厚に見えるけれど、何故かそぞろ怖い。しかも先生だということが私を恐怖

させた。もしかして、私はマックスに目を付けられているの……？
私の手が知らないうちにがたがたと震えていた。
そのとき、ガタンと音がした。前の席で立ち上がったキャシアス
に私は気付いた。

「どうして、護恋だけ集中攻撃するんだ！」
フェイまでそれに続くように立ち上がる。

「そのとおりです！ マックス、あんたは今は教師なんだろ！ ち
ゃんとやれ！」

味方が増えて、私の震えていた手が元に戻った。

「おや、貴方がキャシアス様ですね。私の授業が気に食わないと？」

「ああ、そうだ！」

「でしたら、学園長に言いつけますか？」

「そうさせてもらう！」

完全にキャシアスを侮っているようだ。キャシアスはますます顔を
険しくした。

フェイの傍に歩いてきて、マックスは笑んだままの目でフェイを
見る。

「それに、貴方がフェイですか。なるほど」

何でマックスは、キャシアスとフェイを知っているの？ キャシ
アスがこの国の跡継ぎ候補だから？ フェイが競技場ハルシオンの
三年連続のチャンピオンだから？

「おい、マックス」

フェイがマックスを呼び捨てにしたことで、マックスの顔が微妙
に強張った。

「マックス『先生』でしょう？」

「……何のために、ハルシオン学園に来たんだ？」

「何のために？ 先生をするためですよ」

マックスは愚問だといわんばかりだ。マックスの笑みが明らかに
フェイを侮っている。

授業の終わりのベルが鳴った。マックスはフェイから目をそらし、

教壇の方へ歩いていく。

「それでは、授業を終わりましたようか」

「起立、礼！」

ルルの声もどことなく怒っているように聞こえた。

「あ、ありがとうございます……」

生徒達の声は小さかった。戸惑っている人もいるみたい。やつぱり、こんな先生にお礼を言うのはためらっちゃうよね。私も、なんだか気分が悪かった。

意外だと思われるんだけど、私は先生に逆らったことだって、これが初めてだったのよ。私は頭が悪いんだけど、先生には好かれるんだ。なんで好かれるのかは分からないけど、いつの間にか友達みたいになって……。だから、私は先生の言うことなら「はい」って聞いていたけれど、マックスは駄目だ。彼には関わるなと私の第六感が言っている。

ルルの号令がかけられた後、マックスは教室を出て行くこととした。「ああ、アンジェリカさん、その資料を職員室に持ってきてくれますか？」

「はい」

アンジェリカはすつと立ち上がった。

また、ざわりと辺りに動揺が走った。

今度は、アンジェリカ！？ アンジェリカは先生の言われたとおり立ち上がって、黒板の前に立てかけられた資料を取りに行こうとしている。

アンジェリカは素直だし良い子だから分かる気がするけれど、マックスに近寄らせては彼女が危ない。

「アンジェリカ、持つて行くことなんてないよ！」

私はアンジェリカの前に回って、アンジェリカの手から資料を奪った。でも、アンジェリカはとがめるような目を向ける。アンジェリカらしくない。

「護恋、マックス先生はこちらに来てまだ日が浅いのです。上手く

行くことがなくてストレスがたまっているのかもしれない。護恋に八つ当たりしてしまったのは多分そういうことです。ですから、私達が手を差し伸べて差し上げましょう?」

アンジェリカはふんわりと私に向かって微笑んだ。やっぱり、アンジェリカはアンジェリカだった。彼女の背中に後光がさしているような気がしたよ。私は思わず感化されていた。

「アンジェリカは、やっぱり良い子だよ」

どうしてアンジェリカはこんな優しい子に育ったんだろう! 実は人間じゃなくて天使じゃないの?

衝動的に私は、アンジェリカを抱きしめていた。

「う、護恋……」

私は、感動して思わず出た涙を手で拭う。

「分かった! 私がアンジェリカに付き添うから資料を職員室に戻しに行こう!」

「はい」

アンジェリカはふんわりと微笑んだ。私もつられて笑みを浮かべる。だが、キャシアスは疲れた様子でふうと息を吐いた。

「……私は用があるから、フェイは護恋とアンジェリカに付き添って行ってくれ」

珍しく厳しい口調でキャシアスはフェイに言い渡した。

「はい、かしこまりました」

フェイはキャシアスに向かって一礼すると、私のところまで歩いて来て、資料を私の手から奪った。

「持ってやる」

「ありがとー。んんん?」

私はそう言いながら、廊下の窓まで足早に歩いてきて外を眺めた。「どうした?」

フェイが怪訝そうに私の方に駆け寄って窓の外を注視する。

「いやー、フェイが荷物を持ってくれるから、雨が降るのかなと思っ
てー」

私が清々しく笑うと、フェイはムツと口をへの字にした。そして、予告なく私のポニーテールを後ろに引っ張った。

「いたあ！」

「人の親切を……！ もういい、資料はお前が持て！」

「ああっ、嘘ですっ！ フェイ様ー！ 素敵っ！」

私がファンクラブの女の子のまねをしようと、フェイがプツと吹き出した。アンジェリカもくすくすと笑っている。

そうして、やっと和やかな空気が流れたんだ。

そんなとき、私達が教室を出て行った後で、キャシアスはそっと教室を抜け出していた。

第八話 アンジェリカの直感

私とアンジェリカは、談笑しながら職員室に向かっていた。フェイは後ろからゆっくりと付いて来ている。

廊下の開け放たれた窓から、涼しい風が入ってきて心地良い。アンジェリカの綿毛のような髪も、ふわりと風になびいている。

「アンジェリカ、また髪が伸びてきて良かったね」

「ええ、そうですね。髪はいつか伸びるものですから」

「アンジェリカの髪を二つにくくつたら何かに似てるって思ったんだけど……」

「何に似てますか？」

アンジェリカが不思議そうに首をかしげたので、ふわふわの髪が肩に触れた。

「あのね、トイプードルに似てるような気がするの！ ふわふわの髪だし、色もクリーム色だし」

「そ、そうですね？」

「アンジェリカは何に例えても可愛いよね〜！」

「護恋も充分可愛いですよ。ねえ、フェイ？」

何故か、アンジェリカはフェイを振り返って尋ねたの。

その質問に不意を突かれたフェイは、アンジェリカの次に私を見て、何か言いたそうに目を細めていた。

「何よ、その顔！ 言いたいことがあるなら、はっきり言いなさいよ！」

私の文句をすっかり無視したフェイは、難しい顔になった。

「申し訳ありません、アンジェリカ様。アンジェリカ様の質問にはそうですねとお答えしたいのですが……護恋は可愛い……ですか？」

逆にフェイに尋ね返されて、アンジェリカはフェイと一緒に私を見つめる。そして、二人は同時に吹き出した。

「なっ！？ なによー！ 失礼しちゃう！」

私は、資料をフェイの手から奪い取って、「フン！」と顔を背けた。そして、足早に先を急いだ。アンジェリカとフェイが慌てて追いかけてくる。

「ごめんなさい、護恋！ 護恋が可愛かったものでつい」

「ちよろちよろしているところが、ハムスターそっくりだなと思っただ」

「ちよろちよろ！？ 何よ、二人して！」

私が舌をベーツと出して、後ろ向きで歩いていると、ドンと誰かにぶつかった。

「廊下で何を騒いでいるんだ！」

しわがれた声を聞いて、私はぎくりとして振り向いた。

「さ、サーヴェリー先生……」

そこには、剣技の教材を抱えたサーヴェリー先生が私のほうを睨んでいたのよ。おっかなびっくりで、私は大いに慌てたわ。

「すみません！」

私が資料を持ったまま頭を下げると、サーヴェリー先生は納得した顔で頷いた。

「護恋さん、君は、色々と問題児のようだな。日本から留学しているそうだが、日本人は君のように程度がしれているのかね？」

明らかに馬鹿にした様子で、サーヴェリー先生は鼻で笑ったの。

これにはすごく腹が立ったよ。

「お言葉ですが！」

歯向かおうとした私だったけど、後ろからフェイの手が伸びてきて、私の頭を後ろから押して下げさせられた。

「！？」

「申し訳ありません、サーヴェリー先生。以後、気をつけます」

「申し訳ありません」

フェイもアンジェリカも一緒になって頭を下げている。サーヴェリー先生は、ふうと嘆息した。

「……以後、気をつけなさい」

そうして、サーヴェリー先生はどこかの教室に向かって歩き出した。サーヴェリー先生が通り過ぎる。それを見計らって、私はフェイの手を振り払った。

「フェイ、アンジェリカ、なんで！」

「文句を言いたいののは分かりますが、これ以上日本の評判を落とす必要はないんじゃないですか？」

「あの先生のことだから、きっと他でもこのことを言うだろうからな。ちゃんとしていた方が後々響かない」

「そ、そうだね、ごめん……良く考えたら、私も悪かったよね……」

突然横から拍手が聞こえてきたので振り向くと、マックスが笑顔で手を叩いていた。

「マックス先生、何でここに？」

私はマックスの出現に驚いた。

「ここは職員室前だよ。俺が居ても不思議じゃないだろう？」

マックスは苦笑している。

「あつ、ホントだ」

部屋の上の方に職員室と書かれたプレートが銀色に光っていた。喧嘩しているうちに職員室に着いてしまったらしい。

「俺は、日本人は礼儀正しいし良い人だって知っているけどね？」

「えっ……？」

さっきの台詞は、マックスが言ったんだよね？ 私は目をまばたいて、マックスを見つめる。マックスはにっこりと微笑んだ。

「それより、護恋さんが資料を持ってきてくれたんだね。ありがとうね。フェイ君もアンジェリカさんもありがとう」

私から資料を受け取ると、マックスは手を振った。

「じゃあまた、後だね」

そうして、マックスは職員室の中に消えていった。職員室のドアがバタンと閉まる。マックスの言動が衝撃的だったので、私とフェイは職員室のドアを見たまま固まってしまった。

「だから言ったでしょう？」

アンジェリカの台詞に私はハツとして、彼女の方を振り向いた。

「マックス先生はきつと良い先生ですわ」

アンジェリカは満足そうに微笑んでいる。

そうなのかなあ……。私は分からなくなってしまうって、フェイを見上げたよ。フェイも煮え切らないような顔をしていた。私もきつとフェイと同じような表情をしてるんだらうな。

「お前達！」

元気な大声が聞こえてきて、驚いて声のしたほうを向いたの。それは、デュエル担当教科のシンシエル先生だった。

「マックスのお使いか！ えらいな！」

「は、はい」

「じゃあ、また授業でな！」

シンシエル先生は元気に笑いながら職員室に入ってしまった。

「怪我でもされたのかな？」

フェイが眉を潜める。

「えっ？」

私は思わずフェイを仰ぎ見た。

「シンシエル先生が保冷剤を持っていたから、怪我をしたのかと思っただんだ」

「そ、そうなの？」

「心配ですわ……」

私とアンジェリカは思わず顔を見合わせていた。

心配していた私達だったけれど、その保冷剤はシンシエル先生が使うものではなかったみたい。保冷剤の行き先は。

「もう少し、横になっっている、ヒューゴ」

ここは、職員室の横にある先生達が使う宿直室だ。

「ほら、これを使え」

シンシエル先生は、ヒューゴ先生に枕ほどの大きさの保冷剤に、タオルを巻いて渡した。

「シンシエル先生、すいません」

ヒューゴ先生はベッドの上で横になって、それを頭の下に敷いた。ドアがまた開いて、人が入ってきた。二人はハツとして、ドアの方を振り返る。

「ご気分はどうですか？ いきなり倒れるからびっくりしましたよ。顔を出したのは、マックスだった。」

ヒューゴ先生とシンシエル先生は顔を険しくした。

「出て行ってもらえるかな？」と、シンシエル先生の言葉は冷たい。マックスはそんな言葉も意に介さないようだ。くすりと同情的な笑みを浮かべた。

「……お大事に。ヒューゴ先生の授業は、元気になるまで私が代わりに行いますから」

ボタンとドアが閉まり、マックスの足音が遠ざかっていった。

第九話 警告

私達が教室に帰ってくると、キャシアスがこちらに気付いて、神妙な顔で手招きした。何だろうと不思議に思ったわ。私達が席に近づくと、自分の席で読書をしていたキャシアスは、本をパタンと閉じたの。

「どうされたんですか？」

私とフェイはキャシアスの脇に立った。アンジェリカは隣の自分の席に座っている。

キャシアスは小声で話し始める。

「少し、学園長室に行って父上と直談判してきたんだけどね……マックスを辞めさせるように進言したのだけど」

「えっ!？」

つい大声を出してしまった私は、慌てて口を手で押さえた。

「でも、駄目だったよ。父上は何か企んでいるようだった……」
キャシアスはため息を付いて、椅子にもたれかかった。

「企んでいるって学園長がですか？」

私も小声でこそこそと尋ねる。

「ああ、イースティアとウエストランドの為になることだから、私の意見は聞けないとそう仰せられた」

「イースティアとウエストランドの為になること……ですか？」

私には、なんだか良く分からない。

「マックス先生がウエストランドを代表して、親善の為にイースティアに来ているということでしょうか？」

アンジェリカがそれとなくキャシアスに尋ねた。キャシアスは苦笑しながらアンジェリカに返事した。

「いや、さっきの授業の態度でそれはないと感じただろう？」

「そうでしょうか……そんなことはないと思うのですが」

アンジェリカは気落ちした様子で俯いてしまった。

「アンジェリカは良い子だから、つい信用しちゃうんだね。マックスじゃなくても、悪い人にほいほいとついていたらダメだよ？」
私が冗談ばくウインクすると、アンジェリカはくすくすと笑って「はい」と返事してくれた。

それからはいつもとどおり、授業は普通に進んでいった。賭け事の授業が終わり、私はふわあつとあくびした。隣で、フェイが「フツ」と、馬鹿にしたように笑った。

「何よ？」

「吸い込まれるかと思った」

「吸い込めるなら吸い込んでやるわよ……」

私は机に突っ伏した。

元氣のない私を不思議に思ったのか、フェイが「どうした？」と尋ねた。

「最近、デュエルの勝負を授業以外でやってないから、気合が入らないんだ……私から勝負を挑もうにも逃げられちゃうし……」

キャシアスとフェイの近くに居るのに、彼らのファンクラブの子からはまったく勝負を挑まれない。もう、諦めちゃったのかな……？

誰かが私の席の横に立った気配がした。

「護恋さん」

「ふえ？」

ルルの声がして顔を上げる。

「上級生の方たちが、護恋さんと呼んでくれって」

「えっ!？」

私は嬉々として勢い良く立ち上がった。

「もしかして、デュエルの申し込みとかっ!？」

私の勢いにルルは気圧されて後ろに一步引いた。

「わ、分かりませんけど……」

胸を躍らせながら、私が廊下の方に顔を出すと。

そこには、見たことのない上級生のお姉さんが三人、腕組みをして立っていた。一人は茶髪のウエーブヘアのお姉さん。一人はクリ

「ム色の巻き髪のお姉さんで。もう一人は、黒髪の長いストレートヘアのお姉さんだった。」

彼女達の目はどれも青くて綺麗だった。私に向けられた視線には敵意がこもっていた。でも、勝負をしようってことなら、気合が入るわ！

「私達は、キャシアス様とフェイ様を慕う、高等部のファンクラブの役員だけれど」

ストレートヘアのお姉さんが、自分の髪のを優雅に払いのけながら私に話しかけた。

「もしかして、デュエルの申し込み!？」

私が目を輝かせて乗り出すと、三人は嫌そうに一步下がった。

「違うわよ!」と、ウェーブヘアのお姉さんは怒鳴った。

「なんだ、違うの?」

「私達は警告に来たの!」

「け、警告って何……ですか?」

デュエルではないことに私は不安を覚えた。

「貴方、キャシアス様やフェイ様と仲が良いからって調子に乗らないことね! そのうち、痛い目に合うから、覚悟しておきなさい!」

彼女は言い捨てると「参りましょう」と巻き毛のお姉さんに促されて、そのまま帰ってしまった。

「な、なんなのよ……!!」

思わず足で地面を踏みつける私。

「護恋も大変だよなあ」

「本当ですね」

そんな一部始終を見ていたルルとコードネルが、窓際の席で苦笑していた。キャシアスとフェイも気になったらしくて様子をうかがっている。二人が笑っているのを見て、私は顔を険しくした。

「護恋、また、私達が守ってあげるから安心してくれ。フェイ、そうだよな?」

「はい、キャシアス様」

フェイは促されて、軽く礼をした。そして、フェイは私を振り返った。

「お前も大変だな」

可笑しそうにフェイがハッと一笑した。

「誰のせいだと思ってるのよ！」

どう考えても、キャシアスとフェイの二人は気楽そうに見える。

私も相当のものだけど、この二人には負けるわ……。はあ……。

この日の放課後は補習だった。でも、マックスの配った問題のプリントをするだけだったので、不安だったことは何もなかったよ。

マックスは教室の窓際に座って校庭を眺めている。私は、マックスが何を見ているのかなんて、それどころじゃなかった。難しい問題を解くのに必死だったわ。後で聞いた話だけど、マックスはある光景を目にしていたらしい。彼は視力がとても良いらしいの。だから、ただっ広い校庭の隅から隅まで綺麗に見えるんだって。

その門の出口のところでは他校の生徒とうちの学校の生徒が話しているのが見えたらしい。すぐに、彼らはリムジンに乗り込んでしまったようだ。その他校の生徒というのが。

第十話 ヒューゴ先生の謎

翌日は、国史のヒューゴ先生が授業に復帰していた。だから、その授業の時は本当に安堵したわ。マックスに指名ばかりされちゃ敵わないもの。

ヒューゴ先生はいつもどおりだった。昨日は風邪だったのかなと思わせるぐらいごく自然で、誰も疑いを持たなかったようだよ。実際に私だって、そう思っていたし。

授業の終わりを告げるベルが鳴った。私は、ヒューゴ先生に頼まれて、黒板を消していた。そして、帰り支度をしているヒューゴ先生に尋ねた。

「ヒューゴ先生、昨日はどうされたんですか？」

風邪だという答えが返ってくると思っていたの。気をつけてくださいねって、話を終えるつもりだった。

でも、ヒューゴ先生は、

「ちょっとね……」

と言葉を濁してぎこちない笑みを浮かべた。

私は、ヒューゴ先生の表情がすっきりしないことに気付いていた。なんだか、様子がおかしくて……。

「ちょっとって、何かあったんですか？」

私が更に突っ込んで聞くと、ヒューゴ先生はぎこちなさを消すように笑った。

「いや、何も無いよ。じゃあね」

ヒューゴ先生は荷物を持って、教室から出て行った。

私は、何も無いというのは嘘だと直感で思った。

でも、これ以上、深く尋ねても無駄だって分かる。一端の生徒が先生に本音をきいても、ごまかされるのは分かっているからよ。先生と生徒の立場が逆だったらきつと話してもらえらるだろうけれど。私が自分の席に帰ると、フェイが私の様子に気付いた。

「どうした？」

「ヒューゴ先生、様子が変だったよ……風邪じゃなかったのかな？」
フェイがフツと笑った。

「マックスが何かしたんじゃないのか？」

「あー、ありえる！」

私は思わずフェイを指差した。

でも、それはフェイの冗談だと思っていたの。フェイだってそのつもりだったんじゃないかな。

ヒューゴ先生に何かするっていつても、マックスでは何もできないような気がしたから。

「もしかして、学園長が授業を替わって言ったのかな？」

「いや、それはないんじゃないかな？ 学園長がそう言ったところで、ヒューゴ先生が承諾しないよ」とキャシアス。

「確かに、仰るとおりですね」と、私。

ともかく、ヒューゴ先生が元気になったので、マックスがこれで大人しくなるかなと、私は期待していた。

でも、また問題が起こった。それは、二時間目のデュエルの授業ことだった。もちろん、一年Aクラスと一年Bクラスの合同授業よ。私は桃色のジャージに着替え、フェイやギルバート達は水色のジャージに着替えている。アンジェリカやキャシアスなど高貴な位を持つ方々は見学で、パイプ椅子に座ってこちらを見て談笑している。

いつもどおり、私達デュエリストの卵はシンシエル先生に習って、デュエルの技を磨いていた。

そんなとき、がらりと体育館の戸が開いて春の心地よい風が吹き込んできた。その人物は段々とシンシエルの方に歩いてくる。皆は、段々とその人物に気付いて、また辺りが騒がしくなっていく。

ちょうど私は、一年Bクラスのギルバート相手にデュエルの稽古をしていたの。フェイは女の子達に練習相手になるように取り合いされて……まあ、いつもどおりよ。

私の横を光沢のある赤毛が通り過ぎた。私はハツとして、デュエ

ルの剣を止めた。

「あ、あれ！ またマックスじゃん！」

ようやく私が気付いてあちらを指差すと、マックスはこちらに向かってにっこりと愛想良く笑った。

「おお、昨日は俺のクラスに国史の授業に来てたぜ」

ギルバートはどこか楽しそう。

「そんなのまだ良いわよ……私なんか補習されたんだから！ でも、本当に今日は何しにきたんだろ？」

一番疑問に思っていたのは、私よりもシンシエル先生だったみたい。いつもの元気な笑顔が今日に限っては引きつっている。

「こんな所へ、どうされましたか、マックス先生……」

相反して、マックスはいつものように愛想笑いを絶やさない。

「私もデュエルの授業がしたいのです。授業を代わっていただけませんか？」

シンシエル先生は豪快に「ハハハハ！」と笑った。

「俺に授業を代わってほしいと？」

「はい」

二人は和やかに笑っていた。けど、シンシエル先生の目が先に開いて、彼の鋭い眼光がマックスを射った。

「絶対に嫌ですね！」

敵意の込められた声を聞いて、マックスはようやく笑っていた目を開いた。二人とも口元だけは笑っているので、一見和やかそうだけど、視線がぶつかって火花が散っているみたい。

「ヒューゴ先生には上手く代わっていただいたようですが、俺はその手は受けません！」

視線を先生の方に向けたまま、私はギルバートのジャージの袖を引っ張った。

「上手く代わっていたらどうして、何？ マックスが何かしたの？」

「さ、さあ？ 俺に聞かれてもな……」

ギルバートも二人を見たままで、首を傾げるだけだ。そりゃ、私

だってギルバートに聞いたって分かるわけないって思っていたけど、聞かずにいられないじゃない？

他の生徒達も動揺しているけど、二人の先生の方に目が釘付けだよ。

マックスは「そうですか……」と再び、目を細めた。

「では、デュエルをしませんか？」

「何だって？」

シンシエル先生の片眉がぴくんと跳ね上がる。

マックスはシンシエル先生の反応が面白かったのか、くすくすと笑っている。

「勝った方が今日のデュエルの授業をする。この賭けに乗りませんかと言っているのです」

シンシエル先生が何か言う前に、マックスが付け足した。

「まあ、シンシエル先生相手なら、五分で私が勝つと思いますけどね」

マックスは完全にシンシエル先生を舐めきっている。これには、シンシエル先生はキレたらしい。額に青筋が浮き出ている。

「ほ……ほう、良いでしょう！ その賭けに乗りますよ！ そして、俺が勝ちます！ 貴方は競技場ハルシオンの元チャンピオンかもしれませんが、俺だってそこで優勝したことがありますよ！」

第十一話 マックスVSシンシエル先生

体育館の中は動揺で満たされていた。半分は先生同士のデュエルに戸惑う声。もう半分は、シンシエル先生を尊敬しているがゆえの不安の声だ。

私は、更にギルバートのジャージの袖を引っ張る。

「シンシエル先生って競技場ハルシオンの元チャンピオンだったの!?」

「どうやら、そうみたいだな。俺も初めて知ったぜ」

「シンシエル先生ってすごいんだ……！」

私は、シンシエル先生をますます尊敬して感嘆の息を吐いた。

マックスは、シンシエル先生に視線を向けたまま、面白そうに微笑む。

「良いでしょう。では、デュエルをしましょうか」

「規則委員！ デュエルの用意を頼む！」

シンシエル先生は、真剣な目で規則委員に指示した。ルルとコードネルは規則委員だからデュエルに参加しない。だから、貴族の方と見学したり、デュエルの審判をして回ったりしている。なんでも、デュエルのことを見て勉強しているらしいよ。

「は、はい!!」

「かしこまりました！」

呼ばれたルルとコードネルは、すつと立ち上がった。

ルルとコードネルは練習用の剣ではなく、カードキーで体育館倉庫を開けて、麻痺薬の塗ってあるデュエル用の剣が入った箱を押して持って来た。

規則委員は赤いフレームの眼鏡をかけるのが決まりだ。ルルはすでにそれをかけているし、コードネルも胸ポケットから取り出してかけている。コードネルの眼鏡は、ルルのと違ってレンズに度が入ってないらしい。いわゆる、伊達眼鏡^{だて}ってやつよ。

「俺が審判するから、ルルは座ってるよ」

コードネルがルルに、ニツと笑いかけた。

「良いんですか？　じゃあ、お任せします」

ルルはそんなコードネルに笑みを返して、席に帰って行く。

コードネルは、明らかに楽しんでるわ。私はもちろん、シンシエル先生に勝ってもらいたい。でも、マックスはどれだけ強いんだろう。そういえば、人のデュエルを傍観するのって、これが初めてかもしれない。

シンシエル先生とマックスは、箱の中からデュエルの剣を引き抜いた。麻痺薬に濡れた刀身が、てらてらと光っている。

「どっちが勝つと思う？」

すぐ隣で、ギルバートが私に話しかける。私は首を振った。

「分かんないわよ！　でも、シンシエル先生を応援する！」

自分のデュエルよりドキドキするよ。両手を組み合わせて、シンシエル先生が勝つように祈る。

コードネルはヘッドホンマイクを付けて、分厚い本を手にした。

「今からマックス先生VSシンシエル先生のデュエルを行います」

彼は片手を上げて高らかに宣言した。

「掟の神テュテュスの名の下にコードネルは審判の立会いを務めます」

コードネルが分厚い本を開くと、ページが勝手にぱらぱらとめくれていく。

「この審判の判断はこの『決闘の書』の判断にゆだねます」

決闘の書とは、神がそれを使って、公平なジャッジを伝えるアイテムらしい。審判は、それを口頭で伝えるだけの存在らしいのだ。神様なんて本当にいるのか分からないけれど、不思議な力は存在するらしい。

「コードネルはテュテュスと規則委員の名の下に公平な判断をすることを誓います」

コードネルの声が膨張して響き、決闘の書が真ん中のページを開

いて落ち着いた。

『最初に、決闘七ヶ条を読み上げます』

コードネルの声が強い意志を持って響く。

『一条。決闘は正々堂々行われなければならない』

どこからか風が舞い込んで、決闘の書のページをめくっていく。

『二条。決闘はテユテユス神の御前で行わなければならない』

一ページをぱらり。

『三条。決闘の勝敗により主おもに敗者は賭けに束縛される』

また、一ページ。

『四条。手駒は主のために戦わなければならない』

コードネルは、本の背に手を置いていただけで、ページをめくろうとしてない。

『五条。決闘を行う者は剣によって戦わなければならない』

でも、決闘の書は意思を持っているかのように、彼が読むたびにページをめくっているのだ。

『六条。賭けは正当かつ対等でなければならない』

私はここから、コードネルの手元を覗いた。

『七条。決闘の精神にもとる行いをしてはならない』

決闘の書には文字が浮かび上がって、そして消えていつている。どういいう仕組みなんだろう。不思議よね。

それらを読み上げたコードネルは再び、本から顔を上げてこちらを見る。

『尚、掟に背くと神の意志により絶対的な賭けは実行されません。』

正々堂々と戦ってください』

マックスとシンシエル先生は「はい」とそれぞれ返事した。

『賭けの確認をします。それぞれ、負けた方が授業を譲る。これで良いですね』

シンシエル先生は「その通り」マックスは「同じく」と答えた。

決闘の書にそれが刻まれて、神に認められたようだ。

『これより、マックス先生VSシンシエル先生の一本勝負を始めま

す

コードネルの声が、体育館の中に良く通って響く。

二人は、剣をそれぞれに構える。

『では、始め!』

コードネルが、サツと手を上げた。

「やあああああっ!」

「はあああああっ!」

両者は掛け声を上げて、距離を狭めた。そして、剣を何度も交わす。剣の金属音が鋭く響く。

「がんばれ、シンシエル先生ーっ!」

「マックス、頑張っつてーっ!」

生徒達は、思い思いに先生を応援し始める。

「シンシエル先生、がんばれーっ!」

皆に交じって、私も声を張り上げる。

ほとんどの生徒がシンシエル先生を応援していた。マックスを応援しているのは、アンジェリカと、コードネルと、ギルバート。他にもいるけれど、数えられる程度だ。

「ふっ、応援では、俺の方が勝っている感じだな!」

剣を打ち払いながら、シンシエル先生は不敵に笑う。

「それに、俺とマックス先生とはほぼ互角ですね!」

本当にそうだろうか。どう考えても、シンシエル先生の方が押している気がする。

シンシエル先生は、マックスの足元を狙って一文字に剣を振った。マックスは、それをさっと飛んで避ける。すぐさま体勢を立て直し、剣を斜めに切っていく。剣の触れる鋭い音が響く。

二人は、さっと距離を開いてまた剣を構えた。

「そうですね……いつまで、こうしていても、勝敗は付かないでしょう。貴方は思ったより強い」

マックスは、にやりと口もとを吊り上げた。

「では、私の手の内を見せましょうか」

そして、戦いを刺激するような真つ赤な瞳で、シンシエル先生を捉えた。

「っ……………!?!」

途端に、シンシエル先生は目を見開いた。何が起きたんだろう。そう思う間に、シンシエル先生の動きが金縛りにあったように止まってしまった。

「何？ 何が起きたの？」

私は、視線を向こうに向けたまま、ギルバートの袖をぐいぐいと引っ張る。

「わ、分かんねえよ！」

ギルバートは首を振る。

生徒達は浮き足立って、不安を口々に唱えているよ。

「シンシエル先生、がんばってーっ！」

私が思わず応援すると、生徒達もそれに続く。でも、シンシエル先生を応援する声が戸惑っているのがすごく伝わってくる。

そんな生徒達の動揺している応援をマックスは気持ち良さそうに聞いて、声を立てて笑った。

「私は、掟の神のテュテウスが大好きです！ 彼女はいつだって、私に味方してくれる！」

「ど、どういうこと？」

デュエルの神様は、マックスの味方？ だから、シンシエル先生は動けないの？

「終わりです！」

マックスはゆっくりとシンシエル先生に近づいて、剣を振りかぶった。

第十一話 マックスVSシンシエル先生（後書き）

今回は、先生同士の話であんまり面白くなかったかもしれませんが、もう少ししたら、三角関係が入って参りますので……！ また読んでくださるとありがたいです。

では、読んでくださってありがとうございました^^

第十二話 勝負の行方5

その時、シンシエル先生の目が更に見開いた。

「はあああああああつ！」

「なっ!？」

シンシエル先生がいきなり絶叫して、剣を袈裟懸けに振り下ろした。

マックスの顔から笑みが消えて、余裕がなくなったように見える。それを剣で受け止めたマックスは、それから後ろに飛んで距離を取った。

「やった! シンシエル先生、動けるみたいだよ!」

「ああ、そうみたいだな!」

私とギルバートは、手を取り合って喜んだ。

皆の顔にも笑みが戻ったみたい。

「見るよ、シンシエル先生が目を閉じたぜ!」

ギルバートが、シンシエル先生を指差す。

確かに、シンシエル先生は目を閉じているけど……。

「何でだろう?」

私には、その理由が分からなかった。

「その様子だと、私の手の内がばれましたか」

マックスは苦笑している。

「そうだな! テュテウスがマックス先生の味方なわけがないだろう! マックス先生の目は、見てはいけない気がした……。ウエストランドの元チャンピオンに瞳術使いが居ると聞きましたが……。もしかして、あなたがその瞳術^{マユツク}使いではないかな?」

マックスは、瞳術使い?

「瞳術使いつて、瞳を使って相手を操るっていう……?」

「そうじゃねえの?」

私の問いに、ギルバートが頷く。

「そ、そんなことできる人っているの!？」

私達は困惑したまま試合を目で追う。

「そのとおりですよ! 私は俗に言う瞳術使いです! 世間ではもう忘れ去られているみたいですからね! でも、シンシエル先生、目を閉じたままで貴方は動けますか?」

マックスはすぐさま、距離を縮め、剣を振り下ろした。

「なっ!？」

マックスの表情が強張る。

シンシエル先生が目を閉じたままで剣を受け止めたからよ。

「シンシエル先生、すごい!」

興奮した私は、飛び上がって拍手した。

「俺を侮っていたようですね! 目を開かなければ、貴方は弱い!」
シンシエル先生は、マックスと剣を交わして攻め立てる。

これには、マックスはかなり動揺しているみたい。

「どういうことですか! 貴方は見えてないはずでしょう!」

目を閉じているシンシエル先生は、楽しそうに笑った。

「お教えしましょうか? 俺は、気配で貴方の位置が分かるのです

! 気で大体が分かります!」

マックスは「あ……あはははは!」と、納得したように笑った。

「それは、恐れ入りましたよ! でも、貴方は馬鹿だ。簡単に手の内を見せるのは、自分にとっておきがあればの話……」

マックスは、すうっと溶けるように横に避けた。

「なっ!?! マックスの気が消えた……!?!」

どうして良いか分からない様子で、シンシエル先生は目を閉じたまま周りを見回している。

そして、とうとうシンシエル先生が目を開けてしまった。

私は、怖くなって、ギルバートの腕をぎゅっと掴む。

「先生、右よ!」

私は思わず叫んだけど、遅かったみたい。

「!?!」

シンシエル先生のすぐ横にマックスがいたの。

二人の目が合う。

マックスの口角が引き上がる。

「終わりです……」

マックスの赤い目がギリリと光ったような気がした。

「ぐああああ……っ！」

なんでっ!？

シンシエル先生は、いきなり苦しみだしてその場に膝をついてしまった。

剣を投げ出して、地面に手を置いて苦しんでいる。

私達は「先生！」と悲鳴を上げた。

これは、武器放棄……シンシエル先生の負けだ。

私が審判の方に目を向けると、さっきまで楽しんでいたはずのコードネルの表情が、引きつったままで固まっている。

「コードネル！」

私が声をかけると、コードネルはハッと我に返った。

『こ、この勝負、マックス先生の勝ちです!』

コードネルがサツと手を上げた。

「シンシエル先生！」

私は居ても立ってもいられなくなって、シンシエル先生の下に駆け寄った。

「シンシエル先生！」

「先生っ！」

他の生徒達も私に続いて、シンシエル先生を取り囲む。

「大丈夫ですか、シンシエル先生！」

私がシンシエル先生の顔を覗き込むと、先生は乗り物酔いが治ったときのような顔をして、私達のほうを向いて笑った。シンシエル先生の首元に、絶対的な賭けが働いている印が星型に黒く現れた。絶対的な賭け、それは発動されると必ず守られるという。

「先生、負けてしまったな……!」

シンシエル先生は無理したように笑っている。なんだが、すごく痛々しい。

「そんなことないです！ 先生は充分強かったです！」と、私は泣きそうになっていた。

「そうですね！ とっくに、五分をオーバーしてますし！」と、ルル。

「そうですね！ そうだよな、皆！」と、コードネル。
私達は口々に「そうですねよ！」という。

皆は、シンシエル先生の味方だということが分かる。
そんな皆を見て、シンシエル先生は清々しく笑った。

「皆がそう言ってくれて、俺は嬉しいぞ！ まあ、勝負は負けたんだ。マックス先生に今日の授業はゆずろう！」

「ありがとうございます、シンシエル先生。私も、貴方を舐めてました。貴方は十分お強いですよ」

マックスはにっこりと愛想良く笑った。
「認めてくれて嬉しいよ」

シンシエル先生は、釣られるように微笑む。

「それでは皆さん、私の授業を始めます。私の授業はこれです！」
マックスは、懐から小さなリモコンを出した。

なんなんだろう？

私が首をかしげていると、体育館のドアががらりと開いた。
「なっ、なんだ!？」

そして、入ってきたのはなんと、人型のロボットだった。白く塗った金属のボディに、目はレンズの繋がった水中眼鏡のようで、赤い光を放っている。

そのロボットは一台だけじゃない。何台も続けて体育館の中に入ってくる。

その光景に、私達は呆然と立ち尽くすしかなかった。

第十三話 マックスとロボットとハンデ

「皆さん、驚いてますね？ これはウエストランドで開発した、最新型のデュエル練習用ロボットです」

誇らしそうに、マックスが両手を広げた。

「デュエルの練習用ロボット!？」

皆は目を丸くして、物珍しそうにロボットの動きを観察している。もしかして、ウエストランドの技術ってかなり進んでいるんじゃないのかな。

ロボットがやってきて、私の前で止まった。そして、目のセンサーをピピピと赤く明滅させている。

「あらかじめ、皆さんのデータが入力されています。それでは、デュエルの剣を持ってください」

皆は楽しそうに、剣を持って構える。

それにしても、このデータってどこで集めたんだろう。

「それでは、始め!」

マックスの声と同時に、私達はそれぞれ向かい合っているロボット一体に挑んで行った。

「やああ!」

私が、剣を振り下ろしながら前に出ると、ロボットはそれを避けて、剣を一字に薙いだ。私はそれを下がって避ける。

ピピピとロボットの目が赤く光る。

なんなの？ もしかして、データを取ってる……? ?

私は、何回か攻撃を仕掛けた。それも、ロボットは素早い剣さばきで私の動きをかわしていく。

面を狙って、剣を振りかざした時だった。

ロボットはいきなり、体勢を低くした。そして、私の下段を狙って、私の懐に飛び込んできた。

「わあっ!」

それを寸前のところで横に飛び退く。

マックスが楽しそうに声を張り上げた。

「次は、あなたたちよりも、数段強いデータを送ります！」

ロボットの目が激しく明滅する。そして、俊敏な動きで接近してきて、私と剣を数回交わす。

私は素早い動きに圧倒されたよ。

それから、ロボットは私の剣を切り上げたの。途端に、私の懐はがら空きになった。

ロボットは体勢を低くする。そうして、私の懐に飛び込んできた。

「しまっ……！」

避けようとしたが、ロボットの剣が私の胸を打っていた。

「負けちゃった……」

ロボットの動きがあまりになめらかなので、私は驚いていた。

それに、あれって本当に私の動きそっくりじゃん……。特に、私が下段を狙って懐に飛び込むところなんて、完璧にコピーされてるし……。

「護恋も負けたのか……」

「ギルバートも？　なんか、ロボットに負けるなんてやる気なくすよね……」

私とギルバートは苦笑いした。

パンパンと手を叩く音がして私が振り向くと、マックスが満足そうに笑っていた。

「皆さん、負けてしまったようですね！　このロボットは性能がいいので、仕方ありません。諦めてください！」

その時、ドサツという音が聞こえて、一同はギョツとして振り向いたの。

瞬間的に、皆の顔が明るく彩る。

そこには、倒れたロボットにフェイが剣を突きつけていた。

歓声を上げる皆とは対照的に、マックスだけは顔を引きつらせている。

「軽く勝ったけど、何か文句でも？」

フェイが、フツと挑発的に笑った。

「きゃーっ！ フェイ様、素敵ー！」

「フェイ様、最高ーっ！」

私は、女の子達と一緒にあって、フェイに歓声を送った。

男の子達もその時は一緒になって「フェイ様、痺れるう！」って黄色い声を送っていたけどね。私は、それに大うけして笑ってしまっただ。

特に嬉しそうな顔をしていたのは、シンシエル先生だった。

フェイが仇を取ってくれたって感じだったよ。

ちようど、そこでベルが鳴った。

「それでは、授業を終わります」

ルルが号令をかけようとしたが、マックスのほうが少し早かった。

「では、護恋さんだけ補習ですから」

皆はどよめく。

「なっ！ 何ですか！」

私は納得がいなくて、目を白黒させる。

「何か文句でも？ 護恋さんはロボットのデュエルで負けたでしょっ？」

「負けたのは、皆同じじゃないか！」

キャシアスが真っ先に反論した。

「じゃあ、私と護恋さんはデュエルで勝負をしましょう」

「はあ！？ 勝てるわけないじゃん！ それこそ不公平だよ！」

私は思わず、反論していた。

周りからも、私を援護するようにブーイングが起こる。

マックスは周りを一切気にしてないようで、まったりと笑った。

「じゃあ、ハンデをあげましょう。護恋さんが勝ったら、護恋さんの補習は今後一切しません」

そ、そんなことを言われても困るよ。

「じゃ、じゃあ、私がもし負けたら……？」

「私は、護恋さんに興味があるのです」

「はあ……？ それってどういう意味ですか？」

何を言っているんだろう、この人……。私の眉間のしわが深くなる。

「もし、私が勝ったら……護恋さんは、私と付き合ってもらいましょうか」

「なっ……！？」

あまりのことに、私は二の句が継げなくなってしまった。

第十四話 護恋VSマックス

「つ、付き合うつて、恋人同士になるってことですか？」

私は動揺しながらマックスに尋ねた。

「そういうことだね」

もしかしたら、『購買部に付き合つて』というのかもしれないと淡い希望を持っていたのだけど。

キャシアスとフェイが、私の横に立った。

「聞き捨てならないな！ 私に何の断りもなく、護恋と付き合おうだなど！」

「きゃ、キャシアス様……！」

私は、おろおろしながらアンジェリカの方をつい振り返ってしまった。アンジェリカは、状況が分かってないような顔をしている。

何とかアンジェリカに気付かれないように事を収めなきゃ……！

マックスがキャシアスとフェイを面白そうに見て、くすりと笑った。どこか馬鹿にしているような感じがする。

「もしかして、許可が要るのかな？」

「要りません！ 私が勝ちますから！」

私が思わず言つと、キャシアスが振り返つて「護恋！」と、私をとがめた。

でも、私は面白くなつてきていた。私の悪い癖よね……。でも、久しぶりのデュエルだし、勝利で飾りたいわ。私は腹に一物隠して、にやりと口の端を上げた。

「それで、どんなハンデを私にくださるのですか？ まさか、競技場ハルシオンの元チャンピオンが普通のハンデじゃないですよね？

シンシエル先生のこともありますし、目隠し程度だったら、デュエルはしませんよ？」

もし、マックスがハンデをつけて私が勝つても、私の勝ち私の勝ちだよ……。マックスに勝つたら、他の人から私にたくさん勝

負を挑まれるかもしれないじゃん。それって、かなり楽しいんじゃない……？

私の胸はドキドキと楽しそうな鼓動を刻んでいる。

「そうですね……目隠しして、両手を後ろできつく縛るっていうのはどうですか」

私はつい笑ってしまった。

「いいんですか？ そんなハンデを私にくれちゃっても」

「ええ」

マックスは嫌味なく微笑んだ。

「それでも勝てるっていうんですか？」

「ええ」

それは自信あり気な声だった。

その時、マックスの笑んだ目が開いて赤い瞳が見えた。楽しんでるけれど、どこか馬鹿にしている感じがする。なんか、これで負けたら、貴方は大したことないですねって言われそうな気分よ。

「へ、へえ！ 面白そうじゃん！ 私、デュエルしますよ！」

私が、クラスメイト達の方を振り向くと、クラスメイト達は楽しそうに私達に注目している。

マックスの出方に興味が集まっているらしい。これで、どのようにマックスが勝つのか。もし、私に負けたらマックスはかっこがつかないよね。

クラスメイト達は私が勝つのを期待している。シンシエル先生の仇を取れることを喜んでみるみたいにも見えるよ。

でも、アンジェリカは笑っていない。キャシアスもフェイも笑っていない。

だから、私は嫌な予感がしていた。

さつきはすっかり頭にきて、勝負を引き受けてしまった。マックスはもしかしたら、わざとあんな挑発をしたのかもしれない。私は、それにまんまと乗ってしまったんだろうか。

「大丈夫よ。勝てるわよ！ だって、あんなハンデだったら普通は

負けるわよ!」

私は、ポニーテールをくくりなおした。そして、両頬を叩いて、自分を奮い立たせる。

そして、デュエル用の箱の中から剣を引き抜いた。麻痺薬がちやんと塗られているのを目で確かめる。そして、フィールドの方へ歩いていく。

マックスと言えば、目隠しをして自ら手を後ろにまわしていた。クラスメイト達がこれでもかというぐらい、縄をきつく何重にも縛っている。そして、申し訳程度に、剣を手に握らせている。

それでも、マックスの口の端は笑みを作っている。すっごい、余裕よね。

コードネルとルルがその剣に麻痺薬が付いているかチェックしているわ。

私は剣のグリップを握り締めて、深呼吸。

なんだか、高揚感が半端じゃない。私、マックスに勝てるのかな。でも、そうじゃないとしたら、マックスはどんな風に反撃してくるのかな。

私は、唇を引き伸ばして、剣を構えた。

コードネルはデュエルの定型文を読み終えた。

『これより、護恋VSマックスの一本勝負を行います』

コードネルの声もどこか弾んでいる。

『では、始め!』

第十五話 勝負の行方6

「やあああっ！」

すぐさま声を上げて、私はマックスとの距離を縮める。そして、マックスに向かって剣を振り下ろした。

だが、マックスの姿がすっと掻き消えた。

「後ろっ!？」

振り向いたけど、私の後ろにも居ない。

「どこを見てるのかな？」

耳元で声がして、私は振り向きざまに剣を横一文字に薙いだ。

それを、マックスはすつとしゃがんで避ける。

そして、さつと後ろに下がった。

私が袈裟懸け、逆袈裟に剣を振り下ろしても、マックスはそれをして、さもたやすく避けてしまう。

まるで目隠しをしてないみたいに。

「本当は見えてるんじゃないの……!？」

「まさか！ 私はシンシエル先生の真似をして、気で護恋さんの動きを感じているだけですよ」

「真似って……!？」

簡単に言うものだから、私でもできそうな気がしてきたよ……!

でも、そう簡単に真似なんてできるもんじゃない。そんなこと、分かってる。

そして悔しいことに、マックスの唇は笑ったままだ。

「くっそぉー！」

私は、一方的に剣を振り下ろしていく。

でも、マックスを追うだけで、私はへとへとだよ……。

マックスにこの剣が当たれば、決着が付くはずなのに……!

「護恋さん、貴方は弱い。こんなにハンデをあげても私に勝つことができないんですから」

「……テュテュスはマックスの味方だっというの？」

「その通りですよ」

私への応援の声が大きくなっている。

私は息を切らしてマックスに剣を振っていく。

「そろそろ、私も反撃しましょうかね。貴方は、根性だけはあるよ
うだから、これでは、いつまで経っても勝負が付きませんのでね」

「なにを……」

反撃ってあの格好でどうやってするのだろう。

疑問で私の頭にもたげた時、マックスはすつと自分の手を横に引き抜いた。

「んなっ!？」

あんなに縛っていたロープから簡単に手を抜いたのだ。

そして、あっさりとそれを捨ててしまった。

剣を握った手を前に持つてきて、刃先を私に向けている。

「何やってんのよ……! 私にハンデをくれるはずでしょ……!」
私の声を肯定するようにクラスメイトのブーイングが一層大きくなる。

「ハンデは充分あげましたでしょう? それに、私は、一言もロ
プを取るとは言ってませんよ?」

「そんなの詐欺よっ!」

「詐欺じゃありません。確認しなかった貴方が悪いのです」
マックスはそう言いながら、目隠しまで取ってしまった。

「……っ!」

目を見ると瞳術を使われるからヤバイんだっけ。

でも、目を開けてないと剣筋が見えないし……!!

どうすれば良いのか分かんないよ!

マックスはにっこりと微笑んでいる。

余裕綽々(よゆうしゃくしゃく)ってこのこと?

私がどう出るのか楽しんでいるみたいに見えるよ!

こうしていても埒らちが明かない。こうなったら、先手必勝だ!

「やあああああつ！」

私は踏み込んで距離をつめて、剣を振りかぶった。その時、マックスの目が大きく開いて、私を視覚で捉えた。

「!?!」

途端に、地震が起きたのかと思うほど、視界が上下に動く。ぐらりと捻じ曲がる視野。

私はめまいが起きたときのように動けなくなって、よろめいて膝をついてしまった。

「終わりです」

楽しんでいるようなマックスの声がして、私の持っていた剣をマックスが剣で弾き飛ばした。

『武器放棄でこの勝負、マックスの勝ちです!』

コードネルの審判の声が響き渡った。

どよめきが大きくなる。

私のぐらついていた視界が元に戻った。

私は、ほっと息をついたが、ぐいっと腕を引っ張って起こされる。マックスだ。体育館のライトで赤いマックスの目がきらりと光った。

「護恋さん、じゃあ私と付き合ってもらいましょうか」

「え……」

「良いよね」

絶対的な賭け、絶対的なマックスの声に私の口は勝手に「はい」と答える。

私は目を白黒させてマックスを見つめた。

マックスと付き合うことは守らなければならないらしいが、マックスのことを好きだという気持ちは湧いてこない。

私はその事に安堵していた。

もしかしたら、キャシアスもそうなのかもしれない。

でも、好きでもないのにマックスと付き合うなんて嫌だよ……! それに、私はマックスが恐ろしいから苦手だ。

「その賭け、待ってもらおうか！」

私はギョツとして、声の方を向いた。噂をすれば。

「どうされたんですか、キャシアス様？」

マックスの面白そうな声。

「キャシアス様……」

私は口元を震わせて、その名を呟いた。

きっと、私は情けない顔をしているんだろう。

私の前に現れたのはフェイを従えたキャシアスだった。

「その賭けの取り消しを賭けて、私の手駒とデュエルしてもらおうか」

キャシアスは険しい顔でマックスを睨んでいる。

フェイも私をちらりと一瞥した。そして、マックスに静かな視線を送っている。

「どうして、キャシアス様が私に文句を付けられるのですか？ 理由をお教えてください」

私は、キャシアスの遙か後ろのアンジェリカと目が合った。

アンジェリカは不安そうにこちらを見ている。

私は慌てて、キャシアスに視線で「言うな」と訴えた。

「私は」

それでも言おうとするキャシアスを止めるため、私は首を振って

否と訴える。

でも。

「私が、護恋を愛しているからだ」

キャシアスは私の訴えを無視してごり押しした。

授業の終わるベルが鳴り、他のクラスの生徒が集まってきた。

場違いで楽しそうな雑音が大きくなる。

一つの劇の幕引きのように、傍観していた生徒達は興味を失ってしまった。

青い瞳から雫が零れ落ちる。

それが私の目に鮮明に映る。

私のほうを見ていたアンジェリカは、野次馬が集まってきた中に紛れて見えなくなってしまった。

「アンジェリカ！」

私はデュエルそっちのけで思わず駆け出していた。

第十六話 砕ける心

私は人ごみを掻き分けて、アンジェリカを探した。

体育館を出たところで、アンジェリカがゆらゆらと歩いていた。

いつもの歩き方ではない。魂が抜けているような、茫然自失とした歩き方だ。

「アンジェリカ！」

私がアンジェリカの手を掴むと、彼女は涙を浮かべた顔でこちらを向いた。

涙が頬を伝い、下へと落ちていった。

「ごめん、アンジェリカ……！」

「護恋……」

「アンジェリカ……」

私が申し訳なくて慌てていると、アンジェリカはぎこちなく笑った。

「私が、何も知らないと思っていましたか？ 前々から、キャシア様が護恋のことを好きだと言うことは存じております」

「え……」

何故かぎっくり切られたような気分になった。

「だから、護恋は私に気兼ねしなくても良いのですよ」

その笑顔は、アンジェリカの精一杯の強がりだと分かった。

触れると壊れそうなアンジェリカを前にして、私はどうしたらいいかわからずに泣いてしまっている。

「でも、私は、キャシア様とは考えられないよ！ 私は、これからもアンジェリカとキャシア様が両思いになれるように頑張るから！」

それでも、まだ潤んだ瞳をこっちに向けているアンジェリカ。

急に私の脳裏に、フェイの顔がよぎった。

「そ、それにね、私 フェイのことが好きなの！ だから……」

それは嘘だった。

少しでも、アンジェリカの気持ちを慰めたいと思つての嘘だった。

「護恋、ありがとう。でも、少し」

「えっ？ 何？ 言つて？」

「護恋が許せません……」

アンジェリカがきつぱりとそう言つて、私に背中を向けて歩き出した。

「あ……アンジェリカ……」

私は、アンジェリカに嫌われてしまつたんだ……。

掴んでいた手がするりと解けて離れた。

私から遠ざかつていくアンジェリカ。

もう、この手が届くことはない。

小さくなつていくアンジェリカの後姿と一緒に、気持ちもどんどん離れていくようだった。

でも、追いかけることはできない。

アンジェリカを捕まえたところでこれ以上何を言つていいかわからない。

分かっているのは大切なものを失つてしまつたという事実。

私は大切なものを失つてしまつたんだ……。

彼女の金髪が横から吹いてきた風になびいているのが寂しげに見えた。

私の目から涙があふれ出る。

嗚咽を抑えるために私はずつと、震える口を手で押さえていた。

でも、それ以上にアンジェリカの複雑な思いを知らなかった。

アンジェリカを思つていたより深く傷つけてしまつていたことを。そして、何かが段々とカウントダウンされるように手遅れになつ

ていくことを。

私が、制服に着替えて体育館に戻ると、まだマックスとフェイは戦っていた。

体育館の中では、元チャンピオン同士の戦いという物珍しさで人

山ができていた。

「護恋さん！ 主役がそんなところで何してるんです！」

「えっ……あ……！」

私はルルに引っ張られて、デュエルがよく見物できるところまで連れてこられた。

でも、デュエルを見たいという気分じゃなかった。

アンジェリカとの友情にひびが入ってしまい、酷く気落ちしていた。

そりゃ、フェイとマックスの戦いはすごかったよ。

フェイにはマックスの瞳術が全然効かないみたいだった。

二人の剣さばきも素早くて目で追うのが大変だ。

だって、元チャンピオン同士だもの。

こんなプロの剣戟けんげき見たことないよ。

だが、終業のベルが鳴った。コードネルがサツと手を上げる。

『タイムアップです！ よって、この勝負、引き分けです！』

コードネルの楽しそうな審判の声が響き渡った。

「良いでしょう、フェイ。貴方の努力に免じて、護恋さんとの賭けは放棄してあげます。では」

マックスは心なしか楽しそうだった。

満足そうに微笑むと、デュエルの剣を箱に戻しに行った。

「フェイ、ご苦労様」

キャシアスがフェイに笑顔を送った。

「キャシアス様、労いのお言葉、とても痛み入ります」

フェイはキャシアスの言葉に恐縮して頭を下げた。

フェイの表情は曇っている。

マックスと引き分けだったけど、それがフェイには不満なのかな。「護恋、良かった。護恋の目の下に出てた烙印が消えたよ」

キャシアスが私のほうを向いて笑った。

フェイも安堵したような顔になった。

私は力なく微笑む。我ながら元気がないわ。

「ありがとうございます……でも、良かったのか悪かったのか……」
「護恋……」

キャシアスの気落ちしたような声に私は我に返った。

「あー、違うんです。何でもありません」

「護恋、私と護恋のことをいつまでもアンジェリカに隠しているわけにはいかないだろう？」

そんなキャシアスに私は腹が立った。

そもそも、アンジェリカとの友情にひびが入ったのは、キャシアスのせいなのだから。

「キャシアス様、むやみにアンジェリカを傷つけないください。

私は、キャシアス様と付き合う気はありません」

自分の言葉がやけにとげとげしいと自覚したがすでに遅かった。

キャシアスが苦しそうに息を詰めた。

「そういう、護恋も私を傷つけていることに気付いてないみたいだね……」

「ご、ごめんなさい……」

私の気持ちは、ぐちゃぐちゃだった。

なんで、こうも上手くいかないことばかりなんだろう。

大切な友人を傷つけてばかりの自分が嫌で仕方なかった。

そして、その日、アンジェリカは授業に戻ることはなかった。私は心配でアンジェリカの席の方ばかり見ていた。

第十七話 マックスの謎

その日の帰りのことだ。

私は、紅に染まる空を仰ぎながら、アンジェリカの屋敷に携帯で電話をかけていた。

「そ、そうですね。アンジェリカ様はお屋敷にご帰宅なさったのですね。それなら良いんです。ありがとうございます」

通話の切れる電子音がピツと響いた。
私は、携帯を胸ポケットにしまうと、寮に続く道をとぼとぼと歩き出した。

夕焼けで園舎が赤く染まっている。

もう皆は寮や家に帰ったのか、人気はまばらで辺りは静かだ。

たまに遠くで微かな声が、戯れて遠ざかる程度。

「ふう……」

はつきりと聞こえるのは私のため息ばかりよ。

私は、キャシアスがアンジェリカのことを好きになってさえくれれば、それでうまくいくと思っていたの。

そんなの造作なまじりないことだと気楽に思っていた。

でも、そんなに容易たやすいことじゃないみたい。

人の気持ちって、簡単に変わるようで、そうじゃない。

恋愛となると、とても頑固で融通が利かなくなるみたい。

私は、まだ恋愛なんてしたこと無いけれど、アンジェリカとキャシアスを見ていると良く分かる。

「……そうですね。護恋さんは、とても良いと思いますよ」
えっ……？

いきなり誰かの声が聞こえてきて、私の心臓が跳ねた。

それに、自分の名前が出てきて、私は驚いた。

誰かが話してる……？

私は、導かれるように声の方に歩いていく。

煙が一筋、声の方から風に乗って漂ってきている。

私は、煙の流れてくる方向　体育館の角を、すつと曲がった。すると、体育館の段になっているところの一人、誰かが腰掛けている。

そして、タバコを吹かしているようだった。

その光景に釘付けになり、私は足を止めていた。

あの光沢のある赤毛は　。

「では、神風さん、失礼します」

なっ!？　神風って、まさか、神風総理のこと!？

その人物は携帯を切り、腰を上げた。そして、こちらを振り向いた。

「おや、護恋さん？　立ち聞きですか？　良い趣味してますね」

それは、マックスだった。

につこりと赤い瞳を笑みに隠して、タバコをぷかぷかと美味しそうに吸っている。

「学園内でそれも、生徒の見ているところでタバコを吸わないでよ」文句を言うと、マックスはこちらに歩いてきて、私の顔に向かって吸い込んだタバコの煙を浴びせた。

「な、何すんのよ!」

私は、けほけほとむせる。

「じゃあね」

マックスは手をひらひらと振って、私の横を通り過ぎた。

「待ってよ!　マックスは神風総理と知り合いなの?」

マックスがぴたりと立ち止まって、こちらを振り向いた。

「……さあ?」

そうくすくすと笑いながら、またタバコを口にくわえる。

「さあって……!　総理に電話してたじゃない!」

マックスはうつすらと赤い瞳を覗かせた。

「じゃあ、私と付き合ってくれたら、教えてあげるよ」

次に用意していた私の台詞が、グツと喉に詰まった。

「い、嫌です！」

そう言つと分かっているはずなのに、マックスは良い性格してるわ。

私の反応を見て遊んでいるのかな。

悔しそうな私の顔を見て、彼はハハハとおかしそうに声を立てた。

「残念……じゃあね……」

マックスは、そのまま歩いて行ってしまった。

タバコの煙が充満しているような気がして、私は力任せに手で仰いで煙を消そうとした。

マックスは、煙と一緒につかみどころが無い気がする。

彼のことかますます分からなくなってしまうた。

その後、食堂に寄ると、中は生徒達でにぎわっていた。

座席を見渡すと知った顔が二人居たので、私は惹かれるようにそちらのテーブルに歩いていく。

色んな美味しそうな香りが鼻腔をくすぐる。

私の視線の先では、フェイとギルバートが夕食を食べていた。

二人で、料理をスプーンで口に運んでいる。

「カレー、美味しそう……！」

思わず声を出してしまったせいで、ギルバートが私に気付いた。

「護恋もカレーと一緒に食べようぜ！」

フェイとギルバートが、こちらを見て微笑んだ。

「う、うん！」

私は、釣られて笑顔になる。

なんだか、心がほどけていくような気がしたんだ。

私は、カレーをよそって持ってくると、ギルバートの隣に椅子を引いて座った。

「やっぱ、カレーは美味しいよな！ 朝昼晩食べてても飽きねえよ」「

「こいつの場合、食べすぎだ」

フェイが呆れている。

私は二人がおかしくて、ぷぷつと吹き出した。

「フェイも、ギルバートにカレーを食べようって誘われたの？」

「ああ」と、フェイ。

「インド人もびっくりね」

笑いながら言うと、フェイもギルバートも目をぱちくりした。

「インド人？ インドって国があるのか？」と、ギルバート。

「私の元居た世界にあるのよ。カレーもインドって国が発祥の地なの」

「ふーん？ カレーは最近できた食べ物だっと思ってたが、違ったのか」

フェイは、スプーンにすくったカレーをじつと見て、それから口にした。

「もしかしたら、神風総理がこつちに持ち込んだのかも……っついていか、聞いてよ！ マックスが神風総理に電話してたのよ！ しかも、私のこと言ってたの！」

「へえ……。あいつ、何しにイースティアに来たんだ？」

フェイが怪訝そうな顔になった。

でも、ギルバートは美味しそうにカレーをぱくついていたが、ひらめいたらしい。

「護恋を鍛えるためじゃねえ？ マックスに気に入られてんだよ」

気楽そうにギルバートは言う。

「そんなわけないだろ」と、フェイ。

「そうよ。そんなわけないと思うよ」

私も、フェイに同意だ。

「そ、そうかあ？」

ギルバートは私とフェイの答えに戸惑っている。

それにしても、何のためにマックスはイースティアに来たんだろ
う。

「護恋、フエイ、食べ終わったら、体育館でデュエルの特訓しようぜ？」

ギルバートが、ニツと笑った。

「そうだな、護恋をもう少し鍛えておかないと、マックスに目を付けられているから不安だ」と、フエイも同意する。

「良いの！？ よーし、食べ終わったら特訓よ！」

胸の高鳴る鼓動が、半端じゃない。

私は、カレーライスを一気にかきこんだ。

第十八話 疑い

静けさと闇が支配している体育館に、ライトが明々と点灯した。闇は小さくなつて私達の影に姿を変え、静寂は体育館シューズが床に触れ合う音で壊された。

まだ汗臭さが残る館内に、私達は足を踏み入れていく。

先ほどフェイが、担任のグロリアーナ先生と体育館を管理しているシンシエル先生に許可を得て、体育館の鍵を借りてきたというわけよ。

今日ここを使うのは、フェイとギルバート、そして私の三人しかないみたい。

「貸切りだね！」

私は、館内を走り回って開放感を味わう。

「広々と使えて良いんじゃない？」

ギルバートもそれに続く。そんな私達を尻目にフェイは、すました顔でゆっくりと後ろからついてくる。

「なんか、隅にロボットがいるけど」

私は、思わず笑ってしまった。

「置き場がなかったらしい。まったく、マックスは邪魔なものを持つてくる」

フェイが、ロボットの前で止まって嘆息した。

出口の方に、水中眼鏡をしたような白いボディで人型のロボットが、二十体ほど綺麗に並べられて鎮座しているんだ。

動かなかつたら、置物みたいで可愛いよ。

「それを特訓に使うぜ！」

ギルバートは、はりきつて箱の中から、練習用のデュエルの剣を引き抜いた。

麻痺薬のデュエルの剣は、ちゃんと他で管理されているから使うと思っても使えないのよ。

「でも、マックスがないからこのロボットは使えないよ」と、私
「どっかに、リモコンがあるんじゃないかねえ？」

ギルバートは、ペロりと舌なめずりした。そして、スイッチを探
してロボットに触っている。

「勝手に使ったら怒られるよ」

言いながら、私は髪をポニーテールにくくり直していた。

フェイが、そんな私のほうをじっと見ている。

なんで、私のほうをじっと見てるんだろう？

私がフェイへ疑問を返すと、フェイはすっと私から視線を外した。

「マックスに気兼ねする必要はない」と、フェイ。

「フェイの言うとおりだぜ！ それにしても、どうやったら、これ
動くんだけ？」

その時、ギルバートの触っていたロボットの腕がギギギ……と、
上がった。

「おっ、動いた？」

ギルバートの触っていたロボットの目が、パツと赤く光を放った。
そして、他のロボット達の目も流れるように一斉にスイッチが入
って、赤く光る。

「ぎ、ギルバート、なんか様子が変わだよ！？」

警告しているようなロボットの赤い目を見て、私は恐怖を感じて
一歩後ろに下がった。

「そ、そうみたいだな！ 護恋、フェイ、逃げようぜっ！」

私達は、一目散に逃げようとした。

でも、ロボットがすごい速さで走ってきて、フェイに襲いかかっ
たのよ。

「何で!？」

私とギルバートの方に、ロボット達は見向きもしてない。

二十余りのロボットは、一斉にフェイだけに殴りかかって行っ
たの。

でも、フェイはやっぱりすごかった。

彼は隙を見て、ロボットの一体に足払いをかけた。

ロボットの一体は、後ろを巻き込んで倒れ込む。

他のロボットが飛び掛ってきたけれど、フェイは回し蹴りを浴びせて、跳ね除けた。

そして、続けざまにロボットの腹に掌底てのひらを打ち込んだ。

更に、そのまま回し蹴り。

続けて距離を取り、助走をつけて飛ぶと、ロボットからロボットへ頭を踏みつけていく。

一気に、ロボットは倒れてしまった。

まだ、殴りかかってくるロボットがいたけど、フェイはロボットの腕を跳ね除けて投げとばした。

そして振り向きざまに、極めつけのかかと落としを、最後の一体に決めた。

とうとうロボットたちは、動かなくなってしまった。

「す、す……い……」

私は、あんぐりと口を開けた。

呆氣にとられるとは、このことよ。

「やるう！」

ギルバートは、口笛を吹いて面白がっている。

フェイは、制服のネクタイを緩めて息を切らしている。

でも、息が上がっているって言うてもほんの少しよ。

さすがとしか言いようがない。

「何なんだ、このロボットは」と、フェイ。

「フェイのことしか狙ってなかったぜ。俺たちは全然見向きもされてないし」

「そうよね……マックスの仕業かな？」

いつの間に、体育館の戸が開いていたんだろう。

夜気が、風と一緒に吹き込んできた。

「違いますよ」

闇をまもっていた人物は、明かりに照らされて姿をあらわにした。

「マックス……先生」

珍しく、マックスの表情が冴えてない。

「私の仕業じゃないですよ。ロボットを操作するリモコンが盗まれましたね」

マックスは、やるせなさそうに肩をすくめた。

「ええっ!? ちゃんと管理してくださいよ!」

私は、雑な管理に憤った。

マックスは、力なく笑う。

「大変なことにならなくて良かった。フェイ君が強くてよかったですよ」

「それは嘘で、本当はマックスが操っていたんじゃないのか?」

フェイが、そんなことを言った。

実は、マックスが犯人だという説ね。

私も、そう思っていたところよ。

だが、マックスはそれを笑いながら否定し、こちらに意味ありげなことを投げかけた。

「そう思うなら仕方ありませんが、そっちにも心当たりがあるんじゃないですか?」

「どういうことだ……?」と、フェイ。

「例えば、フェイ君が狙われた理由とかね……」

「そんな理由ない」

私は言いかけて瞬間的に、私の脳裏にある出来事が浮かんできた。

「そ、それにね、私……フェイのことが好きなの! だから……」

私が、アンジェリカに言った言葉。

それは嘘なのは間違いない。

でも、アンジェリカは、

「護恋が許せません……」

そう、私に告げた。

アンジェリカがもし、私のことを傷つけようと思って、フェイを襲ったとしたら。

私の顔から血の気が、サアツと引くのが分かった。
アンジェリカが、そんなことするはずがないと思うけれど、でも。

第十九話 襲撃!

「護恋、どうした?」

フェイが、私の様子に気付いた。

「な、なんでもないの!」

私は両手を振って、笑顔でごまかした。

マックスは、体育館の中を見て回っている。

ロボットに襲撃されて、気が削がれてしまった。

もう、修練する気分になれないよ。

「こんなところに、リモコンが!」

マックスは体育館の入り口の下に、リモコンが置かれているのを見つけた。

そして、嬉しそうにそれを手にした。

「いやあ、良かった良かった!」

なんだか、わざとらしく聞こえるのは気のせいなのかな……。

マックスは、鼻歌を歌いながらロボットを操作させて、元の位置に戻している。

夜のしじまに機械的な音が、うるさく響き渡った。

「帰ろうぜ……」

ギルバートが、溜息まじりに言った。

「そうね、もう、帰ろう」と、私。

マックスに振り回されて、疲れてきたよ……。

歩き出した私とギルバート。

だけど、フェイが付いて来ないことに気付いて、ギルバートが立ち止まった。

私もギルバートに釣られるようにフェイを振り返る。

「フェイ、帰らないのか?」

ギルバートが、不思議そうにしている。

「ちょっと、こいつに用があるから先に帰ってる」

そう言いながら、フェイは私を指差した。

「私に？」

用ってなんだろう？

「愛の告白でもすんのお？」

ギルバートはニヤニヤして、フェイを茶化す。

だが当のフェイは、動じた様子もなく、むしろ同調するよつにニヤリと笑ってみせた。

「似たようなもんだ。先に戻ってる」

「は……はああ？」

まさか、同意するだなんて！

私はフェイから距離を取ろうとしたが、フェイに手を掴まれてしまった。

「ひっ!？」

フェイが、にたりと笑ったので、ゾツと寒気がした。

「……い、嫌な予感がするよ……」。

「ヒューー! じゃあな、ご両人！」

私達を冷やかしたギルバートは、ご機嫌で手を振って走って行く。

「ちよつと!？ ギルバート!？」

私は、すぐるようにギルバートに手を伸ばしたが、もう遅い。

ギルバートは邪魔しちゃ悪いと思ってるのか、さっさと帰ってしまっただ。

余計な気を利かさなくても……っ!

マックスも、いつの間にかいなくなっている。

マックスに助けを求めようとしたが、無駄だったようだ。

フェイの手を振り払おうとしたのだが、彼は私を逃がすまいと、しっかりと手を掴んでいる。

「ちょ! フェイ、何考えてんのよ? そりゃあ、アンジェリカにはフェイのことが好きって言ったけど!」

動揺してしまい、私の身振り手振りがオーバーになる。

「ほお?」

フエイが、面白そうに目を細める。

し、しまった、余計なことを喋って……！？

空いた手をかざして、フエイを静止させた。

「いや、納得しないで！ 好きって言ったけど、それは嘘で私はキヤシア様のことを好きにならないっていう、私のアンジェリカに対する戒めで……」

顔が熱くなり、穴があったら入りたい気分になった。

途中から何を行っているのか分からなくなって、めまいを催^{もよお}してくる。

「もしかして、さっき言いよんだこととは、このことか？ アンジェリカ様がしたこともしれないと思っただんな？」

フエイの言葉が的確で、混乱していた私はハツと冷静になれた。

「あ、ありえないよ……ありえないと思うけれど……」

どうやら、私は疑心暗鬼になってしまったているようだ。

「ああ、ありえないな。アンジェリカ様は、そんなお方ではない」
フエイがきつぱりと否定してくれたので、私の心に晴れ間が差した。

「そ、そうよね！ 私の考えすぎよね！ そんなこと考えるなんて、馬鹿だよね！」

「ああ」

フエイは、やっと私の手を放した。

きつと、フエイはこのことを言及したかったに違いない。

やっと私は、いつものペースを取り戻して、につこり笑った。

「明日、アンジェリカに電話を入れてみるよ！ じゃあ、帰るね」

「女子寮まで送っていく」

「別にいいよ！ 一人でも平気」

「いや、良くない。お前に何かあったら、キヤシア様に叱られてしまう」

「あー、分かったよ。手駒も楽じゃないね……」

「構わない。女子寮と男子寮は隣だから、どうせ途中まで一緒だ」

「ああ、そつか！ そういえば、そうだね！」
体育館の戸を閉めて、鍵を職員室に返しに行った。
そして、私とフェイはそのまま、自分達の寮に向かって歩き始めた。

空を見上げると、満月が出ていた。

月明かりが程よく周囲を照らしているので、特に照明は要らない。
フェイと二人きりで、こうやって歩くのも新鮮だね。

夜の学校も、乙なものね。

虫達が、ジージーと眠そくに鳴いている。

夜の、バックグラウンドミュージック。

でも……、不意にその虫の鳴き声が途切れてしまった。

瞬間的に、暗闇からシュツと何かが、フェイに向かって振り下ろされた。

「……！」

フェイは、それを手で掴んだ。

フェイの手から、液体が滴り落ちた。

「……しまっ……！」

そのままフェイは、地面に崩れ落ちる。

「フェイ!？」

私は、慌ててフェイを抱き起こした。

「一体何が起きたの!？」

パニックに陥って、私は辺りを見回した。

ざわざわと、闇がうごめいたような気がした。

私の心臓が、不穏な警戒音を鳴らしている。

「……っ」

フェイが何か言おうと、息を詰まらせている事に気付いた。
でも、それは言葉になつてない。

「フェイ!？ 何が言いたいの!？」

フェイは、怪我をしているわけじゃ、ない？

ただ、動けないだけ？

「もしかして、麻痺薬!？」

「」名答!」

私達の前に誰かが出てきて、靴が地面にすれる音がした。

満月に照らされて、影が掻き消される。

「あんだ達!？」

月明かりで、彼らの手に持っているデュエルの剣の刃がぎらりと光る。

それは、この間弱いものいじめをしていた、あ那他校の生徒二人組だった。

第二十話 回避

他校の不良二人組は、悪狐のようにあくどい笑みを浮かべている。デュエルの剣が、月明かりで鈍い光を放っていた。

「この間はよくもやってくれたな？」と、不良の一人。

「お前等のお陰で俺たちは停学どころか、退学になるところだったんだ」もう一人の不良が言う。

私は、二人の言葉に眉を潜めた。

『退学になるところだった』って？

キャシアスが退学にしようとしたんだろう。

けれど……誰が、それを止めたの？

「この間の仕返しをさせてもらおう」

不良二人は、剣を構えた。

「や、止めなさいよ！ こんなの卑怯じゃない！」

私は、フェイの頭をぎゅっと抱きしめた。不良二人は、面白そうにそれを見て笑った。

「お姉ちゃん、今日はあんたに用はないんだ」一人が言った。

「えっ!？」

「俺達は、フェイに『デュシヤール』をしようと思ってね」

もう一人が、大げさに言って笑った。

「デュシヤールって影のデュエル!？」

それって、非合法のデュエルじゃない!

そんなことしたら、デュエルを取り締まる『ディージャ』という組織が黙ってない。

「俺達が勝ったら、謝ってもらおうか」

「謝るって誰によ!」

「俺達に。そして、後一つはフェイが良く知ってるんじゃないの?」

フェイが良く知ってる……?」

突然、植木の影からフラッシュが焚かれた。

誰かがカメラで撮っている？

「もしかして、まだ、仲間がいるの……！？」

「その通り、フェイがデュシャルをしていたと世間が知ったら、フェイは世の中から失墜するだろうね」

不良二人は下卑た笑いを浮かべて、楽しそうに語りだした。

「どういうこと？」

木の陰にいた誰かの靴音が遠ざかる。

とうとう、その一人を捕まえることが出来なかった。

私は、悔しくて歯噛みした。

「あの写真を新聞社に送るのさ。そうしたら、デュージャがフェイを捕まえる。そして、もうフェイはデュエルをすることすらできなくなつて、この学園からも追放だ」

私は、眉を吊り上げる。

「そんなことない！ フェイが襲われているって誰が見ても分かるもの！」

私が思わず叫ぶと、不良二人はおかしそうに笑った。

「甘いな。俺達のバックについてるのは素晴らしいお方だ」

「写真なんて、どうにでも合成できるし、新聞社だつてその方の味方なのさ」

「フェイは、もう終わりだ」

「そ、そんな！？」

私は、愕然となった。フェイが、今後一切デュエルできなくなる？でも、そんなことよりも、フェイが学園からいなくなつたら嫌だよ！

「あなた達、何をやっているんですか！」

この声は、もしかして！

「グロリアーナ先生！早く来てください！」

私は、声の方に向かって叫んだ。靴音が、複数走ってくる。

「まずい、撤収だ！」

二人は、デュエルの剣を持ったまま、そこから退散してしまった。

遠くから影が四体近づいてきて、月明かりの下で影を脱ぎ去った。
「グロリアーナ先生！ サーヴェリー先生！ ルル！ コードネル！」

ルルが、私に近づいてきて、私の手を取った。
ルルの手が、震えている。

「大丈夫か！？」と、コードネル。
「う、うん」

私は、首肯してコードネルを見つめた。

コードネルもルルの表情も、強張っている。

サーヴェリー先生とグロリアーナ先生は、不良二人を追いかけ
ていたようだが、捕まえられなかったようで引き返してきた。

「何て奴らなんだ！ けしからん！」と、サーヴェリー先生。

「本当です！ 護恋さん、フェイ君、怪我はありませんか！？」

グロリアーナ先生は、一人心配している。

「ありませんけど……でも」

私が一部始終を話して聞かせると、皆は青ざめてしまった。

「もしかして、バックについているというのはマックス君じゃない
かね？ あんな嚴重に管理している麻痺薬とデュエルの剣を簡単に
持ち出せるのは教師ぐらいだからな！」

サーヴェリー先生は、険しい顔をして顎を触っている。

「サーヴェリー先生、職員室内が混乱しているのは分かりますが、
そんな簡単に疑うのは良くありません」

グロリアーナ先生が、サーヴェリー先生をたしなめている。

「そうかもしれないが……他に誰がこんなことをやるといっただね？
こういう問題が起きたのも、マックス君が学園に来てからじゃな
いか！」

「それは……」

グロリアーナ先生は、押し黙ってしまった。

「で、でも、どうするんです！？ フェイ君が退学とかになったら
！」

ルルは青ざめてうろたえている。

「どうしたら……そうだ！」

私は、フェイのポケットの中を探って、フェイの携帯を取り出した。

フェイが恨みがましそうな目で、こちらを見ている。

「フェイ、ちよつと借りるから！」

フェイの携帯を操作して、私はキャシアスに電話をかけた。

コール音がして、キャシアスが『はい』と出た。

『どうしたの、フェイ』

「キャシアス様！」

『護恋？ どうして、護恋がフェイの携帯に出るの？』

「実は、大変なんです！」

私がキャシアスに、一部始終を話して聞かせていたその傍で、ルルがまだ、動転したように青ざめていた。ショックだったとしても様子がおかしい。

「ルル？」

「え？ あ？ なんでもないんです！ 気にしないでください！」

ルル……？

「そう？ ならいいけど……」

気のせい、なのかな……？

私はそんな彼女を一瞥して、キャシアスと話すことに集中しはじめた。

「フェイ君、動けますか？」と、グロリアーナ先生。

「ええ、大丈夫です。グロリアーナ先生、サーヴェリー先生、ご心配をおかけしました」

フェイは、やっと麻痺が取れたみたいだ。

「競技場ハルシオンの元チャンピオンも、人の子というわけか」

サーヴェリー先生は、面白そうに笑みを浮かべている。フェイはそれに愛想笑いを返していた。

フェイの携帯を切って、私は晴れやかな気分でフェイの方を振り

返った。

「フェイ、キャシアス様が何とかしてくれるって！ だから、フェイは何も心配要らないから！」

私が笑顔でそういうと、フェイはにやりと笑った。

「ありがとう、護恋」

私は、素直なお礼に面食らった。

「えっ？ ああ、お礼なんて良いのよ！」

私は、何故か顔が熱くなって、手で仰いでいた。

「それにしても、卑怯な連中だ。正々堂々とやっても俺に勝てないからあんなやり方しかできないんだな」

フェイが、挑発するように吐き捨てた。私は、やりきれない気持ちでそれを聞いていた。

第二十一話 護恋の思索

寮の自分の部屋に帰って風呂から出てくると、ちょうど夜の十時になるところだった。

掛け時計の秒針の音が、静かな部屋の中で響いている。

酷く疲れてしまい、私はベッドに横になって目を閉じた。

でも疲れているのに、今日はなかなか寝付けなかった。

携帯を手にとって、アンジェリカにメールを打ち始める。

『ごめんね、アンジェリカ。私は、本当にキャシア様のごことは恋愛対象じゃないから。元気出して明日は学園に来てね』

送信完了を確認すると、くたびれた腕を枕の脇に落とした。

心の中が、まだ重いような感じがする。

やっぱり私は疑っているんだ、アンジェリカのことを。

フェイには違うって言われたけれど、動機があるのはアンジェリカと、マックスとファンクラブの子だ。

犯人はロボットを動かしてフェイを襲わせ、それでも飽き足らずに不良二人をフェイにけしかけたんだ。

フェイが、どう考えても狙われている。

マックスは、私に心当たりがあるんじゃないかって言った。

ファンクラブの女の子達が、フェイを襲うとは考えられない。

心当たりっていうと、アンジェリカのことしか考えられない。

私が、アンジェリカにフェイが好きだって言ったから、アンジェリカが復讐の為にフェイを。

バックに付いているのはすごい人だって言ってたし、やっぱり、アンジェリカが……。

私は、思わず頭を振っていた。

やっぱり、アンジェリカはそんなことしないよ！

でも、なんで、マックスが心当たりがあるってことを知っているの……？ マックスが犯人と通じているから……？

それに、マックスは、神風総理と携帯で話していたし。

「分からないことだらけだ……」

眠ろうと目を閉じた。

それでも、余計に考えてしまつて眠れない。

明日、アンジェリカが私に普通に話しかけてくれたら、楽になるんだらうけれど。

「ちよつと、体育館で素振りしよ！」

起きてジャージに着替えた。そして、体育館に出かけて行こうと靴を履き替える。

寮の外に出ると、どこかでフクロウが鳴いていた。

私が歩き出すと、後ろで砂を踏む音が聞こえた。

……なんだろ？

気にしないで歩いていくが、後ろから誰かがゆっくりと付いて来る。

な、何！？ もしかして、変質者！？

寮に戻ろうと振り向いたが、寮の入り口に誰かが立っている。

帰るに帰れない……！

仕方ない学園内をぐるっと回ってから、この人を巻こう！

思い切つて体育館の方へ走ると、影も追従するように走ってきた。

「うああああああ！？」

それどころか、私を上回るスピードで私を追い抜いて、目の前に立ちふさがった。

「おいっ！」

聞いたような声だったが、恐怖でいっぱいではどこでもない。

私はそのままターンして、走り去ろうとした。

だが影は、私の首根っこをガシツと掴んだではないか。

「ぎゃああああああ！ 襲われるっ！」

私が大声を出すと、その影は私の口を手で塞いだ。

「むぐう！？」

「お前は、馬鹿か！」

私は恐怖で見開いた目を瞬いた。
手がようやく放される。

「あ、れ？ フェイ？ ど、どしたの？」

そこにいたのは、怒り狂ったフェイだった。

「……な、なんか、ご機嫌斜めだね？」

「どしたの？ じゃない！ 俺が襲われた後に、夜中にそれも一人で外に出る馬鹿がいるか！？」

「い、いや、眠れないから、体育館で素振りしようと思って……」

「この、ドアホが！」

「ご、ごめん」

私も考えなしだった。反省。

でも……。

変質者でも、フェイでも、どっちにしる怖かった……。

フェイに許可をもらって、また体育館の方に歩いていく。

「どうして、私が外に出るってわかったの？」

「匿名で電話があった。お前が外に出ようとしているというな」

「は、はあ！？」

「ストーリーカー！？ そう考えて、私は心当たりがあることに気付いた。」

「もしかして、神風総理関連かな……？」

「前も、監視されている気がしたんだよね。」

「さあ、それは知らんが」

フェイはふうと、疲れたようなため息を付いた。

「嗚呼、何故、キャシア様はこんな馬鹿、もとい、単細胞、もとい、ミジンコ脳の女がお好きなのか！ 俺にはさっぱりわからない！」

「まだ怒ってるの……？ フェイって結構ねちっこいよね？」

「おーまーえーはーっ！ もう少し反省しろ！」

「わあああ！ ごめんっ！」

フェイに睨まれるのが怖くて、私は体育館の方まで走った。フェイが後ろから追尾してくる。

明かりが漏れていることに気づいて、私は足を止めた。

「あれ？ 体育館の照明が点いてるや……」

体育館に到着すると、誰かが剣で戦っている音が外まで聞こえていた。

「誰だ？ こんな遅くに……」

フェイが、怪訝そうに眉を潜める。

私は段を上がり、体育館の戸に駆け寄った。

そつと体育館の戸を引いて開けると、強いライトの光が目をくらませた。私は目を瞬かせて、光に慣れようと努める。

「やあ、護恋さんじゃないですか！ フェイ君もどうしたんですか？」

「げっ、マックス……。まだ居たの？」

一人で来ないで良かったーと、フェイに感謝したよ。

でも私は、マックスが誰と剣で戦ってたのか気になった。

そして体育館の奥に目をやると、思いがけない人物がいることに気が付いた。

第二十二話 思いがけない正体

「よう。護恋、フエイ」

体育館の奥から、彼はこちらへと歩み寄ってくる。

彼の茶色で短い天然パーマが、夜風にふわふわと揺れていた。

「コードネル？　なんで、コードネルがここに居るの？」

私は、面食らってしまった。

学級委員で規則委員のコードネル。

マックスとコードネルの組み合わせは、意外すぎる。

不思議に思っ、コードネルをまじまじと観察していた。

今日は、赤いフレームの伊達眼鏡をかけてないみたい。

それどころか。

「な、何で審判専門のコードネルがデュエルの剣を持っているの？」

振り返ると、フエイも不思議そうな顔をしていた。

マックスは目を細めて、私達の一挙一動を楽しんでいる。

「俺がデュエルの剣を持ってちゃ悪い？」

コードネルが、剣を手に持って微笑している。

「そ、そんなことないけれど……もしかして、デュエルしてたの？」

私の疑問に、コードネルは「まあな」と言っ、マックスを見上げ

て笑っている。

「私に教わって、前々から特訓をしていたんですよ」

マックスは、コードネルの頭を撫でている。

特訓って……？　一体何のために？

コードネルは規則委員を辞めるのかな？

「ねえ、コードネルも誰かの手駒になるの……？」

コードネルは唐突に吹き出した。

「まさか！」

「じゃあ、どうして？」

コードネルの目が泳ぐ。

「ああ、それは……フェイに勝つためだよ」

「俺に……？ どうしてだ？」

「フェイが一番良く知っているんじゃないの？」

コードネルが一笑する。

「え？」

「分からないから聞いてるんじゃない。別に喋りたくなければいいけど」

コードネルは諦めたように笑う。

そして、大仕事が終わった時のように嘆息する。

「話さないでもいいんだけど、秘密の特訓も見つかったし、そろそろ潮時かなと思うんだ。それに、フェイの傍にはキャシア様がいるから、調べられたらすぐに分かってしまう。捕まってからでは遅いんだ」

「何を……言っているんだ……？」

私とフェイの眉間のしわが深くなる。

コードネルの言っていることは謎かけのようで良く分からない……

…。

「フェイに……」と、コードネルは一呼吸置いた。

そして、覚悟を決めたらしい。

「フェイに、怪我をさせてやろうと思って、ロボットをけしかけたけれど、デュエル以外でもあれだけ強いとはね」

「！？」

いきなりの犯人の告白。

私は驚いてしまい、言葉が詰まって出てこない。

そうよ。マックスがそんなに簡単にロボットのリモコンを手放すはずがない。

マックスとコードネルが裏で繋がっていたんだ。

「不良たちを助けてやったけれど、あいつら、べらべら喋っちゃうんだもんな。黙っていりゃ、上手くことが運んだのに……残念だ」

コードネルはいたずらげられた時の子供のように肩をすくめた。

「そういえば、あの時、不良は麻痺薬の付いたデュエルの剣を持っていたよね。麻痺薬は規則委員か教員でないと、管理ができないはずよね。嚴重に管理しているんだもの。あんなに簡単に持ち出せるはずがない。でも、コードネルは規則委員だから……。そう考えると、つじつまが合う」

「ご名答。俺が使わせたんだ」

でも、いたずらにしても度が過ぎるんじゃない……。

「すごい人がバツクにいるって……」

わたしは何を言っただけか分からずに、そんな言葉を口に出していた。

だけど、コードネルは馬鹿馬鹿しそうに笑い捨てた。

「すごい人だって？ 俺の実家は男爵なんだ。アンジェリカ様やキヤシアス様と比べたらそんなにすごい位でもないだろ」

ふと、ルルの動揺した顔が、私の脳裏をよぎる。

「もしかして、ルルが青ざめていたのって……」

「そう、ルルには勘付かれた。俺が影で何をしているのかもね。ルルは良い奴だよ。黙っててくれた……」

コードネルは、辛そうに笑う。

「コードネル、何故だ？」

フェイの問いに、コードネルの表情が険しくなる。

「自分の胸に聞いたら……？ もっとも、分からないみたいだから、俺はムカついているんだけどな！」

コードネルの声が、とげとげしくなる。

今や笑みは消え、フェイの顔を睨んでいる有様だ。

「もしかして、マックスにデュエルを習っていたのって、わけの分からぬ理由でフェイを打ち負かすために？」

私は失言したと思ったが、もう遅かったようだ。

コードネルは私まで睨んで、たまりかねたように叫んだ。

「わけの分からない理由じゃない！ そんなことで、俺は友達を傷つけたりしない！」

「そうか……」

「フェイ？」

フェイが、にやりと笑っていたので私は驚いていた。

こんなときに笑える余裕があるなんて。

「じゃあ、今から俺とデュエルをしよう。剣で全てを語ってもらおうか」

コードネルの目が、敵意で燃え上がる。

「良いぜ？ もっとも、俺は規則委員だけあってフェイの剣を研究しつくしている。マックスから剣の手ほどきを受けて、強くなったという自負もある」

「それは面白い」

フェイの笑みが、深くなる。

フェイの笑い方が挑発的だったせいか、コードネルのこめかみに青筋が立っていた。

「絶対に俺が勝って、フェイを……お前を、地べたに這はいつくばらせてやる！」

第二十三話 一方的な思い

コードネルとフェイは、たがいに睨み合っている。

視線がぶつかって、火花が散っているようよ。

「でも、デュエルをするって言うても、誰が審判をやるの？

まさか、マックスが？」

マックスは、意外そうに笑みを浮かべた。

私の台詞が、よほど面白かったらしい。

「私は構いませんけれど、良いんですか？ 審判の資格を持ってま

せんが」

私に尋ね返すマックス。

「うっ……やっぱり良くない」

「審判の資格がないとやっぱり駄目だ」

フェイも同感だったようだ。

「私がやります！」

後ろで物音がして振り返ると、見知った人がそこにいた。

彼女は意を固めたような面構えで体育館に入ってきていた。

「ルル！？」

私は驚いて、ルルを見る。

ルルが上に顔をそらすと、体育館の照明で赤いフレームの眼鏡が光った。

規則委員の証である眼鏡が。

「私なら、審判の資格を持っています。私、コードネル君もフェイ君もクラスメイトとして好きだから……だから、規則委員の名にかけて任せてください！」

「ルル……」

コードネルがどこか安堵した様子でルルを見て笑った。

先ほど、彼がフェイを見ていたような憎しみは感じられない。

「コードネル君、何があったか分かりませんが、私はコードネル君

を信じます!」

ルルは眼鏡の奥の青い綺麗な瞳で、真っ直ぐにコードネルへ訴えた。

「ありがとう……」

コードネルは嬉しそうに目を細めた。

断金の契りって奴かな。

こういうコードネルを見ていると、とてもあんなことしそうに思えないのに。

ますますコードネルが分からなくなったよ。

「では、賭けの確認をします!」

ルルが、コードネルとフェイを前に立たせた。

「フェイ君の賭けは?」

「俺の賭けは……そうだな。罪を償ってもらおうか。そして、理由を話せ」と、フェイ。

私も、そうして欲しいと思うよ。

コードネルは、決心したように頷いた。

「それでも良いよ。俺だって、生半可な気持ちでこんなことを企てたんじゃないんだ」

コードネルは、自分の手をぎゅっと握り締める。

「コードネル君の賭けは?」

「俺の賭けは、フェイに謝ってもらおう」

「フェイに謝る……?」

私にはわけが分からなくて、眉間のしわを深くした。

フェイは、ハッと馬鹿馬鹿しそうに笑った。

くだらない理由だと思っっているんだろう。

「ああ、いくらでも謝ってやる」

どうでも良いと言わんばかりのフェイの発言を聞いて、コードネルの顔がカツと怒りで染まった。

「絶対に……! 絶対に謝らせてやる!」

「良いだろう」

フェイは、にやりと口の端を引き上げる。

ルルが持つて来た箱の中から、デュエルの剣を二人は引き抜いた。麻痺薬の付いている剣であることを目で確かめている。

ルルがヘッドホンマイクを付けて、分厚い本を開いた。

『今からフェイVSコードネルのデュエルを行います』

ルルが高らかに片手を上げて宣言した。

『掟の神テュテュスの名の下にルルは審判の立会いを務めます』

決闘の書を開くとページが勝手にめくられていく。そして、真ん中のページを開き終わり、その書は落ち着いた。

『この審判の判断はこの決闘の書の判断にゆだねます。ルルはテュテュスと規則委員の名の下に公平な判断をすることを誓います』

決闘の書に『対戦者フェイ認証』『対戦者コードネル認証』『審判者ルル認証』という文字が次々とページに浮かび上がり消えていく。

『最初に、決闘七ヶ条を読み上げます』

そして、デュエルの決闘七ヶ条の定型文を読む。ルルの手元をずっと覗いていたけれど、ページが勝手にめくられて、何も無いページに条約が綴られてルルが読み終わると消えていく。そして、またページがめくられる。その繰り返しだ。

『賭けの確認をします』

ルルが賭けの内容を言うと、文字がざざっと集まって消えていった。絶対的な賭けが認められたのかどうかは分からない。

『これより、フェイVSコードネルの一本勝負を行います！』

フェイとコードネルは剣をそれぞれに構えている。

『では、始め！』

フェイが、仕掛けるより先にコードネルが動いた。

コードネルはかけ声を出さずに、ただ走って距離を詰める。

そして、剣を繰り出して、フェイと二、三度交わす。

だけど、フェイの姿がすっとコードネルの後ろに回った。

後ろを取られたら終わりだと、私は思っていた。

でも、コードネルはサツと振り返る。

「後ろから来る確率八十パーセント！」

ギインと、剣が擦れあつて離れた。

フェイは驚いた様子で「ほう？」と目を細める。

フェイはまた剣を振りかぶつて、素早く動いた。

「次は右！ 次は切り上げる！ と、きたら恐らく次はその流れから左！」

驚いたことに、フェイはコードネルの言ったとおりの動作をしている。

そして、コードネルはフェイの繰り出す剣を受け止め、それどころか攻撃を展開している。

「す、す……」

私は、思わず感嘆の息を吐いていた。

ルルも、真剣な顔で見守っている。

マックスだけは楽しそうだけど。

「お前、たいしたもんだな？ 審判にしておくのは惜しい」

フェイが、感心したように呟いた。

その間も、剣が激しく打ち合つて、火花が出そうなくらいだ。

「俺を舐めてただらう！？ 俺をマックスが持って来たロボットのデータと同じにして欲しくない！ 俺の分析はロボット以上だからな！」

「そうか」

「でも、フェイの弱点は悔しいけど分からない！ だから、マックスに教えをこつたんだ！」

フェイが、にやりと笑う。

「俺の弱点はすでに自己分析して、徹底的に弱点を克服しているからな。そう簡単に分かつては困る」

「くっ！」

フェイの体さばきと剣を振るう速度が上がった。

そのため、コードネルの顔から余裕が消えた。

付いていくのが精一杯みたいだ。

隣でルルが、手を組み合わせて祈っている。

私も、なんだかやるせなくなつたよ。

クラスメイトなのに、どうしてコードネルは。

「どうしてだ？ どうして、俺を恨む？ どうして俺に謝ってほし
いんだ？」

私の疑問を、フェイが代弁した。

コードネルの顔が、怒りに歪む。

「俺にじゃない！ フェイに謝れ！」

フェイの顔が一瞬で強張った。

急にフェイの剣が勢いをなくした。

何？ 何なの？

「フェイって……」

その『フェイ』という人の名前を、どこかで聞いた気がした。

だけど、どうしても思い出せなかった。

第二十四話 勝負の行方7

「うあああつ！」

コードネルは声を張り上げて、フェイの体へ剣を振り下ろしている。
く。

フェイは、それを剣で受け止めているが、コードネルに押されっぱなしだ。

「ね、ねえ、ルル？」

私は、ルルに視線を戻した。

「何ですか、護恋さん」

ルルは、ふたりのデュエルの方を向いたままで答える。

彼女の顔は真剣そのものだ。

「ルルは知ってる？ その……FINEって人」

「FINEは去年いじめが原因で自殺してしまった男の子です」

「そ、そういえば……」

前に、キャシアスが言っていた。

去年、嫌な事件があったって。

しかも、フェイが。

「FINEとコードネルは友達だったんです。親友と言っていいほどの……」

ルルは辛そうに視線を下げたが、気丈にふたりの決闘を見ていた。

コードネルは怒りで剣を振り回している。

「フェイはあの時言っていたよな！？ FINEが死んだのは俺のせいって！」

「ああ」

「フェイもいじめに加担していたんだろう！ だから、そんなことを言ったんだ！」

フェイは剣を受け止めながら嘆息した。

「FINEは他校の生徒に目を付けられていたらしい。恐喝されてい

た」

「だから、お前も！」

「俺は、その生徒達を懲らしめて、今まで恐喝していた分のお金をファイネに取り返してやった」

「えっ……？」

驚愕でコードネルの動きが止まる。

フェイも剣を止めて、その場に立ち止まった。

「俺はそれで解決したと思っていた。だけど、その後、他校の生徒がファイネに報復したらしい。それが原因でファイネは。後で、俺が証拠を見つけて、警察に通報したんだ。だから、あいつらは捕まったが、結局、俺がファイネの様子に気が付かなかったせいで、ファイネは死んだといってもおかしくない。俺のせいだ」

フェイは気落ちしたように嘆息した。

コードネルは目に涙をいっぱいためて、「はあ！？」と顔全体で呆れ返っている。

「な……なんだよ！？ そんなの、お前のせいじゃないだろ！？ 被害妄想も大概にしろよ！？ 俺はてつきり……ッ！」

「……すまない」

コードネルはその場に崩れ落ちた。

そして、剣を投げ捨てて、体育館の床を拳で叩く。

「うわああああああああああああ！」

コードネルの目から涙が滝のように伝い、床に跳ねて光を散らした。

『こ、この勝負、コードネルの武器放棄で、フェイの勝ちです！』

コードネルの首元に小さな星マークが浮かび上がった。絶対的な賭けが発動された者に刻まれる烙印だ。

ルルは言った後、コードネルの傍に駆け寄って、背中に手を置いた。

「大丈夫ですか、コードネル」

ルルは震えるコードネルを支えようとしている。

私は、何もできない。

今回の事件はあまりにも。

「もう、覚悟はできた……ディージャに通報でも何でもしろよ……」
コードネルは泣きはらした顔をフェイへと上げる。その目からはもう憎しみが消えている。フェイが面白そうに笑った。

「へえ？ 俺が通報したらお前だけじゃなくてお前の実家にも迷惑がかかるが」

「ああ……」

コードネルは自分の腕をぎゅっと握る。

「お家御取り潰しでも、おかしくないが」

「ああ！ 俺が悪いんだ！」

フェイの言葉に、コードネルは顔を伏せてしまった。

「ちよつと、フェイ……！」

私がおか言う前にフェイは私を手で制した。

「それだけ、覚悟ができているなら平気だな」

「ああ！」と、コードネル。

「これからも、学級委員と規則委員の活動に尽力しろ。先ほどの賭けは取り消しだ」

「ああ！ ……つて、えっ!?!」

コードネルはフェイへ顔を上げて固まっている。コードネルの首に浮かび上がっていた星マークが消えた。賭けが取り消されたからだ。

「聞こえなかったのか？」

フェイが楽しそうに口の端を吊り上げた。

「ど、どういう意味だよ!?!」

「誤解させたのは俺も悪いってことだ。だから、今回のことはなかったということにする」

「なん……だよ……！ お前、どこまでもかっこよすぎだろ！ ちくしょー!」

コードネルは安堵したように笑いながら泣いている。

「コードネル君、良かった！ フェイ君、ありがとう！」

ルルは晴れやかそうに笑って、コードネルに寄り添っている。

「うん、本当に良かった！ フェイ、えらい！」

私がそういうと、フェイが私のポニーテールを後ろに引っ張った。

「何すんのよ！」

「前々から思っていたんだが、お前のポニーテール、おもちゃみたいな」

「あうっ!？」

フェイは私のポニーテールを後ろにぐいぐいとひっぱる。

私のポニーテールを気に入ってくれるのは嬉しいんだけど……。

「もう、止めんか！」

私は怒鳴って、フェイの手を振り払う。

終いには、私とフェイは取っ組み合いになってしまった。

けど、一方的に私が遊ばれている。

「俺に勝てるんでも？」

「いつか勝ってフェイに百年間の賭けを！」

「調子に乗るな」

「どっ、どっちがよ！」

次第にみんなの顔に、笑みが広がっていった。

体育館の中は賑やかになる。

「あれ？ マックスは？」

私達は、マックスがいらないことによく気付いた。

「さあ？ さつきまでいらっしやいましたけど……」

「まあ、いつか！」

私達はのんきに笑っていた。

アンジェリカのことを疑ってしまって、反省しきりだよ。

ごめんね、アンジェリカ。

これからは、何があっても信じるから。

そろそろ、寮に帰って眠ろう。きつと良く眠れるわ。

丁度満月が雲に隠れていた。その暗闇の中を誰かが歩いている。

「ええ……分かりました」

それは、マックスの声だった。

雲が流れ、満月が顔を出した。

「そろそろ、強硬手段に出ます……」

風がサアツと吹き抜けて、マックスの髪を撫でていった。

空に浮かぶ満月は怒りが増すような赤い色をしている。

マックスの瞳が満月の光で鈍く光った。

私はこれから、何が起きるのか予想すらしてなかった。

平和になった喜びでゆっくりと眠っていたのよ。

第二十五話 呼び出し

「……と、いうわけなんですよ」

翌日、教室でキャシアスに昨夜の出来事を話して聞かせると、彼は安堵したように目を細めた。

「へえ、それはご苦労だったね。フェイも護恋のボディガードをありがとう」

「いえ、お安い御用です」と、フェイは恐縮している。

「フェイが狙われていた理由も分かったし、これで一件落着かな？」

「そ、そうですね……」と、私は曖昧に笑う。

キャシアスから隣の席に目を移す私。

アンジェリカは、今日も学園に来なかった。

キャシアスは、これで納得しているかもしれないけれど。

私の気分は、降下気味だよ……。

キャシアスが、私に同調するように声を潜めた。

「アンジェリカのことは、仕方がないが……」

私は下を向いて、握り拳を作った。

「どうしよう、このままアンジェリカが学園に来なくなったら……」

「お前が気にやむことはない」と、フェイ。

「でも……!」

その時、誰かが私の横に立った気配がした。

ルルが、こちらに向かって微笑んでいる。

「護恋さん、保健のジェイディ先生が保健室に来るように仰ってますよ」

「えっ？ 何の用だろ……ちょっと、行って参ります」

「ああ、行っておいで」

キャシアスとフェイも、快く見送ってくれた。

やっぱり、アンジェリカに許しを請わないといけない。

全部、私が悪いんだから。

アンジェリカのお屋敷までまた行ってみようかな。
そうしたら、許してくれるかも。

保健室の近くは、教室がないので静かだ。
どこかで歌を口ずさんでいるような声が、風に乗って耳に届く。

「失礼しまーす！」

保健室の中に入ると、ドアを閉めた。

雑音が遮断されて、どことなく静まりかえっている。

私は、辺りを見回す。

「ジェイデイ先生……？　いないのかな……？」

保健室の中に入って、奥まで探ってみた。

ベッドのカーテンを引いてみる。

でも、人っ子一人いやしない。

私が室内に入ったのを見計らったように、保健室のドアが音を立てて開いた。

「ジェイデイ先　……！？」

振り返って肝を冷やした。

ボタンとドアが、閉められる。

「呼んだのは私ですよ」

そこにいたのはマックスだった。

マックスの顔にはいつもの笑みがない。

マックスは、一步私の方に踏み出した。

「な、ななな、何ですか！？　私をこんなところに呼び出して！？」

マックスを見たまま、私は後ろに下がっていく。

「何って、貴方が悪いんですよ？　自分の胸に良くお聞きなさい」

彼は段々と私のほうに、にじり寄ってくる。

「何言ってるんですか……！？」

ついに私は、後ろの壁にぶつかった。

退路は完璧に塞がれてしまった。

「私は強硬手段に出ることにしました」

マックスは瞳を開いて、私の目を覗き込んだ。

「あ……！」

私は、そのまま動けなくなって、壁からずり落ちた。

マックスが、私に覆いかぶさる。

そして、私のネクタイを解いた。

私は、恐怖でいっぱいだけど、何もできない。

指を一本動かすことも。

誰か、助けて……！

私の目から涙が零れ落ちる。

途端に、マックスの手が体がびくりと震えた。

「やはり駄目だ……私は、こんなことはできない……」

マックスはぼつりと呟いて、疲れきったように息を吐く。

そして、眉を寄せたまま私のネクタイを結びなおす。

「すまない……ある方の命令でね……。外に、車を用意してある。

護恋さんは、すぐにアンジェリカ様のお屋敷に向かってくれ……。

そこで、理由が明らかになるから」

マックスは立ち上がり、そのまま部屋を出て行った。

金縛りが解けたように、私は上体を起こした。

あ、危なかったよ……！

それにしても、アンジェリカのお屋敷に向かってくれって……？

逃げるように校庭に出ると、本当に車が止まっていた。

しかも、アンジェリカのお迎えのリムジンらしく、運転手さんも

顔見知りだった。

「こ、こんにちは……」

私は、愛想笑いを浮かべるしかなかった。

その笑いも引きつってしまったけれど……。

運転手さんは腰を折って「どうぞ、お乗りください」と、リムジ

ンのドアを開けた。

「ど、どうも……」

私は、広いリムジンの中でちょこんと座る。

ドアを運転手さんが閉めてくれた。そして、運転席に運転手さん

が乗ったのが確認できた。

窓の外を見ると、次第に景色が流れ出す。

携帯を取り出して、アンジェリカに電話をかけた。

『はい』

携帯でもアンジェリカの声はいつもどおりだった。

「あ、アンジェリカ！ この間はゴメンね」

携帯を持ったまま頭を下げる私。

『いえ、私も謝らないといけませんわ』

私は、ほっと溜めていた息を吐いた。

アンジェリカはそんなに怒ってないみたい……。

「あ、あのね？ 私ね、今ね、アンジェリカのお屋敷に向かってるんだ！ アンジェリカとお話が出来たらいいなと思って……」

それは嘘だったけれど、どう言い訳したらいいか分からない。

まさか、マックスがアンジェリカのお屋敷に行けって言ったなんて伝えられないよ。

『それは、私が護恋をお呼びしましたから』

アンジェリカは、くすくすと笑っている。

「そ、そっか……！」

『では、お待ちしてますね？』

携帯の通話が切れて、電子音がツーツーと鳴っている。

携帯の電源を切って、二つに畳んだ。

なんで、アンジェリカは私を呼んだの……？

まさか。

恐ろしいことを考えそうになって、慌てて頭を振った。

「私は、アンジェリカを信じるよ！」

後は、野となれ山となれよ！

第二十六話 アンジェリカの訴え

アンジェリカの屋敷に着くと、執事さんが私をその中に通してくれた。

以前と代わり映えのない、クラシックがバツクに流れているかのような趣おもむきがある西洋風の屋敷だ。

少し空気が重いような気がして、私は二、三度深く息を吸い込んだ。

「ここでございます」

執事さんが部屋のドアを開ける。

私は、「ありがとうございます」と愛想笑いを浮かべながらドアをくぐった。

「では、私めはこれで失礼します」

執事さんは、愛想のいい笑いを浮かべて出て行ってしまった。

ちよつとだけ、執事さんの手助けをあてにしていたただけだな。

「護恋、いらっしやい」

アンジェリカは真っ白なワンピース姿で、こちらにふんわりと笑いかけた。

もしかして、アンジェリカは無理しているんだろうか。

「あ、アンジェリカ……！ この間はゴメン」

私が軽く頭を下げると、アンジェリカは嬉しそうに笑った。

「ええ、構いませんわ」

「ところで、何してるの？」

アンジェリカは色とりどりの花の茎を、水を張った洗面器の中で切っている。

「水切りですわ。こうやって茎の根元を水の中で切ると、切った花の寿命が長くなるのです」

「へえ……！ アンジェリカは、物知りなんだね！」

アンジェリカの左手の人差し指には絆創膏がまだ巻かれてあった。

まだ、傷が治らないのかな。

料理をして手を切ったって言ってたけど。

アンジェリカの料理も食べてみたいな。

今日、もしかしてご馳走してくれるかも！

私は久しぶりに、アンジェリカの隣に立って舞い上がっていた。

嬉しくて、にこついていると、アンジェリカが嘆息した。

「私も、キャシア様様の思いを長く持てたら幸せでしたのに……」

そうして、またパチンと水切りするアンジェリカ。

そのはさみの音が、私には拒絶するように聞こえた。

「あ、アンジェリカ……」

何を言ったらいいのか分からなくなってしまった。

「護恋がデュエルに勝って、私とキャシア様様を付き合うようにしてくださいましたのですね？」

「いつから、知ってたの？」

「ずっと前からです。私はそれでも幸せでした」

アンジェリカの目から涙が零れる。

「キャシア様が私のことを思ってくださいさらなくても、私はあの方のお隣を歩けるだけで充分でした」

アンジェリカはハサミを動かして、ユリの花の根元をパチンと切った。

そして薔薇の活けられている花瓶に、ユリの花を挿した。

薔薇の横に咲くユリ。

私にはそれが、ついこの間までのアンジェリカとキャシア様様に見えた。

「アンジェリカ……ごめん。でも、私にできることなら何でもするから！」

また、花の茎をパチン。

「では……。護恋は、日本に帰ってくださいますか？ 私のために」

「えっ……！」

私は絶句してしまって、二の句が次げなかった。

アンジェリカは何て言ったの？

心臓の音が、ドクドクと脈を打つ。

「何でもすると仰いましたよね？ 私のために、日本に帰ってくださいー！」

アンジェリカの顔が上がり、涙が辺りに散った。

「貴方が邪魔なのです！」

アンジェリカはハサミを両手で握り締めて、刃先をこちらに向ける。

「わ……分かったよ。私、日本に帰るよ。ごめんね、アンジェリカ……！」

私は、慌てて退室した。そして、逃げるように屋敷の外に出る。

「お帰りですね」

外では執事さんが待ち構えていた。

「は、はい……」

執事さんが、背を向けて案内する。

私はそれに、とぼとぼと付いて行く。

でも、急にマックスの台詞が蘇ってきた。

この屋敷に來れば、明らかに言うていたけど……。

背後を振り返ると、木漏れ日がさわさわと光陰を散らしている。

私は妙な胸騒ぎを覚えて、眉を寄せた。

もしかしてアンジェリカが、マックスに私を襲うように申し付けたの？

私は、どうしてもそれが信じられなかった。

「護恋様、どうされましたか？」

前へ視線を戻すと、執事さんが怪訝そうな顔をしてこちらの様子を窺っている。

「執事さん、少し待ってもらえますか？ 忘れ物をしたので……」

私は、踵を返して、アンジェリカの屋敷に戻った。

アンジェリカはそんなに、私のことを憎んでいたのかな……。

ドアの前に立つと哄笑が聞こえてきて、私はびくりと体を震わせ

た。

アンジェリカの声じゃない……？

私は、そつとドアに耳を近づけた。

「良くやったわ、アンジェリカ！ これで、護恋は日本に帰るわね。アンジェリカがキャシアスと付き合つと聞いたときは、はらわたが煮えくり返ると思つたけれど。アンジェリカ、貴方の父はデュエルの賭けで私に負けた。その時から、貴方は私の傀儡くわいなのよ。これからも、私のために動きなさい？」

その女はアハハハハ！ と愉快そうに笑っている。

私は怒りに任せて、ボタンと勢い良くドアを開けた。

「どういふことなのか説明してよ！ あんたがアンジェリカを操っていたの！？」

私の目の前にいた人物は面食らっていたが、にやりと笑って肩をすくめた。

「あゝあ。バレちゃった！」

第二十七話 黒幕の言い分

「ずっと、あんたがアンジェリカを操っていたのね！」
そういえばずっと、アンジェリカの瞳には光がなかったような気がする。

アンジェリカの足元に何かが落ちた。良く見ると、それは絆創膏だった。水の中に手を浸けていたから、粘着力がなくなったんだ。アンジェリカの左手の人差し指には絶対的な賭けが働いている星の印が黒く入っていた。

怪我をしたって言ってたのって……確か、私がいじめられていた子を助けた時からだ。そんなに前から？

アンジェリカは、涙をぼろぼろとこぼしながら私を見ている。

そして、アンジェリカの口が微かに言葉をかたどる。

「た」「す」「け」「て」「……！？」

アンジェリカは、助けてって言っているの！？

アンジェリカを好き勝手された怒りで、私の髪の毛が逆立つような気がした。

「許さない！ ミルドレッドー！」

私の前にいる黒幕、ミルドレッドはアハハと小馬鹿にしたように笑う。

「どう許さないというの？ 私は、アンジェリカの父親とデュエルで勝ったのよ！ 何も後ろめたいことなんてないわ！ 私が、大金を賭けると言っつて、この女の父に持ちかけたら、あっさりこの父親は勝負を受け入れたのよ？ アンジェリカは馬鹿よね、自分が賭けに加わることをあっさりと承諾したんだから」

私はマックスの授業を思い出していた。

「主Aに友達Dがいたとしますね。その友達Dは主Aや主Bその手駒達に関係がありませんが、友達Dが主Aと主Bの賭けに許可をしたとします。すると、友達Dも賭けに影響することができません」

確か、マックスはこんなことを言っていた。

ずっと私は、何であんな授業をするのかと思っていた。

もしかして、マックスは何か知っていたの？

ミルドレットは私の沈黙に気を良くしたのか、べらべらと喋りだした。

「私は、王命でこのイースティアに来たと言ったわよね。王命が何なのか、教えて差し上げましょうか？」

「王命？」

私は疑問を返した。そんなのどうだって良い。でも、ミルドレットは、喋り続ける。

「私は、イースティアとウエストランドの親善を目的としてここに居るの。イースティアの国王様が、キャシアスと私を結婚させて、二国の友好関係を深めようとしているの。私は、キャシアスと結婚するために、この国に来たのよ」

「何ですって……？」

王命って、キャシアスと結婚が目的だったの？

「だから、アンジェリカも護恋も邪魔なのよ！」

ミルドレットの顔が憎しみに歪む。

「もしかして、アンジェリカがキャシアス様の気持ちを最初から知っていたっていうのは!？」

「そうよ、私が教えてあげたの。それに、アンジェリカは私の駒となったわ。護恋を何とかしようと思って、目覚めたばかりのマックスをハルシオン学園に呼んだのよ」

「じゃあ、アンジェリカがマックスを信用していたのって……？」

「そうよ。私が仕向けたの! アンジェリカを使って、マックスと護恋をくっつけようとしたけど、なかなか上手く行かなかった。アンジェリカとマックスに強硬手段に出るように言っただけけど、その様子だと上手く行かなかったようね……」

もしかして、マックスは私に色々と示唆していたんだろうか。

「全部あんたが仕組んでいたの!？」

「私は警告したわよ？ ファンクラブの女の子たちが貴方に警告しに行ったでしょ？ 聞かなかつた貴方が悪いのよ」

私は、つい笑ってしまった。

「何がおかしいの？ 気でも触れた？」

ミルドレッドが馬鹿にしたように笑った。

私は手を合わせて、「ごめんごめん」と謝る。

「でも、あんたのことをキャシアス様が惚れるわけないなって確信したのよ」

私が笑顔でそういうと、ミルドレッドの顔がカツと赤くなった。

「なんですって!？」

「アンジェリカを操って？ しかも、邪魔だからの理由でマックスに私を襲わせて？ どこに、キャシアス様が惚れる要素があるのよ？ 分かった時点でどん引きじゃない」

ミルドレッドは顔を怒りで真っ赤にして髪を振り乱した。

「うるさい、うるさい！ 私は二国の平和のためなら何だってするのよ！ 貴方には私の崇高な考えが分からないだけ！」

「そのためには、人を傷つけても良いっていうの!？」

私の問いに、ミルドレッドは笑みを取り戻す。

「そうよ、一人を傷つけても皆が幸せになれば、それで良いじゃない!？」

「そんなの、間違ってる！ アンジェリカを元に戻してよ!！」

「なら、私の手駒とデュエルしなさい！ 勿論、マックス相手にね。私が勝てばアンジェリカはこのまま。そして、貴方は日本に帰るのよ!！」

第二十八話 駆け引き

「そんな勝負は受けれるわけじゃない！ ハンデをもらっても勝てなかったのに……そんな大事なデュエルなんて、できるわけないよ！」

ミルドレッドは勝ち誇ったような馬鹿笑いをした。

「そうね！ だから、私は言っているのよ。お分かり？ 今回は私に正当性があるわ！ だから、誰にも文句は言わせない！ 護恋はデュエルをして勝つしかアンジェリカを助ける方法はないのよ？」

私は、アンジェリカに視線を移した。アンジェリカはただそこに突っ立っている。アンジェリカが本物の人形のように小さくなったような気がした。

アンジェリカの透き通った青い目からは、涙が頬を伝っている。

それが、私の心を焦らせた。

アンジェリカを元に戻さなくちゃ。

「私はマックスじゃない相手と戦いたいよ！」

「嫌よ！」

ミルドレッドは私の訴えを首振り一つであっさりと却下した。

「そんなことしないわ。前は油断していたけれど、今回は違うわ。貴方はマックスにハンデを貰っても勝てなかった。だから、私は彼で戦うわ」

「……私の代わりにフェイで戦うっていうのは駄目？」

ミルドレッドはいらだつたようにその場を歩き来する。

「ダメよ！ 何度も言わせないで！ 貴方は、アンジェリカを元に戻すという賭けをして、私は貴方を日本に帰らせるという賭けをするのよ」

「違う！ アンジェリカを元に戻すけれど、ミルドレッドもウエストラランドに帰ってもらう賭けだよ！」

ミルドレッドの足がぴたりと止まって、私の方に視線を上げた。

ミルドレッドの口もとには不敵な笑みが浮かんでいる。

「それでも良いわ。……じゃあ、やるのね？」

「じ、時間をくれないかな？」

このままだと確実に、ミルドレッドの思う壺。だけど。

「駄目よ！ 今すぐやらないと、金輪際私はこのデュエルをしないわ！」

「わ、分かったよ！ やるよ！」

私は後悔していた。

腹が立ったからって、挑発なんかするんじゃないよ。

もっとミルドレッドをおだてたら、希望を見出せたかもしれないのに。

でも、負ける勝負だって、しないよりはマシかもしれない。

負けたら、帰ることを条件にアンジェリカを元に戻してもらおう。

それでも、駄目だったら。

私は、下唇を噛みしめて、ミルドレッドを見つめた。

「ミルドレッドお嬢様。マックス様がお着きです」

突然の執事さんの報告。

私の心臓がドクンと高鳴った。

「そう、このバトルフィールドに通して。今からデュエルをするから」

「かしこまりました」

執事さんは一礼したが、彼の顔は強張っている。そして、執事さんは私を見つけた。そして、疲れた様子で息を吐いていた。

「護恋。付いてらっしゃい。アンジェリカもね」

「はい、ミルドレッド様」

アンジェリカは、従順な犬のようにミルドレッドの後ろを付いていく。

我が物顔でミルドレッドは部屋を出て行く。その後ろから執事が付き従う。

「あ、アンジェリカ……！」

「護恋、参りましょう?」

アンジェリカは私に声をかけた。

でも、私はアンジェリカの表情を見て衝撃を覚えてしまった。
アンジェリカの表情は笑顔だった。

でも唇は震え、目からは涙がぼろぼろと零れて頬を伝い落ちる。

アンジェリカはそのまま、ミルドレッドの後ろを追っていく。

「なんとかしなきゃ!」

アンジェリカを助けられるのは私しかないんだから!

勝てないんじゃないかと、絶対に勝たなくちゃ!

バトルフィールドは、アンジェリカの屋敷の別館にあった。

そこは、小さな体育館のようだった。

太陽の光が窓から零れ落ちて陽だまりを作っている。

観客も座れるような椅子が、数個脇に置いてある。

コンクリートの床には、バトルフィールドの線が白くペンキで引かれてあった。

恐らく、アンジェリカの父親が道楽で造ったものだと思われる。

「ミルドレッド様」

館内に入ると、誰かが駆け寄ってきた。反射的に顔が跳ね上がり、ドアの前に立っているマックスを見つけた。

マックスはミルドレッドの前に跪き、ミルドレッドの手の甲にキスを落とす。

でも、ミルドレッドの顔は険しい。

「マックス、しくじったわね」

「申し訳ございません」

マックスは笑顔を消して、頭を垂れた。

「でも、今日のデュエルでは勝ってもらっわ!」

傍にいた執事さんが進み出た。

「では、私めが、審判をいたします。賭けの確認をお願いします」
きつと、アンジェリカのお父さんのデュエルで審判慣れしているんだ。

「では、護恋様から」と、執事さん。

私は、自分でしつかりと賭けを反芻して確認した。そして、頷く。
「私の賭けは、ミルドレッドがキャシアスの結婚を諦めて、自分の国に帰ってもらうことと、二度とアンジェリカや私の周りの人が困るようなことをミルドレッドやミルドレッドに関する人がししないと誓うことと、アンジェリカを元の状態に戻すという賭けよ」

「良いわよ」

ミルドレッドの見下したような返事には喜色が混ざっている。

「それでは、ミルドレッド様」

執事さんが、ミルドレッドの賭けを促した。

「私の賭けは、護恋が二度と私の邪魔をしないことと、護恋が日本に帰ってもらうという賭けよ」

私は閉口して、じっとミルドレッドを睨んでいた。

ミルドレッドがくすりと笑う。

「構わないわよね、護恋？」

「……私にハンデをくれたら、承諾してあげるよ」

「嫌よ！」

ミルドレッドはあっさり首を横に振った。

私の頭の中で何かがブツツと切れる音がした。

「ああ、そう！ やっぱ私、こんなできレースするのやめるよ。」

負けるの分かってるし。あほらし……じゃあ、私帰るよ」

私は、手をひらひらと振って、建物から出て行くこととする。

「何ですって？ アンジェリカがどうなっても良いの？」

私は少し振り返って、対角線上にいるミルドレッドを睨む。

「そんなことしたら、デージャが……って言っても、あんたには無効だったね」

視線を落とす私に、ミルドレッドは勝ち誇ったような笑みを浮か

べた。

「そうよ！ 良く分かってるじゃない」

「アンジェリカに何かあったら許さないから」

「どう許さないっていうの？」

ミルドレッドが馬鹿にしたように笑う。

「ただ、私は負けるもんかとミルドレッドを睨む視線に怒気を込める。」

数秒考えて、私はひらめいた。

「そうね。じゃあ、私はあなたの一番嫌がることをしてあげるよ」

負けじと私も笑みを浮かべる。

目には目を、歯には歯を。

「一番嫌がることですか……？」

ミルドレッドは眉を跳ね上げる。

「そう。キャシアス様と婚約する。もちろん、私がね」

「な、何ですって!？」

想像以上にミルドレッドは驚いてくれた。

マックスも少し面白そうに目を見開いた。

「ちょっと崖っぷちの感じがしたけど、上手くいったよ。」

そのお陰で、ミルドレッドは二の句が継がないでいる。

私は、悪役上等！ と思いながら、背筋を伸ばして顎を上げた。

第二十九話 護恋VSマックス

ミルドレッドは明らかに狼狽していた。

「そんなことをしたら、アンジェリカがどうなっても」

「何度も同じことを言わせないでって台詞をお返しするよ。そんなことをしたって、私はそんな賭けなんかに乗らない！ あとで、キヤシアス様と結婚して、ミルドレッドに復讐するだけだよ！」

しばらく、私とミルドレッドは睨みあった。

ミルドレッドは根負けしたという風に視線を斜めに落として笑った。

「……へえ、交渉が上手くなったじゃない。良いわ。ハンデをあげる。その代わり、護恋はマックスとデュエルをするのよ」

よし！ 一歩前進してところか。でも、まだ油断できない。慎重に事を運ばないと。

「……どんなハンデ？」

ミルドレッドはふうと嘆息して、近くの椅子に座って足を組んだ。

「マックス、考えなさい」

面倒くさそうな声を聞いたマックスは、苦笑して上の方に視線を這わせて嘆息した。

「そうですね。護恋さんに不利な瞳術は、このデュエルが終わるまで使わない。そして、始まって五分間は私は攻撃しない。これでどうでしょうね？」

マックスは笑顔を私に向けてそう提案した。

でも、五分なんて短すぎるよ！ 前にマックスとデュエルしたときは五分じゃ無理だった。せめて、一〇分、いや、十五分は。

「十五分よ！」

マックスはくすりと笑って承諾した。

「では、十五分で」

「分かった！」

私は、神妙に頷く。

「決まりね」と、ミルドレッド。

それでも二人が余裕なのは、マックスに勝算があるからか。間もなくして、デュエルが始まることになった。

高い窓から差し込む陽だまりの中にアンジェリカはぼうつと立っている。

私は、アンジェリカの前に立って、アンジェリカの手を取った。アンジェリカの手は温かい。生きているって分かるだけ救いだ。

「アンジェリカ、必ず元に戻してあげるからね」

「護恋……」

アンジェリカは元気なく微笑んだ。その笑みが消えてなくなりそうで、私は思わずアンジェリカを抱きしめていた。

「じゃあ、行ってくるよ」

私はポニーテールに髪の毛をくくりなおした。そして、麻痺薬の付いた剣を箱の中から引き抜いた。ちゃんと麻痺薬が付いているのか目で確かめる。

よし、ちゃんと剣が薬で濡れている。

そして、私とマックスは床を踏みしめて、フィールドの中に入っていた。

執事さんが、分厚い決闘の書を開いて、高らかに宣言した。そして、決闘七ヶ条を読み上げた。そして、賭けとハンデの確認をした。『尚、掟に背くと神の意志により絶対的な賭けは実行されません。正々堂々と戦ってください』

正々堂々と……？ 瞳術を使えるマックス相手に正々堂々と……？

私は馬鹿らしくて、ハッと笑い捨ててしまった。

「どう考えても瞳術を使えるマックスが有利なのに。私が負けたら絶対的な賭けは発動するんだ？」

「そうですね。だって、私に負けると絶対的な賭けは発動しますからね」

マックスはにっこりと笑う。

私はくやしくて歯噛みした。実力の差は自分で何とかするしかないってことか。

『これより、護恋様VSマックス様の一本勝負を行います!』
執事さんのしわがれているけれど、しっかりとした声が建物の中に満ちた。

私とマックスは剣をそれぞれに構える。呼吸の音と衣擦れの音が空気を微かに振動させた。

『では、始め!』

執事さんの手がサツと上がった。

「やあああああつ!」

私は、マックスとの距離を縮めて剣を振りかざす。

私に勝算があるのは最初の十五分間しかない!

私はマックスめがけて、剣を袈裟懸けに振り下ろした。

だけど、マックスにいと簡単に避けられる。

「くそっ!」

続いて、逆袈裟に振り下ろす。でもこれも横にあっさり避けられた。

それならばと、距離を縮めて、横一文字に剣を薙いだ。だが、マックスは簡単に後ろに飛びのいてそれを免れた。

「どうしました? 剣に焦りが出てますよ?」

「アンジェリカを助けるの!」

私は接近して、マックスの足元を狙って剣を振った。

だけど、マックスはたやすくそれを飛んで回避してしまった。

「アンジェリカは、とても、良い子なの!」

「へえ……」

「でも、いつも不幸せなの! だから、私の手でアンジェリカを幸せにしてあげたいの!」

私は、そこから上に切り上げる。

マックスが体を反らせて、私の手から風のように逃げる。

「それほど、大事な友達ですか?」

「そうよ！」

それから、ずっと私はマラソンをするみたいに走り回ってマックスを追いかけながら剣を振り回した。マックスは風で舞い踊る紙のようにひらひらと、私の攻撃をかわす。狭いバトルフィールドをマラソンのトラックを回るように器用に避けていく。

これだけ、攻撃を避けれたら本人は面白いだろうなと思うよ！

『一〇分が経過しました！』

「絶対に！ アンジェリカを助けるんだから！」

私はスピードを上げて、一気に畳み掛けた。

『あと、五分です！』

それでも一向に、マックスに剣が当たる気配すらない。

剣の先だって、かすれもしない。

『あと、三分です！』

カウントダウンのせいで、焦りばかりが強くなっていく。

「くそっ！ 当たれえ！」

闇雲に剣を振っていくが、マックスは余裕の表情でそれを避けている。

私は息を切らして、肩を上下させた。

私の汗が、滴って地面に落ちる。

マックスに向けた剣が疲労でぶれてしまっていた。

足がもつれそうになって、たたらを踏んだ。

私、もう限界かもしれないよ。

私の様子を見て、ミルドレッドが大笑いした。

「アンジェリカ、応援しておあげ」

応援……？

私の脳裏に疑問が生まれたときだった。

「マックス、頑張つてー！」

アンジェリカが思い切り大声でマックスを応援し始めた。

ぎくりと心臓が跳ねて、私は思わず剣を落としそうになる。

私は慌てて剣を両手で握りなおした。

アンジェリカが、マックスを応援してる？ 嘘でしょ？
操られているからだって分かってるけど……でも！

「護恋、負けるー！」

アンジェリカのマックスへの応援はどんどん強まっていく。

「マックス、護恋をボコボコにして！」

剣を握った手が震える。

アンジェリカは操られているって分かっているけれど、私の元気がどんどんなくなっていく。

「護恋、日本に帰れ！」

容赦ないアンジェリカの罵声。アンジェリカはこんなことを言う子じゃない。

言わせているミルドレッドが憎たらしくてならないよ。

「くそっ！」

『あと一分です！』

時間もどんどんなくなっていく。

息を切らして、私は立ち止まった。

激しく動いたせいで、私の心臓は動悸が激しくなっている。

「もう、駄目だ……！」

俯いた私は、剣を持った手をだらんと下に伸ばす。

「どうしたんですか？ 護恋さん？ もう終わりですか？」

マックスがこれ見よがしに近づいてくる。

「大事なお友達の私への応援がそんなにショックでしたか？」

私はじつと足元を見つめる。

「護恋さん？」

マックスが私の顔を覗き込んだ。

今だ！

にやりと笑い、私は剣を振り上げる。

「なにっ……！？」

マックスが初めて驚いた顔をした。

「やった……？」

希望を掴みかけて私の口元が緩んだ瞬間。

マックスもまた、全て悟っているかのように口角を上げた。

「残念でした」

「そんな！」

私の最後の一撃は、マックスの剣の刃で受け止められて、あっさりとは払い除けられてしまったのだった。

『十五分間のハンデの時間終了です！』

審判の声が容赦なく宣告する。

ドクン、と私の心臓が大きく高鳴った。

第三十話 勝負の行方⑧

『十五分間のハンドエの時間終了です!』

「そんな……!」

「それでは、私も攻撃しましょう!」

マックスが、剣を私の刃に勢い良く当ててきた。

「くっ!」

その剣を受け止めながら、私は一步退いた。

「ほらほら、どうしました?」

数回打ち込まれて、私は後ろに押される。

マックスの剣が私の体に当たらないように、必死で剣で受け止める。

「……っ!」

繰り返されるマックスの猛打を、デュエルの剣を掲げるだけでしか対応できない。マックスの剣圧で衝撃が伝わってくる。防戦一方で、私は段々と後退していく。

「くっ!」

急に、ドンツと背中が何かに当たった。

「!?!」

狭い館内だから、あっという間に壁際に追い詰められてしまったようだ。

「面白くありませんね……」

脱力したようにマックスがため息を付いた。剣の刃は交差したまま止まっている。

「その通りよ! 私だって、全然面白くないわよ!」

このままじゃアンジェリカを助けることが出来ない。

何か、何か手を考えないと……!

剣をそのままに、マックスが私の瞳を覗きこむ。

「ど……瞳術は使わないって、言ったよね……!」

私はとっさに文句を言っていた。

不思議と目をそらすことができない。

「ええ、貴方に『不利な』瞳術は使いません。ここからは、ちょっとしたお遊びですよ」

マックスの瞳が見開いて、きらりと鈍く光った気がした。

お遊びってなんなの……？

手足が、恐怖でがたがたと震えだす。

目が眩んで辺りが白と黒に明滅する。

「……？」

次第に、眩暈が治まるが、痛くも痒くもない。

私の手足の震えも自然と止まった。

「瞳術で護恋さんの能力を五十パーセント上げてみました」

私と距離を取りながら、マックスが楽しそうに告げた。

「何ですって……？」

そういえば、目がすごく冴えているし、手足がすごく軽い。

「なんのつもり？」

「言ったでしょう、お遊びだって」

ミルドレッドが椅子から立ち上がって声を荒げた。

「マックス、何をやってるの！ さつさとやっつけなさい！」

「ミルドレッド様、私も試したいのです。簡単に打ちのめしたのでは面白くないでしょう？」

「まったく！」

ミルドレッドは、イライラと椅子にもたれて足を組んだ。

「後悔しないでよね」と、私。

「後悔させてくれるんですか？」

マックスは楽しそうににっこりと笑った。

「その余裕の仮面、引き剥がしてやるよ！」

すっと右に動いてみた。すると、簡単にマックスの後ろに回りこめた。

すぐさま、私は剣を振り下ろす。

マックスが振り返る。そして、私の剣を受け止めた。でも、その動作がスローモーションのように見える。

「やああああああっ！」

今度は、突きを連打してみる。

マックスは楽しそうにそれを後ろに飛んで避けた。

そして、私の剣を自分の剣で捕らえた。

剣を切り結び、距離を縮める。

マックスが一步引いた。

そして、私が攻めている方向に加わった力を流して、私の剣をいなしした。

マックスが後ろに回って切り込んでくる。

私はすぐさま振り返って、身を捻って避けた。

「面白い！ 貴方の力を五十パーセント引き出して、やっと私と互角のようですね！」

「うるさい！」

私はひたすら、攻撃に徹する。

潜在能力を五十パーセント以上出して互角だなんて。

私は何て弱いのか……？

マックスが、赤い瞳をすうつと細めた。

「でも、私には勝てませんよ」

「そんなの分からないじゃない！」

「いいえ、分かるんです。そろそろですかね……？」

そろそろって……？

私の頭に疑問がもたげた時だった。

手足の関節がミシツと音を立てたような気がした。

途端に激痛が体全体に走る。

「うあああああああ！」

耐えられなくて、剣を持ったまま私はその場に崩れ落ちた。

「何をしたのよ！？ ぐうぐうぐう！」

武器放棄だけは駄目だと、私は剣を握り締める。

「潜在能力を五十パーセントもあげたんです。ツケが来るのは当然じゃないですか」

マックスは肩をすくめて、冷淡に告げた。
なるほど、この瞳術は一応私のためになっているから反則じゃないのか。

「こんなのでありなの……？」

「何をやっているの、マックス！ さつさとドメを刺しなさい！」「ミルドレッドがイラついたように、声を張り上げた。

「申し訳ありません、ミルドレッド様！」

マックスはミルドレッドに頭を下げ、私に視線を戻した。

「貴方もいい加減しつこいですね。護恋さんが剣を落とせば、私の勝ちなのに」

マックスは痛々しげに私を見て嘆息する。

「仕方ありません」

マックスが剣を使って、私の剣を打ち落とそうとした。

その時、私は僅かに体勢を立て直して。

「やあああああ！」

すぐさま私は、マックスのふくらはぎを剣で打った。

「やった……！」

私の口から笑みが漏れた。

「なっ！？ もしかして……！」

マックスの酷くうるたえた声。

私は、剣を持ったまますつと立ち上がる。

マックスは、私の代わりに床に崩れ落ちてしまった。

「どう？ 私の演技は？ なかなか良い感じでしょ？」

私がぺろりと舌を出すと、マックスは床に倒れたまま呆れたような顔をしていた。

『「……この勝負、護恋様の勝ちです！」』

審判の声が告げられると同時に、アンジェリカの瞳が光を取り戻す。

そのアンジェリカの瞳から、涙があふれ出た。

「護恋……！」

アンジェリカが駆け寄ってきて、泣きながら私に抱きついた。この様子だと、絶対的な賭けが発動したらしい。

アンジェリカは元に戻ったのかな。

「こんな勝負なんて……！ ありえないわ！」

ミルドレッドは、頭痛が起きた時のように頭を押さえている。

「アンジェリカ……！ 元に戻ったんだよね？」

「護恋、ありがとう！ 本当に、護恋がいてくれて良かった！」

アンジェリカは、私の手を取って私に微笑みかけた。

アンジェリカの人差し指の烙印は消えているようだけど。

彼女の安堵したような笑みは、今までの辛さを物語っているような気がした。

「キャシアス様のことはゴメンね」

もう一度頭を下げると、アンジェリカは頭を振った。

「構いません。もうとくに私は諦めてますわ」

「ってことは……私は日本に帰らなくても良いのかな？」

頬を掻きながら恐る恐る尋ねると、アンジェリカは顔いっぱい笑いをくれた。

「もちろん、護恋はイースティアにいてください！ これからも、私の手駒でお友達でいてください！」

ほっとして私はその場にしゃがみこんだ。

「護恋！？」

アンジェリカも慌ててしゃがんで私を支える。

「あはは……実は、大丈夫でなかったりする……」
体の節々が、筋肉痛ですごく痛い。

「今の勝負はなしよ！ あんなの反則よ！」

ミルドレッドが手のひらに現れた星印を押さえながら、悔しそうに声を上げる。

「いや！ 反則なんかじゃない！」

毛色の違う声が聞こえて、私は驚いて顔を上げた。

「キャシアス様！」

アンジェリカと私の声が重なった。

扉のところにキャシアスが険しい形相で立っている。後ろにフェイも控えている。

それからなんと、ヴィンセントも続いて入ってきた。

ヴィンセントはアンジェリカの親のことでアンジェリカと一時敵対していたけれど、今はアンジェリカを見守ってくれているらしい。ヴィンセントは、アンジェリカのが心配で来てくれたのかな？でも、いつの間に？というか、いつからキャシアスとフェイはそこにいたんだろう？

全然気付かなかったよ。

「ミルドレット、色々と私に内緒で暗躍してくれたようだね」

キャシアスが、切れた様子でにっこりと笑った。

さっきの台詞に嫌味をいっぱい込めたの、すごく分かったよ。

育ちの良い王子様って、怒ると怖いな……。

「な、なんのことかしら」

ミルドレットは、思いつきりうろたえている。

「とぼけても無駄だよ」と、私。

ポケットから携帯電話を取り出して、黄門様の紋所のように掲げた。

「念のために、アンジェリカの屋敷に来る途中にキャシアス様に携帯で電話をかけたんだ。それで、電源切ってなかったから、キャシアス様に全部筒抜けってわけだよ」

私は、したり顔で笑ってみせた。

第三十一話 一件落着

ミルドレッドは、悔しそうに私をにらんだ。

そして、開き直ったようにキャシアスを見やった。

「私はただ、二国の友好のために！」

「ミルドレッド。そんなことをしたところで、二国は平和にならない。だって、私は君のことなんて全然好きじゃないからね」
キャシアスがきっぱりとそう告げると、ミルドレッドは気色ばんだ。

「でも、イースティアの国王様がなんていうかしら！」

「父上には私の思いを伝えた。そうしたら、ミルドレッドは自国に帰ってもらおうということになった」

ミルドレッドの顔が、怒りで赤く上気した。

「私に恥をかかせる気なの!？」

鋭いミルドレッドの声を聞いて、キャシアスがいなすように、にっこりと笑う。

「恥じゃない。私とミルドレッドは嫌々結婚という型にはめられていたんだ。ミルドレッドはウエストランドに帰りたいがために私と賭けをした。そして、ミルドレッドは勝ったんだ。だから、堂々と自分の国に帰れるだろう?」

ミルドレッドの怒りが、すっと消えるのが分かった。

「そう……そういうことにしてくれるんなら、構わないわ。私だって、キャシアスみたいな男は死んでもお断りよ！」

ミルドレッドは執事さんから上着を着せてもらってから、後ろを振り向いた。ミルドレッドの背後では、マックスがようやく麻痺から回復して上体を起こしたところだった。マックスの右手の手の甲にも絶対的な賭けの小さな星印が浮かび上がっている。

「マックス、ウエストランドに帰るわよ！」

ミルドレッドはマックスに声を投げかけた。

これは、絶対的な賭けが発動してるってことだよな。

「私は後でゆつくりと帰りますよ」

マックスの疲れたような声を聞いて、ミルドレッドは不機嫌に背を向けた。

「ふんっ、勝手になさい！」

ミルドレッドのいらだつたような靴の音が、館内から遠ざかる。屋敷の外に車を止めていたのだろう。怒ったようにドアが閉まり、車が発進する音がして、やがて遠退いていった。

「やれやれ……目覚めた途端にこんなにこき使われるとは思わなかったけど、これで一段落のようですね……」

マックスは足を投げ出したままタバコを取り出して、一本口にくわえた。

「マックス、もしかしてわざと負けてくれたの？」

私の問いに、マックスはライターでタバコに火をつけながら答える。

「さあ、どうでしょう？ 私も油断してましたからね。護恋さんが勝ったということにしておいてください。そうでないと、私が余計に叱られてしまう」

タバコの先に火がついた。マックスは、それを美味しそうに深く吸う。

「マックス、気になっていることがあるんだけど……」

私の質問にみんなが注目している。

「なんですか？」と、マックスは煙を吐いた。辺りが白く濁っている。

「私は能力を上げられたせいで激痛が走ったけれど、シンシエル先生はどうしてマックスに負けたとき、苦しそうに悲鳴を上げていたの？」

「あれはね、シンシエル先生の古傷の記憶を蘇らせたんですよ」

「古傷？」

「シンシエル先生は、闘技場ハルシオンで大怪我を負ったことがあ

る。その記憶を瞳術で呼び起こしたのです」

なんとなく後ろに引く私。マックスのことがうすら怖くなった。

「そんなこともできるんだ……」

恐々とマックスを見下ろす。

マックスはその視線に気付いて、にっこりと顔を上げて笑った。

「じ、じゃあ、ヒューゴ先生の代わりにの授業で私を連続で当てたのは？」

マックスがふーっと煙を吐く。タバコの煙がわだかまって、やがて引いていった。

「言ったでしょう？ 私は、護恋さんに興味があるって。キャシア様のお心を射止めている護恋さんはどんな子なんだろって思ってたね。それと、アンジェリカ様のことを早く護恋さんに教えてあげたかったのだけど、上下関係があるからなかなか上手く行かなくてね。ヒューゴ先生には悪いことをしましたね」

「じゃあ、あのロボットは？」

「あれは、イースティアのデュエリストのデータ収集ですよ。私は遊びに来たんじゃありませんからね。ロボットも、データも自国に持ち帰ります」

むむつ。抜け目がないな、ウエストランドって。

「じゃあ、神風総理と電話でお話していたのって？」

「あれはね、神風総理が護恋さんを鍛えてくれてお願いされたんですよ。一応、最後のデュエルで私が力を引き出してあげたので、これからはあの感覚を思い出して戦えば強くなりますよ」

「あ、ありがとうございます」

な、なんだ。本当に、総理にはお願いさされていただけだったのね。ふう……。じゃあ、私はそろそろ帰りますかね……」

マックスはよっこらせと立ち上がって、タバコを吹かせながら出口に向かって歩いていく。

もしかしたら、アンジェリカの言ったとおり、良い人なのかも。

そんなことを思っていると、マックスは思い出したように私を振

り返った。

「護恋さん、また五年後にお会いしましょう」

「えっ？ な、何ですか？」

「……護恋さんが、良い女になっていそうだから、かな？」

マックスはくすりと笑った。

「はあ!？」

私は呆れ返るばかりだ。

褒めて損した気分……。

「じゃあね」

マックスは、おざなりに手を振った。

「マックス、待って！」

私はマックスの背中に声をかけた。マックスが半分振り向く。

「何ですか？」

私は、マックスの口もとを指差した。

「タバコ、止めた方がよいよ。健康に悪いし……今度は眠るだけじゃすまないかも」

マックスは上の方に視線を這わせたまま嘆息した。

「そうですね……止めましょうか」

マックスは携帯の灰皿にタバコを押し付けて火を消すと、ポケットにしまった。

「もう、ごたごたはごめんです。でも」

マックスはこちらを見て、にっこりと微笑んだ。

「そういう、護恋さんの優しい心遣いが好きですよ」

「なっ!？」

私が真っ赤になるのをマックスは満足そうに見て、また手を振った。

「じゃあね」

そして、マックスは建物から出て、どこかに帰っていく。

タバコの煙が、いつまでも余韻を残していた。

「アンジェリカ様、大丈夫ですか」

ヴィンセントの声がしてアンジェリカの方を振り返る。

「ええ、大丈夫ですわ。もしかして、心配して来てくださったんですか？」

「そうです。アンジェリカ様はやはり危なっかしい人のようですから」

アンジェリカは、嬉しそうに顔を綻ばせた。

ヴィンセントもどことなく優しくそうな笑みをアンジェリカに向けている。

「なんか、良い雰囲気だね」

私は、キャシアスとフエイに囁いた。

「ああ、そうだね」とキャシアス。

フエイもフツと頬を緩めた。

「邪魔したら悪いから、帰ろうか」

そんなことを小声で話して、私達はこっそりとアンジェリカの屋敷を後にした。

第三十二話 終章

そつとアンジェリカの屋敷から出て行き、私達はキャシアスが用意したリムジンに乗って学園に帰ることとなった。

キャシアスとフェイを前にして、私は後部座席に座っている。

「えっ？ そしたら、ヴィンセントに声をかけたのはキャシアス様なんですか？」

「そうだよ。私もアンジェリカに幸せになってほしいと思ってね」

「そうですね、アンジェリカ様とヴィンセントはとてもお似合いでしたね」と、フェイ。

「そっか、私もアンジェリカが幸せになると嬉しいよ」

キャシアスは私を見つめて、嬉しそうに二度微笑んだ。

「キャシアス様、何か良いことでもあつたんですか？」

キャシアスが面白くて、私も釣られて笑った。

「だって、護恋は私と結婚してくれるんだろう？」と、キャシアス。「えっ!?!」

瞬間的に、私の笑みが引きつった。

そ、そういえば!?! 『あとで、キャシアス様と結婚して、ミルドレッドに復讐するだけだよ!』って、啖^{たんか}呵切つたんだっけ。

しかも、携帯の電源入れっぱなしで通話状態にしていたから、キャシアスに筒抜けってわけだ。

「い、いや、あの、それは、ものの勢いってどうか……」

私はあわあわと両手を振った。

幸せそうなキャシアスの横で、フェイが私を睨んでいる。

「許せませんね」

「フェイ、どうしたんだい？」

「この女、アンジェリカ様に私のことが好きだと偽っていたようです」

ぎっくーっ!

私は、必死で愛想笑いを浮かべる。

「あ、あれはね？ その、仕方なかったっていうか……」

キャシアスの目が急激に冷えたような気がした。

私の背中にも、ぞくつと悪寒が走る。

「ふうん、私のことが好きなのか、フェイのことが好きなのか……
返答次第によつては酷いけど」

二人は、私に絶対零度の視線を容赦なく浴びせる。

「どっ」

私の顔から冷や汗がだらだらと流れ、目が泳ぐ。

「どっ？」

キャシアスが尋ねる。

「どっちも好きって言っただめですか？ っていうか、どっちもそんなに好きじゃなかったりして」

爽快に私は笑った。

ギャグのつもりだったが、失敗した。

二人は、つまらない芝居を見たときのように嘆息した。

「お前、もう、降りろ。乗せてやらん」

「そうだね、学園まで走ると良いよ」

「ああっ、ごめんなさい！ フェイ様！ キャシアス様！ 私って正直だから嘘はつけないっていうか」

失言だと思つたときには、私は道に降ろされていた。

容赦なくリムジンは発進する。

私は、リムジンが出す排気ガスにむせた。

「な、なんで！？ 本当に降ろすなんて聞いてないわよ！」

というか、道が分からないんですけれど！

「キャシアス様とフェイの馬鹿　　っ！」

私の虚しい雄たけびは誰も聞いていなかった。

ということはなかった。

私の他に、一人私のことを見ていた人がいた。

「あれ？ 護恋じゃないか。どうしたんだ？」

黒髪黒目の日本人が目の前にいた。

「えっ？ えーと？」

私は彼の名前が思い出せずに、固まってしまった。確かクラスメイトの。

「良かったら、学園まで乗って行くか？」

「う、うん！」

私は、自転車の後ろにまたがった。

途中で降ろされるということはなく、彼は学園まで送ってくれた。ああ、なんて良い人なんだろう。あのサドの二人とは全然違うよ。私は、気持ちの良い風を髪に受け、ご機嫌だった。

そうだ、思い出した。

確か、この人の名前は、くとうひめる工藤姫流。姫流だ。

何分走っただろうか。自転車は学園内に入っていく。

私は、女子寮の前で降ろしてもらった。

「姫流、ありがとう！」

「どういたしまして」

姫流は、猫のような目を細めて笑った。

もう少しして、私は姫流達と事件に巻き込まれるのだけど、それはまた別の話。

少しだけの幸福に浸る私を、見透かしたように風のささめきが笑っていた。

第三十二話 終章（後書き）

二章が完結しました。次回からは三章に突入します。二章の最後は三角関係で閉めてみました。次回からは、恋愛色が濃くなるかもしれません。

宜しければ、感想や批評などお待ちしております。ここまで読んでくださってありがとうございます。三章からお付き合いくださいれば嬉しいです。

第一話 プロローグ

蛍光灯の白い光が刺さるように眩しくて、少女は目をうつすらと開いた。

ぼんやりとした周りの景色が、少女の水晶体に段々と写りこむ。周りはぼんやりと白い。清潔じみた消毒液の臭いが鼻につく。身じろぎした衝撃を、下に敷かれているものが吸収してくれた。どうやら、ベッドの上に寝かされているらしい。

ようやくまぶたを開けると、隣で誰かが喜びの声をあげた。顔をそちらの方に向けると、誰かが泣きながら少女のやつれた手を包み込んだ。手のぬくもりがじんわりと伝わってくる。

点滴の管が自分の腕から伸びているのが二重に見えて、瞬きするとようやく一つにピントが合う。そして、温かい手の持ち主もようやくはつきり見えた。

「…………お母さん？」

「良かった、本当に良かったよ！」

手を取り合って喜ぶ家族に交じって、見覚えのない男が横に立っている。

どこかで見えた顔だと思い、少女は男をじっと見つめた。

男は、少女の方を心配そうに見ている。

「そろそろ、お時間です」

彼に囁く部下らしき人物。

「ああ、分かった。では、皆さん失礼します」

彼は愛想良く笑い、病室から出て行った。

「あの人どうしてここに居たの？」

少女が母に尋ねると、彼女の母はにっこりと笑った。

「あの方はね、あんたを助けてここまで運んでくれたんだよ」

「ふうん…………いい人だね」

少女は、男が出て行ったドアの方をずっと見ていた。

「はつくしよーい！」

私、花咲護恋はなさきこれんは、思い切りくしゃみをして鼻をすすった。

四方八方から驚いて私を振り返る人達。

「びつくりした！」

「風邪か？」

そう言ったのは、第三王位継承者のキャシアス王子と、その『手駒こま』のフェイだ。

手駒というのは、一対一の剣の戦い『デュエル』で、高貴な身分の方が自分の代わりに戦わせる者のことをいうの。

手駒はその主のために他にも身边を守ったり、お世話を焼いたりする。

「大丈夫ですか、護恋」

「うん、大丈夫」

もう、イースティアの季節は初夏だ。マックスがウエストランドに帰ってから暫く平和に過ごしていた。

隣の席で心配そうに私の様子を窺っているのは、アンジェリカだ。なんと、彼女は伯爵令嬢なの。ふわふわの肩までの金髪と、青い瞳。フランス人形のように、とってても美人さんなのだ。念願叶って、私はアンジェリカの手駒をやっているのだ。

「噂されてるのかなあ」

私は呟いて、周りを見渡す。辺りが騒がしいのは休み時間だからだ。

ここは、一年Aクラス。

白を基調とした格調高い教室だ。

ここでもなくても、ハルシオン学園は全体がイギリスのカントリー

ハウスのような造りで、なんだかここにいるとお姫様になった気分を味わえる。

なんと言っても、この学園は王立で、キャシアスのお父さんである国王様が運営されているのだからね。

「噂って？」

キャシアスが楽しそうに尋ねる。

「私って可愛いから。なーんつってー」

たはは、と頭を掻いて一人照れていると、キャシアスが茶色の瞳を細めて笑った。

そして、キャシアスは机に置いている私の手を両手で愛しそうに包み込む。

「可愛いよとつても」

「うえ!？」

肌がゾワツと粟立って、私は椅子の方に仰け反ってしまった。

慌てて、キャシアスの手から自分の手を引き抜く。

ただでさえ、キャシアスは金髪に美形といういでたちなのに、そんな台詞を吐いたら、周りの女の子たちはメロメロも良いところだろう。

それは、私以外の人は、ってことだけどね。

キャシアスのことは友達にしか思えないんだ。悪いけど。

私の心を読んだのか、彼の笑みに意地悪な色が混じった。

「お猿さんみたいで可愛いってことだよ？」

キャシアスは、にっこりと笑った。

「お、お猿さんーっ!？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまった。

途端に吹き出すアンジェリカとフェイ。

「護恋は可愛いすわね」

そう言いながら、アンジェリカはくすくすと笑っている。

恨めしそうに彼女を見たけれど、悪気はないみたい。

アンジェリカは良いの。可愛いから、許しちゃう。

でも、問題はこの男。フェイだ。

「確かに、猿みたいに喋っていますよね」

キャシアスの手前、フェイは私のことを大声で笑うわけにはいかないらしい。でもフェイは私を見た後、横を向いて肩を揺らし始めた。むっかー！

「失礼しちゃう！ フェイだって……！」

「俺が何だって……？」

フェイの目がこちらを向いて鈍く輝いた。

「な、なんでもないです」

とても、爬虫類に似ているなんて言えやしない。フェイは黒髪黒目のアジア系の容姿をしている。その見かけの印象どおり、古武術に長けているだけでなく、デュエルも負け知らずで、競技場ハルシオンでのチャンピオンだったらしい。だから、『絶対無敵のデュエリスト』なんて影で囁かれている。その強さが認められたのか、フェイはキャシアス王子の手駒をやっているのだ。

「アンジェリカ様、ヴィンセント君がお越しです」

規則委員で学級委員のルルが、アンジェリカに伝達した。

「ありがとう」

アンジェリカは、ルルに砂糖菓子のような笑みで答えた。そして、につこり笑ってヴィンセントのところまで駆けていく。

私は、席から廊下のアンジェリカとヴィンセントの楽しそうな笑みをそっと見て、安堵した。

「一時はどうなることかと思っただけれど、二人とも仲良さそうだね」と、キャシアス。

「そうでございますね」と、フェイ。

本当に、アンジェリカの身边が平和になってよかったよ。

今は皆が幸せで、私も今の関係が心地よくて。

今の関係がずっと続けば良いって、私は心から願っていた。

第二話 護恋の写真

次の日のホームルーム。アンジェリカとキャシアスが付き合うこともなくなつたので、担任のグロリアーナ先生は席替えをした。結果、アンジェリカは私の隣に来ることになり、キャシアスとフェイは私の前の席に陣取ることになったの。

それから、私はアンジェリカと話すことが多くなつた。

「昨日のテレビ、ご覧になりました？」と、アンジェリカ。

「マックスの圧勝だつたでしょ！」

私は微笑みながら相槌を打つ。

「私は、マックスを応援してますわ」

やっぱり、アンジェリカはマックスを気に入っているらしかった。以前、マックスが特別教師でこの学園に来たときは、色々マックスと揉めたんだ。けれど、結果的には良い人かもしれないとは思つたけどね。アンジェリカの直感はたいしたものよ。

今は、マックスはウエストランドに戻って、競技場ハルシオンで最強のデュエリストをしているらしい。

それから、アンジェリカと一緒にマックスの戦いについて、あーでもない、こーでもない論議に花を咲かせた。終いには、アンジェリカがマックスは私と付き合うべきと言つたので、断固拒否しておいた。それならと、キャシアスとフェイと付き合うように勧めてきたので、そつちの方が嫌だと首を横に振つたのだつた。

話すだけ話してすっきりした顔で席に戻ってくると、キャシアスとフェイが私を見つけた。先ほど彼らの悪口を並べたのはバレてないらしい。ほっと安堵してあたり障りのない笑みを浮かべた。ちょっとだけ罪悪感があるのでドキドキしているけれど。

「護恋は楽しそうだね」

キャシアスは私のほうを向いて、ため息をついていた。

フェイが眉を寄せて、キャシアスを心配そうに見ている。

「どうされましたか、キャシアス様。なんだか顔色が優れないようですが」

「どうされたんですか、キャシアス様」

なんとなく私も気になった。そんな私を見て、キャシアスは元気がなさそうに微笑んだ。

「昨日、色々あってね」

「色々ですか……？」と、私。

そんなキャシアスが少し心配だったけれど、始業のベルが鳴ったので、私の意識はそっちに向けられてしまった。

次の休み時間。ついに私は、アンジェリカの髪型をお姫様風にアレンジすることに成功した。自分の髪をいじるのはあんまりだけど、人の髪形をいじるのは得意なのよね。

「できたよ、アンジェリカ」

アンジェリカの髪は後ろでアップにして、薔薇の髪留めをアンジェリカから借りてティアラ風に飾っている。お姫様風っていうのはこういうことだ。

「わあっ！ 素敵です！」

規則委員で学級委員のルルは、立ち止まって歓声を上げた。ルルと同じ委員のコードネルも頬を染めている。

「アンジェリカ様すごくお似合いです。くらくらしそうだ……！」

コードネルが感嘆の息を吐く。すると、隣でルルが頬を膨らませて、コードネルにファイルを全て強引に押し付けてしまった。

「コードネル君、これ全部よろしく願います」

ルルの規則委員の証である赤いフレームの眼鏡のレンズが、キラインと光る。

「うわっ、ルル！？ ど、どうしちゃったんだよ」

コードネルは、ファイルを全部抱えきれずに落としている。

でも、ルルはさつさとどこかに行ってしまった。

アンジェリカは上品に吹き出した。

「他人事だと思って笑わないでください」

コードネルは、体勢を立て直すのに必死だ。

彼はファイルを机に置くと、「ルル？　おい、ルル？」と、ルルを追いかけていった。

私とアンジェリカはルルとコードネルが面白くて、くすくすと笑っていた。

「やっぱり、アンジェリカの髪型いい出来だと思っよ」

「恥ずかしいわ、護恋。元に戻してちょうだい」

アンジェリカは頬を染めている。

「えー、なんでよ？」と、私。

「私、アンジェリカの髪型をこういう風に見てみたかったの！」

私が満面の笑顔になると、アンジェリカがブラシを持って立ち上がった。

「じゃあ、護恋もして差し上げます」

「えっ!？」

アンジェリカに誘導されて、私は自分の席に座らされてしまった。

「わ、私は良いよ。ポニーテールで充分だし！」

「そんな手ぐしでといたような、ぼさぼさのポニーテールじゃ駄目ですわ。私が綺麗にくくってあげます」

と、アンジェリカが私をそっと抑える。アンジェリカの押さえる力は僅かなものだった。だけど、とてもじゃないけれど、彼女の手を振り払えないよ。

「あっ……」

私は大人しくなって、髪の毛をされるがままになった。

うつつ。幼い頃に、お姉ちゃんに人形代わりに髪をいじられたことを思い出すなあ。あれ以来、トラウマなんだけど。

「あれ？」

ふと、床に小さな用紙が落ちているのが見えた。

「アンジェリカ、それ何？」

「これですか？」

アンジェリカは拾って私に渡してくれた。

「写真？」

その写真を見て驚いた。

そこには、私が大きく写っていたのよ。

第三話 賭け事の授業

私の写真が何でこんなところに？

しかも、少し前くらいの写真だよ？ 中学生の時の制服着ている

し。日本にいるときならともかく、こんなところにあるなんて変だ。

「できましたわ、護恋」

「え、あ、うん」

いつまでも見ているわけにもいかず、その写真をノートの間に入れて机の中にしまった。私が写っているのだから。私が持っているのも良いよね？

「護恋、可愛くなりましたわ」

アンジェリカは私を見て喜んだ。そして、彼女は嬉しさ余ったように軽く拍手した。

「そ、そう？」

「はい、鏡をどうぞ」

アンジェリカが私に手鏡を渡した。私は、それをそつと覗く。

「わあ！ 私じゃないみたい」

「髪型で大分違いますわね」

「う、うん」

私の髪は綺麗にくしけずられていて、頭の上の方で綺麗にポニーテールにされている。しかも、両方のもみあげのところを少し長く垂らしているので、顔が小さく見える。私は、人の髪は綺麗にくくれるけど、自分の髪は難しくていつも変になってしまうんだ。不器用な私じゃとてもじゃないけれど、こんな風にくくれない。

違う角度から鏡を見ると、それにキャシラスとフェイが映っていた。私は鏡を置いて彼らに視線を移した。

キャシラスとフェイは物珍しそうに私を見ているので、天然記念物になったような変な感じがした。

「ど、どうされたんですか？」

「いや……すごく可愛いなと思ったんだ」と、キャシアス。

「お猿さんみたいですか？」

またからかわれるんだろうと思って身構えた。

「そうじゃない。女の子としてだよ」

キャシアスはにつこりと微笑んだ。

「えっ……」

どことなく、居心地が悪くなった。キャシアスはストレートに褒めるのでむずがゆい。私が照れ笑いしていると、フェイの目がすうつと冷めたように細くなつた。

「フェイも、護恋を可愛いと思うだろう？」

「いえ、それはキャシアス様のお言葉でも同意しかねます。私には猿にしか見えません。だから護恋は、キャシアス様には相応しくないのではと思うのですが」

猿にしか見えない……。

フェイの言葉が思いのほかショックで、私の胸が鋭く痛んだ。

「な、何よ！ ちょっとぐらいい私のことを褒めてくれても良いのに

！」

「……護恋は、自分がキャシアス様に相応しいとも思っているのか？」

「そんなこと言ってない！ 私はただ……」

ただ、フェイに。そこまで考えて、疑問が湧いた。フェイになんて言って欲しかったの？ フェイが私のことを良くなんて言うわけないじゃない。

涙を浮かべて俯くと、フェイは不機嫌そうに私に背中を向けてキャシアスの隣の席に腰掛けた。

アンジェリカがその様子を見たまま固まっているが、はっと我に返った様子で、私に向かって手を組み合わせた。

「ごめんなさい、護恋！ 余計なことをしてしまいましたわ」

「ううん……アンジェリカは悪くないよ」

「護恋、フェイはやきもちを焼いているのですわ」

アンジェリカがそんなことを言ったが、私はネガティブだ。

ポニーテールが揺れるくらい首を振ると、アンジェリカが悲しそうに眉を下げた。

「護恋……」

普段は悪口なんて全然気にしないのに、フェイから言われたことがよほどショックだったみたいだ。

アンジェリカの言葉をキャシアスが聞いて面白くなさそうな顔をしていたが、やがて、彼はふうと嘆息した。

「護恋、後で私と一緒に来て欲しい」

「え……？ どこにですか」

「お婆様のお墓参りに」

「別に、構いませんけど……」

キャシアスの真剣な顔が何故か不思議だった。

でも、他人の家のお墓参りに同行するのって変じゃないだろうか。友達だったとしても、自分の家じゃないお墓参りには普通は行かないよね。私のことをキャシアスが好きだからなのかな？

その事を言及しようと思った。でも、キャシアスの目がどこか思いつめたように見えたので、とうとう聞けなかったんだ。

フェイの言葉に打ちひしがれていた私だったけれど、次の授業である賭け事の授業を聞いているうちに、傷も癒えたような気がした。カシス先生の年齢を重ねた優しそうな顔を見ると更に気持ちが和んだ。

カシス先生はにっこりと笑って、かけている丸い小さな眼鏡の真ん中を持ち上げた。

「次は犯罪者についての賭けです。一つ、警告しておかなければなりません。皆さんは犯罪を犯してはなりませんよ。特に重罪となる罪を犯して見つかри、なおかつ、『決闘の書』に犯罪者と認められた場合、デュエルの賭けでの正当な権利が失われてしまいます」

それを聞いて、少し恐ろしくなった。でも、よほどのことがない

かぎり大丈夫よね。私は絶対に犯罪なんて犯さないもの。

「犯罪者は、望まれたデュエルを必ず受けなければなりません。そして、相手の賭けの内容を確認することも拒否することもできません。それは、一回の罪で一度だけ認められていることですが。皆さんは、絶対に罪を犯してはいけませんよ？ お返事は？」

私達は、「はい」と口をそろえた。そして、ノートにしっかりと書きとめたのだった。

でも私は数日後に、この授業を思い出すことになる。

第四話 墓参りの出来事

その日の昼食が終わった後、キャシアスに呼ばれたの。彼に付いていくと、校庭にリムジンが停まっていた。日の光を受けた高級車は黒く輝いてその存在感を見せ付けているみたい。私はキャシアスと一緒に用意されているリムジンに乗り込んだ。

そして、キャシアスの隣にちょこんと座る。でも、外に立っているフェイと目が合ってしまった、私はムツとして、顔を背けた。

何よ、フェイなんて……。

「では、キャシアス様、行ってらっしゃいませ」

フェイが腰を折って挨拶する動作が、反対の窓に微かに映っている。

「ああ、じゃあ行つて来るよ」

キャシアスの機嫌の良い声がして、窓が自動で閉まる音がした。でも、私はフェイの方をかたくなに見ようとしなかった。

なんで私がこんなにふて腐れなくちゃならないのか。心の中でフェイに悪態をついた。

次第に車が発進する。高級車だけあつて不快な振動がまったくないし、エンジンの音も静かだ。だから、急に音が消えたような錯覚がした。

しばらく、私とキャシアスは黙って窓の外の流れる景色を見ていた。暫くの沈黙の後、衣擦れの音がして、キャシアスが私のほうを見たような気配がした。

「護恋」

「なんででしょうか？」

キャシアスのほうを振り返ると、彼はひどく落ち込んでいるような顔をしていたので、驚いてしまった。

「ど、どうされたんですか？」

「護恋は、フェイのことが好きなの？」

いきなりの質問に、何故か顔が熱くなった。キャシアスの顔がかげったような気がする。

「ぜ、全然好きじゃないですよ！ 私はもつと優しい人がタイプですし、フェイみたいなサドなんて、全然好きじゃないです！」

両手を振って思い切り否定すると、キャシアスは少しだけ微笑んだ。

「そう？ じゃあ、私が護恋に優しくしたら、護恋は私を好きになつてくれる？」

「それは、分かりません…… キャシアス様には不思議と…… えっと、その……」

「分かった。もういい」

キャシアスは諦めたように笑って目線を下げた。

「それは、仕方ないことなのかもしれない……。私は随分と護恋をいじめたからね」

「あはは……でも、キャシアス様はお優しい方だと思います」

キャシアスを傷つけてしまったかと思い、慌てて私はフォローした。でも、キャシアスが優しい人という言葉に嘘はない。最初は良いようにキャシアスとフェイにいじめられたけれど、それはすべて愛情の裏返しだった。結果的にはキャシアスは私に優しくしてくれたように思う。ううん、思うんじゃない。事実、キャシアスはいつも優しくかったよ。

キャシアスも嬉しそうに顔を上げて微笑んだ。

「そう思ってくれて嬉しいよ。護恋は、私がどうして護恋のことを好きなのか知りたくない？」

「そうですね、知りたいです」

キャシアスは言おうとしたが、戸惑ったように口をつぐんだ。

「でもそれは、やっぱり言えない……」

もしかして、照れてるのかな？ でも、その様子が可愛く見えて、思わず吹き出してしまった。

「なんですか、それ？ じゃあ、良いですよ。無理して言わなくて

も、大丈夫です」
笑顔でいう私を見てキャシアスは笑っていた。

やがて、リムジンは小高い丘の前で停車した。運転手さんにドアを開けてもらって、私とキャシアスは外に降り立った。後ろに停車した車からSP セキュリティポリスが降りてくる。

「うわぁ……………」

そこには、立派なお墓が複数点在した。日本のお墓と言うよりは、西洋風の丸みを帯びた石が等間隔に立てられてあり、王家の紋章が墓石に彫られてあった。でも、この世界では不思議な魔力があるので、掘られた名前はカタカナに見え、結果私にも読めた。

「これが、お婆様の眠ってらっしゃるお墓だよ」

「マリーエル……………マリーエルお婆様ですか」

キャシアスは運転手から花束を受け取り、墓石の前に置いた。

「お婆様がお亡くなりになった時は、私は十二歳でね。ここでずっと泣いていたんだよ」

キャシアスにそんな過去があったなんて……………。きっと親しい人が亡くなるのは辛いんだろうな……………。

「でも護恋、ここらの景色はとても綺麗だろ？」

「ここは草木が多くて空気が綺麗だし、街がミニチュアのように見渡せる。」

「そうですね。心が洗われるようです。それに、キャシアス様もおいでくださっただし、マリーエルお婆様も喜んでらっしゃるのではないかと」

「そうだね……………」

どうしてか、キャシアスの笑みが寂しそうに見えた。お婆様が亡

くなくて、三年か。まだ、キャシアスは心の傷が癒えてないのかな……。

その時、風に乗って車の停車する音が聞こえたので、私とキャシアスは後ろを振り向いた。リムジンが一台停まっている。中から、誰かがSPと一緒に降りてきた。段々とその人物が近づくとつれ、キャシアスの顔が強張っていく。

「キャシアス様、あの方をご存知なんですか？」

キャシアスは視線を向こうに飛ばしたまま頷いた。

「フローゼンス。腹違いの私の兄だよ」

そう呟いたキャシアスの言葉は重かった。

第五話 フローゼンス

「えっ、お兄様なんですか？」

そう言ってしまうくらい、こちらに近づいてきたフローゼンスは中性的な美少年だった。少年と分かるのはハルシオン学園の男物の制服を着ているからというのもある。肩までのストレートの銀髪を垂らし、目にはアイスブルーが輝いている。だけど視線は鋭く、睨まれたら凍りつきそうだ。キャシアスが陽なら、フローゼンスは陰じゃないかな。それくらい二人の見た目は対照的だった。

「おや、キャシアス。君もお婆様のお墓参りに来ていたんだね」

キャシアスはフローゼンスに厳しい視線を向けたままで何も言わない。

ど、どうしちゃったの？ いつものキャシアスらしくないよ。

フローゼンスの瞳がすつと動いて、私を捉えた。

私は戸惑って、まばたきした。雪女に氷漬けにされたような涼しい感じがしたのよ。

一応、フローゼンスの口もとには笑みが薄く引き延ばされてるから、歓迎されてはいるんだよね？

「フローゼンス様、こんにちは」

戸惑いながら、お辞儀する。

「もしかして、貴方は護恋かな？」

草木の匂いのした新鮮な風が、私達の髪を撫でて青空へ吹き抜けていく。

「はい、そうです。初めまして」

長閑な風景が心地好いせいか、私の愛想も自然と良くなった。

でも、何がおかしかったのか、フローゼンスは吹き出して、くっくくと肩を揺らして笑った。

「キャシアス、その様子だと上手く行かなかったようだな？」

えっ？ 上手く行かなかった……？

「上手く行かなかったって何ですか？」

また、キャシアス様は何か企んでたのかな。

「護恋……」

キャシアスはばつが悪そうに私を見る。でも、私にはキャシアスの視線の意味がいまひとつ分からないので、首を傾げるのみだ。

「君は、日本から来たんだよね？」

フローゼンスのアイスブルーの目が笑っている。

「はい」

返事をしながらも少しむっとした。何故か、フローゼンスが嫌な人に見えたからだ。

「君はなんでイースティアに来たんだい？」

フローゼンスが面白そうに私に問う。今度こそ、馬鹿にされないようにちゃんと返事をしようと背筋を伸ばした。

「はい、世界一のデュエリストになるためです」

「これは、傑作だ！ 世界一のデュエリスト！ いや、なってもらわねばね！」

フローゼンスはつぼに入ったように、「はーははは！」と、涙を流しながら笑う。

な、何なのよ、この人〜っ！

「ちよつと、失礼なんじゃないんですか！」

フローゼンスは「ゴメンゴメン」と笑いを収めようとしている。そして、彼はキャシアスの肩になれなれしく手をかけた。

「キャシアス？ こんな子を口説くのは、もう疲れたんじゃないのかい？」

キャシアスが何か言おうとしたのを私はつい遮ってしまった。

「キャシアス様の気持ちは受け取れないけれど。私は絶対無敵のデュエリストになってみせます！」

フローゼンスは腹を抱えてまた笑い出す。

決定的に馬鹿にされてしまった。

キャシアス様も、何もフォローしてくれないし。

「なんで、初対面の人にこんなに馬鹿にされないといけないのよ！」
確かに、私は弱いかもしれないけど。絶対に強くなって見せるんだから！」

ぶんぶんと一人怒っていると、キャシアスが酷く疲れたように嘆息した。

「護恋、先に帰ってくれないか」

キャシアスが、厳しい眼をこちらに向ける。

「えっ？ で、でも、まだ、お墓参りが……」

「良いから！」

キャシアスの怒鳴る声に、びっくりして飛び上がってしまった。

「は、はい……」

私は、お墓から離れて、停まっているリムジンの方に歩き出す。

道路沿いの木々がざわざわと風に揺れて影を落としている。キャ

シアスはフローゼンスと何か喋っているようだった。

風に乗って、キャシアスの声が流れてきた。

「もう、疲れた」

キャシアスのはっきりとした声。

私はハツとして、後ろを振り向いた。

今日のキャシアスはどことなく変だった。引き返そうとしたが、SPの人に「こちらです」と案内されて、リムジンに乗せられてしまった。

このとき、私はキャシアスのところに戻るべきだったのだ。

違和感を生んだままリムジンはゆっくりと走り出す。窓の景色にキャシアスを見つけてじっと見ていたが、あっという間に彼は木々に覆い隠されて、暮色と一緒に流されてしまった。

第六話 フェイのノート

学園に帰ってくると、今日の授業が終了して、園舎は閑散と
していた。鳥達が気だるげに鳴きながら自分のすみかに飛んでいく
のが、一年Aクラスの窓から見える。高貴な方達はリムジンで誰と
もなしに帰っていく。生徒達の他愛もない話し声が戯れて遠ざかる。
夕日に染まる教室の中で、一人リュックに教科書を詰め込んでいる
と、後ろから誰かが近づいてきた。

「おい」

それは、フェイだった。彼も帰り支度をして、リュックを背負っ
ている。

私は、フンと彼を無視して、リュックを背中に背負おうとしてい
た。

「これも、一緒に入れておけ」

「えっ？」

渡されたのは、一冊のノートだった。それを仏頂面で受け取る。

何事だろうとノートをぺらぺらとめくった。

「こ、これ！ 今日の授業のノート？ もしかして、私のために書
いてくれてたの？」

「ああ。後で返せよ」

「あ、ありがとう！」

国史、賭け事、剣技の授業までこと細かく書かれてある。

「フェイが書いてくれるなんて思ってもみなかったよ！ フェイツ
て意外と良い人なの？」

「今頃気付いたのか」

「あははははは」

私は、明るく振舞ってノートをリュックにしまう。そして、それ
のチャックを閉めて、背中に負う。フェイが私をじっと見て、それ
から嘆息した。

「今日は、悪かったな。別に……お前が猿に見えていたというわけじゃないんだ」

「そ、それ、ホント？」

「じゃあ、何に見えてたの？ と聞こうとすると、フェイが、フウツと嘆息した。そして、あさつての方向を向いて、ドアに向かって「おい！」と、声をかけた。

「えっ？」と、私もドアの方を振り返る。

「お前ら、そこで何をしている！」

「バタバタバタツと、足音が去っていく。フェイがイライラしながらドアを開けると、

「は、放してください〜！」

「放せよ！」

「まあまあ、逃げなさんなって。今から面白いところじゃなか」
にここにいるギルバートに、腕を捕まえられたルルとコードネルがいた。

「おい、お前ら……」

「フェイの目がキラリと光る。ルルとコードネルはひいいい！ と、顔を真っ青にして、怖気だっていた。ルルは先にギルバートの手を振り切った。

「わ、私は、デュエルの審判をしなければならぬので、これで失礼しますっ！」

ルルの眼鏡が光る間もなく、彼女はさっさと廊下を走っていつてしまった。

「コードネルもやっとギルバートの手から逃れることに成功したよ
うだ。」

「じ、実は、俺もなんだ！ じゃあなーっ！」

「彼もバタバタと廊下を走り去ってしまった。」

「ありやりや……逃げられちゃったぜ」

「ギルバートはニカツと笑った。ギルバートは全然フェイを怖く思っていないらしい。ついでに、悪気もないみたい。」

「おい、ギルバート」

「なんだよ、フェイ？ 痴話喧嘩は終了したのかよ？」

「あとで……ここで立ち聞きしていた奴らを教える」

「教えたらどうすんだ？」

フェイはニヤツ……と笑った。ぶ、不気味……。

後でデュエルで締めるんじゃないでしょうね！

「ふえ、フェイ！ もういいじゃん！ それより、お腹空いたよ。

学食でなんか食べようよ！」

フェイはふうと嘆息した。

「そうだな……」

「そうしようぜ〜！」

ギルバートは一人明るい。

私は内心ほつと安堵していた。何の罪もないクラスメイトが締められるのは見てても辛いものがあるものね。

そして、今日も三人で仲良く夕食を取ったんだ。ちなみに、ギルバートは今日もカレーだった……。

夕食を食べた後、私は女子寮の自分の部屋に帰ってきて、シャワーを浴びた。そして、風呂上がりにフェイに貸してもらったノートを写している。

フェイの字は達筆だった。それに丁寧に解説されているのでわかりやすい。授業を受けるより、フェイのノートを見たほうが良く分かるんじゃないかってくらい。

「ふう……これでオーケー」

最後の一行を書いて、ノートを閉じようとすると、下のほうにイラストが描かれてあったのが見えて、「ん？」と、ノートに顔を近

づけた。

それは、可愛いネズミにポニーテールを付け足したようなイラストだった。

「何これ、フェイが描いたの？」

横に矢印が描いてあって、「護恋」と書かれてあった。やっていることが彼に似合わなくて、思わず吹き出していた。不思議と気分が明るくなる。

まあ、良いよ。そのイラストが可愛かったから、許してあげよう。それから暫く、にこにこしながらフェイのノートを読み直していた。

その日の夜は静かで何も起きる気配がなく、しかも良く眠れた。だけど、私は変な夢を見たんだ。夢には、キャシアスが出てきた。

キャシアスは暗いところに一人で立っている。表情はとても辛そうで、私を見て、涙を流していた。

『護恋……さようなら……』

キャシアスはそう言って、私に背を向けてどこかに遠ざかっていく。幽霊のようにすうつとどこかに。

『待つて、キャシアス様！』

手を伸ばしてキャシアスの腕を掴もうとした。でも、するりと彼の指が滑って私の手は空を握る。

キャシアスはそのまま、すうつと消えてしまった。

『きゃし……あす……様？』

胸にぽっかりと穴が開いたような空虚な感じがした。

『いやだ……』

途端に、底知れぬ悲しみに襲われる。自分の制御が利かなくなる

ほど悲しみに感情を操られる。

『嫌だ！ キヤシアス様！ キヤシアス様あああああ！』
胸を掻き毟られるほど悲しくて、夢の中で泣きながら絶叫していた。

キヤシアスがいなくなることは悲しいって分かっている。だって、友達だと思っていたから。でも、それを差し引いても残る悲しみはこの悲しみの正体は。

「は……っ！」

答えが出る前に現実に戻された。

飛び起きて、荒く息を吐いた。寝汗をびっしょりとかいている。

「何、今の……夢……？」

時計の針は朝の五時を示していた。

第七話 キャシアスの異変

翌日、アンジェリカの手駒の私は、彼女の出迎えのため、園舎の前で待っていた。フェイやギルバートも、私と同じ目的でグラウンドにいる。私の他にも、手駒たちが高貴な方達を待ち構えている。そんな朝の日常だ。

今日は朝から良い陽気で、おしゃべりには最適だった。今はフェイとギルバートと、昨日行われた競技場ハルシオンの試合をネタに、盛り上がっているところだった。

昨日の夢は気になっていいるけれど、正夢になることなんてほとんどないに近いし……。

「あ、もう時間のようだぜ」

ギルバートがサツと軽く手を上げて私達を制止した。

「あ、ホントだね」

グラウンドの向こうから、リムジンが次々と入ってきている。ただっ広いグラウンドなので、その向こうからこちらまでかなり距離があった。ここから見ていると、リムジンがおもちゃのように見えるほどだ。

それでも、だんだんとリムジンは大きさを増して近づいてきている。

しばらくして、ようやくアンジェリカのリムジンが私の前で停車した。

運転手さんが先に降りて、後部座席のドアを開けた。

するとアンジェリカが、リムジンから綺麗な所作で降りてくる。今日も、いつもと同じ肩までのふわふわの髪型だ。しわ一つないブレザーの制服をきちんと着こなしている。

「おはよう、アンジェリカ！」

「おはようございます。護恋」

ふんわりと笑うアンジェリカ。私はにこにこしながら、アンジェ

リカの隣に並んだ。

挨拶が明るく飛び交う朝の日常の中を、爽やかな風が吹き抜けた。園舎の屋根には鳥たちが飛び交い鳴き声を交わしている。

「おはよう、フェイ」

「おはようございます、キャシアス様」

キャシアスとフェイの穏やかな声がして、私のほうに歩いてくる。にこやかに彼はフェイと談笑している。

いつもと変わりなさそうだし元気みたいね。思わず私は安堵の息を吐いていた。

それに、私はキャシアスに言いたいことが山ほどあったの。

でも、先にちゃんと挨拶をしなきゃいけないよね。

「おはようございます、キャシアス様」

フェイに叱られないように頭を下げる。

「それでね、フェイ。私はこう思うんだよ」

だけど、キャシアスは、私の横を通り過ぎてしまった。

えっ……？

驚いて顔を上げる。すると、アンジェリカもフェイも、口が疑問の形に開いたままで止まった。

「フェイ？　ちゃんと聞いてくれてるのかい？」

「え、ええ。キャシアス様の仰るとおりです」

フェイは私をちょっと見てから、キャシアスと一緒に園舎の中に入って行ってしまった。

「聞こえてらっしゃらなかったのかな？」

アンジェリカに不安な視線を送る私。

「きっとそうですわ」

アンジェリカはそう答えたけれど、彼女も戸惑っている。

「そ、そうだよ……」

私はアンジェリカと話しながら、自分たちの教室まで歩いてきた。ドアを開けると、向こうにキャシアスとフェイが楽しそうに喋っていた。

さっきのは、気のせいだよ……？

「よし！」と気を取り直して、キャシアスの机の横に立った。

「おはようございます、キャシアス様」

私は丁寧にお辞儀して、元気いっぱい挨拶した。

いつもならこんな私に対して、「おはよう、護恋」と、とろけそうな笑みで答えてくれる。でも、今日は。

キャシアスは、静かに嘆息した。そして、彼は机の中から本を一冊取り出して、読み始めてしまった。

え……？

「ど、どうされたんですか？ キャシアス様？」

私には、うるたえるしか方法がない。まさか、キャシアスの耳が聞こえなくなっただけでもあるまいし。

「キャシアス様！」

たまりかねてキャシアスを呼んだ。すると彼はうるさそうに、荒く嘆息した。

「フェイ」

私を呼ばずに、キャシアスはフェイに声をかけた。しかも、本のページから目をそらさずにだ。

フェイはずっとキャシアスの隣の席で、そんな私を見ていたようだ。フェイの視線は戸惑いを隠しきれない。彼は私に一瞥くれて、キャシアスに視線を戻した。

「どうなさいましたか？」

「フェイ……うるさい虫がいるようだ。追い払ってくれ」

「えっ……？」

鋭い刃物でざっくり切られたような気分になった。

「うるさい虫って、もしかなくても、私のこと……？」

フェイはそんな私を手で制して、キャシアスへ動揺したような笑みを浮かべた。

「失礼ですが、護恋がキャシアス様に何かしたのですか？」

「別に何も？」

「でしたら……」

「ああ、そう言えばしたね……現在していると言ってもいい」

「私がしたことは改めます。ですから、私が何をしたのか仰ってください」

しつこく食い下がると、キャシアスがやっと私を見た。でも、その目は敵意に染まっている。

「私と同じ空気を吸っている。不愉快だ」

シヨックで息が詰まりそうになった。

いつの間にかクラスメイトの注目の的となっていたようだ。皆は戸惑ったようにこちらを見てざわざわと話している。

始業のベルが鳴って、担任のグロリアーナ先生が入ってきた。出席簿を抱えている。

「皆さん、席についてください」

クラスメイトの足音が戸惑いながらも各席に戻っていく。

何も知らないグロリアーナ先生は、一人だけにこやかだ。

「出席を取ります」

皆は席に座っても、ざわざわと私を見て喋っている。

だが、私は一人キャシアスの前に突っ立っている。何故か、足が硬直したかのように動けなかった。

「護恋さん、席についてください」

「す、すいません……」

混乱していたが、まず席に着こうと自分に言い聞かせて、キャシアスの後ろを通り過ぎた。その時。

「グロリアーナ先生」

「何でしょうか、キャシアス様」

「席替えをしてください」

キャシアスの頑とした声を聞いて、クラスメイトたちは再びざわつき始めた。

私には、何が起きているのかさっぱり分からなかった。

心臓の音が、途方に暮れたように不安の音を奏でている。

ただ、キャシアスに嫌われてしまったという事実を突きつけられて、私は呆然としていた。

第八話 工藤姫流（くどう ひめる）

状況のつかめていないグロリアーナ先生はぼかんとして、キャシアスを見つめながら瞬きした。

「……キャシアス様、席替えはこの間したばかりですが……」

その通りだ。グロリアーナ先生が不思議に思っても仕方がない。

「後ろの席が気に入らなくなったんです。替えてください」

先生は、涙を浮かべている私に気付いて、同情したように眉を下げた。

「グロリアーナ先生」

キャシアスの声に、先生はハッと我に返って、無理やり笑みを浮かべようとしている。

「何があつたか存じませんが、キャシアス様の命令ですので、席替えをいたしますね……」

グロリアーナ先生は、困惑したような目で生徒達を見渡す。

「それでは、護恋さんの席を……」

「グロリアーナ先生」

声の方を向くと、アンジェリカが珍しく厳しい目をして手を上げていた。

「アンジェリカ様、どうされましたか？」

「護恋が移動させられるなら、主の私も一緒の方が良いですわ」

「アンジェリカ……」

私が涙を拭くと、アンジェリカは励ますように私へと微笑みをくれた。

「そうですね。その方が宜しいかもしれませんね」

グロリアーナ先生は少し安堵したように笑みを回復させる。

「護恋、私も一緒ですから元気を出してください」

「うん、ありがとう」

「では、護恋さんの席は……」

思案に余ったようにグロリアーナ先生が席をドアの方から左に視線を飛ばす。

「グロリアーナ先生」

声のしたほうを振り向くと、一人の生徒が手を真つ直ぐ上に伸ばしていた。

「先生、護恋とアンジェリカ様は、僕の前の席ではどうでしょうか」
黒髪で黒い猫目の少年だ。確か、名は工藤姫流だ。

彼は私と同じ世界から来た日本人らしい。でも、彼とはあんまり話をすることがない。

今まで私は、キャシアスとフェイに目を付けられていたので、話す暇がなかったというのもある。

それを差し引いても、なんていうか彼は周りの空気に溶け込んでしまっている感じなんだよね。だから、いつの間にか彼の横をすり抜けてしまっている。

「姫流君がそう仰ってるので、そうしましょうか」

グロリアーナ先生は私を励ますように笑みを浮かべた。

「はい」と、私とアンジェリカは返事する。

「机、僕が運んであげるよ」

彼は目を細めて微笑む。そして、彼はアンジェリカの机を軽々と持ち上げた。

「あ、ありがとう……姫流って良い奴だね」

「まあね」と、姫流。

私は気持ち少し明るくなったような気がして、頬を緩めた。

そんな私と姫流をフェイがじっと見ている。でも、私の視線に気付いて、目をそらしてしまったけれど。

姫流は、私とアンジェリカの机を左側の席まで移動させてくれた。さつきは右の前から二番目だったけれど、今回は左の後ろから二番目になってしまった。

教室が見渡せて良いけれどね。

新しい席からは、グラウンドも良く見下ろせる。とにかく、この

席に慣れようと視線を左右に巡らせた。対角線の先にはフェイとキヤシアスが楽しそうに喋っている。

「護恋、フェイとキヤシアス様と大分離れてしまいましたわね……」
アンジェリカは、気落ちしたように嘆息している。

「アンジェリカに辛い思いさせてごめん……」

「そんなことありませんわ。護恋は私のお友達ですもの。護恋と離れる方が嫌ですわ」

私は少し頬を緩めた。

「アンジェリカ、ありがとう……でも、キヤシアス様と離れたけれど……」

「何度も申しますが、キヤシアス様のことは、もう何とも思っておりません」

はつきりとしたアンジェリカの声を聞いて、心が軽くなるような気がした。

「なら良いんだけど……」

でも、私はちゃんとアンジェリカに微笑みを返せない。気落ちしてしまっていることは確かだから。

「護恋のほうが辛いんじゃないやありませんの？ キヤシアス様があれでは、フェイとも話せませんし……。キヤシアス様は護恋を気に入ってくださっていたのに……一体どうなさったんでしょう」

「だね……」

好かれすぎるのも困るけれど、嫌われてしまうのもなんだかね。友達っていう中間はないのかなあ。キヤシアスは、極端すぎるよ……

突然、パシャッとデジタルカメラのフラッシュが焚かれた。ぎよっとして私は振り向いた。後ろの席から姫流が私の姿をカメラのフレームに収めているではないか。

「どうしたんだよ。喧嘩したんじゃないの？」

姫流の質問に答えようと私が口を開くと、またカメラのフラッシュが焚かれた。私は、強い光に目を瞑る。

「姫流、あのねえ……勝手に写真取らないでよ」

「どうやら、姫流は変わり者らしい。勝手に、人の写真を取るだなんてプライバシーの侵害だよ。常識がないんだらうか。」

「そこまで考えて、突然、脳裏にひらめいたんだ。」

「待って、姫流。この写真のこと知らない？」

「私は、姫流にこの間拾った私の写真を見せたのよ。」

第九話 三十日間の賭け

「知っているよ。だって、これは僕がキャシアス様にお渡ししたものだから」

姫流しめるは、猫のような目を笑わせて当然のように言った。当たり前のように言うので私はまったく面白くない。

「何で、人の写真を勝手に……」

「キャシアス様に頼まれたんだよ。護恋の写真が欲しいってね」
悪びれた様子もなく姫流はあっさりと白状した。

「キャシアス様が……？」

「でね、護恋。これは提案なんだけれど……」

姫流は楽しそうにその『提案』を語る。

私は彼の作戦を聞いてニヤツと笑った。

「面白そうだね……」

隣で聞いていたアンジェリカも、「良い提案ですわ」と軽く手を叩いている。

「じゃあ、早速試しに行ってくるよ」

私が席を立つと、姫流とアンジェリカが笑顔で手を振ってくれた。ちょうど、キャシアスはフェイと上機嫌で喋っているところだ。

私はそこまで近づくと、手のひらでキャシアスの机を思い切り叩いた。

キャシアスは反射的に振り返った。クラスメイト達は何事かと私に注目している。

振り向いてくれたキャシアスだったけれど、うっとうしそうに私を睨んでいた。

「……何の真似だろうか？」

声にとげとげしさが込められている。

「落し物を届けに来たんだよ。これ、キャシアス様でしょ？」
机を叩いた手を除けて、私の写真をキャシアスにお披露目した。

「ああ、それならもういらぬ……君にあげるよ」

さつさと話を済ませてフェイのほうへ顔を戻そうとするキャシアスに、私はなおも食い下がる。

「どうして？ 写真が欲しいくらい、私のことが好きだったんじゃないの？」

おどけて言うと、キャシアスはやっと私に面して馬鹿馬鹿しそうに笑った。

「……安心してくれ。もう、君の事は嫌いではないから」

「私だって、キャシアスの思いを受け止めることはできないけれど、好きにしる、嫌いにしる、ね」

キャシアスは、とげとげしい視線で私を見ている。

「でも、やっぱり嫌いって言われると辛いな」と、私。

視線を下げて、机に置かれた写真を上から見下ろす。写真の私は、何も知らないで無邪気に笑っている。

「私がかしたのなら謝るけれど、身に覚えがないんだ」

私の罪は、キャシアスにやきもちを焼かせてしまったくらいで……

……それで、キャシアスは私のことを嫌いになったんだろうか。

「ああ、私が一方的に嫌いになったからね」

キャシアスは、どうでも良いというように嘆息した。早く私と話を終わりたいらしい。

「……でも、そうはいかないよ。」

「それなら仕方ないよね。私の提案なんだけれど……私とデュエルしない？」

私はまっすぐに、キャシアスの目を見た。

「負けると分かってて、言っているのか？」と、フェイ。

彼は、私の考えが分かってないようだ。隣で怪訝そうな顔をしている。

「ちがうよ、フェイとするんじゃない。キャシアス様とデュエルするんだよ。つまり、キャシアス様が直接私と戦うの」

「おい、何を寝ぼけたことを！」

フェイの怒鳴り声に思わず目を瞑る私。彼が怒るのは想定済みだ。だけど、怒っているフェイとは逆にキャシアスは面白そうに笑った。「フェイ、構わないよ」

よし、かかった！ と、内心ほくそ笑む。

「それでね。私は、キャシアス様が私の友達になっってもらっ賭けをする」

傍観していたクラスメイト達はざわつき始める。

キャシアスはますます面白そうに目を細めた。

「面白いね。じゃあ、私は三十日間の賭けにしようか」

「三十日……？ 三日間の賭けじゃなくて……？」

「怖気づいた？」

「まさか！」

キャシアスは目をすうつと開く。その目には、意地悪な色がまざまざと浮かんでいた。

「じゃあ、デュエルはいつにしようか？」と、キャシアス。

姫流が私の後ろからひよこつと顔を出す。

「今日の放課後ではどうでしょうか？」

そして、彼はそんな提案をした。

「では、今日の放課後。規則委員、伝えたよ」

キャシアスは傍で見ていたルルに視線をやった。

「はい、かしこまりました」と、彼女は慌てて頭を下げた。

「オーケー！ キャシアスと友達になれると思うとワクワクするよ！」

「そう簡単には行かない。多分、護恋は後悔することになるよ」

キャシアスは絶対零度の視線を私にくれた。くじけそうになる私だったけれど、もう少しの我慢。写真は仕方ないから私が持つておくか。

用も済んだので、私はゆっくりと席に戻ろうとしていた。

「おい！」

その時、私の腕をフェイが掴んだ。

「何を考えているんだ？ キャシアス様を少し侮ってないか？」

「そりゃ、フェイと戦うよりはいいと思うけれど？」

フェイは疲れたように嘆息した。

「キャシアス様と俺はよく一緒にデュエルの手合わせをしている。

そんなキャシアス様にお前は勝てない」

「それでもよ。キャシアス様が私を嫌いなままより良いでしょ？」

私の考えが気に入らなかつたのか、フェイは眉を寄せて、何ともいえぬ奇妙な顔をした。

「キャシアス様は、護恋と距離を置きたいと思っておられるのだ。

もう少し、あの方のお気持ちを考えたらどうだ？」

「……好きな人から友達にはなれないってこと？」

「ああ、そうだろう」

何故か、すごく寂しい気がする。

「それでも……。それでも、キャシアスに嫌われたままじゃ、私が辛いんだよ」

それは、ワガママかな。

そう言っつてフェイを見上げると、フェイの瞳が揺れた。それから、

フェイはすつと私から視線を外す。

「そうか……じゃあ、何も言わない」

フェイはそのまま、席に戻ってしまった。

第十話 ブーゲンピリア

昼休みのことだ。私と姫流ひめるは先にジャージに着替えて、グラウンドに出ていた。アンジェリカも後で来るらしい。姫流と一緒にそこでデュエルの特訓をしようと、ウォーミングアップに体操をしていた。

「護恋、これを両手両足に付けて？」

姫流がジャージのポケットから何かを取り出した。

「これ、何？」

「日本が開発した『Gアングレット』と『Gブレスレット』だよ。自由な重さの負荷が付けれる」

「へ、へえ……。日本の技術ってすごいね」

戸惑いながらそれらを両手両足につける。重さはあまり感じない。ただの銀色の金属の輪って感じがするけどね。

取り付けると、金属が縮んで腕にフィットした。

「ちなみに、俺でしかそれを外せないからよろしく」

姫流はリモコンを手にもにこにここと、のたまう。

「別にいいけど……。早く特訓しようよ。昼休み終わっちゃう」

その時、複数の足音がして、私達の前で止まった。

顔を上げると、女達が腕組みして仁王立ちで立っているではないか。

「うげ……」

「ああら、ご挨拶なこと」

女の一人はとりまきを従えてご機嫌で、フンと鼻を鳴らす。

「貴方、キャシアス様に振られたんですってね」

ざまあみろといわんばかりに女は楽しげに声を弾ませる。

ムツとして「そうよ」と答えた。もしかして、ファンクラブの連中なのかな。

「キャシアス様とデュエルをするそうじゃない。無駄な抵抗はやめ

ることね」

「無駄な抵抗かどうかは分からないじゃない」

「目障りなのよ、あなた」

女達は私を取り囲んだ。うげっ、もしかして、ピンチなの？ 助けを求めするように姫流を見ると、姫流は隣で小さくなって気配を消していた。まったく頼りにならない……。

「護恋！？ あなた方、何をしているんです！」

アンジェリカが私に気付いて駆けて来た。

「アンジェリカ来ちゃ駄目！」と、私は叫んだ。

女達は私に警告する。

「護恋さん、貴方だけじゃないわ。アンジェリカ様も学園ですごくせなくなるかもしれませんわよ」

くっ、脅す気なの？ でも、今はキャシアスが庇ってくれるわけじゃないし、私の力だけじゃアンジェリカを守れないかもしれない。女達の脅しに屈しそうになったときだった。

「お止め！」

凜とした芯のある声が辺りに響いた。女達は敵意を持って声の方を振り向いたが、次第にその顔から血の気が引いていく。

「ぶ……ブーゲンビリア様……」

ブーゲンビリア？

女達はサツと私から遠ざかって、ブーゲンビリアに道を作った。ブーゲンビリアはウエーブヘアを揺らしながら颯爽さつそうと歩いてくる。藍色の目が女達を射った。背は高く細く、可憐な女の人だった。

「な、何の御用でしょうか？」

女たちは戸惑いを隠せないようだ。

「私の生きているうちは、護恋に何かすることは許しません」

女達は苦り切った顔で「も、申し訳ありません」と言っ慌てて退散した。私はほっと安堵して、ブーゲンビリアに視線を戻す。

「護恋、アンジェリカ、大丈夫ね」

ブーゲンビリアは私のジャージの襟を直してくれた。私はブーゲ

ンビリアの可憐さに目を奪われた。それよりも驚いたのは、ブーゲンビリアはアンジェリカを呼び捨てにしたことだ。ということは、アンジェリカより位が高いってことになる。私は友達だと思って、アンジェリカを呼び捨てにしているけれど。

「ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます」

アンジェリカに釣られて私も慌てて頭を下げる。

「良くつてよ。護恋もデュエルを頑張りなさい」

甘い花の香りを残して、ブーゲンビリアは立ち去った。

思わずその場にへたり込んでしまう。

嵐が去ったみたいだったよ……。

そして、特訓ができないまま、昼休みが終わってしまった。

今日の、デュエルの授業の休み時間。

気合を入れて、ポニーテールをくくり直していた。そんなひとときに、後ろで獣のような目がきらりと輝く。不穏な空気を感じて振り返ると、それは本物の獣のように飛び掛ってきた。

「護恋んんんっ」

「ふえ……？ ふぎゃああああ」

あつという間に彼女の下敷きになってしまった。高等部には相応しくない幼い姿。

「護恋、みつけたああああ」

「う、うつつう、ウナ様ツツ！？」

悲鳴を出したいのを堪えて、半泣きで彼女を見る。今まで、彼女を避けるだけ避けてきたというのにつ。

この方は、キャシアスの妹のウナ様だ。私のもっとも苦手として

いる人。目を合わせたが最後、ウナ様はにっこり笑っていつもこう言う。

「護恋、お馬さんして」

いやだあああああああ！

そんな私の背中に早くもウナが跨ろうとしている。

ひー、何なの、このお子様は。

「ああ、ここにいらっしやったのか」

救いの神が現れて、ひよいとウナを抱き上げた。

「ぎ、ギルバート……」

た、助かつ……。

「お願いだから、もっと早く来てよ……っ」

私の心臓はバクバク鳴っている。

「あら、ご挨拶ですわね。お兄様とデュエルをするというから、忠告に来て差し上げたのに」

ギルバートに、だらんと抱えられたまま、ウナは天真爛漫な目を私に向けている。

「忠告ですか……」

また、何を言つつもりなんだろうか。

「お兄様はデュエルはめったになさいませんが、すごくお強いですわよ？」

「へ、へえ……」

「あら、本当ですわよ。果たして護恋が勝てるかしら」

もうすぐデュエルだっというのに、不安なことを言わないでよ。

私の気も知らず、ウナはにっこりと微笑んだ。

第十一話 キャシアスの手

そして時間は刻々と過ぎ、放課後になった。体育館には人だかりができています。ファンクラブの子や、野次馬が人山を作って、キャシアスの登場を待ちわびている。

私はポニーテールを自分で結って、髪の毛の根元を引き上げた。気合も自ずと入ってくるようよ。

キャシアスは、ジャージ姿で現れた。傍に、フェイを従えている。キャシアスと呼ぶ黄色い歓声に、彼は手を振って答えている。

ん……？ 姫流がルルと話しているけれど。一体何を真剣に訴えているんだろう？

姫流の手にはリモコンが握られてある。ああ、私の手足に付けている『Gブレスレット』と『Gアンクレット』のことを話しているのかな。

規則委員のチェックに引っかけかかって、私がもし勝ったとしても無効になったら嫌なものね。

「護恋、頑張ってくださいね」

アンジェリカが天使のように微笑んだ。

「うん、頑張るよ！」

近づいてくる足音と視線を感じたので、私は顔を上げた。

するとキャシアスが、傍で意地悪そうな笑みを浮かべて立っていた。

「やあ、護恋」

「あれ？ キャシアス様、もしかして、デュエルなしで友達になつてくれるんですか？」

おどける私が面白かったのか、彼は肩を揺らして笑った。

「まさか。ウナにいじめられていたようだけど、特訓らしい特訓はしてないんじゃないかと思ってね。そんなことで、私に勝てると思っっているのかな？」

「さあね、キャシアス様の實力なんて知らないし」

「嫌いな君に、三十日間の賭けができると思うと楽しくてならないよ」

やっぱり、キャシアス私のことが嫌いなんだ……。

こないだのウナの台詞がじわりと脳裏に蘇る。

『今回は、私に策はありませんの。護恋の味方もしたいけれど、お兄様の肩も持ちたいですし。だから今回は自力で頑張ってくださいな』

ウナは天真爛漫な笑みを浮かべてそう言ったのだった。

だから、今回は策は全然ないけれど。

でも、賭けで勝てば、何かが変わるはずだよ。

でも、勝ってキャシアスと友達になっても私のことを彼が嫌いなままだったらどうしよう。かといつても、賭けで気持ちの操作はしたくないし。

え？

あれ……？

ちよつと待つて……？

絶対的な賭けつて……。賭けの内容によっては、勝てば相手の『心の操作』も、できるんだよね？

「キャシアス様!？」

私の大声を聞いて、キャシアスが私に鋭い眼光を浴びせた。

「なんだ、うるさい!」

「ごめんなさい! 手を……手を、見せていただけませんか?」

キャシアスの手に触れようとした。だけど、私の手をキャシアスが勢いよく振り払った。

「どうして君ごときに私の手を見せなければならぬ!？」

キャシアスの言動にショックを受けている場合じゃない。

私は視線を上げて、キャシアスの目を真っ直ぐに見つめた。

「キャシアス様、この間、デュエルをしましたよね? そして、相手が『護恋を嫌いになるという賭け』をしてしかもそのデュエルで

キャシアス様は負けたんじゃないですか？」
私の問いに、アンジェリカもルルも驚いているようだった。

第十二話 キャシアスVS護恋

キャシアスは観念したように息を吐く。そして、リストバンドを左手から外して、ひじを曲げてこちらに向けた。

「これで満足かい？」

「えっ!？」

私は絶句してしまって、動きを止めた。アンジェリカとルルも同様で、口に両手を当てて驚愕している。フェイも隣で瞠目していた。キャシアスの左手の内側には、絶対的な賭けが働いているという星型の烙印があった。それも、『三つも』だ。

キャシアスはリストバンドを左手に戻して、

「規則委員、早くデュエルの用意をしてくれないか」

ルルへと声を飛ばした。

「は、はい! かしこまりました!」

ルルは慌てて、ヘッドホンマイクを頭につけている。ルルと同じ委員のコードネルはカードキイを使い、体育館倉庫を開けて、麻痺薬の付いている剣の入った箱を急いで引っ張ってきた。

「キャシアス様、まだ話が終わってません!」

私は、キャシアスを追いかける。彼は足を止めて、箱の中から麻痺薬の付いた剣を引き抜いていた。

「文句は、デュエルで聞こう」

彼は私に一瞥を残して、さっさとバトルフィールドに歩いて行ってしまった。私はふうと息を吐いて、口を一文字に結ぶ。

そして、私も剣を箱の中から選び取った。

『今からキャシアスVS護恋のデュエルを行います』

ルルは片手を上げて高らかに宣言する。ギャラリーは盛り上がって、私とキャシアスに歓声を送った。

『掟の神テュテュスの名の下にルルは審判の立会いを務めます』

ルルが分厚い本 『決闘の書』を開くと、どこからともなく涼

しい風が舞い込んで、そのページを素早くめくっていく。

『この審判の判断はこの決闘の書の判断にゆだねます。ルルはテュテュスと規則委員の名の下に公平な判断をすることを誓います』

彼女の声が強い意志を持って空気を打ち振るわせる。

『最初に、決闘七ヶ条を読み上げます』

『決闘の書』は真ん中のページまで開いた。

『一条。決闘は正々堂々行われなければならない』

ルルの厳格な声が体育館を満たした。

『二条。決闘はテュテュス神の御前で行わなければならない』

彼女が一条読み上げること、ページが勝手にめくられていく。

『三条。決闘の勝敗により主おもに敗者は賭けに束縛される』

彼女は背表紙に両手を置いておけるのに、ページが自動的にめくられていくのだ。

『四条。手駒は主のために戦わなければならない』

透明な誰かが、隣でめくっているような気がしてならない。

『五条。決闘を行う者は剣によって戦わなければならない』

それは、もしかして、掟の神のテュテュスなのだろうか。

『六条。賭けは正当かつ対等でなければならない』

ルルが読み上げること、体育館が神聖な空気で満たされていくような気がした。

『七条。決闘の精神にもとる行いをしてはならない』

いつの間にか体育館は静まり、ルルの声だけが響いている。

『尚、掟に背くと神の意志により絶対的な賭けは実行されません。』

正々堂々と戦ってください』

私とキャシアスは「はい」と返事をした。

『賭けの確認をします。キャシアス様は『護恋に対しての三十日間
の賭け』、護恋さんは『キャシアス様が護恋の友達になってもらう』
という賭けですね』

再び、私とキャシアスは「はい」と首肯する。

『ルールはもう一度言いますが、先に剣が肌に触れて痺れた方が負

けです!」

私とキャシアスは剣をそれぞれ構える。

『では、始め!』

「やあああああああ!」

「はあああああああ!」

両者共に、気迫を声に込めて向かっていった。まず、キャシアスの右肩を狙ったが、彼に刃で受け止められてしまう。キャシアスは私の繰り出した剣を払いのけて突いてきたので、真つ先にそれを打ち払った。今度は胴を狙おうとしたが、彼が身体を捻って避けられてしまう。そして、彼は隙を見て前に出てくる。私の剣と彼の剣が激しく衝突した。

「キャシアス様!」

思い切り叫んでフェイントを剣先にかける。キャシアスがあっさりとそれを刀身で受け止めた。

「どうして、デュエルに負けたことをお教えくださらなかったのですか」

思わず語気を荒くすると、キャシアスが私を睨んだ。刃が激しくぶつかり合う。

「どうして言わなくちゃならない? 私はもう疲れていたんだ。何もかも、思い通りにならないことばかりでね」

キャシアスの剣筋が彼の言葉のトゲと共に荒くなる。

「私のことも、思い通りになりませんでしたか」

私も負けずに、応戦しようとする。でも、手足が思うように動かない。

「その通り。いっそのこと、君を嫌いになろうと思って、フローゼンスに勝負を持ちかけて、わざと負けた」

「な、何ですって? わざと?」

気後れしたのが手に現れたのか、私はキャシアスの技に押されてしまう。

「ああ、そつだ」

私に段々と近づいて、彼は手足を狙ってきた。私はそれを刀身で打ち払った。

「君を嫌いになれば楽だろうと思ってね」

明らかにデュエルを楽しんでいる。剣筋も軽やかだ。

「思ったとおりだったよ」

彼は楽しそうに「ハハハ」と笑った。

「そうですか。じゃあ、その目から流れているものは何ですか？」

キャシアスの片目から涙が一筋こぼれ落ちたのだ。

その雫は剣を振るう反動で、キラキラと宙に舞って床に落ちていく。

彼は、その涙に込められた本音を悟ったように顔をしかめた。

「生理的なものだ！ 気にする必要はない！」

キャシアスは私を睨むと、そのまま入り身になって距離を縮めた。

そして、肩透かしを食らわしてきた。彼が私の小手を狙おうとした

ところを、体をひねって横に避ける。

「キャシアス様。私と友達になりませんか。そうすれば、丸く収ま

ると」

「はあああああああああ！」

キャシアスの気迫が突然激しさを増した。彼は大股で踏み込んでくる。

「寝ぼけたことを！ 私が、私が今までどんな気持ちだったのか、護恋には分らない！」

繰り出される剣の荒々しさに翻弄されてしまう。

「痛みも苦しみも何もかも！ それを友達などという生温い言葉で

ごまかそうというのか!？」

なりふり構わないというようなキャシアスの攻撃には、痛みが感じられた。それに何より、彼のスピードが上がっている。私はその

剣舞について行くことがやっとだ。

「私は、絶対に護恋とは友達になんてならない！ 護恋のそういう無神経なところが大嫌いなんだ！」

キャシアスは叫んで、スパートをかけてきた。私は攻められっぱなしで、後退するしかない。

「終わりだ」

彼はフェイントをかけて、私の左肩へと剣を薙いだ。

第十三話 勝負の行方9

気が付くと、キャシアスの剣を刀身で受け止めていた。それを、右に勢いよく払った。そして、彼から左に避けて距離を取る。

「へえ……立ち直ることができたか。ならば、これはどうかかな？」

キャシアスが本気を出したようだ。太刀筋がまるで読めない。私は彼の剣を振り払いながら後退していくことで何とかしのいでいる。フェイが私に忠告したとおりだ。キャシアスはすごく強い。反撃がまるでできない。隙がまったくみつからない。

どうしよう！ これじゃ、本当にキャシアスと友達になるどころか……！

「私……私……」

唇が自然と言葉を模って震える。

「……負けたら、キャシアス様にずっと嫌われたままなのかな？」

戸惑った笑みを浮かべたまま、キャシアスに尋ねていた。

「そういうことになるな」

彼の剣は休まず、隙があれば私を打とうとしている。

「これからも、ずっと……？」

現実を突きつけられて迷う私に、キャシアスは冷酷に笑ってみせた。

「ああ、そうだ」

刹那、私の視界が煙ったかと思うと、涙が頬を伝っていた。私は嗚咽を堪えてキャシアスを見つめる。瞬間、彼の剣に迷いが生まれた。

「そんなの……」

キャシアスがハッと我に返る。

「しまっ……！？」

「そんなの嫌だあああああああ！」

私はキャシアスの下段に飛び込んで、彼の胸を打った。

シンと静まり返る体育館内。

キャシアスは二、三步進んだ後、ドツと膝を付いて横に倒れた。

『……この勝負、護恋の勝ちです!』

ルルの審判の声が館内に響き渡った。どよめきが波のように大きくなる。

「やった……!」

私は思わずガッツポーズして喜んだ。零れた涙を、袖で拭う。

キャシアスのほうを振り返ると、ファンクラブの子達が彼の方に殺到していた。その中にフェイもいる。

「キャシアス様!」

フェイがキャシアスを抱き起こした。

彼を応援していた者達が、刺すように私のほうを睨んでいた。冬眠していたクマを起こしたような気持ちだ。おもわず「うわぁ……」と、呻いてしまった。

「護恋!」と、逆方向から呼ばれたので、私の意識はそちらに集中した。アンジェリカとウナ、ギルバートが、笑顔でこちらに駆けて来たんだ。

「護恋、おめでとございます。これで、キャシアス様とお友達になれますわね」

アンジェリカがタオルを渡してくれた。私は汗を拭きながら「うん! ありがとう、アンジェリカ」と、頬を緩めた。

「まさか、泣き落としとはな」

ギルバートが呆れたように笑っている。

「わざとじゃないのよ。キャシアスに嫌われたままだっと思ってたら辛くっさ」

私は鼻をすすりながら、剣を箱に戻す。

コードネルが、「お疲れ様」と微笑みかけたので、私も「ありがとう」と笑みを返した。そして、彼はそのまま箱をキャシアスのほうに押していく。ルルがコードネルと話しながら、キャシアスの剣を拾って箱の中に戻しているのを一瞥する。

視線を戻した先には、ウナがコードネルに肩車をしてもらっていた。そして、より高い目線になって、私を見下ろしている。

「私は勝っても負けてもどっちでもいいと思っていましたけれど？
運は護恋の味方をしたようですね」

ウナが私の頭をなでてくれている。彼女らしくて、私は思わず頬を緩めた。

そんな私を、向こうから呪うように女達が睨みつけている。

「花咲護恋、許せませんわ…… キャシアス様をこんなに……」

ファンクラブの誰かが憎々しげに呟いた途端、彼女達の文句は口伝いに勢いを増していく。

初めて私がこの学園に来たときに、アンジェリカがフェイやキャシアスには勝たないほうが良いと、言葉を濁していたことを思い出した。

それは、彼らに味方する者の反撃が怖かったからなのだろうか。

女達の怒りの堤防が決壊する前に、キャシアスがフェイに支えられて、ゆっくりと起き上がった。

「キャシアス様！」

「キャシアス様、大丈夫でございますか？」

彼は答えずに突っ立ったまま、手のひらに新に浮かび上がった新しい烙印をうつそりと見つめている。

絶対的な賭けが働いた者に刻まれる、小さくて黒い星型の印だ。

「キャシアス様！ 護恋の奴、許せませんわよね！」

ファンクラブの一人が、強い語気でキャシアスに尋ねる。

それを聞いて、キャシアスはクツと笑った。そして、刻印された手を握っている。

「……いいや？」

キャシアスの否の声を聞いて、ファンクラブの女の子達は動揺したように彼を呼ぶ声を重ねた。キャシアスはそんな女の子達に目も

くれず、顔を上げてそして。

私は『Gブレスレット』と『Gアンクレット』の調子を触って確かめる。そして、確信を持って顔を上げた。

「ちよつと、姫流ひめりゅう！」

のんきに写真を撮っていた姫流は、

「どうしたんだよ、護恋」

と、カメラを顔からどけて白々しい視線を私に送った。

「どうしたじゃないわよ！ 私のデュエル中にGブレスレットとGアンクレットのリモコンずつといじってたでしょ！」

「ああ、これ？ 護恋が負けたら面白いかなと思ってね」

「やっぱり！ 勝てたからいいようなものの、試合中手と足が重くなったり軽くなったりしたから集中できなかったんだから！ リモコン私が持つておくよ！」

私は活火山のごとく怒って、姫流を追い掛け回した。彼はおどけながら私から逃げる。

「あはは！ リモコン取れるなら取ってみなよ！」

彼はリモコンを持った手を上にやって、それを私から遠ざける。けれども、姫流の手からひょいと、簡単にリモコンが奪い取られた。

もちろん、私じゃない。

「あれ？」

リモコンが手の平から消えたので、姫流は驚いている。

「え？」

一瞬、何が起きたのか分からなかった。

周りは戸惑ったように、私のほうを指差してざわめいている。整った美しい指が、リモコンをもてあそぶ。

「……面白そうなものを持つているね？」

姫流の後ろには、キャシアスが立っていた。

しかも、キャシアスの手にはリモコンがある。

「げ」と、私は呻いていた。嫌な予感がするよ。

キャシアスはリモコンを掲げてしばらく見ていたけれど、意地悪
そんな笑みを浮かべて顔をこちらに向けたんだ。

第十四話 天使と悪魔

「これは、どうやって扱うんだい？」

キャシアスは隣にいる姫流ひめりゅうに操作方法を尋ねている。

「キャシアス様。そのリモコンを返してくれませんか」

彼に近づいてリモコンを奪い取ろうとした。けれども、急に手足が重くなって、私はその場に跪いてしまった。手足が地面に張り付いているみたいに重い。

「キャシアス様……！」

「なるほど、これは面白いね……」

私が顔を上げると、キャシアスがずっと私の前でしゃがんだ。瞳には意地悪そうな色を称えて。

「ま、まだ私のことが嫌いなんですか？」

「ああ、そうだよ」

「そ、そんな……。賭けで勝った意味が……」

がっかりして視線を落としたとき、キャシアスが「でも」と付け足した。

私は恐る恐るキャシアスを窺う。

「でも、護恋とは友達だからね。嫌いではあるけれど、君は遊び甲斐がありそうだから、かまってあげるよ」

キャシアスがにっこりと微笑んだ。

それって……！ 仲直りってこと？

「キャシアス様。ありがとうございます」

私は素直に喜んだ。

「さて、教室に帰るよ、護恋」

キャシアスは天使の笑みを残して、颯爽と歩き出した。

「はい！」

私は、犬ころのようにキャシアスに付いて行こうとした。でも。

「あり？」

手足が地面に張り付いたまま動かない。

「あ、あの、キャシアス様……」

「何をしてるんだい？ 置いていくよ？」

「違うんです、手足が重いなぐって……」

「それは知っているよ。リモコンで重さを最大にしているからね
な、なんですか？」

私の笑顔が引きつった。だけど、キャシアスの美しい笑みは壊れない。

「フェイ、帰りに図書室に寄っていこうと思うんだけど」

フェイはいきなり話を振られて、ハッと我に返ったようだ。素早くキャシアスに視線を移す。

「そうでございますか。では、本をお持ち致します
頭を下げるフェイ。」

「いや、友達の護恋がどうしてもって言うから、本を持たせようと思ってるね」

キャシアスは『友達の』を強調した。

「は、はあ！？ そ、そんなこと」

言っていないと訴えようとしたら、キャシアスがこちらを向いて微笑んだ。

「だって、護恋とは友達だからね」

「うっ！」

私は弱点を握られてしまったのではないだろうか。

キャシアスは面白そうに瞳を開いた。彼の背中に黒い羽が見えた気がした。

キャシアスは天使じゃない。悪魔だ！

「キャシアス様、これでは護恋があまりにも……」

フェイが助言してくれた。私はさすがのようにキャシアスを見上げる。
る。

キャシアスはふうと嘆息した。

「そうだね。調子に乗って私も遊びすぎたようだよ。護恋が可哀想だったね。じゃあ……」

キャシアスは反省したらしく、同情を込めて私を見る。そして、彼はGブレスレットとGアンクレットのリモコンを操作した。

「キャシアス様……」

私は彼の言葉に素直に感動した。やっぱり、キャシアスは優しい人なのかも！

「おお！ 手足が軽く……ならない……」

確かに、起き上がることに成功したけれど、この手足の重さは尋常じゃない。私は恨めしそうにキャシアスに視線を送る。

「あ、あもう、キャシアス様……？」

「護恋、手足は軽くなっただろう？ なんせ、重さを半分に下げたからね」

「半分って……」

動くのがやっとです！

そう言おうと口を開いたけれど、キャシアスに先を越された。

「なんと言っても、私と護恋は友達だからね」

キラキラキラキラ……。

「うっつ！」

キャシアスの微笑みに負けた……。

「さあ、護恋。図書室に行くよ」

キャシアスは意気込み盛んに体育館から出て行く。

「私もお供します」

フェイがキャシアスの後ろを付いていく。

最後に、フェイが振り返って、

「哀れな……」

と、何ともいえぬ同情的な視線を残してくれた。だけど、彼はあっさりキャシアスを追いかけていってしまった。

「そ、そんなに……」

なんとか手足を動かしてがんばってみるものの、どうにもならな

第十五話 宝石箱の写真

ここは、学園の図書室だ。そこは日本の市営図書館のように広く一階の十分なスペースを取っている。室内は足音が絨毯に吸収されているかのようで、話し声も雑音もあまりしない。厳かな図書室独特の空気を作っていた。

それはともかく……。

私の腕の中には厚みのある本が次々と積まれていく。どうして、キャシアスはこんな辞書みたいな分厚い本ばかり借りるのよ〜！

「あと、これと、これにしよう」

Gブレスレット等の手足の負荷がなくても、この本の重みはすでに限界を超えている。

「計五冊ですね。貸し出しカードに記入しておきます」

「ありがとうございます、フェイ」

ご機嫌なキャシアスの声。

フェイがシャーペンで記入する小さな音が机の端で小気味良く響く。

でも、私の手足は筋肉の限界を超えて、小刻みに震えている。

わーん！ もう限界だよ！

私が重さで潰れる前に、本の重みがすっと消えた。隣を見ると、フェイが借りた本をすべて抱えて立っていた。

「あ、ありがとうございます。フェイ……」

フェイは本の重みなどまったく気にした様子もなく、涼しい顔をしている。

「構わない。キャシアス様がお借りになった本を落とされたほうが困る」

「フェイ、余計なことを……」

「申し訳ございません」

フェイは悪びれた様子もなく、キャシアスに謝っている。キャシ

アスはため息を付いたけど、すぐに笑顔に戻った。

「でも、一冊は護恋のために借りたんだよ」

「えっ？ 私の……私のためにですか？」

キャシアスが、私のために？ 私は感動と歓喜で目を潤ませた。

彼はフェイの腕から一冊を取り出した。

「はい！」

「ありがとうございます！」

私は、笑顔でやけに分厚い本を抱きしめるようにして受け取った。

「キャシアス様が私のために」

題名を見て、私の笑顔が固まった。

「……『教養と立ち振る舞い』……」

感動で出かかった涙はあっさり蒸発した。

題名からして頭が痛くなってきた。息を飲んで、ページを恐る

恐るめくる。

「……『この本書は、私が査査と経験から模索した、もっとも便じ

る良識と所作を至極簡単に取り纏めたものである』……うえ……」

最初の出だしは何とか読めたけれど、難しい漢字がたくさん並ん

でる。しかも意味が分からないよ。

私は引きつった顔を恐る恐る上げると、キャシアスの天使のよう

な笑顔と鉢合わせた。

「な、なんで、頭痛がおきそうな本を何で私に……？」

「何故？」

キャシアスは面白そうに「ハハハ」と声を立てた。

「愚問だね。私と護恋は友達なんだ。でも、友達の君があまりにも

……。だから、私と友達の護恋は少し、お勉強して欲しくてね」

キャシアスは私のことを思っ心配しているという表情をあから

さまに作った。

私は、引きつった顔で空笑した。これは、どう考えてもキャシ

アスの嫌がらせだよ……。

以前は、私を無視してやりすごしていたのが、私と友達になって

無視できなくなつたから、嫌がらせになつて表に出てきているのかも。

らしくなく論理的に考えてしまい、それがどうも的を射ているよ
うな気がして、私は思わず「あう……」と、呻いた。

フェイは嘆息して、キャシアスのほうに視線を移した。

「キャシアス様、少し宜しいですか？」

「何だい？ フェイ」

私もキャシアスと一緒にフェイを仰ぎ見る。

「フローゼンス様とデュエルなさつたそうですが、私があの方と再
びデュエルして勝つた方が良いのではないですか？」

フェイの言うとおりだ。そもそもキャシアスが豹変したのは、彼
が勝手にデュエルをして負けたからじゃないか。

「そ、そうですね！ そのほうが、いつもどおりですし」

私の声にキャシアスは顔をしかめた。

「そんなことはどうでもいいことだよ。君達が気にすることじゃな
い」

「ですが！」と、私。

「そろそろ、迎えの車が来る頃だよ。急いで」

キャシアスが、筆記用具をしまおうと、リュックのチャックを開
けた。すると、用紙がはらりと床に落ちた。

「キャシアス様、落ちました……」

私はそれを拾つて、つい好奇心から見てしまった。それは、宝石
箱の写真だった。

「これ……」

私は、その写真を見たまま固まった。

「キャシアス様の宝石箱の写真ですか？ 綺麗ですね」

その宝石箱は卵形で花の模様が入っている。そして、全体的に宝
石が散りばめられていた。

キャシアスは嘆息して、私の手から写真を奪い取つた。

「これは、私のものじゃないけれどね」

つんけんどんに言って、キャシアスはリュックにそれをしまっ。

「私、それ、見たことがあるような気がします……」
我知らず、そんなことを呟いていた。

途端に、キャシアスの顔が跳ね上がった。

「……どこで？」

「え？」

キャシアスに両肩を掴まれて、真っ直ぐに見つめられた。

「どこでそれを見たか、思い出してくれないか！ 大事なことなんだ！」

図書室にキャシアスの声が大きく響き渡った。私はキャシアスの形相に驚いて、思わず目を見開いていた。

第十六話 フローゼンスの恋人

「ど、どこって……どこだったか……。やっぱり、思い出せません……あの……」

私の両肩を掴んだままキャシアスは微動だにしない。真剣な目で私の一言一句を見守っている。

けれども、私はどこで見たのかまったく思い出せない。ただ、どこかで目にしたというだけだ。最悪、これが売られている店で見かけたのかもしれない。

けれど、それは真剣なキャシアスを目の前にして言えることじゃない。

「キャシアス様、護恋が困っております」

フェイが助け舟を出してくれた。キャシアスの手から力が抜けて私の肩から離れていった。

「すまない……」

「この宝石箱、もしかしてキャシアス様が探していらっしやるものなんですか？」

「ああ、そうだよ」

キャシアスの態度から見ても、よほどこの宝石箱を手に入れたいのだと分かる。

ついさっきまでは、嫌いな私をいじめて楽しんでいるようだったけれど、今は希望を見つけたというような穏やかな表情だからだ。

「じゃあ、見つけたら、お知らせ致しますね」

意気込む私を見て、キャシアスは力が抜けたように笑った。

「それはどうも。でも、多分見つからないよ。あるとしても、宮殿の中だろうけれど」

「そ、そうですか……」

せつかく、キャシアスが心を開いてくれそうだったのに。私は、すっかり気落ちしてしまった。

「でも、まあ、護恋が見たって言うのだから、思い出してくれるだけで助かるよ」

「分かりました。思い出したら報告致しますね」

「ありがとう、護恋」

やっといつものようにキャシアスが笑ってくれた。心の中が温かさで満たされていく。

「……そろそろ時間だね」と、キャシアスが図書室の掛け時計を見て呟いた。

「お見送り致します」と、フェイが一礼した。

そして、フェイとキャシアスは図書室の中から出て行った。

手の中の分厚い本を、粗相をした子供を見るように目をやって、嘆息する。

少しずつ、キャシアスと元の関係に戻りつつある。喜ばしいことよね。

誰かが近づいてくる気配がして、振り向くと、小さな子供と保護者が後ろで笑っていた。

「ウナ様とギルバート！ どとど、どうされたんですか？」

動揺を隠せずに、一歩後ろに下がった。

お迎えの時間は気にしなくて良いのかな。

そう呟くと、小さな悪魔はにっこりと微笑む。

「送迎の時間は伸ばしてもらったので構いませんわ。それより、私はキャシアスお兄様に何が起きているのかが心配でなりません」

「そ、そうだ。ウナ様はフローゼンス様のクラスをご存知ですか？」

そして、この間キャシアスとマリーエルお婆様のお墓参りに行ったときのことを話したんだ。

「フローゼンス様の手駒とデュエルなさったと仰ってました……」

ウナは大人っぽいしぐさで頷く。

彼女は幼いので、ませているようにしか見えない。でも、そのしぐさが似合っているのが不思議なところだ。

「なるほどね。でも、あの方の手駒を探す必要はありませんわ。手

駒は主に不利なデュエルを勝手にできませんからね」

「そうですね……」

そうすると、アンジェリカは私のことを色々で見逃してくれているんだなあ。私は彼女にこっそり感謝した。

「それに、あの方に手駒はいませんもの」

さらりとんでもない事を言われたような気がして、私の喉から「へ……？」としゃっくりのような声が出た。

「手駒はいないんだってよ」と、ギルバート。

「フローゼンスお兄様は、ご自分で戦われますの」

「ご、ご自分で!？」

つい大声を出してしまい、思わず口を押さえる。そうだった、ここは大声禁止の図書室だった。案の定、ここにいる人たちから敵意を込められた視線を向けられてしまったよ。

「ご自分で戦われるって……」

声を小さくして、ウナに尋ねた。

「あの方は、手駒なんか信用できないと、ご自分を鍛えてらっしゃいますの。デュエルも研究されていて、フェイにも勝てるだろうと豪語されてますわ」

ウナの言葉を聞いて、驚いてしまった。

「そんなにお強いんですか？」

彼女は神妙に頷いた。

「キャシアスお兄様はまず、あの方に勝てませんわ。昔、キャシアスお兄様の恋人をあの方にデュエルで奪われてしまったこともありましたし」

キャシアスの元の恋人？

「それは、どなたなんですか？」

「確か……ブーゲンビアだったかしら。フローゼンスお兄様の現在の恋人ですわよ」

「ブーゲンビア様!？」

ファンクラブの子から私とアンジェリカを守ってくれた人だ。

「とにかく、護恋はすぐに無茶するから。俺は突っ走らないほうがいいと思っぜ」

ギルバートの忠告はもつともだ。良く考えてからデュエルしないと。

私は「う、うん……」と、力なく返事をしたのだった。

ウナを見送っていくというので、ギルバートとウナとそこで別れた。

あっ！ フローゼンスのクラスを聞けなかったよ……。

食堂でご飯を食べた後、女子寮に帰って課題を机の上に広げようとした。

でも、肝心の課題がない。

「あ、あれ？ もしかして、机の中に忘れてきたのかな」

カーテンを開けて窓の外へと目を凝らした。夜の帳が落ちて、静かな気配が辺りを占めている。

「今、外に出たら、またフェイに叱られるかな……」

仕方がないので、携帯を手にフェイへとメールを打つ。

『課題を机の中に忘れてきちゃったんだけど、外が暗いからついてきてくれるかな？』

「送信つと」

暫くすると、すぐにメールが送られてきた。

『何だと？ そそっかしいのにもほどがある』

「うわ〜。また怒ってる……あやまつと」

『すいません、フェイ様』

『すぐ行くから、女子寮の外で待っている』

「よっじゃー」

いそいそと、支度をして部屋の外に出て行く。階段を下りると、外にフェイが待ち構えていた。
恐る恐るフェイに近づくと、フェイがぎろりと睨んだ。

第十七話 幽霊騒動

「お前のどんくさいところは、一生かかっても直らなそうだな。何故、明るいうちに気付かない！」

フェイに怒鳴られて、私は思わず首をすくめた。

「ごめんって言ってるのに」

落ち着きを取り戻すように彼は静かに嘆息した。

「まあ、連絡してきたことは褒めてやるがな。これで、暗い中一人で取りに行つて、何かあつたら、キャシア様にもうしわけが」
「そこまでつらつらと言葉を並べていた彼の口が止まった。」

「ああ、そっか。キャシア様はもう私のことを好きじゃないからね」

フェイの心配する理由がなくなつたわけだ。

「そうなのだが……。一応、お前はあの方の友達なのだから」

歯切れの悪い彼に私のセンサーが反応した。

「あれ？ もしかして、心配してくれてるの？ 照れてるとか？」

フェイって素直じゃないね。あはははは」

鬼の首を取つたように爽快に笑っていると、フェイが手をボキボキ鳴らし始めたので、私の笑みが凍った。

「……なんだって？」

怖じ気立つて三步下がった。

な、何よ。照れ屋さんね……。じゃなかった。こんなこと言ったら何をされるか。彼が怖すぎて本能的に笑顔になってしまう。

「わ、私は、ほら……。！ フェイとあんまり話せなかったから、嬉しくつてつい……」

フェイが睜目して固まっている。

「あ、あれ？ 私なんか変なこと言つたかな？」

「早く教室に課題を取りに行くぞ」

彼は言うが早いか、さっさと歩き出す。

「ま、待つてよ」

歩みを進めて、フェイに並ぶ。すると、彼がこっちを見てフツと笑った。

あれ……？

「どうしたの？」

「そういえば、護恋と歩くのも久しぶりかもしれんな」

「嬉しいんでしょ」

おどけてそういうと、フェイがまた私のほうを見てにやりと笑った。

嬉しいんだ。

私の口もとがむずむずと笑みを浮かべたがる。

「でも、あれだね？」

「なんだ？」

「フェイと歩いていると、おじいちゃん連れて散歩しているみたいな気になるよ」

しまった失言だと思ったときには、後ろからフェイに羽交い絞めされていた。

「ぎぶぎぶ……！ フェイはぴちぴちのヤングです……！ すいませんでした！」

「よし！」

やっと彼の手が放される。私は、ゼーゼーと息を吐く。

「でも、フェイの喋り方は、おじいちゃんだよね」

フェイの目がキラリと光った。

「なんでもないです！ ほら、私って正直だから駄目なんだよね！」
瞬間、フェイが動いた。学園内に私の絶叫が響き渡ったのだった。
口は災いの元だと身を以って知った。でも、懲りない私。がくり

……。

そんなこんなで、わいわい騒ぎながら、私とフェイは、まず職員室に教室の鍵を取りに行くことになったのだ。

でも、やっとたどり着いた職員室は出払っているのか明かりがつ

いていなかった。

「もしかして、職員室の鍵も閉まっているかも知れん」

「ええ〜っ。困るよ、せつかく来たのに」

フェイが職員室のドアを開こうとした。でも、やっぱり鍵がかかっている。

「駄目だ。諦める」

「そ、そんなにや……」

泣きそうになっている私の横で、彼が疲れたように嘆息した。

「仕方ないから、俺が問題を写してやる……」

「あ、ありがと！」

仕方ないので、私とフェイは帰ろうと踵かかとを返した。

刹那、職員室の窓が強い光で明滅した。

「な、何!？」

フェイを振り返ると、彼も目を見張っていた。

そして、また元の暗闇に戻る。辺りに耳を澄ませば、ひっそりと静まりかえっていた。

驚く私の横で、職員室の窓は再び強い光りで雷のようにひらめく。

「も、もしかして、お化けかも！」

立ちすくんでいると、フェイが速やかに動いた。

「ふえ、フェイ」

泣きそうな声を出すと、フェイはシツと唇に人差し指を置いた。

そして、彼は、職員室の窓を開けようと試みているようだった。

「駄目だ、全てに鍵がかかっている」

「フェイ、良いから、帰ろうよ……怖いよ……」

彼が返事をする前に、廊下の端がカッーンと響いた。

おっかなびっくりで、音の方を見る。

廊下の隅で響いていた足音は段々とこちらに近づいてくる。

突然、職員室のドアが閉まった小さな雑音が耳に入ってきた。

「おい、そこで何をしている!」

フェイは何者かを追いかけて廊下を走って行ってしまった。

私はそれどころじゃない。恐怖がピークに達してしまって、泡を吹いて倒れそうだ。

それどころか、反対方向から響いていた足音は、フェイの大声を聞いて、こちらに駆けて来た。

その足音は、光りをこちらに向けて、「おい！」と、声を発した。「な、何？」

その人物は、自分の顔を光で下から照らし出した。

「私だ」

それは、しっかりホラーだった。

「ぎゃあああああああああ！ お化け！」

私は、思わず絶叫して、あろうことか腰が抜けてしまったのだった。

第十八話 謎の光

そして、ぺたんとしゃがんでしまった。

「どうした！？ 護恋！？」

フェイの声がして、こちらに足音が駆け足で戻って来る。

私の前にいたお化けは、息巻いた。

「失敬な！ 私だ、サーヴェリーだ！」

「へ……？ さ、サーヴェリー先生？」

先生は私の手を引っ張って起こしてくれた。私は、しばしばと目を瞬いて、目の前の人物を確認する。先生は手から細く伸びた光を持っているが、それは懐中電灯だった。

ということは、考えられることは一つだ。

「み、見回りですか……？」

「ああ、そうだ」

サーヴェリー先生は、不機嫌に答えた。

たった今嵐の中から生還したような心地がして、私はほっと息をついたんだ。

「サーヴェリー先生……？」

フェイが戻ってきて、サーヴェリー先生を見つけた。

「お前達、こんな時間に何をやっているんだ？」

「課題のプリントを忘れて、教室の鍵を取りにここまで来たんですが」

私は先ほどあったことを説明した。

「何？ それは本当か？」

血相を変え、サーヴェリー先生は職員室のドアに手をかける。

「確かに、開いている！ 出るときに閉めたはずなんだが」

先生は、職員室の電気を付けた。部屋の中が蛍光灯の光で一面白く照らし出される。先生は職員室の中を舐めるように見渡し、確かめながら歩いていく。

「何か変わったことは……」と、私。

サーヴェリー先生は、自分のディスクの引き出しを開けて確かめている。

そして、唸ってから私達に視線をくれた。

「いや……特に変わった様子はないみたのだが」

確かに職員室は整然としていて、荒らされた様子はない。

「まさか、お前たちが……？」

私達を疑っているの！？

「な、何ですか！ 先生も見たでしょ！ 犯人は逃げて行ったじゃないですか！」

私は必死で弁解した。サーヴェリー先生は「まあ、そうだがね……」と、呟いた。一応は信じてくれたらしい。良かったと、私は胸を撫で下ろした。何もしてないのに犯人にされちゃかなわないもの。「何か気になったことはなかったかね？」

「私と護恋が職員室に来たときは、鍵がかかってました」

「何？ では、犯人は今まで職員室で鍵をかけたまま、中で何かをしていたのか？」

「そ、そうみたいです……」

「一体何を？」

気持ち悪そうに、サーヴェリー先生は辺りを見回した。

「他の先生方にも、何か取られたものがあるか聞いてみなければ」

私は、気づいていたことを話そうと口を開く。でも、それをフェイが遮った。

「あの、時間がないので、教室の鍵をお借りします」

そして、壁にかけられていた一年Aクラスの鍵を取った。

「また何か気づいたことがあったら、報告してくれ」

「はい、かしこまりました。おい、行くぞ」

「え？ あ、うん」

フェイは私の手を引っ張って、ずんずんと歩いていく。

「フェイ？」

「なんだ？」

やっと、フェイは私の手を放した。

「言わなくて良かったのかな……あの雷みたいなの光のこと」

私は、職員室の方を名残惜しそうに振り返る。

「言わなくて良かったんだ。サーヴェリー先生は、厳しい先生だからな」

「だからこそ、言った方が良かったんじゃない？ 犯人を捕まえてくれるかも」

フェイと私は廊下を進んでいく。そして角を曲がった時に、再び彼は口を開いた。

「あの光の正体が、分かったんだ」

「えっ？ な、何？」

フェイは口では言わずに、ジェスチャーをして見せた。それは……。

「カメラ……？」

「そうだ。犯人は職員室の中でカメラを使って何か撮っていたんじゃないのか」

確かに、あの光がカメラのフラッシュだと説明がつく。

思わず大きくなりそうな声を潜める。

「ちよつと待って……？ カメラって……私、思い当たる人物が一人いるんだけど……」

フェイも頷いた。
「俺もそれを考えた」

黒髪で猫目の男 工藤姫流。彼は、いつもデジタルカメラを持っていた。

「でも、姫流がそんなことをする理由が見つからないよ！」

「早合点するな。カメラを持っていたからって姫流と決まったわけじゃない」

「う、うん、そうだね」

カメラなんて使おうと思えば誰でも持てるもの。姫流と決め付け

るのは良くないよね。

「このことは、黙っていた方が良く。仲間を売るようなことはしたくない」

「同感だよ」

そこまでで、この話をお終いにした。

やっと教室に到着して、私はドアの鍵を開けた。そこに足を踏み入れて、蛍光灯の明かりを一部分だけ点ける。そして机の中を探り、課題のプリントを取り出した。

「あつたよ！」

教室のドアのところまで待っているフェイに声を飛ばす。

「いいから早く寮に帰るぞ」

「うん！」

その時、消化不良を起こした腹のような音が遠くで鳴った。何だろうと考えていると、稲光が激しく明滅した。

「うわっ！」

私はびっくりして飛び上がった。慌ててフェイのところまで駆け戻った。

「一雨来そうだ」

「早く帰らなきゃだね！」

フェイが教室の鍵を閉めている。

私はこわごわと廊下の窓へ視線をさまよわせる。その時、空が激しく裂ける音がして雷がどこかに落ちた。

「うわっ！」

夜の真つ暗な学園で見る雷はとても怖かった。

それだけでは終わらなかった。

空が青く明滅したとき、廊下の窓に人影が写っているのを目の当たりにしてしまったのだ。それはおどろおどろしい幽霊のようだった。

「ぎゃあああああ！ 出たあああああ！」

私は絶叫して、思わずフェイに抱きついてしまったのだった。

第十九話 テュテュスのペンダント

「お、おい！ どうした？」

フェイは明らかにうろたえている。でも、私はそれどころじゃない。頭の中が恐怖でいっぱいになって、身体が震える始末だ。

「まっ……窓のところに、幽霊が！」

「幽霊……？ いるわけない」

「でも、いたの！」

フェイは嘆息して、しがみ付いた私を抱きしめてくれた。

私の震えは段々と治まっていく。

「……大丈夫か？」

フェイが腕を解いて、私を気遣うような視線をくれた。私はすっかりそのフェイの目を見てしまった。途端に、心臓が跳ねた。

「う、うん、大丈夫」

顔が熱くなるようで、慌ててフェイから離れる。

そして、窓の方に目をやる。人影はなくなっていた。

ひとまず安心したけれど、まだ怖い。園舎から出るまで、フェイの腕を掴んでいた。

女子寮の前まで来ると、私はようやくフェイの手を放した。

私の顔が青ざめていたんだろう。フェイが心配そうに尋ねる。

「大丈夫か？」

「う、うん、大丈夫だよ……」

フェイがズボンのポケットを探ってから、私の手を取って、何かを握らせた。

「何、これ？」

「テュテュス神のペンダントだ。お前は無茶をするから持っている。きつと守ってくれる」

「あ、ありがとう！ でも、フェイのがなくなるんじゃない？」

「俺のは別にちゃんと持っているから心配しなくていい」

ぽつんと雫が落ちた。雨が段々と降ってきた。

「大変、雨だよ！」

「では、俺は帰る」

「またね！」

「ああ」

私とフェイはそこで解散した。私はいそいそと寮の中に入っていく。自分の部屋に入り、電気を付けてフェイから貰ったペンダントを眺める。

「わあ！ カッコイイ」

テュテュスのペンダントは剣に羽が生えているデザインだった。いかにも、デュエルの掟の神のテュテュスというご利益のありそうな感じだ。

早速それを首につける。雷が轟く間もペンダントトップをぎゅっと握り締めていた。大丈夫、テュテュスが フェイが守ってくれるから怖くないよ。

私の心臓の音も心地よく響いている。

「それにしても、職員室のあの光って、カメラじゃなくて雷だったんじゃないのかなあ……」

結局、分からなくなってしまったのだった。

翌日になると雨は止んで、雲の間から覗いた朝日が学園を照らしていた。

今日もリムジンで通学したアンジェリカを出迎えて、私は一年Aクラスのドアを潜ったんだ。

フェイとキャシアスの姿を見つけた。

「おはよう、フェイ」

「ああ、おはよう」

フェイはいつもどおり。でも、笑みを薄く浮かべているので、もしかしたら機嫌がいいのかも。

「キャシアス様、おはようございます！」

キャシアスの反応は特に期待していなかったけれど、彼は私に笑みを返してくれた。

「おはよう、護恋」

しかも、愛想良く答えてくれた。これは夢か幻か！

感動で胸がいっぱいになっていると、キャシアスが更に続けた。

「ところで、あの宝石箱をどこで見たのか思い出したかい？」

キャシアスのご機嫌でにこにこしながら私に尋ねた。

私は、彼に釣られるように笑みを浮かべる。

「いや、それがですね。まったく思い出せなくて……一体どこで見たんでしょうねー。あはは！」

ピツとりモコンの作動する音が小気味よく響く。笑んだ目を開くと、キャシアスがリモコンをこちらに向けていた。

「え……？」

途端に、私の手のひらと足は床にぺたんと付いてしまう。

あのリモコンは『Gブレスレット』と『Gアンクレット』のだ！

気付いたけれど、もう遅い。

「ちよっ！ キャシアス様!?!」

手足が尋常じゃない重さで床に張り付いてしまって、私は動けない。

情けない格好でキャシアスを覗き見ると、彼は冷めた目でこちらを見下ろしていた。

「思い出すまで、そうしていればいいよ」

トゲのある言葉を残して、彼は自分の席についた。

や、やっぱり、キャシアスは私のことが嫌いなものね。

「ご、護恋、大丈夫ですか？」

「アンジェリカあ……」

「あれ？ 護恋、何してるんだ？」

通学してきた姫流の声が聞こえて、私は「姫流う……」と情けない声を出してしまった。

アンジェリカが姫流に事情を説明してくれた。姫流の持っている予備のリモコンで、私の重力は元に戻る。

「助かった。ありがとう姫流、アンジェリカ」

下を向いていたから頭に血が上がりそうだったよ。

キャシアスのほうを恨みがましそうに振り返ると、キャシアスは涼しい顔で、昨日図書室で借りた辞書のような分厚い本を読んでいた。

私はすごすごと自分の席まで退散した。

「護恋、やはり元を何とかしないと駄目なのではないでしょうか」

アンジェリカが可愛い顔を難しくして、声を低めた。

「元って？」

姫流が私の後ろでリュックを降ろしながらアンジェリカの言葉に続ける。

「フローゼンス様だよ。彼にキャシアス様の絶対的な賭けを解いて貰うしかないんじゃないかな」

姫流の言っていることは、全く以って正論だった。

第二十話 姫流の写真

「うーん、そうだね」

フローゼンスか。キャシアスの腹違いの兄。嫌な人だけど、彼にお願いするしかないか。

ふっと、昨日のフェイとの出来事が私の脳裏をよぎる。

姫流ひめるに会ったら、まず尋ねようと思っていたこと。

「ところで、昨日の夜なんだけど、姫流は何してた？」

彼は、きよとんとして目を瞬いた。

「何って？ 昨日は課題して、それからカメラの画像の編集してたけど……」

『カメラ』という単語にドキツとして、私は姫流を見つめた。

カメラの編集って、まさか。

昨日フェイと職員室で見た、謎の光のことが思い浮かぶ。

事情を知らないアンジェリカは、隣の席で不思議そうな顔をしている。

彼も尋ねられる理由が分からないようで、首を傾げている。

「それがどうしたの？」

「い、いや。別に、なんとなく」

私は空笑いして、誤魔化そうと努めた。

姫流は違うんじゃないのかな。彼の態度を見ていると白って言う気がしてきたよ。

「写真、プリントアウトしたんだ。良かったら見る？」

いきいきとして、姫流は楽しそうに自分のリュックのチャックを開ける。

「う、うん！ 見たい！」

身を乗り出して、姫流が写真を取り出すのを待った。

「どうぞ？」

彼はゴムで留めた写真の束を私に寄越した。

「ありがとう！」

「アンジェリカ様も宜しければ」

同じような写真の束をアンジェリカにも渡している。

「姫流、ありがとうございます」

アンジェリカは、楽しそうに写真をめくっている。

ドキドキしながら、私も一枚一枚写真を机の上に重ねていく。

違う。

これも、違う。

これでもない……。

五十枚ほどの写真の束の中には、職員室の写真は入ってなかった。姫流は犯人じゃないのかな？ いや、もし犯人だとしても、自ら証拠を持ってきてばらすようなことはしないよな。

犯人の立場で考えたらすぐに分かることじゃないか。

「護恋、取替えっこしましょう？」

「あ、うん」

アンジェリカに勧められるまま、私は写真の束を彼女の持っているものと交換した。

また、五十枚ほどの束を検査するように見ていたけれど、どこにもそれらしき写真の痕跡がない。

私は安堵なのか疲れたのか良く分からないため息を付いて、写真をそろえる。

馬鹿馬鹿しい。カメラなんて誰でも持てるじゃない。姫流を疑うのはやめよう。

ふと、隣でアンジェリカが写真を見ながらくすくすと上品に笑っていた。

「どうしたの？ アンジェリカ？」

「ぎこちなくアンジェリカの方を向くと、

「護恋、気付きませんでした？ 姫流の写真、ほとんど護恋のばかりですよ？」

彼女は机に広げた写真を指差した。

「えっ？ うわ、ホントだ！」

私のアップの写真。髪を解いている写真。アンジェリカに綺麗に髪をくくってもらった写真。キャシアスとのデュエルの写真。

そして、GブレスレットとGアンクレットでキャシアスにいじめられている写真まである。

「な、なんで？」

後ろを振り返ると、姫流が自分の席でカメラを磨いていた。

「そりゃあ、僕が護恋のファンだからだよ」

姫流は瞳に怪しい色を秘めているような気がした。

そういえば、姫流はキャシアスに私の中学時代の写真を渡していたんだっけ。

一体何時から私の写真を……という疑問は怖くて聞けなかった。

ごくりと、つばを飲み込む私。

そんな疑り深い私に反して、姫流は好意的に微笑んだ。

「護恋の好きな写真があつたら、あげても良いよ」

「えっ？ ホント？ じゃあ、どうしようかな？」

私は再び、写真を選び始める。今度は気持ちも弾んでいる。

そんな時、アンジェリカが「あっ」と声を出した。

「どうしたの？ アンジェリカ」

「この写真、護恋はまだご覧になっていませんわよね？」

アンジェリカは横に避けていた写真の束を私に渡す。

「あ、ありがとう」

私は鼻歌交じりに、写真を眺める。

三枚目の写真をめくったときだった。私の鼻歌が途切れた。ついで、私の笑顔も凍る。

私はびっくりしたまま後ろを向いた。

「姫流！ この写真！ この写真をどうして姫流が持っているの？」

「えっ？ なんだよ？」

姫流は面倒くさそうに顔をしかめる。

私が姫流に見せたのは、キャシアスが探し求めている宝石箱の写

真そのままだった。

第二十一話 宝石箱の謎

「ああ、この写真ね。それは、僕もこの宝石箱が欲しいからだよ」
姫流しめるは造作なく、あっさりと告白した。

「そんなにすごく人気があるものなの？ キャシアス様も欲しいって仰っていたし」

私の疑問を聞いて、姫流は「いや……」と困惑しながら微笑む。

「そんなに人気はないんじゃないかな。でも買おうと思ったたら、普通のスーツを買うぐらいの値段で買えるよ。それに、量産されているようだし」

「それって、一般人でも簡単に手に入るってこと？」

「まあ、そうなんじゃないかな」

私は唸った。姫流はそんな私を面白そうに観察している。

キャシアスには、肩透かしを食らわされた気分だ。そんなに簡単に入手できるものならなんで……？

「人気がありすぎて、今は手に入らないってことなのかな？」

姫流は猫のような目を細めて、私の疑問を笑い飛ばした。

「そんなことないよ。買おうと思ったらインターネットを使えばすぐに買えるよ。はい、これ」

姫流がくれた紙には、インターネットの店の情報が印刷されていた。

「あ、ありがとう！」

キャシアスも喜んでくれるかもしれない。

「キャシアス様！」

声をかけると、キャシアスは読んでいた本から顔を上げた。

「なんだい？ 護恋。どこで見たのか思い出したの？」

キャシアスを見るからに私に期待している。彼の笑顔がそれを如実にあらわしている。

私は、はやる気持ちを抑えて、キャシアスに姫流から貰った用紙

を渡す。

「姫流から聞いたんですが、あの宝石箱はインターネットですぐに手に入るそうです」

途端に、キャシアスの顔から笑みが消えた。

「だろっね」

彼は、がっかりしたようなため息を付いている。

「えっ？」

ど、どういうこと？

「悪いけど、私の欲しい宝石箱は量産されているものじゃない」

キャシアスは用紙を私に返してきた。

「そ、そうなんですか……でも、どこにあるのかが分からないと、探しようがないですよ……」

無理難題を押し付けられている気がしてならない。

迷想したように彼は私を眺めていたが、

「それを持っている人物は分かっている」

ぼつりと、そう告げた。

「えっ！？ ど、どなたが持つてらっしゃるんですか？」

最初からそれを教えてくれればいいのに。その台詞を飲み込む私。

「フローゼンスだ。私は、彼の持っている宝石箱が欲しいんだよ」

また、フローゼンスか。

「でも、フローゼンスには尋ねなくていいからね。分かったね？」

「は、はい」

カシス先生に頼まれて、課題のプリントを職員室に届けた昼休みの帰り。私は、考えながら廊下を一人歩いていた。

「フローゼンス様が宝石箱を隠しているとか？ でも、何でキャシ

アス様はあの宝石箱が欲しいんだろっ？」

フローゼンスの持っている宝石箱が欲しいなら、懇願するか彼の言い値で買えばいいはずだよ。そうよ。キャシアスは王族なのだから、お金には困らないはず。

となると、フローゼンスは宝石箱を手放したがるのかな。

あつ、もしかして。

「護恋じゃないか？」

いきなり、聞いたことのある声がかかり、私の思考は中断された。このやけに明るい、そしてどこか人を見下げた感じの声は。

「やあ、護恋」

「フローゼンス様」

彼は私のほうにゆっくりと歩いてきた。

「護恋、キャシアスとは仲良くやっているかい？」

それを聞いてむかつ腹が立った。全く以って白々しい。

「はい、キャシアス様は私に親しくしてくださいさってます」

自然と言葉がとげとげしくなる。

「へえ？」

フローゼンスは愉悦を込めるように目を見開く。それも白々しいことこの上ないけど。それでも、彼にしてみると私の答えは意外だったらしい。

けれども、そんなことより優先しなければならぬことがある。

キャシアスは、フローゼンスには尋ねなくていいと言っていただけだ。

「それより、フローゼンス様にお尋ねしたいことがあります」

「なんだろうね？」

私は姫流から借りた宝石箱の写真を取り出して、フローゼンスに示した。

彼の目つきが険しくなったような気がした。

「この宝石箱、フローゼンス様がお持ちなんですか？ それなら、キャシアス様にお譲りくださいませんか？」

「……君は何故、この宝石箱に執着している？」

「えっ？ それは、キャシアス様が、何故か求められているようですので……何か、大切なものでも入ってらっしゃるのでしょうか？」

フローゼンスはフツと頬を緩めた。

「私には、どうでも良いものが入っているけれど、キャシアスにと

つては大切なものなんだろうねえ」

「何が入っているのかご存知なんですか？」

「さあ、なんだろうねえ」

明らかに、知っているという顔でフローゼンスは笑う。

なんだか、からかわれてるのかな。

「では尚更、キャシアス様にお譲りくださいませんか？」

「嫌だね」

フローゼンスの台詞は私に被せるように早かった。

「では、その宝石箱を賭けて私とデュエルしていただけませんか？」

私の問いに、フローゼンスは初めて心から面白そうに笑った。

「いいよ……と言いたいところだけど、やめておく。君とミルドレツドとの噂は良く聞いているからね。万が一ということがあると困るのでね」

「そんな……」

フローゼンスにはどうでも良いものなら、さっさとキャシアスに渡してあげなさいよ。と、言いたいけれど、私はグツと堪える。フローゼンスを怒らせては宝石箱が遠退いていく気がするからだ。

「それに、宝石箱は売ってしまったので、私の手元にはないんだよ」

「そ、そうなんですか」

残念極まりない気持ちだ。

「でも、キャシアスの気持ちを元に戻す賭けならしても良いが？」

「えっ！？ 本当ですか！？」

希望を見つけて私の気分が高揚した。

第二十二話 デュシヤールと命の賭け

「本当だよ。それに今は昼休みだから、丁度良いじゃないか。今からデュエルをしよう」

人の良い笑みを浮かべて、フローゼンスは両手を広げた。

「えっ？ 今からですか？」

いきなりの申し出に、私は尻込みしてしまった。

「心配しなくても、私は手加減してあげるよ。君が勝てるようにね」「本当ですか……？」

果たして、フローゼンスのこの言葉を信用していいものか。ギルバートの時は、彼にまんまと騙された。あの時は勝てたから良かったようなものの……。

「やっぱり、キャシアス様と相談してから決めます」

早めに切り上げようとしている私を、フローゼンスは「ああ、待ってくれ」と引き止めた。

「君は知らないようだね。キャシアスがどういう運命にあるのか」

フローゼンスは顔に手をやって嘆いた。

「えっ？ キャシアス様の運命ですか？」

フローゼンスはなれなれしく私の肩に手を回して、顔を近づけると声を潜めた。

「キャシアスは私とのデュエルでね……自分の命も賭けたんだ」

「ええっ!？」

自分の命って？ キャシアスはそのことを何も言わなかったけど。

「シッ、声が大きいわ。そして、キャシアスの命がなくなるリミットはもうすぐなんだよ……」

フローゼンスは消沈した様子で下を向いてため息を付いた。フローゼンスの様子から見ても嘘をついているようには思えない。

でも、私は引っ掛かりに気付いた。

「でも……。確か絶対的な賭けでは、命を賭けてもその賭けは無効なんじゃ……。？」

そうよ。前にそれは無効になるから、永遠の眠りの賭けをしようってことになったし。それも、無事に事なきを得たけれど。

だから、命を賭けるってことは掟の神のテュテウスが許さないはずよ。

フローゼンスは歯が痛んだ時のように顔をしかめた。

「君は頭がいいけれど、鈍いのが弱点だな。掟の神のテュテウスが実行しなくても、実行される賭けがあるだろう？」

フローゼンスは小さい子に言い聞かせるような口調で私に謎かけた。

テュテウスが実行しなくても……？

頭を捻って考えていたが、やがて一つの仮定に達した。

「まさか！ デュシャル？」

影の非合法的なデュエルのことだ。これを実行したものは、デュエルの警察　ディージャに捕まり、罰を受けるはめになる。フローゼンスは「シツ」と、周りを気にしながら唇に人差し指を当てた。

「おふざけでお遊びの……。デュシャルのつもりだったんだけどね、それが本当になってしまったんだよ」

「ど、どういうことですか？」

「絶対的な賭けになってしまったと言っているいいかな？」

「絶対的な賭けって？」

なかなか私が理解しないので、もどかしそうにフローゼンスが説明する。

「ほら、キャシアスの手には三つの烙印があっただろう？　一つがそれなんだよ」

「えっ！？　まさか、デュシャルのつもりがテュテウス神に認められて絶対的な賭けが発動したっていうことですか！？」

つい声が大きくなってしまった。フローゼンスがイライラと「シツ」と人差し指を自分の口に当てる。

「私は、お遊びのつもりだったんだよ。キャシアスが死ぬのは嫌だが、デュシャルルをしてしまったということを誰にも話せなくて苦悩していたんだ。そんな時、君が現れた。私とデュエルしてくれないかな？ 私は早く負けてしまいたいんだよ」

今にも泣き出しそうなフローゼンスとその事実には、私は焦った。「わ、分かりました！ では、キャシアス様から賭けの許可を頂いて参ります！」

第三者が関わる賭けは、第三者の許可が必要なのだ。だが、走り出そうとした私をフローゼンスが手を引っ張って止めた。

「キャシアスからは許可は得ている。心配しなくてもいい」

「そ、そうですか、分かりました！」

それなら、私が早くキャシアスを助けなきゃ。

「さあ、早く体育館へ！」

フローゼンスに誘導されるまま、私は体育館に足を踏み入れた。昼休みの体育館なのに、閑散としていた。いつもなら、体育館にはデュエルをする人で賑わっているというのに。見慣れない上級生らしい女が一人いる。規則委員の証である、赤いフレームの眼鏡をかけていることから、審判だろうと察した。彼女の手には分厚い『決闘の書』が抱えられていた。

「極秘でやるので、人払いをしたんだよ。さあ、剣を選んでくれたまえ」

フローゼンスの説明に納得して、私は真剣な顔で頷いた。

「はい、分かりました」

まず、ポニーテールを括りなおす。そして、その審判の持ってきた箱からデュエルの剣を一本抜き取った。

「護恋の賭けは『キャシアスの気持ちを元に戻す事と、キャシアスの命の賭けを無効にすること』でいいかな？」

「はい」

「では、私はどうするべきか……賭けは対等でなければならぬか

らね」

フローゼンスは「うーん」と思案した。そして、手を叩く。

「よし、この勝負で私が勝てば『私と護恋は恋人になる』という賭けにしよう」

「えっ？」

私は胡散臭そうにフローゼンスを窺った。何故か、心の中で小さな不安が芽を出していた。

第二十三話 勝負の行方10

「格好だけだから、心配なくていいよ。私は負ける前提で言っているのだからね」

フローゼンスは人当たりのいい笑みを浮かべた。

「そ、そうですね」

その笑みに安心してしまい、私は落ち着きを取り戻す。

『今からフローゼンスVS護恋のデュエルを行います』

女の審判が決闘の書を開いた。どこからともなく吹いた風がそのページを素早くめくっていく。

『掟の神テュテュスの名の下にセトルは審判の立会いを務めます』

審判の名はセトルというらしい。凜とした声が体育館の壁に染み込んでいった。

『この審判の判断はこの決闘の書の判断にゆだねます。セトルはテュテュスと規則委員の名の下に公平な判断をすることを誓います』

審判セトルは、決闘七ヶ条と賭けの確認をした。

賭けの内容は、決闘の書に　テュテュスに認められたらしい。

『フローゼンスの賭けの『護恋と恋人同士になる』という賭けもなの？』

セクシャルハラスメントではないから、テュテュスに認められたのだろうか。

けれども、グレーゾーンの賭けという感じが否めない。

いや、格好だけだからそれほど心配をする必要はないはずよね。

それより、キャシアスの命は一刻を争うのだから、私がデュエルをして勝つしかない。

私は深呼吸して、剣の柄を握り締めた。

『尚、掟に背くと神の意志により絶対的な賭けは実行されません。

正々堂々と戦ってください』

セトルは決闘の書から顔を上げた。

『では、始め!』

セトルの手がすつと上がる。

フローゼンスは目を閉じて突っ立ったまま微動だにしない。やはり、負けてくれるのかも。私は安心して、踏み込んで剣を振り下ろした。

だけど。

その時、フローゼンスが動いて、私の攻撃を彼の剣で振り退けてしまった。

「えっ!?!」

私は焦って、後ろに飛び退いた。

「話が違っじゃないですか! 負けてくれるはずじゃないんですか!?!」

フローゼンスがゆっくりと目を開けて、蔑んだ面持ちで薄っすらと笑った。

「まさか、ここまで愚かとはね……」

彼は、いつもの嘲笑を浮かべる。

私の顔からサツと血の気が引いていく。

「騙したの!?!」

「その通りだよ。命の賭けがテュテュスに認められるはずがないだろっ」

はつきりと私の心の中で不安が顔を出した。心拍数が早くなっっていく。

「それに、安心するがいい。キャシアスは命を賭けたことはない。

あの三つの烙印はそれではないのだよ」

それを聞いて、私は安堵した。でも、すぐに不安が襲ってくる。

「それじゃあ、私とデュエルして勝つ気なんですか?」

フローゼンスは剣を構えて、踏み込んできた。

「その通り!」

刀身が激しくぶつかった音がした。

「なんで、私を恋人に?」

一歩下がった私は、フローゼンスに肩透かしを食らわせると、そのまま一気に畳みかけようとした。

「何で？ 分からないのかい？」

フローゼンスは、一歩ずつ引きながらも余裕の表情だ。

「私のことが好き……ではなさそうですね」

叩くように剣で攻めるけれど、彼はそれを全て受け止めてしまう。私の力を剣先を使って軽くいなしている。

「察しいいじゃないか。君を恋人にしたら、キャシアスがどんな顔をするかと思ってね」

何だつて？

「キャシアスがいつまで、賭けに左右されるか見てみたいのだよ」
まったく、良い性格してるよ！

「フローゼンス様はキャシアス様がお嫌いなようですね」

「ああ、大嫌いだ！」

フローゼンスの顔が憎しみで歪んだ。なるほど、これがフローゼンスの本音というわけか。

私の息が早くも切れてきた。そんな私を斜に見て、フローゼンスはニヤリと嫌な笑みを浮かべた。

「それでは、私も少し本気を出そうか」

フローゼンスはたおやかに宣言した。彼の足がすすつと動いて、剣がぐるんと一回転する。

その後、とんでもないことが起きた。彼がぐるりと数十人の残像を残して、私を取り囲んだのだ。

「なっ！？ 何なの！？」

私は、左右に首を激しく振りながら戸惑うしか術がない。

マックスだ この攻撃は彼の瞳術に似ている！

私の脳裏に、忘れかけていた競技場ハルシオンのチャンピオンの名が思い起こされた。

それ以上に動揺が大きくなる。マックスに勝つ妙案なんて急に思いつくはずがない。

でも、考えるのよ。考えないと私は、フローゼンスの恋人にされてしまう。

「やあああああああ！」

とにかく、フローゼンスの取り囲んでいる輪の中から出ようと考える、私は彼の一人に切りかかった。

彼の残像はすぐに消え、私はその輪の中から出ることが出来た。

私は向きをすぐに変え、フローゼンスの残像の方に剣を向けた。

ひやり……。

私の首筋に冷たいものが当たっている。

「え……」

悪い予感がして、振り向こうとするが無駄だった。私は体勢を崩して、前のめりに倒れていく。デュエルの剣が手から落ちて、高い音を立てて跳ね返り、転がっていった。私の体が地面に軽くバウンドした。

『この勝負、フローゼンスの勝ちです！』

ま、負けたの！？ ということは、私は、フローゼンスの恋人になっちゃおうの！？

フローゼンスが私の体を横抱きにして、立ち上がった。

私は痺れているので抵抗することもできない。

フツと嫌味な笑みを浮かべて、私を見下ろす彼。

「さて、護恋よ。行こうか」

えええ？ 行くつてどこへ！？

フローゼンスが歩き出した時、体育館のドアが開いた。

「お待ちください！ フローゼンス様！」

それは、ブーゲンビリアだった。

第二十四話 助けに来た者

「ブーゲンビリア、どうした？」

私を横抱きにしたまま、フローゼンスは彼女に尋ねた。

「護恋をどうするおつもりですか！」

ブーゲンビリアは、ひそやかに怒りを募らせているようだ。

「宮殿に連れて行く。私の恋人にするのだ」

朝食をパンにすると言うように、フローゼンスはこともなげに宣した。

「それでは、私はどうなるのですか！」

ブーゲンビリアは今にも泣き出しそうだ。私はこの前、ウナが彼女はフローゼンスの恋人だと話していたことを思い出していた。

「案ずるな。私はブーゲンビリアと婚約する。そして、この護恋を^{めかけ}妾とするのさ」

ブーゲンビリアは背中に氷を入れられたような顔になった。

「何ですって！？ それでは、キャシア様が」

「そうだ。キャシアスは胸を掻き毟るぐらい苦しむだろう。絶対な賭けは感情を操るには完璧ではないからな。だから、あいつは指をくわえて見ているしか出来ないのだよ」

体育館にフローゼンスの哄笑が響いた。

な、なんて奴！

私はフローゼンスの手の中で暴れた。痺れも取れたようだ。

「おっと！」

フローゼンスは私を降ろしたが、私はそのまま彼を睨みつけた。

「私は、フローゼンス様の思い通りにはなりません！」

フローゼンスの氷の瞳がすうつと薄くなる。

「ふうん？ 果たして、できるかな？ 確認するけど、護恋は私の恋人だよねえ？」

私は、違います！ と否定してやりたかった。

だけど。

「そうです。私はフローゼンス様の恋人です」

□が私の意志とは関係ない言葉を紡ぐ。私は愕然として、□元を
押さえた。

フローゼンスが冷たい笑みを浮かべた。

「どうして、私が護恋の感情まで操らなかつたと思う？」

「えっ……？」

「分からないようだから、答えてあげよう。それは、護恋が お
前が、苦しむようにだ。お前が苦しめば、キャシアスはもっと苦し
むだろう？」

フローゼンスが楽しそうに笑った。ブーゲンビリアは見ていられ
なくなつたのか顔を背ける。

「あ……あ……」

私の体が怖気立ち、震えが止まらなくなる。フローゼンスが恐ろ
しい人物だということが、まざまざと肌にしみるようだ。

どうして、キャシアスはこんなにこの方に恨まれているの？

『フローゼンスは腹違いの兄だ』

急にあの時のキャシアスの声が耳に蘇る。

お母さんが違うから……？ それとも、王位継承を争っているか
ら？

「さあ、護恋。宮殿に一緒に帰ろうか」

フローゼンスが私へと手を伸ばした。急に彼のその手がけがれて
汚らしく感じた。

「お待ちください！」

私の体にフローゼンスの手が触れる前に、体育館に強い意志を持
つた声が響き渡った。

それは、キャシアスでもフェイでもない。

「ひ、姫流……！」

それは、クラスメイトで、後ろの席の工藤姫流だった。

第二十五話 書類と脅し

「誰だ？」

フローゼンスは蔑んだ瞳を細くして姫流に向けた。

「僕は護恋のクラスメイトで友達の工藤姫流と申します。以後、お見知りおきを」

姫流の一礼は流れるようで優雅だった。いやに様になっているのが不思議だ。

「へえ、姫流か。それで私に何の用だ？」

その姫流の礼儀正しさに、フローゼンスは気を良くしたらしい。あくどい本性を口の端に浮かべて、面白がっている。

それでも姫流の態度は如才ない。

「護恋を恋人にするという賭けの取り消しのデュエルを望みます」

「やけに詳しいじゃないか」

フローゼンスがそういうのも頷ける。まるでどこかで聞き耳を立てていたような。

「ええ、僕は護恋のファンですからね」

「ファンねえ……」

愛想笑いを浮かべた姫流を、フローゼンスは刺すように観察している。

「そうです。だから、僕とデュエルをしてください」

「姫流う」

姫流が手を差し伸べてくれた、それだけで私は早くも泣き出しそうになっている。

姫流は変なところもあるけれど、良い奴だよ！

だけど、フローゼンスは大きなため息を仰々しくついた。

「困ったね。残念ながらそのデュエルは護恋が承諾しないと無理だ。そして、護恋は承諾したくないといっている」

な、なんですって!？

「そ、そんなことないよ！ 姫流、早く私を助けて！」

私の言葉に、姫流が頷こうとしたとき、フローゼンスが更に続けた。

「護恋の言葉より、私の言葉を尊重しなさい」

有無を言わせないフローゼンスの厳命。

「そんな!？」

そんな命令がまかり通るとしたら、私は一巻の終わりだ。

姫流は愛想の良い笑いを消して、真剣な面持ちになった。

「そうですね。ですが、承諾するもしないも、彼女がこちらの世界に来る時に護恋が書類に署名したので、彼女が賭けに窮した時は日本の仲間やデイージャが救済することになってます。そして、護恋を助けるといふ賭けは、護恋本人の承諾なしに誰しもが受け入れなければならぬように、役所で手続きしてあります」

「そういえば、来る時に書類を書いたつけ。」

「何だと？」

姫流は封筒を取り出し、更にその中から一枚の用紙を取り出した。

「これが書類です。ご確認ください」

フローゼンスは書類を見て、いらだつたように唸る。

その用紙を破りだしそうな彼を見て、姫流が付け足す。

「それを破っても無駄ですよ。それは控えですから」

姫流の冷めたような口ぶりが癪に障ったのか、フローゼンスは牙をむいた。

「関係ない。こんな書類など無効だ！ デイージャの力など私の前では無力だ」

予想通りだといわんばかりに姫流は笑う。

「そうですね。それはそうと、フローゼンス様ともあろうお方が、デュシャルをなさったとか？」

姫流は『デュシャル』を強調して言った。

フローゼンスは馬鹿馬鹿しそうに笑い捨てる。

「してない！ あれは、嘘だ」

「そうですね……」

姫流はボイスレコーダーを再生した。

『私は、お遊びのつもりだったんだよ。キャシアスが死ぬのは嫌だが、デュシャルをしてしまったということを誰にも話せなくて苦悩していたんだ。そんな時、君が現れた。私とデュエルしてくれないかな？ 私は早く負けてしまいたいんだよ』

フローゼンスの顔から血の気がなくなっていく。姫流はおかしそうに唇の端を持ち上げる。

「これを、園内放送で流せばどうなるでしょうね？」

見る見るうちに、フローゼンスの顔色が土気色になってしまった。

「それをよこせ！」

フローゼンスは姫流に近寄ろうとしたが、姫流はサツとそれを避ける。

「では、交換条件です。護恋の賭けを取り消してください」

「なんだと？」

「あー、出来ないのであれば……」

グツとフローゼンスは文句を飲み込んだ。そして、噛み締めるように伝える。

「分かった！ 護恋の賭けは無効にする！ 審判！」

『はい。今を持って、護恋の賭けは無効になったことをお知らせします』

どこまでも、事務的な審判の声だ。

どこからともなく入ってきた柔らかな風が、私の頬をなでて行った。でも、その他は特に変化はないように思えるんだけど……。

諦めの悪いフローゼンスは姫流に詰め寄って、ボイスレコーダーを奪い取るうとした。

「早く、それをよこせ！」

姫流は彼の手をサツと避けて、付け足す。

「賭けの取り消しのご確認を」

フローゼンスはチツと舌打した。そして、投げやりに彼は私に尋

ねる。

「護恋に聞く！ 護恋は私の恋人か？」

「い、いいえ、違います……！」

思った答えを正確に言えて、私は胸を撫で下ろした。

「これで良いか？」

無然とした表情でフローゼンスは、手を伸ばす。

「充分です。これをどうぞ」

姫流はそつと差し出したが、彼は乱暴にそのボイスレコーダーを奪い取った。

「工藤姫流……。覚えているが良い。私に歯向かったことを後悔させてやるからな！」

フローゼンスは言い捨てて、体育館から出て行った。ブーゲンビリアがその後を追う。

私は力が抜けて、その場にうずくまる。

フローゼンスの恐ろしさから逃れることが出来た。

その事に安堵して、力がドツと抜けたのだった。

第二十六話 フローゼンスへの対抗策

一年Aクラスの教室の前で、キャシアスが青ざめた顔をして、携帯で誰かと話していた。傍にはフェイもいる。

ふと、キャシアスがこちらに気付いて、携帯の通話を切った。

「護恋！」

彼は、私の顔を見た途端、泣き出しそうに眉を寄せる。私は驚いて、思わず姫流と顔を見合わせた。

「どうしたんですか？ キャシアス様……」

「どうしたんじゃない！ 今し方、フローゼンスから電話がかかって来て、全て聞いたよ！ 君は何てうかつなんだ！」

怒鳴られてしまい、思わず私は身体を硬くした。

「す、すいません……。キャシアス様がデュシャルをなさって、更に命の賭けが本当になったと聞いたので、私が何とかしなければと思ったんですが」

全て裏目に出してしまった……。

「命の賭けが実行されるはずがないだろう！ テュテユス神は基本的に道理に外れたことはしない！ それに私はデュシャルなんて馬鹿なまねはしない！」

「も、申し訳ありません」

キャシアスに心配をさせてしまったことが申し訳なくて、私は頭を下げた。

「いや……フローゼンスはすごく狡猾こつこつだから、護恋が騙されたのも仕方ないことかもしれない。私も散々痛い目に合ってきた。これからは、護恋も気をつけてくれ」

「は、はい」

キャシアスのことを心配しても、フローゼンスに踊らされたら意味がないってことが痛いほど分かった。

「それから、姫流。護恋を助けてくれたことに礼を言うよ。ありが

とう」

「いえ、お安い御用です」

キャシアスは姫流の手を取って、固く握手を交わした。そのことに、姫流は恐縮しきっている。

本当に姫流がいなかったら、私は今頃どうなっていたか。私は安堵するばかりだ。

「本当に、姫流。ありがとう」

と、私は頭を下げた。

「あー、別にいいよ」

礼を言われ慣れてないのか、姫流は戸惑いながら手を振った。

「フローゼンス様に目を付けられちゃったみたいだけど……姫流、くれぐれも気をつけてね」

席に戻りながら、私は姫流に真剣な顔で忠告した。

「分かってるって」

姫流にしてみればそれがおかしかったのだろう。猫のような目を細めて笑った。

「まさか、護恋に言われるなんてね。護恋こそ気をつけなよ」

私は「そ、それもそうだね」と苦笑いを浮かべたのだった。

自分の席に座ると、心が落ち着いた。そのまま、座ったまま寝そべる。

すると小さな足音が駆けて来て、私の前で立ち止まった。

「護恋！」

アンジェリカの怒声が聞こえたので、私はびっくりしてしまい慌てて起き上がった。

「キャシアス様から事情を聞きました」

彼女は柳眉を吊り上げているし、声も怒りを抑えているようだった。

「うえ……！？」

私はその迫力に押されて、後ろに体を引いた。

「護恋の身に何かがあったら、主の私はどうすれば良いのですか？」

震えていたかと思えば、アンジェリカはしくしくと顔を覆って泣き始めてしまった。

「ご、ごめんね、アンジェリカ！」

アンジェリカを泣かせてしまった。そのことに、私は猛省したのだった。

これからは、フローゼンスには極力注意していかなければ。

今日の授業が終了した。クラスメイト達は次々と帰宅していく。

そんな夕焼けの差し込む教室の中。私は、アンジェリカとキャシアスの笑顔を目前に圧倒されていた。

「きゃ、キャシアス様、どうされたんですか？ アンジェリカまで」

二人とも不機嫌だったのに、急に笑顔なんて怖い。

「はい、これをあげよう」

「私からもですわ」

「どうわ!？」

いきなり、腕に重しが掛かったので、私は前のめりによるけてしまった。これは、Gブレスレット等の重さに似ているけれど、非なるものだ。

腕の中を覗くと、辞書三冊ほどの分厚い用紙の束があった。しかも、小難しそうな問題が書かれてあったので、私はめまいを覚えた。

「な、何ですかこれ……」

「何って、賭け事の問題だよ」

事も無げにキャシアスは答えた。

「賭け事の問題がこんなに？ あっ、クラスメイトに配られてことですか？」

私は他の可能性を考えて、真っ先に思い浮かんだことを否定しよ

うとした。

「いや、これは、すべて護恋が解くんだよ」

だが、あっさりと言っしアスは、私のすぐに浮かんだ答えを肯定してしまった。

「私が？ 冗談ですよね？」

笑顔が引きつってしまふ。

「冗談ではありませんわ。護恋が騙されないようにするには、護恋に頑張ってもらわなければならないのです」

「アンジェリカの言うとおりだよ。そういうわけで、家庭教師をフエイにお願いしたからね」

「かしこまりました」

隣で聞いていたフエイは、いんぎん慇懃に腰を折る。

「それから、今日はSPに来てもらったから、見送りは良いからね」

「そういうわけですので、頑張ってくださいな。では、ごきげんよう」

二人は、上機嫌でSPに連れられて帰ってしまった。

「そ、そんなにや……」

腕が痺れてきたので、私は机の上にプリントの山を置いた。一枚のプリントが、ふわっと風に乗って床に落ちた。ため息をつきながら、それを拾い上げる。

目の前にブレザーのズボンを穿いた足が二本やってきて、立ち止まった。

恐る恐る顔を上げると、フエイが不機嫌な顔でぎろりと私を見下ろしていた。

「……っ！」

私は、声なき悲鳴を上げたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9838q/>

絶対無敵のデュエリスト

2011年10月28日13時20分発行